眠狂四郎無頼控（六）

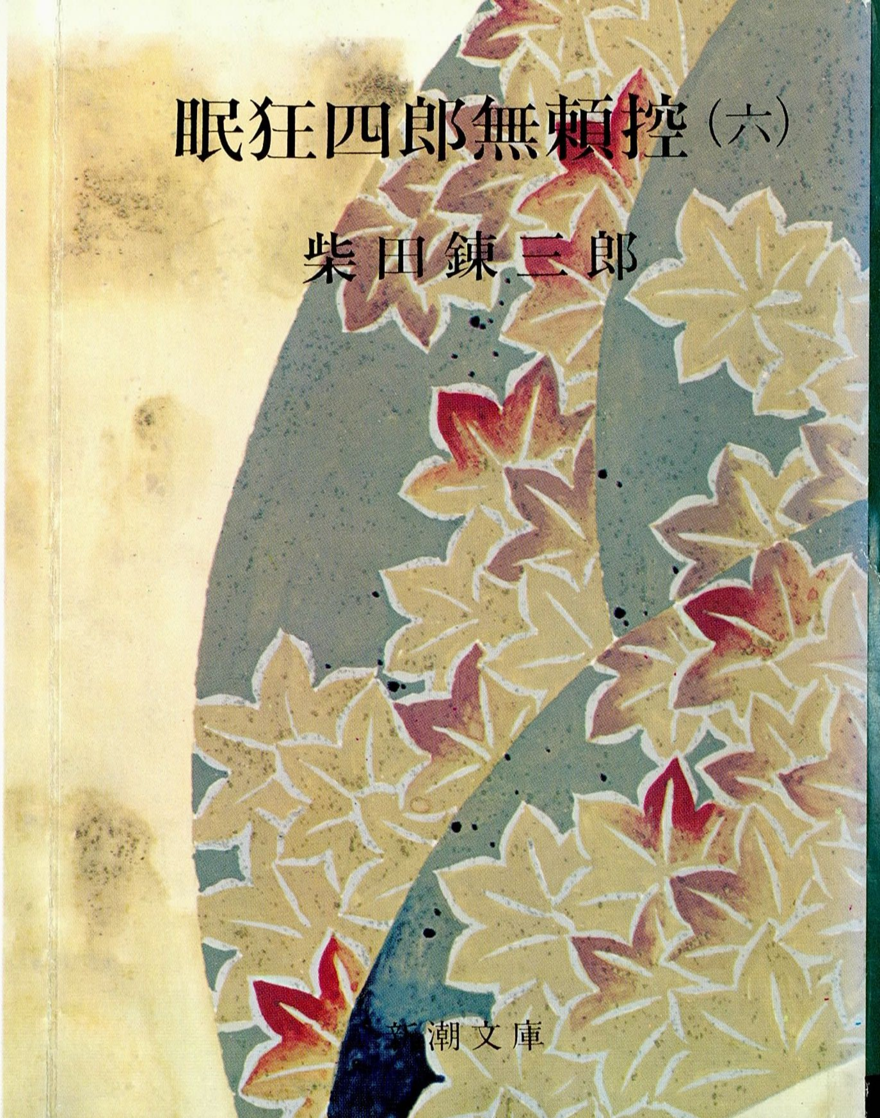
柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎無頼控（六）

柴田錬三郎



新潮文庫

カバー　中尾　進

眠狂四郎無頼控（六）　柴田錬三郎　し 5 11　新潮文庫 640

9784101150116

1910193006408

定価640円（本体621円）

一年ぶりに江戸に帰った狂四郎は、ふとした行きがかりで、阿波蜂須賀家の内紛にまきこまれ、四尺余の長刀で狙う恐るべき剣客野々呂甚内との対決がはじまる。淡路人形一座を登場させた新しい構想のもとに、狂四郎の宿命的な死闘を展開する本巻は、圧倒的な読者の支持を得た正編に引続き『続三十話』として発表されたもので、〝狂四郎シリーズ〟は以後20年間にわたって書き継がれた。

ISBN4-10-115011-7

C0193 P640E

新潮文庫
柴田錬三郎の本

剣は知っていた（上・下）	徳川浪人伝（上・下）
江戸群盗伝（正・続）	御家人斬九郎
美男城	邪法剣
眠狂四郎無頼控（一～六）	人間勝負（上・下）
眠狂四郎独歩行（上・下）	一の太刀
眠狂四郎殺法帖（上・下）	孤独な剣客
孤剣は折れず	浪人列伝
赤い影法師	最後の勝利者（上・下）
運命峠（前・後）	無念半平太
剣鬼	眠狂四郎京洛勝負帖
眠狂四郎孤剣五十三次	決闘者 宮本武蔵（上・中・下）
眠狂四郎虚無日誌	隠密利兵衛
眠狂四郎無情控	剣魔稲妻刀
眠狂四郎異端状	弱虫兵蔵

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

眠狂四郎無頼控

（六）

柴田錬三郎著

新潮社

新 潮 文 庫

眠狂四郎無頼控

(六)

柴田錬三郎著

新 潮 社 版

1703

目次

眠狂四郎無頼控

（六）

青銅の顔

一

早春——。

ぼうぼうたる武蔵野（むさしの）の枯野を、遠くから分けて、渡って来る風は、もうすぐ、雨を乗せて来るであろう。

げんに、北方の丘陵は、濡（ぬ）れて、烟（けむ）っているようであった。

鎌倉古街道（かまくらこかいどう）、という。

首（しゅ）は鎌倉から、武蔵野の中央部を貫いて、西上州および信越地方を尾（び）として、往昔（おうせき）これが、武蔵七党武士の馬蹄（ばてい）で、高く鳴った。

いまは、旅人の姿は、ことごとく東海道へ移って、一里塚（いちりづか）の大きな二本榎（えのき）も、いたずらに、高いばかりの、蕭々（しょうしょう）たる原野の眺（なが）めであった。

夜明けてから、わずかに、数人の農夫を通したばかりの路上に、やがて、黒羽二重を着流した肩のとがった痩軀（そうく）が、しずかな歩みを刻んで、近づいて来た。

飄然（ひょうぜん）と江戸を去って一年——いま、また、飄然として帰って来た眠狂四郎が、東海道を逸（そ）

れて、この鎌倉古街道をえらんだのは、いかにも、この虚無の男にふさわしい、といえる。

崩れて行く空へむかって、足をはこぶのである。

鋭く鳴って打って来る寒風に、そうでなくてさえ血の色に乏しい貌が、一層蒼く沈んで、暗い。

先刻すれちがった農夫が、怯えて、道をさけたが、わが家へ戻って、枯野から生れた幽鬼と出遭うたと、家族に告げても、さまでの誇張にはなるまい。

鶴見川に沿うた地点で、十日市場からつづく渓間を通り抜け——緩い傾斜の、いつの間にか丘陵を辿っているのであった。

疎林が、きれたり、またつづいたりして、あたりに人家は、さらに見当らなかった。

——ふと。

狂四郎は、双手を懐中に置いたまま、左方の灌木の繁みへ、目を投じた。

人の気配が、そこにあったのである。

とたんに、ざわっと動いて、ひょいと、のぞけた首が、若い女のものであったのは、意外であった。

綺麗だったのである。

かたちのいい眉を迫らせた大きな双眸も、やや反って高い鼻梁も、それから肌膚の白さも、きわだって遠目のきく特長だった。

一瞬、まばたきもせず、狂四郎を瞶めた娘は、ぱちっと音たてるように、長い睫毛を打った

せてから、
「失礼ですよ！」
と、鋭く咎めた。
「なんとした？」
怪訝に、問いかえすと、こたえは、はっきりしたものだった。
「小用を足していたのじゃありませんか」
「そうか」
狂四郎は、苦笑して、歩き出した。
すると、娘は、
「あ——似ている！」
と、叫ぶや、大急ぎで、灌木をかきわけて、道へ出ると、小走りに追いついて来た。
かまわず、歩幅を広く取って、ものの一町も進んだ狂四郎は、かたわらにより添うて離れぬのみか、食い入るように、こちらの横顔を瞶めつづける娘に、わずらわしさをおぼえて、
「おれが、だれに似ているのだ？」
前方へ目を投じたままで、訊ねた。
ところが、娘は、口をつぐんで、何ともこたえぬ。
狂四郎は、視線をまわした。
縹色の道行合羽をまとうた旅姿であったが、手に荷物は何も持っていなかった。

「狐狸に馴れた百姓が、おれを見て怯えたが、お前は、怕くないのか？」

娘は、かぶりをふって、「怕くなんか——似ているんですもの！」

と眸子をかがやかせて、云った。

「…………」

狂四郎は、——誰に？　と重ねて問う代りに、もとの姿勢にもどると、

「おれに跟いて来るのなら、顔をまっすぐに置くがよい」

と、冷たく命じた。

「はい——」

すなおにしたがった娘は、

「おさむらいさんは、江戸へお行きになるのですか？」

「うむ——」

「じゃ、江戸までお伴させて頂けますでしょうか？」

「勝手にすることだ」

「ありがとうございます」

礼をのべて、両手を胸に置くと、小さく、「よかった！」と呟いたが、そのはずんだ声音は、狂四郎の耳に、心地よくひびいた。

二

「あ——あれ、鶴が飛んでいる！」

狂四郎のあとにしたがって、四、五歩あるいた時、娘は、頓狂な高い声をあげて指さした。

雨に追われて、鉛色の厚い層雲すれすれに、白いゆたかな翼に速力をしめして翔け過ぎて行く三羽のすがたを仰いで、狂四郎は、江戸へ帰って来た感激を、はじめて胸中に湧かせた。

当時——。

田舎の人々が江戸土産に持ち帰る錦絵には、かならず上空を鶴が舞うところを描いてあった。公儀は、「餌まき」という者を、江戸近郊に置いて、鶴の下りるように、その餌を撒かしめたのである。将軍が鷹狩に出て、鶴を捕えれば、これを朝廷に献上するしきたりがあるためであった。

江戸を去る者、江戸へ帰って来る者が、市中をはなれた野で、空に鶴のすがたを仰ぐ——美しい風景が、この時代のものだったのである。

娘は、ひとり明るく微笑し乍ら、仰がせた顔をまわして、その行方を見送っておいて、何思ったか、ツツツ……と三歩ばかり走り出ると、両の袖を、ぴんと張って、しなやかに、首をひとふり振ってから、右足を、とんとふみ出した。

かたちがきまって、後姿が、なまめいたところで、長唄を口ずさみつつ、踊りはじめた。

「……頃は寿永の白拍子祇王祇女とてふたりあり、雲井の縫のうしろ帯……男舞いとも名づ

けたり」
狂四郎は、そのさす手ひく手裾さばきに、血の出るほど叩かれた習練のみごとさを見た。
「……君を初めて見る時は、千代を経ぬべし姫小松……御前の池に亀浮び、鶴も群れいて千歳経る、羽袖をかざすしおらしや、響く扇のとりどりに、三度び返してかなでける——」
くるりと体がまわった時、白いおもてには、真剣そのものの気色が刷かれていた。
武蔵野の原頭を舞台にして、いちぶの隙もみせずに、鮮やかに踊ってみせる天衣無縫ぶりが、この虚無の男の心をなごませたとすれば、娘にそれをなさしめた鶴は、やはり、騎って揚州に上るに足りる瑞祥の生きものといえようか。
雨は、この時、今白拍子の上へ落ちて来た。
恰度、時刻を同じくして、この丘陵から渓間へ移る薬研形の坂路の中ほどの、杉木立に、あきらかに、何者かの来るのを待ち伏せる険しい気配の数騎がいた。
いずれも、野駆けのいでたちであった。陣笠の紋が、揃って五三桐であることと、指揮者とわかる年配の武士の跨った鞍の前立てに、丸に卍の紋がついているところから見て、これは、疑いもなく阿波藩蜂須賀家の定府の士たちであった。
「おそいな！」
指揮者は、気短かな人柄らしく、眉根を寄せて、他の者たちへ当るような語気で云った。
「時刻は、はかって居りますが——」

一人が、こたえると、
「いや、もし、田所が、この街道を通らなかったなら、という懸念だ」
と、吐き出すように、焦躁をかくさなかった。
「それは、まちがいございませぬ。田所の妻を拷問にかけて白状させて居ります」
「それはもう、何度もきいた。……肝要は、田所が、はたして来るか、来ないかだ！」
その激しい声がおわるかおわらぬうちに、
「きこえる！」
一人の口から、ほとばしった。
皆は、はっとなって、耳をすました。
たしかに——馬蹄の音が、はるかに遠方に起るのを、風がつたえて来た。
この坂路を下れば、田野がひらけ、馬入が通じている。馬入とは、馬を入れることの出来る程の幅を有する畦畔である。馬蹄は、そのまた先の鶴見川沿いの地点を鳴らしているようであった。
雨が降って来て、樹枝をざわめかせて、そのひびきを消すや、指揮者は、舌うちして、憎いものに空を仰いだ。
「矢の橋を渡りました」
そう告げたのは、馬上の者ではなく、後方にひかえていた唯一人の徒士であった。どこといって特徴のない、風采のあがらぬ男であった。しいて、特徴をさがせば、脂肪過多の膨れ

た目蓋(まぶた)を、鬱陶(うっとう)しげに眸子へ垂らしていることだったが、それが、かえって、貌(かお)を貧しいものに見せているといえなくもなかった。服装も粗末で、鼠色(ねずみいろ)の無地の木綿羽織には、紋もついていなかった。無紋は、最も身分のひくいお小人(こびと)を意味している。裾をからげて、素足に雪駄(せった)をはいていた。

しかし、このお小人が、ただの軽輩でない証拠は、その腰に帯びた長い太刀であった。小兵(こひょう)のからだにある、といった程度の長さではなかった。四尺を越えていたのである。これを使いこなすとすれば、余程の抜刀術に長(た)けていなければなるまい。

抜刀術は、長い太刀を抜くことより起って、戦場における用途であった。起源は明らかにしないが、文禄(ぶんろく)・慶長の朝鮮役の修羅場裡(しゅらじょうり)に、抜き討つ迅業(はやわざ)の利が、攻防の形勢を変えるまでに働いたため、以来重く考えられるようになった、という。朝鮮人や明兵(みんぺい)は、肩に斜に剣を負うて、左手で剣鞘(けんざや)を摺(す)り上げつつ、抜き撃ちに斬(き)り下す兵法をとったが、その間髪をはずさず、日本武士が腰間(ようかん)から走らせる紫電は、能(よ)く彼らの臂(ひじ)を断った。この兵法は戦場にあって、持った槍(やり)を折られた場合、一瞬を待たずして手に剣光を煌(きら)めかせて、敵の乗ずる間隙(かんげき)を与えないために、生まれたものであった。加藤清正は、これを学んで抜群の腕前を有し、朝鮮の山野を奔馳(ほんち)しつつ、二百余名を一撃によって仆(たお)した、とつたえられている。

時代が下るにしたがって、研磨(けんま)の功を重ねて、抜刀術は、鞘離れの一刹那(せつな)に勝負を決するものになり、陰陽の変化は、鯉口(こいぐち)を切るところに生じ、敢(あ)えて長刀に限らず、となった。したがって、当代に於(お)ける斯道(しどう)の流派中、長刀を帯びている者は、殆(ほとん)ど見当らなかった。ただ、

居合抜きと唱えて、この迅業を行なって、薬を售る大道技芸者はいたが、これは敵を斫る勝負の業とは自ら別ものとして扱わねばならぬであろう。

したがって――。

四尺余の長刀を腰に帯びていることは、非常に珍しい姿といわなければならなかった。まして、居合の流派を起てている師範ではなく、武士の資格もあるかなきかのお小人が、である。

この男の腕前が、いかに高く買われているかは、指揮者の次の言葉で、明らかであった。

矢の橋を渡った、と告げるのへ、頭をまわして、

「よいか、甚内。田所は、お前を見たならば、遁れ得ぬとさとって、お墨付を、路傍へすてるかも知れぬ。目は、それにもくばっておけ」

「心得て居りまする」

甚内と呼ばれた男は、樹枝からしたたる雫に垂れ目蓋をしばたたいたが、いかにも、もっさりした表情で、これが異常の秘技を備えた人物とは到底見えない。

馬入をいっさんにとばして来る馬蹄の音は、みるみる、近いものに迫って来て指揮者自身もはや、緊張のために、口をきこうとしなかった。

国許へ向って帰路を急ぐ田所等も必死ならば、これをはばもうとする藩士たちも必死だった。阿波二十五万石の浮沈が、田所の懐中にある封緘の一筆にかかっている、といって過言ではなかったからである。

……坂にさしかかったぞ！

全神経を耳に聚めていた一同は、緊張をさらに鋭いものにした。

と――。

どうしたのか、馬蹄の音が、ふっと、かき消えた。

はっとなっていると、数秒を置いて、再びひびいて来たその音は、意外にも、遠ざかっているではないか。

「引返すぞ！　感づいたか！」

思わず、指揮者が、血相変えて口走るや、それへかぶせるように、甚内が、おちついた声音で云った。

「引返したのではありませぬ。杣径をえらびました」

「なにっ？」

一斉にあびせられた視線を、甚内は、まぶしげに、しきりにまばたきつつ、

「この丘陵の地形を見て、伏兵があるやも知れぬ、と田所殿は用心されたに相違ありませぬ。杣径をえらんで、むこうの麓をまわる所存かと察しられまする」

密使にえらばれるだけあって、田所は腕も立つと同時に、機敏に頭脳の働く人物であった。

ここまで馬をとばして来るあいだに、待伏せられそうな個所は、つとめて躱して来たに相違ない。

「甚内！　追えっ！　……追いついて斬れっ」

指揮者の叫びがおわらぬうちに、甚内は、風のように、杉木立から、奔り出て街道をつきるや、近頃伐採されたばかりの丘陵の頂上へ、馳せのぼり、そして、かき消えた。

三

偶然のことであった。丘陵の北面の急傾斜した叢中を、けものが疾駆するに似て、いっさんに降りて行く甚内の姿を、眠狂四郎が、胡桃林の浅い渓をへだてた向いの丘陵の中腹に建つ阿弥陀堂から、目撃していた。

雨を避けて、この堂の庇の下に、娘とともに身を入れた直後であった。

娘が、お吉といい、江戸興行にやって来た淡路人形一座の者であることを、問わず語りにきかせるのに、あい槌もうたずに、庇から縄で垂らした雨乞いの田螺から、つうっ、つうっ、と糸を引いて落ちる雨だれへ、送るともない冷たい眼眸を送っていた狂四郎は、ふと、その雨だれと雨だれの間隙を――彼方の叢中を掠める一個の速影をみとめて、急に、目ざめたように、神経を働かせたのである。

――ただの脚力ではないが……。

「……いっぺんでいいから、あやつり師をさせてくれって、わたしが、どんなにたのんでも、親方は、きいてくれないんですもの――とうとう、小田原で、大喧嘩になって、出てうせろ、だれがいてやるもんか、このあまっ、このくそじじい――」

お吉は、狂四郎がきいていようがいまいが、かまわずに、しゃべりつづけている。

速影から目を離さなくなった狂四郎の耳には、もうそのおしゃべりはとどいていなかった。麓の林の中から、矢のように馳せ出て来た一騎がみとめられ、速影が、それへ向って躍るのだと見てとった狂四郎は、雨の幕の中に展開されるその光景を、ふっと、江戸へ帰って来たおのれの運命にむすびつける予感をもった。

之(これ)を毫釐(ごうり)に先すれば差(たが)うに千里を以(もっ)てす。

あるいはまた、

初め有らざるもの靡(な)し、克(よ)く終り有るもの鮮(すくな)し。

運命というものの終始に就いて、この男が、無頼の行状を重ねるうちに、いつとなく知ったことは、これらの言葉が含む残酷であった。そして残酷と知るが故(ゆえ)に、この男は、おのれの刹那の予感を、重く量る生きかたをえらんでいる——。

なんの関(かか)わりもない他人が起す一場の争闘も、冷たい眸子(ひとみ)に映した一瞬裡に、これが、直感的に心に掛けられる比重は千差である。悟りとはおのずから別の意識であった。

狂四郎は、えじきを狙(ねら)って翔(か)け下る猛禽(もうきん)にも比せられる疾駆の黒影を目で追いつつ、勝利がいずれにあるかをはやくも読みとった。

騎馬の者が、これを迎え撃つべく、白刃を抜きはなったからである。

襲って行く者の腰に、おそろしい長さの太刀があるからには、居合の迅業を使うに相違なく、これを迎え撃つに、距離を置いて抜刀するのは、狼狽(ろうばい)した証拠である。

居合の極意は、敵に抜かせておいて、おのが身をその刃圏内に容(い)れつつも抜かず、斬りつ

けて来た白刃を、柄（つか）で受けとめ、第二撃のために敵が振りかぶったところを、目にもとまらぬ抜き討ちに、その胴を薙（な）ぐ——いわば、鞘のうちにおいて既に勝ちを含むものである。

この襲撃に備える正剣の業（わざ）は、あくまで没我のおちつきをもってなさねばならぬ。

騎馬の者は、当然予測していたであろうに、咄嗟（とっさ）の焦躁か、十間余をへだてて、白刃をかざしてしまったのである。

——遁れられまい。

狂四郎は、冷たく、胸中で呟（つぶや）いた。

甚内が、平地に降り立つのと、田所がそこを奔り抜けようとするのが、全く同時であった。

田所は、目を剥（む）き、歯を剥き、

「痴（し）れ者っ！　推参なっ！」

一喝（いっかつ）しざま、甚内の小軀へ、びゅっと振り下しておいて、掠め過ぎた。

だが——。

殆ど紙一重に、耳朶（じだ）すれすれに唸（うな）り落ちた刃風に、甚内が没表情をみじんも易（か）えなかったのを、不気味な印象として、田所は、眼底にのこしていた。それが、恐怖となって、田所は、狂気のごとく、馬をあおった。

そして、ものの三十間も、駆けたろうか。

それだけの距離を無事だったことが、そそけだった全身に、微（かす）かに安堵（あんど）を与えた。

——機先を制し得た！

その意識を、皮肉に待ち受けていたごとく、

「御免っ！」

鋭い声が、高鳴る蹄の音の中から噴いて出るように、突如として田所の耳をつんざいた。

「…………」

声にならぬ驚愕の唸りを口いっぱいに頬ばって、田所は、無我夢中で、切先高く、ふりかぶった。

甚内は、文字通り神速の脚力と無足の術をもって、ぴったりと馬腹により添うて走っていたのである。

声をかけたのは、田所の胴を空けさせるためであった。

田所が、ふりかぶるのと同時に、甚内は、その四尺余の長刀を、鞘走らせて、摺りあげに、馬上へ送った。

濁った呻き声を、口腔内でくいとめた田所が、がくっと俯っぷすのへ、細目の光をあてて、なお、甚内は、十数間を、馬から離れなかった。

甚内の足を停めさせたのは、田所が、俯っぷしつつ、片手で懐中をさぐって、路傍を流れる細水へ投じた油紙包みの品であった。

四

「あっ——あ、あっ！」

お吉が、烈しい仰天をしめしたのは、田所の行手を、数騎が、さえぎった時であった。

雨が、急に、強く降りそそいで来たのも、この時であり、束の間、山野は、宵闇の暗さに烟って、いっさいの輪郭をぼやけさせた。

雨脚が見わけられはじめるや、すでに、麓では、馬はすてられて、追いつめられた者は、白刃に包囲されていた。

「おさむらいさん！」

お吉は、思わず、狂四郎の腕へすがると、

「あのお人をたすけてあげて！　おねがいです！　後生です！」

と、せきたてた。

「かこまれた者が、必ずしも正義派とは限るまい」

こたえつつ、狂四郎は、居合の長刀をあびた深手に屈せぬ悲愴な気力に、負うている任務の重大さを感じた。

——もう間に合わぬ。

青眼にかまえた姿が、闘う力をのこしていないことは、無数の修羅場を越えて来た狂四郎には、掌を指すごとく明白なのであった。

「おねがいです！　お前様なら、たすけられます。お前様に、できないことはありませぬ！　わたしに、お前様の奇跡を見せて下さいませ！　おねがいです！」

「奇跡？」

その奇異な一句に、狂四郎の眉宇が、わずかに動いた。

お吉は、いきなり、濡れた地面へ、べったりと坐ると、両手を合せた。

「奇跡を見せて下されば、わたしは、どんなことでもいたします！　わたしの心もからだもさしあげます！」

肉親が、そこで殺されようとしてでもいるかのような、逆上とも思えるその嘆願ぶりに、狂四郎は、ふっと、ひとつの疑惑を起した。

しかし、それを口にするかわりに、つと、斜面へむかって足をふみ出していた。もとより常人の足どりではなかったが、この男としては、むしろ重かった。

この争闘を、帰って来たおのれの運命にむすびつける予感をもったことは、すでに述べてある。その予感が、狂四郎の足を重くさせたといえる。

途中、狂四郎は、朽木が倒れるように地に崩れた者へ向ってとどめを刺そうとした一人へ、小柄を放って、これをのけぞらしたが、足のはこびをやめようとはしなかった。

「引けっ！」

指揮者が命じて、おのれがまっさきに、馬へとび乗ったのは、走って来た甚内の口から、狂四郎が、ただ者ではないと告げられたからであった。甚内は、小柄の飛んだ遠い距離によ

って、狂四郎の腕前をさとったのである。

甚内自身は、騎馬たちを駆け去らせておいて、仆れた田所から、七、八間はなれた地点に立ち、狂四郎を、じっと見まもった。

狂四郎は、甚内には、一瞥（いちべつ）をくれただけで、田所に歩み寄ると、抱き起した。

背活をくわえられた田所は、狂四郎から、

「遺言あれば、きこう」

と云われて、消え果てようとする生命力を、わななく唇（くちびる）に聚（あつ）めようとした。

「て、て、てがらを……くにへ、——くにもとへ……」

——手柄を国許へ？

なんの意味かと、凝視していると、声を失った唇の動きは、「てがらを……」とくりかえし、そして、永久に緘（と）じられた。

狂四郎は、魂魄（こんぱく）去ってなお、一方の手が、背に負うた旅包みのむすび目を、しっかと摑（つか）んでいるのに気づいて、直感が働き、それをほどいて、中身をしらべた。

そうする間も、彼方に立ってこちらの振舞いを見まもる小男に対して、一瞬の油断がなかったことは勿論（もちろん）である。

小行李（こごうり）の中には、なんの変りばえもせぬ旅の携帯品——火打袋、火口（ほくち）、矢立、懐中蠟燭（ろうそく）、用心薬、懐中附木（つけぎ）、磁石、名札、手拭（てぬぐ）い、守札などが入っているだけであった。

失望して、立ち上りかけた狂四郎は、ふと、用心薬に何かがはさまれているのを発見して、

手に把ってみた。

「妹へ兄より」

と上書した紙包みであった。

端を裂いてみて、それが、髪を飾る緋鹿の子しぼりの手絡であるのをみとめて、江戸土産か、とそぞろな憐憫を催したとたん、はっとしたことだった。

必死火急の乗打ちをする者が、妹へ土産物を用意するであろうか？

――そうか、わかったぞ！

手柄、ときいたのはあやまりであった。

手絡――この品を意味したのだ。

「おい――」

狂四郎は、やおら、甚内に向い立つや薄い微笑を送って、

「おぬしは、この仏が拋った物をひろったようだが、あれは、密書ででもあったのか？」

「…………」

無言で、細目の光を送りかえす甚内は、依然として没表情だった。

「もし、密書であったなら、贋と思うことだ。指揮をした御仁につたえるがいい」

それに対して、意外だったのは、甚内のしめした態度だった。

「わしは、そのようなことは、どうでもよい。わしは、命じられた任務を、やむなく果したまでだ」

「ふむ。それならば、なぜ、そうして、立ち残って居る？」
「わしが手にかけたお人だ。わしの手で、葬らねばならぬ」
その言葉は、真摯な語気で、吐かれた。
狂四郎は、赤い手絡を、無造作に袂に入れると、かたわらに茫然として佇むお吉へ、
「行こうか」
と、何事もなかったような口調で促した。

馬入を過ぎて、矢の橋を渡るまで、狂四郎とお吉のあいだには、一語の会話も交されなかった。
野津田並木に入った頃、雨はあがり、夕靄が、野にたなびいた。
狂四郎が、ふいに、口をきいたのは、小野路の宿場を彼方に見出す地点であった。
「おれが、だれに似ているのだ？」
お吉は、みるみる困惑の色を白いおもてに散らして、こたえをためらった。
「おれが似た——その者なら、奇跡を行うことができたというのか？」
お吉は、俯向いて、唇をかむと、十歩あまり進んでから、そっと、わが胸をさぐって、何かを把り出すと、すすっと狂四郎の前にまわって、それをさし出した。
海のむこうから渡って来た小さな自惚鏡のかたちをしていた。
お吉の必死な表情を冷たく見やって、それを受けとった狂四郎は、ぱちりと蓋をひらいた。

狂四郎が、その中に見たのは――。
青銅に刻まれた、十字架(くるす)を背負うた裸形(らぎょう)の男の像であった。
巧緻(こうち)な浮彫の、痩(や)せおとろえてうなだれたその横向きの貌(かお)は、左様、狂四郎の暗い眉目(びもく)と、一脈の相似がなくはなかったのである。

月の濡肌(ぬれはだ)

一

朝から雲ひとつなく、晴れわたったまま、陽(ひ)を落して、冷え冷えと昏(く)れた空に、十六夜(いざよい)の月が昇り、そして、その澄んだ静かな光に、幾刻(とき)か照らされた地上は、鋭い寒気におしつつまれて、もう何処(どこ)にも、人影をとどめていなかった。

町家をはなれて、雑木林や畠(はたけ)のつづく――江戸の外へ出た追分(おいわけ)の、このあたりは、ずうっと先刻、仕事じまいの馬子(まご)や駕籠(かご)を通したきり、もう動くものを全く絶やしてしまっていた。

街道に沿うて高い築地(ついじ)をめぐらした宏壮(こうそう)な大名屋敷も、鬱然(うつぜん)とこもらせた樹木のそよともせぬ葉に、冷たく月かげを宿して、これは、物の怪(け)のすみかのように不気味に、寂寞(せきばく)のたたずまいをみせているのであった。塀(へい)からさしのばされた裸枝に、何処からか飛んで来た破れ凧(だこ)が、ひっかかって、ひっそりと、垂れているのも、なにやら、陰気な風情(ふぜい)であった。

この深夜の景色を乱して――いや、むしろ、景色の方で迎えるように、一個の黒影が、急ぐでもない足どりで、遠くから近づいて来て、恰度(ちょうど)、破れ凧の下に、立ちどまった時、月光に浮いたその異相を、物の怪の方でおそれたように、夜鳥を一羽、なんともイヤな啼(な)き声と

ともにぱっと飛び立たせた。

ひとつの目的を抱いて、ここへやって来た黒影の方は、黒影の方で、ふっと、ひそかに、薄ら笑いを、口辺に刻んで、

「おれを迎えるにふさわしい――」

と、ひくく呟きすてていた。

人の運命の暗合や前兆に、背中を向ける生きかたをして来た眠狂四郎が、かえって、内に顧み身を修める意とは自ら別の感覚によって、空間上の偶合に惹かれたかのように、ここへやって来たことは、後日、これは明らかになる筈である。

「それにしても、すこし屋敷が広すぎる」

この独語は、軽やかに身を躍らせて、築地を越えて、深い木立の中に立った時に、口から洩らされた。

ゆっくりと歩き出したが、手入れのゆきとどいた林は、庭と判ってい乍ら、どこできれるのかと疑わしい程長くつづいていた。

阿波二十五万石・蜂須賀家の下屋敷であった。

元和二年、四代忠英が、六歳で遺領を継ぎ、襲封を謝すために将軍家の御前において元服した際、諱字を賜って忠鎮とあらため、従四位阿波守に叙任し、松平姓を名のることをゆるされたが、これは当時としての比類のない栄誉であり、その格式によって、将軍家御成りのために設けた下屋敷が、これであった。

諸侯の下屋敷中、その宏壮な規模は、屈指のものに相違なかった。
狂四郎は、林を抜け出て、そこから、舟を漕(こ)いで通れる幅の流れに、苑路(えんろ)が沿うているのを知って、

——これは、容易ではない。

と、知った。
大きな池が彼方(かなた)にひろがり、そのむこうは築山(つきやま)になっていた。それも、自然の丘陵ほどの高さと広さを有(も)っていると、想像されるのは、立った地点から、建物のいただきすらも、みとめられないのである。

——おれとしたことが、意中に偶合をつくって、殊更(ことさら)な予感に躍らされようとしている。理のあるところではない。神力に藉(か)りることをきらうこのおれが、だ。

為(な)そうとしているのは、おのれとは無縁の事柄(ことがら)なのであった。
当主正四位左少将斉昌が、病んで、この下屋敷にひきこもっているために、江戸家老の稲田八郎右衛門もまた、夜は、こちらへ来て泊まっているときいて、やって来た狂四郎であった。
ふっと湧(わ)いた自己嫌悪(けんお)に、しばし、そこに足を停めていた狂四郎は、急に、眼光を鋭いものにして、右手の常磐木(ときわぎ)の繁(しげ)みへ送った。
白いものが、妖(あや)しく、木間隠(このまがく)れに、動いて行く。
狂四郎は、扇形の土橋を、つと渡ると矩形灯籠(くけいどうろう)の陰へ身を置いて、じっと、その動きを目

で追った。

いったん、繁みの奥へかくれたと思ううちに、その夜行者は、跫音だけを近づけて来て、狂四郎とは二間もはなれぬ苑路上へ、すっと、白い花のように出現したのであった。

不審を起すに足りる姿だった。

白羽二重の寝召しに、同じく白羽二重の掻取をはおって、裾長く、地面を摺って行くのである。

髪は、おすべらかしで五処へ元結をかけて、身丈の長さに落しているのは、これはあきらかに、ただの奥女中ではない証左であった。

それよりも、狂四郎に、眉宇をひそめさせたのは、土をふんで行くのが跣であることだった。

——事変を前知したつもりでいる者の眼前に、これは、おあつらえ向きすぎるようだが……。

狂四郎は、苦笑した。

二

水路を裾にまわしたひとつの築山が立ち塞がっていた。

妖しい白装の姿は、その築山の、熊笹を繁らせた坂道を越えた。反対側の麓には、網代の竹垣がめぐらしてあり、切妻の中門をくぐると、当然、茶庭となる構造であるのに、意外に

も、白砂の平庭の奥には、鴟尾を夜空にはねた神殿が、くろぐろとわだかまっていたのである。

いくつかの小さな鳥居も、中門から、一定の間隔をとって、つらなっていた。

それをくぐって進み入りつつ、夜目にも、いたいたしく白砂をふむ素足の痛さを、その後姿は、しめしていた。

奇怪であったのは、神殿の前で、合掌はおろか、頭を下げもせず、いきなり、土に汚れた跣を、階にかけて、すすっ、と奥へ入ってしまったことだった。

——どういうのだ、あれは？

尾けて来て、中門のこちら側に佇んだ狂四郎は、小首をかしげた。

女が再び姿を見せたのは、数分とかからず、もし長びけば、狂四郎は、その中へ身をはこんでいたであろう。

まっすぐに、ここへ出て来るものと思って、身を躱す用意をしていると、またも、意外な振舞いを目撃させられることになった。

鳥居をくぐって来て、つと中途から、左方へそれた女が、歩み寄ったのは、御手洗の閼伽井であった。

播取を、地べたへすてると、猿すべりの釣瓶柱に掛けられた釣瓶を手にとるや、屋形の下の車を、からからとまわして、組井筒の中へ、棕梠縄を、たぐりおろした。

汲みあげた釣瓶の重さに、ひと呼吸した女が、つと蹲って、その冷水を、ざあっと頭から、

かぶったのは、狂四郎を、唖然とさせるに充分だった。

——神殿を土足でけがしておき乍ら、その後で、身を浄めるとは、なんの意味だ？

もはや、こちらが、身をかくして、黙って目撃している時機は去ったようであった。

わざと、跫音をたてて、白砂をふんで出た。

その気配に、愕然と、濡れ髪をふりさばいて、頭をまわした女は、釣瓶をすてるやいなや、ひくいが、鋭い気合を発して、双の腕を、ひらっと翻した。

右手左手から、同時に放たれた手裏剣は、月光を撥ねて、二条の白い糸を引きつつ、狂四郎の両眼を襲い来たった。

二本の手裏剣を同時に放って、対手を盲目とする秘術は、曾て、参州岡崎・水野監物忠善に仕えた小坊主あがりの一柳一刀が、咄嗟に会得した神技であった。

一柳一刀は、水野家を致仕して、江戸に町道場を開くうち、東国のさる大名に、その腕前を買われて、定府として仕えることになったが、性格に変ったところがあり、常に、差料は、竹光を用いていた。

たまたま、同藩の朋輩に、これを発見されて、主君に報告されてしまった。

「剣術師範の身であり乍ら、武士の魂を軽んずる不所存者、早々に捕えて成敗せよ」

と、命令が下された。

これは家中一統への見せしめであるため、ただの成敗ではなく、一柳一刀が竹光所持のおかげで、無慚の死恥をかいたことにしなければならぬ、と重臣たちは鳩首して一計を案じた。

すなわち、上意討ちの仕手が、乱心して、抜刀したまま一室にとじこもっていることにして、これを捕り鎮める役目を、一柳一刀に叺付けたのであった。
そうとは、夢にも気づかず、遽かの呼出しに、一柳一刀が、奥へ入ると、乱心者をすぐさま斬れ、と下命があった。
一刀は、重役たちの態度に、ふと、不審の念を催したが、眉宇も動かさずに、承知して、用人に案内されて、その部屋の前に行った。襖が、立てきられてあり、なんの気配も感じられなかった。
「首尾よろしゅう——」
用人が、ひきさがった。
廊下の左右には、数名ずつ、家中のえらばれた使い手たちが、すでに鯉口を切って、眼光を据えていた。その殺気が、おのれにあびせられているのを知るや知らずや、一刀は、しずかに、羽織を脱ぎ、竹光の大小をはずして、ひとまとめにして、背後に置いた。
「一柳！　無刀とは如何？」
遠くから、重役が、叱咤するように声をかけた。
「対手が乱心者なれば、討ちすてに、心得るところがござる」
かわらぬ口調で応えておいて、一刀は、さっと、襖を開いた。
床柱を背にして、白刃を構えている藩士の姿に、みじんの狂気もないのを看破して、一刀は、二間の距離へ進み寄った。

「その方、御意にちがい、御叱りを蒙るや、身の罪科を顧みず取りこもりたる儀、重々慮外なれば、一柳一刀、君命に依って、成敗いたす」
凜乎として、宣告した。
「無手をもって、なんの成敗かっ！」
喚きざま、ぱっと大上段にふりかぶったのへ、一瞬、一刀の双手が躍り、目にもとまらぬ迅さで懐中から抜きとった手裏剣二本を、ひょうっ、と打ち飛ばした。
「う、わあっ！」
両眼を射抜かれて、のけぞるところをひと跳びに躍り込むなり、一刀は、その白刃を奪いとって、丁と首を刎ねた。そして、衂られた刀をひっ携げて、悠々と退出して行ったが、藩士たちは、その隙のない歩みに、一歩も近づくことはできなかった、という。
後年、一柳一刀は、秋田藩佐竹家に、前の二倍の知行で、召抱えられた。
秘術は、「一柳二眼術」と称されて、後世に継がれるかと思われたが、いつの間にか、それは、子女の護身のためのものときめられ、諸流中の表芸からは、除かれていたのである。
いま——。
絶えて久しいこの秘術を、鮮やかに使う者が、ここにいた。

三

無造作とも見える——無想正宗の一閃で、二本の手裏剣を、地べたへ落した狂四郎は、女

が懐剣を抜きかざすのを、かまわず、歩み寄った。

「当邸に、無縁の者——とお断りしておこう。敵にされるのも、味方にされるのも、そちらの自由だ。……野次馬根性で、あの神殿内に、人に知られたくない秘密があると、推察した。水垢離（みずごり）をとるのは、その秘密が人命にかかわることと思われる。それに興味を抱くわけではないが、一昨日御家中の一人が殪（たお）れるところへ行きあわせて、それがこうして、こちらの足をここまで運ばせた以上、乗りかかった船で、かくされた場所へ首をつっ込むことになる。時折の気まぐれから、平気で生命（いのち）をなげ出せるように自分を造った男だと思って頂こう。……いかがだ？」

この口上は、いつわらぬ気持を罩（こ）めていた。

だが——それに対して、返辞のかわりに、狂四郎が与えられたのは、無言の一撃であった。

胸へ来た短剣を、半歩ひらいて、空へ流すと、その利腕（ききうで）を摑（つか）んで、

「敵にする、と云（い）われる」

皮肉に、あびせた。

瞬間、眸子（ひとみ）と眸子は咫尺（しせき）に近寄って、ひたと合った。

狂四郎は、咄嗟に、月に潤（うるお）う佳麗（かれい）の貌（かお）を、これが、高い地位を保ちつづけて幾世代かを継いだ血の、浄化された、娟秀無瑕（けんしゅうむか）の臈（ろう）たけたものと見てとったし——。

あいては、あいてで狂四郎の異相から突如として受けた衝撃を、思わず、小さな悲鳴にしていた。

そして、わななかせる唇から、最初に洩らした言葉は、狂四郎の耳にとどかせるにいたらず、急に、全身から力を抜いて、ふかい溜息の次に吐いた一語が、狂四郎をして、はっとならせたのであった。

「……でうすの恩寵を……」

狂四郎は、はっきりと、そうきいたのである。

――切支丹か、この女が！

かっと双眼を瞠いていると、女は、つづけて、

「でうすひいりよ……おん扶手――」

喘ぎの息とともに、呟いた。

刹那に閃く直感が、狂四郎の脳裡にあった。

いきなり、荒々しい動作で、その胸もとへ片手をさし込むや、氷のように冷えた柔肌をさぐって、ふっくらと盛りあがった乳房の下に、固い円型の品を摑んだ狂四郎は、抜きとりざま、

「これか！」

と、鼻さきへつきつけた。

それは、一昨日、武蔵野の原頭で出会った淡路人形一座の娘お吉が所持していた、自惚鏡と見せかける品物と全く同じであった。

蓋を開けば、青銅に彫られたぜずす・きりすとの磔像があらわれる――。

阿波からやって来た人形一座の娘と同じく、この女もまたおのが守りに胸に抱く天主の御子の貌を、狂四郎の異相に見て愕然となったのである。

国を同じくする者が、ともに切支丹ならば、同じ品を所持しているのは偶然ではなく、狂四郎の異相にうたれたとて、なんのふしぎはない。

ふしぎなのは、最も低い身分の者と最も高い地位の者とが、同じ禁教の守り品を所持していることであった。嫌悪と猜疑(さいぎ)と不安を伴う切支丹邪宗門は、すでに全く跡を絶って、忌(い)むべき名称の記憶のみに残っている当代にあって、この事実は、阿波国に、なお信仰が、根強く広く潜伏していると想像して、あやまらないことではなかろうか。

宗門改(あらため)の特別役所さえも、すでに不用として、寛政四年に、慶長の禁制以来二百年で、閉鎖せられているのであった。

尤(もっと)も、近年にいたっても、長崎在浦上村あたりに、二百年来潜伏していた信仰が、露顕して捕えられた事件はあり、この御府内においても、かくれ切支丹の祈りが、地下でなされていることは、狂四郎も、すでにその身をもってあばいているところである。しかし、一国内に、信仰が根強く広く潜伏していようとは、想像もおよばぬことであった。

「この顔が、そなたのあがめるさんたまりあの伜(せがれ)に似ていると云うのか！」

「…………」

「こっちは、今日まで異端者(ぜんちょ)のつもりだった。伴天連(ばてれん)が謂(い)う良心(こんせんしゃ)とやらを、土足にふみにじる悪業(あくごう)が、日常の振舞いだったと申してもよい」

「…………」

「その邪凶の相にむかって、おらしょを誦えるというのか！」

「…………」

女は、息苦しげに、喘ぎつづけた。しかしその双眸に湛えられたのは、遠く心をでうすの尊い御名にかけて誓うた信仰の中に置く恍惚とした気色であった。

「よし！」

久しぶりに、この無頼の男の身裡に、神の掟にそむく狂暴な力がみなぎった。

「そなたら信徒が目を伏せるもるたるの科が、どのようなしろものか、教えてやる。受けて、懺悔の種にするがいい！」

高慢、貪欲、邪淫、貪食、懈怠、嫉妬、憤怒――これを、容されざる七つのもるたるの罪という。

深夜の月だけが、この原罪のあらわな営みを見戍ることとなった。

褥は、白砂上に拡げられた白羽二重の播取であった。

不意に――。

狂四郎は、しらじらと月光に濡れて大きく拡げられた下肢の間から、はじかれたように、起き立った。

狂四郎が、営みを中断させたのは、しとどに濡れた、白羽二重の寝召しで凍る女の柔肉の

底から、意外にも、微妙な蠢動が起ったからであった。

なんの抵抗もなく、死屍宛然に、掻取の上へ仰臥させられ、べっとりとまつわりついた裳裾をひきめくられるにまかせた女は、それなりに、髪毛一本そよがせずに、あだんより受けた原罪の科に堪えて、ひたすらに、天上の御主に祈りつづけるかとみえたのだが……。そして、その生きた屍体を犯すことに、狂四郎は、傲慢残忍な異端者の復讐を為しとげようとはかったのであったが……。

何事であったろう。

至極のかなしみにつつまれた祈念をこめているかに思われた女は、その冷え果てた白いからだの奥に、本能を芽ばえさせて、徐々に、ゆるやかに、肌膚の上へ、快楽のつぼみをおし出し、恍惚の花びらを拡げようとしたではないか。

脳裡の一隅に、四六時中冴えている鋭敏な神経に、それを感じとった狂四郎は、ここで、女という生きものに対して卒然たる敗北を意識したのである。

快楽を中断する振舞いにおいては、狂四郎は、最大の侮辱を、女に加えたことになった。

突如とした狂四郎のすばやい動作に、咄嗟に応じられず、女は、そのままのみだらな仰臥の姿勢を、一瞬、月光に曝した。

狂四郎が、無想正宗をひろいとった時、女は、ようやく、のろい身ごなしで、起きあがると、乱れた前をつくろった。

黙って、数歩遠ざかった狂四郎は、急に、胸裡に鋭い痛みが走るのをおぼえて足を停めた。

曾て、西丸老中水野忠邦の上屋敷において、側頭役武部仙十郎の謀った筋書を面白いと読んで、美保代を犯した夜のことが、まざまざと、蘇ったからである。その結果、数々の不幸な悲劇の連鎖を、予見しつつも、これを避け得ず、自ら身を投じて、宿命の暗黒裡を歩まなければならなかった狂四郎である。

……いま、また、この宿命が、くりかえされようとしているのではなかろうか？

狂四郎は、頭をまわして、そこに深くうなだれたいけ贄を見やった。

「素浪人眠狂四郎と申す——おぼえておいて頂かぬ方がのぞましいが、もしも宿業の縁であったら、あるいはまた、お会いするかも知れぬ」

語気を静かなものにしたその言葉をのこした。

四

それから、いくばくかの時刻が移った頃合、この屋敷の母家の奥の寝所で、江戸家老稲田八郎右衛門は、憮然たる面持で、臥牀上に端坐して、不意に侵入して来た見知らぬ黒の着流しの浪人者との面談を余儀なくさせられていた。

熟睡していたところを、起されたのではなかった。背負うた大藩の重責に、睡りをさまたげられて、ただ、じっと目蓋をとじていると——不意に、音もなく襖が開かれる気配に、

「曲者！」

と、さとると同時に、はね起きて、床の間から差料を摑みとろうとして、闇の中を、風の

ように奔り寄られて、その手くびをおさえられたのであった。
「おしずかに！　害意はない者です」
おちつきはらった声音で、そう告げておいて、すっと身を引くと、そこへ坐って、
「灯を入れて頂く――」
厳然とした態度を、くろぐろと闇に滲んだ黒影は、しめしたのである。
明りが部屋にひろがってから、狂四郎が、懐中からとり出して、八郎右衛門の前に置いたのは、旅手形であった。
『蜂須賀阿波守家中・田所源次郎』
と、記されてあった。
「この御仁が、密使として御国許へ趨られたことを、お手前様は、御承知でありましょうか？」
問われて、八郎右衛門は、大きく双眼を張って、狂四郎を凝視し乍ら、黙って頷いてみせた。
狂四郎は、江戸へ帰り着くと、ただちに、水野忠邦邸に、武部仙十郎をおとずれて、蜂須賀家で、人格高潔な重役は、誰であろうかを訊ねて、この人物の名前をきかされたのであった。
「お手前様が送り出された密使か否か、は問いますまい。……旅の行きずりに、この御仁が、追手によって殪されるのを目撃し、敵の手に渡った密書が贋であり、御国許へ届けなければ

ならぬのが、婦女子の頭を飾る手絡と知って、これをひろいました」
「………」黙然として、瞶めかえす八郎右衛門の表情には、なんの変化もなかった。
狂四郎は、つづけた。
「偶然のことで、その折、てまえが連れていたのが、江戸興行に出て参った淡路人形一座の娘でありましたので、手絡をその娘に渡し、人形の髷へかけるように命じておきました。そうしておけば、一座によって、手絡は、自然と御国許へはこばれることになろう、と存じた次第です。届先は、密使の妹御にいたしておきました」
「………」
「なお、討手方へも、てまえ一存で、密書が贋であることを明言しておきました故、左様御承知おき下さい」
「………」
「敵味方、いずれへ組する存念を抱く者でない為、この仕儀もまたやむを得ず……お手前様の、何分の善処があるよう、推参いたした者とお思い下されば幸甚です」
「………」
「では――」
狂四郎は、対手から一語も返されぬことになんの不服もなげな淡泊な物腰で、一礼すると立ち上っていた。
入って来たところから出て行こうとすると、はじめて、八郎右衛門は、口をひらいた。

「用人に案内させる。表長屋の通用門から出て行かれたい」

屋敷を抜け出て、ものの二町も、寂莫（せきばく）たる街道をひろった狂四郎に、突然、跫音（あしおと）もなく追って来た者が、白刃をあびせかけたのであったが、これは紙一重の差で左肩すれすれに流れはしたものの、躱（かわ）しざまに抜き討って仕とめた狂四郎に、なお、しばらく、左肩がしびれているように感じさせるくらい、凄（すさま）じい一颯（いっさつ）だった。

このおそるべき使い手に追い討たせたのが、犯した女であったか、それとも、江戸家老であったか――これを判断するには、なお、しばらくの期間、身を危険に曝さなければならないようであった。

今夜、これから狂四郎がしなければならないのは、どこの屋根の下に、ねぐらをもとめるか――そのことであった。

血汐花

一

文字通り、猫の額ほどの小庭に、臘梅が、あたたかみの薄い午後の陽ざしの中に、黄色の花を開いて、仄かな香をただよわせていた。

あるじが、臘梅を好んでいる証拠は、この小庭に面する座敷の床の間にかけられた軸にも、黄庭堅の一詩が記されているので、明らかだった。

「金梅春寒を鎖し、人を悩ますの香未だ展かず、桃李の顔なしと雖も、風味極めて浅からず」

風流を知る心づかいは、手水鉢や飛石や上木や下木の配置にも、こまかくつかわれていた。その誰ガ袖形の手水鉢も、あるじ自身が、こつこつと刻んだものとわかれば、猶更のことである。

座敷には、なんの調度もなく、貧しい軽輩のくらしをしめしていたが、異彩をはなっているのは、床の間の刀架に横たえられた四尺余の長刀であった。

阿波藩蜂須賀家上屋敷の平御長屋のいちばん末端にある、野々呂甚内の住居であった。

屋内の静寂はつづいていて、玄関の格子戸が開いて、所用から帰って来た甚内の声がしても、ひっそりとして、なんの気配もしなかった。

座敷に入った甚内は、無腰になると、庭の黄花へ、細目をあてて、その匂いを愉しむ微かな表情の動きをしめした。孤独の時、はじめて、特徴のない、もっさりした風貌が、自身の感情を、それもごくひかえめに刷くようであった。

朋輩や上役たちは、ついぞ、この男が、いかなる急変の場合も、動じた色を泛べるのを見たことがなかったのである。

甚内が、そのまま、そこへ腰を下した時、うしろの襖が開いた。

人はいたのである。

妻の杉江であった。

――この男に、こんな美しい妻が！

はじめて見る者なら、これは、愕かずにいられない。これほど釣合わぬ夫婦はなかった。

杉江は、ただ整ったというだけの顔立ちの持主ではなかった。妍姿艶質ということばがあるが、その天性の美しさには、妖しいまでの、男を愁殺する色っぽさがあった。しかも、甚内と一緒になって、おのが美貌が、むなしく、この軽輩長屋で老いて行くことに、堪えねばならぬ憂悶を滲ませているので、その仇姿は、かえって、病的な幽情のふぜいがあった。

他の男の目には、そうと映って好き心をそそるのであろう。

良人である甚内には、これは、つとめて、視線をそらしていなければならぬ、気重い存在

だったのである。

「お茶をたのもうか」

甚内は、庭を向いたまま、云った。

「お茶は、きれて居ります」

刃を頸すじへあてるような、冷やかな語気であった。

「では、白湯でもよい」

「居間に沸いて居ります」

甚内は、猶しばらく、じっと、そこに坐っていたが、何も云わずに、立ち上って、居間に足をはこんだ。

自分で自分の忍耐に、感心していることだった。時折は、

――よく、三年間も、堪えた！

日々につもったその不快な記憶を、肩に重すぎると感じて、大きく溜息をつくこともあったが、それを、氷にとざされたような家庭を、一挙に破壊したい狂暴な思いにふりかえようとしないところに、この男の蠐螬のようなしぶとい忍耐強さがあり、それ故にこそ、妻に手ひとつ振りあげずに今日まで過し得たといえる。

尤も、その無抵抗が、かえって、杉江に、敵意を燃やさせたと考えられなくもない。

甚内は、茶道具が見当らぬので、杉江が持って来た古びた厨子棚から、何気なく、楽焼を、手に把ろうとした。すると、いつの間にか、縁側に立った杉江が、

「それは、なりませぬ！」
と、鋭く拒否した。
振りかえった甚内へ、杉江は、露骨な侮蔑の眼眸を据えて、
「それは、長八郎殿が使用なされた品です。貴方が、手をふれてはなりますまい」
きっぱりと、云いはなった。
長八郎とは、杉江の先夫の名であった。
一瞬――甚内の背すじを、悪寒が流れた。
杉江は、良人が、楽焼を、黙って、厨子棚に戻すのを、冷やかに見戍ってから、すすっと、畳に裾を摺って、そこへ近よると、それを把って、手巾で、ぬぐった。
「……血が匂う。きたない！」
座敷へ去りかけた甚内は、杉江が吐き出す独語に、思わず、足を停めて、視線をまわした。
「なんと申した？」
杉江は、良人へ、冷笑を与えた。
「貴方は、先日、田所源次郎殿をお斬りなさいましたな？」
よもや知るまいと思っていた秘密を、ずばりと当てられて、甚内は、ぎくりとなった。
「使命じゃ。余儀ないことであった」
ひくく、云いすてて、去る後姿へ、杉江は、きりつけるように、
「血が匂う！　ああ――いやだ！」

と、叫んだ。

二

ふたたび、座敷のもとの座に就いた甚内は、暗然たる眸子(ひとみ)を、臘梅へ投じて、身じろぎもしなくなった。

——あの日も、臘梅が、咲いていた。おれは、それを見ていた。匂いを、無心に、かいでいた。

あの日——三年前の早春の一日、甚内は、城代家老堀田采女正(ほったうねめのしょう)の供をして、野駆けに出たのであった。

城から、一気に、大滝山まで馬をとばしたが、徒歩の甚内は、終始馬腹のわきからはなれなかった。

帰途、采女正は、何を思ったか、城へも、城代屋敷へも帰らず、さむらい小路(こうじ)に入って、馬廻(うままわ)りの寺島長八郎の屋敷の前で、馬を降りると、

「庭へ曳(ひ)いて、待って居れ」

と、甚内に命じておいて、案内も乞(こ)わずに、さっさと玄関から奥へ通って行った。甚内は、命じられたまま、庭の端に彳(たたず)んでいるうちに、ふと、遠くから、臘梅の香がただよって来るのをかいだ。

お茶をはこんで来てくれた女中へ、

「よい香がいたしますな」
と、云うと、
「露地にきれいに咲いて居ります。そこの木戸をお入りなさいませ」
と、すすめてくれた。
遠慮して、蹬音(あしおと)をしのばせて、猿戸(さるど)を抜けると、美しい掃き波紋の白砂の中を飛石が置かれている苑路(えんろ)がつづいて居り、臘梅は、奥の四注(しちゅう)造りの茶亭の前で、風のない春さきの柔かな陽ざしに、その名のごとく蠟(ろう)でもひいたような光沢のある花びらを、枝いっぱいにひらいていた。
もとより、主人のゆるしがない限り、木戸口からさきへ進み入ることは、ひかえなければならなかった。
ふと――微かな呻(うめ)き声を耳にしなかったならば、甚内は、そこから動かなかった筈(はず)である。
呻き声は、あきらかに、茶亭の中からもれ出ていた。
後日になって、おのれを嗤(わら)うことが、ふたつあった。普通の耳を持った者ならば、到底ききとれなかったその呻き声を、異常なまでに磨(と)ぎ鍛えた聴覚が、それをのがさなかったことがひとつ。それから、その呻き声がいかなる性質のものであるかを知らなかったおろかさが、いまひとつ。
甚内は、ちょっと逡巡(ためら)ったのち、気配を消して、茶亭へしのび寄ってみた。
障子戸は、ぴったりとたてきられてあり、覗(のぞ)く隙間(すきま)はなかった。

数秒間、臘梅の脇へ立って、神経をくばっていると、一瞬、その呻き声は、高く発しられた。女のものにまぎれもなかった。
躊躇をすてた甚内は、躙口の片引戸を、音もなく、二分ばかり開いて、目をその隙間へ寄せた。
あっ、となったことだった。
向切炉の横に、青畳へじかに、纏うた衣裳を打ち拡げ、腰絹の緋色に、その白い豊かな脚線を、鮮やかに浮きあげて、俯っ伏しかかった男の逞しい下肢へ、一足ずつ、曲げからめた光景が、そこに見出されたのである。
咄嗟に、動悸烈しく、身を引いた甚内が、
――あっ、あれは！
そこに脱ぎすてられた羽織や袴の柄が、自分を待たせている城代家老のものであったことに気づいて、愕然となったのは、跫音を消すことのみに夢中になって木戸口まで退いて、ほっと一息ついた――そのとたんであった。
――なんというお振舞いを！
異様な刺戟で波うつ五感へ、苦汁をそそぐように呟きすてて、猿戸を開いて、そっと外へ遁れ出た時――。
甚内は、愕っと、棒立った。
門を入って来たのは、この屋敷の主人寺島長八郎だったからである。

甚内は、反射的に、袖垣へ、身をかくした。
長八郎は、庭に曳き入れられている馬に目をとめたが、べつに、なんの変った険しい様子もしめさずに、すたすたと玄関へ入って行った。
——御城代が見えているな。
ただ、そう思っただけなのだ——と、甚内は、ほっとして、茶亭の秘事が、一瞬でも早くおわらんことを祈った。
……ひそかに、固唾をのんで、秒刻をかぞえる幾分間かが、過ぎた。
突如として、茶亭から噴き出た呶号と、物音に、しかし、甚内は、その刹那、全き冷静にたちかえった。
——やんぬる哉！
破局に直面して、甚内は、そうなることを予め知っていたような自分を見出したのである。
救いをもとめる悲鳴に、甚内は、苑路を、矢のごとく飛んだ。
からだごと障子戸へ突き当って、庭さきへころげ出た目もあてられぬ醜態が、城代家老のものだった。
それを追って出た長八郎の形相は、すでに覚悟をきめた悲愴な色をみなぎらせていた。決して、逆上してはいなかった。茶亭内で、討ち損じたのは、采女正に、切腹を迫ったからに相違ない。采女正が切腹するとみせかけて、隙をねらって、逃走をはかった証拠には、その手に、短剣を摑んでいた。

「おしずまりを！」

甚内は、一刀をふりかぶった長八郎の前へぴたっと立ちはだかった。

「退けっ！　退かぬと貴様も斬るぞ！」

長八郎は、甚内の腕前を知らなかった。いや、家中で、甚内の腕前を知っているのは、釆女正だけであった。

長八郎は、一刀流を学んで、目録以上の使い手であった。

地べたを匍いずって、一間余り遁れた釆女正は、狂人のように、

「甚内！　乱心者だぞ！　討ち取れい！　……主命だぞ！　主命にそむくと、その方も、切腹だぞっ！」

と、吼えたてた。

三

いま——。

甚内の眼前に、頸根から高く宙へ血飛沫を噴きあげて、臘梅へよろめきかかった長八郎の姿が、まざまざと蘇っていた。

その臘梅が、実は、この樹なのであった。

あの屋敷から、はるばる運んで来て植えたのである。朝夕、この樹にむかって、長八郎の冥福を祈るためであった。

恰度（ちょうど）、人の背丈の高さの個処（かしょ）に、黒い斑点（はんてん）がついていたが、甚内には、散りかかった一滴の血汐（ちしお）が、こびりついて、怨恨（えんこん）をそこにとどめているように思われたのである。

もとより、少年の頃から、好んでかいだ芳香であったが、この樹ばかりは、愛（め）でるために咲かせているのではなかった。

長八郎は、乱心して、甚内の一刀に斃（たお）れたと、公表され、世間はそれを信じた。人々は、長八郎の乱心の原因をさぐるよりも、周知の腕前をそなえていた長八郎を斬り伏せた甚内の秘められていた手練に、噂（うわさ）の花を咲かせたものだった。

甚内は、その数年前、長崎へ旅した城代家老堀田采女正が、つれて来た男であった。当時、人々は、風采（ふうさい）のあがらぬ、どこといって取柄（とりえ）のなさそうな甚内を、わざわざつれて来た采女正に、不審をおぼえたものであったが、はじめて、膝（ひざ）を打たされた次第であった。

甚内は、若党から、二十石五人扶持（ぶち）の近習にとりたてられた。同時に、主君の下命であるとして、長八郎の妻杉江を娶（めと）るように、采女正から申渡されたのであった。

甚内は、総身に粟立（あわだ）つ思いで、ひたすらに固辞したが、聴き入れられなかった。

甚内には、采女正の指示に、それがいかなる横車であっても、したがわざるを得ない極秘の恩義があった。

婚礼の席は、甚内にとって、文字通り地獄の針蓆（はりむしろ）に坐らされている苦痛であった。そしてその初夜の褥（しとね）では、背中と背中を合わせて身じろぎもせず、重苦しい沈黙のうちに、束（つか）の間（ま）のまどろみで、朝を迎えたのであった。

二日後には、定府を命じられて、甚内は、名のみの妻をあとにしていた。

事実上の夫婦となったのは、出府して、一月も過ぎてからであったが、その夜の有様も、甚内にのこされた記憶は、なんともあじけないものであった。

真夜中、不意に、杉江は、すっと、甚内の牀の内へ身を入れて来て、冷やかに、

「お抱きなさるがよい」

と、促したのである。

甚内が、逡巡っていると、杉江が継いだ言葉は、酷薄であった。

「城代殿のご命令です」

恰度この折、釆女正も、出府して来ていたのである。杉江をひそかに呼んでいまだ甚内と契りが無いときき、是非とも枕を交わせとすすめたに相違なかった。

妻を抱くことさえも、甚内は、主命によって、為さなければならなかった。杉江の肌は、石のごとく冷たく、無反応であった。

——血が匂う、か！　血が……。

甚内は、突然、かっと、垂れ目蓋をひきあげて、凄じい眼光を、臘梅へ射た。

だが、次の瞬間には、その表情は、その激情の波紋をしずめて、暗く澱んだ。

——そうかも知れぬ。わしの五体は、この手で斬った人々の返り血をあびて、けがれて居る。わしは、そう生まれついたのだ。もはや、妖祥は行を戒め、災異は人を悟す、などと望

まぬがよいのだ。いずれは、天の刑鞭が振りおろされるだろう。それでよいのだ。わしは、黙って、それを受けよう。
おのれに云いきかせ、首を垂れた時、玄関に、案内を乞う者があった。
出て行くと、側用人の奈良池瀬左衛門が、緊張した面持で、立っていた。
田所源次郎を追い討つ指揮をとった人物であった。
座敷に通ると、瀬左衛門は、いきなり、
「追分の下屋敷の前で、数田が一太刀で斬られた」
と、云った。
「数田殿が……」
甚内は、表情こそ動かさなかったが、内心大きな衝撃を受けた。
数田は、江戸藩邸中きっての冴えた技倆の持主であった。
数田の需めで、一度、甚内は立合ったことがあった。
直心影流の数田は、小太刀を把って、甚内の長刀に対したが、その目にもとまらぬ風勢・水勢の凄じい打太刀は、甚内の長刀をたじたじとならせたものであった。尤も、直心影流は、長沼四郎左衛門によって興されて、最も正しい法定の型を尊ぶ流儀であり、運用の妙味を悟るまでの稽古におそろしく長い月日を要求していて、数田自身、七歳の年から二十余年間を倦まず弛まず励んで来た剣客であったから、当然、天賦にたよる我流の甚内の長刀が、修羅場裡でないだけに、小太刀の機鋒に円転滑脱を欠いたのは、いなめなかった。

甚内は、あくまで、その抜刀術において、稀有(けう)の冴えをみせる男であった。

それにしても、一流を起すに足るだけの力を蓄えていた数田が、一太刀で、斬られようとは、想像だに出来難い異変だった。

「何者だと思う？」

瀬左衛門は、こめかみに焦躁(しょうそう)の青筋を走らせて、甚内を睨(にら)むように、眼光を据えた。

「…………」

甚内は、畳の一点に、目を落した。

直感があった。

——もしや、あの浪人者ではないか？

田所源次郎を追いつめて、これを路上に倒し、一人がとどめを刺そうとした刹那、突如、丘陵の中腹から小柄(こづか)を放って、その咽喉(のど)をつらぬく迅業(はやわざ)をしめした浪人者の、妖気ともいえる暗い色を湛(たた)えた異相が、ふっと、甚内の眼裏を掠(かす)めた。

「眠狂四郎という仮名をつかう男だ。調べたところ、円月殺法という邪剣をふるって、すでに、無数の人命を断って居る。……去年、本丸御老中の寵臣(ちょうしん)土方縫殿助(ひじかたぬいのすけ)殿が、西ヶ原御殿山で横死されたが、あの仕業も、眠狂四郎という噂がある。ともかく、数田を一太刀で仆(たお)した奴(やつ)だ。甚内、その方と雖(いえど)も、尋常の立合いでは、あの世へ送れぬ対手(あいて)だぞ」

「…………」

じっと俯向(うつむ)いたなり、甚内は、

──あの浪人者が、眠狂四郎だったのか。

と、感動にも似た気持で胸裡に呟いていた。

甚内は、すでに、眠狂四郎の存在を知っていたのである。

その双眸（そうぼう）の配り、不気味なまでにもの静かだった挙措動作、そして、肺腑（はいふ）へしみるように冴えたひびきをもっていた声音など──ありありと、甚内は、思い泛べることができる。

──そうか、あれが……。

もう一度、甚内は、まちがいなく眠狂四郎であった、と自分に云いきかせるために、心で合点した。

「甚内、よいな！　仕損じてはならぬぞ！　これは、御家老からの厳命だ！」

左様、眠狂四郎を数田に襲撃させたのは、江戸家老稲田八郎右衛門だったのである。

「御家老は、眠狂四郎が、当藩の秘事へ、足をふみ込ませて来たと懸念（けねん）されて居る。生かしてはおけぬ男だ。討たねばならね！　断じて、だ！」

甚内にとっては無用な使嗾（しそう）をしつっこく繰りかえした瀬左衛門は、立ち際（ぎわ）にお茶をはこんで来た杉江には、急に作り笑いを向けて、

「御内儀、あるじはの、また近いうちに、加禄（かろく）になるぞ」

と、云った。

四

眠狂四郎は、夢の中で、亡き妻と会っていた。

……縁側に佇んで、庭の端に、七分ばかりに咲いた桜の花を眺め乍ら、――好い日和だ、と薄い微笑を顔にのぼせていると、背後に衣ずれの音がして、美保代が、呼びかけて来た。

居間の褥に病み伏しているものとばかり思っていた美保代が、いつの間にか、きちんと身じまいを整えて、新しく仕立てた黒羽二重の着物を、持って来ていたのである。

「お召しかえを――」

しとやかに、両手をつかえて、じっと仰ぎ視た。

うっすらと化粧した眉目は、褥の中にあった時の氷肌のつめたさをはらって、清楚な艶やかさをふくんで、美しかった。理智のちからで、熱もおさえたように、明眸も冴えていた。

思わず、狂四郎は、双手をさしのべようとして――夢は、そこで、さめた。

闇の中に、まなこをひらいて、狂四郎は、

――あの日のことだな。

と、頷いた。

白鳥主膳と果し合いを約した日の朝の情景だった。

夢は、そっくり、それを再現してくれたのである。

――美保代は、おれの心の中で、生きている！

あらためて、そう独語してみた——瞬間であった。
狂四郎の全神経は、その感傷からすっと抜け出て、闇の一点へ——それは、襖をへだてた次の間であったが——鋭く、送られたのであった。
物音がひびいたのではなかった。夜気を動かす気配を察知したというのでもなかった。
こうした危機をいくたびとなく迎えた者の、いついかなる時でも、敵に対する鋭敏な本能を用意していて、一刹那に、それを目ざめさせる——爽やかといってもいい霊感であった。
——居るな！
気配を断っている見事さを、ほめてやりたいくらいであった。
そのまま……待つ。
奇怪なことだった。
対手は、いつまで経っても、動かぬのである。
猶、数分待ってから、
「おい——」
呼んだ。
「どうした？　なぜ、襲って来ぬ」
そのこたえは、そこに気配をしめすことだった。
「……先日、鎌倉古街道で出会うた者でござる」
まず、そう告げた。

狂四郎は、薄ら笑った。
「待っていたわけではないが、来るなら、おぬしであろう、と思っては、いた」
「………………」
「立合うなら、裏手の草原にするか。おぬしの長刀をさまたげないだけの広さがある。月の明りもある」
「いや……日をあらためることにいたしたい」
「居合で討つ機を逸したからか？」
「そうではござらぬ」
そこに、数秒の沈黙を置いてから、口にしたのは、奇妙な理由だった。
「庭に咲いた臘梅の香が、きつうござる」
「……………？」
狂四郎は、云われてみて、雨戸をへだて乍らも、この古寺の庭に、その匂いがただようているのに、気づいた。
不審を糺そうとすると、次の間の気配は、すばやく移って、庭へ出ていた。
いくばくかの後――。
狂四郎は、起き上って、雨戸を一枚繰ってみた。
その時であった。
織部灯籠わきの臘梅が、月明りのなかで、音もなく、夢の裡のことのごとく、地上三尺あ

まりの個処から、幹口を開けて、すうっとかたむき……そして、大きく、地面にひびいて、横倒しになったのは——。

両断した者の影は、すでに、そこには、なかった。

淡路人形

一

三日月様かや
ちらと見た
花の色香もよい姥桜(うばざくら)
裾(すそ)で散るぞえ緋縮緬(ひぢりめん)
打水またいで、ちらほらと
濡(ぬ)れぬ先から浮名立つ

微醺(びくん)をおびて、やぞうをきめて、両国岸の掛茶屋のひとつ「東屋(あずまや)」へ、ふらりと入って来たのは、金八(きんぱち)であった。

赤い前掛の茶汲女(ちゃくみおんな)へ、

「どうだ、いい文句だろう。深川の色年増(いろどしま)に、若水汲(く)ませて、松が取れるまで、膝枕(ひざまくら)で流連(いつづけ)したお顔(かんばせ)だあな、拝め拝め」

と、自分で自分の頤(おとがい)へ指をかけて、持ち上げてみせた。

「ほんに——寝る子は育つ、って、鼻の下あたりが、よう延びたこと」
「べらんめえ。花の下なら、うぐいすの、初音ひと声、ほうほけ今日、とくらあ。延びた約束、首尾の宵、口紅といて、帯といて、この仇咲きも君ゆえに、床で散ったか枕紙——てな風情は、てめえなんざ一生縁がねえや、鼻べちゃ」
　すると、落間の床几の顔見知りの隠居が、笑って、
「六根清浄、一根不清浄——若水でよく洗ったかな、金さん」
「なにをこきやがる。ひね大根の出る幕じゃねえや」
「おっと、これで、今年は、ひとつ若返ってな、このお姐さんを女房にしようかと、目下思案中さ」
「ふざけちゃいけねえや。今年は、早桶を用意しておきな」
「いやいや、どうして、新玉となるとな。
　　年立ちかえるあしたより
　　水も漏らさぬあい惚れの
　お年は、とらずに
　　嫁をとる
お姐さんや、ひとつ、どうじゃな、わしの女房になっては——」
　茶汲女は、笑って、奥へ行きかけたが、ふと思い出して、金八のそばへ寄ると、つと耳もとへ口を寄せて、何かささやいた。とたんに、金八は、どんぐり眼を二倍に瞠いて、

「ほんとか、おいっ！」

と、女の胸ぐらをつかんで、

「かつぎやがったら、てめえ、はり倒して——天(あま)の岩戸を、擂粉木(すりこぎ)で、こじあけるぞ」と、ゆさぶった。

「嘘(うそ)だと思うなら、おかみさんにきいてごらんな」

「わかってら。昨夜(ゆうべ)の夢で——ちゃあんと、黒の着流し、無想正宗落差(おとしざ)し、すっとあらわれて、金八元気か、と声をかけられてら。……うあっ、うあーっ、だ！」

横っとびに、茶屋をとび出した金八は、いっさんに、高小屋のならんだ西両国へむかって走った。

二

「雨は降る降る、裾野は烟(けむ)る——時、恰(あたか)も建久四年五月闇(さつきやみ)、まっくら、くらくら暗闇を、ぬき足さし足しのび足、めざす陣屋は木瓜幕(もっこうまく)、工藤左衛門祐経(くどうさえもんすけつね)が寝所なりいっ！」

立川談亭(たてかわだんてい)は、張扇で読み台を、ぴしゃりと叩(たた)き、

「十八年の辛苦、さて夢の間は、粟飯(あわいい)一炊の間(かん)、過ぎて今宵(こよい)の晴れ小袖(こそで)、濡らす五月雨(さみだれ)、野末の風も、無常のものにはこれあらず——折からひびく暮六つの、鐘がこめたる七色は、その覚悟をば問う芥子(からし)、芥子の赤舌、鴉(からす)の白糞——けなげなるぞえその志、願うは弥陀(みだ)の誓願力、運は天にあり、牡丹餅(ぼたもち)は棚(たな)にあり、鎧(よろい)は胸に、臍(へそ)は腹、男は度胸で女は愛嬌(あいきょう)、犬が西向

きゃ尾は東。きまりきったる浮世のならい、君はずかしめられれば臣は死し、親討たるれば孝子讐を復す。兄は十郎、弟は五郎、兄弟その日のいでたちは――」

ぴしゃっ、ぴしゃっと張扇を鳴らしておいて、羽織をぬぎすて、

「兄の祐成、二十と一歳、大磯いそいそ虎御前と、裾は露、袖は泪にしぼりつつ、由なかりける契をば、むすんだ天下の色男、形見ときかえし連銭つきの綾小袖、村鵆の直垂に、小袴の裾たかだかとさしぬき、一寸斑の烏帽子、萌黄の小具足ひきしめて、腰にさげたる太刀こそは、赤銅造りの黒鞘巻、微塵と名づけし業物なり、さてはまた弟時致は、ひとつちがいの二十歳、六尺越えたるタフガイは、生れかわれば裕次郎、四十億をば儲けるものを、夢寐にも知らずにけなげなる、露の置き身のすてどころ、浅黄小袖に綌の直垂、小蝶の飛ぶをすずやかに一着なし、玉襷を挙げて、遠雁金の付きたる紺の袴のくくりを結び、兄と同じく一寸斑の烏帽子をば、一天高しとおしいただき、腰に帯びたる兵庫鎖の大業物は、これぞ源氏重代の友切丸ときこえたり。……いでや、いでこそ、やっこらさ、兄よ弟よ、弟よ兄よ、目指すは、祐経ただ一人、寝首をかいて、巻狩りの、猪の餌になしくれん、すこしも、早よう、おおそうじゃ！」

談亭が、いよいよ、夜討曾我の修羅場を語ろうと、だんご鼻のさきへ汗をかきながら、ぐっと、胸をそらしたとたん、

「うわあっ、だ！」

入口の古暖簾をはねのけて、金八が、あたりかまわぬ大声をあげて、とび込んで来た。

「師匠、赤飯炊いて、鯛の尾頭つきだあ！」
「えっへん、えへん！　これから本懐をとげるくだりでな、まだ赤飯炊くのは、早いが――」
「何をふざけやがる。きいておどろくな！」
「きいておどろき、見てびっくり、桃栗三年柿八年、曾我兄弟は十八年、工藤祐経百年目
――富士の裾野の」
「裾のひろがりは、鉄漿溝から股のぞきすりゃ、小格子女郎が臍まで見せてくれらあ」
客の一人が、ふりかえって、
「うるさい、巾着切！」
と、どなった。金八は、にやっとして、
「そういうてめえは、夜鷹も買えねえ摺切だろう。どけどけ、おけら」
高座へ近づくと、
「師匠っ、先生が帰って来たぞ！」
「う――わっ！」
談亭は、大袈裟に、張扇で自分の額をたたいて、
「どこだ、金公――狂四郎は？」
「それがまだ、わからねえ」
「わからねえとは何事ぞ！　狂四郎やあい――」
「なんだい、師匠、其奴は？」

客の一人が訊ねると、談亭は首をふって、

「狂四郎――今日しろ、ってな、今日為さざれば明日貨亡し、とは管子の名言。とてものことに、いやはや、只今より、目のまわる忙しさに相成ってな、曾我兄弟には気の毒だが、ひとまずこれで――はい、皆の衆」

談亭は、客たちの不服声を背中にして、さっさと狭い板廊下に降りると、ついて来た金八へ、

「いいか、金公、先生の前で、わしは、観世縒で首を縊るし、おめえは、豆腐の角へ頭をぶちつけて血反吐を吐いて――詫びたぐらいじゃ、すまねえんだぞ」

と、云った。

談亭と金八は、武部仙十郎から、不幸な孤児新太郎を預っていたのであるが、この正月、突然、何者かに誘拐されて、血眼になって捜したが、いまだに、手がかりもつかめずにいるのであった。

新太郎――。

禁制のびるぜん、さんたまりあ像を作った仏像師芦部光源の娘お艶が、その父を救うために、海の彼方から、おそるべき信仰の強さをもって、この国の切支丹禁絶に挑むべく、渡って来た布教師ヨハネス・セルディニイを、おのれの白い肌をもってころばせた――そのたった一度の秘密で、この世に生まれた因果の混血児であった。狂四郎が、ひろいとって、わが子として、美保代に育てさせていたが、親に縁の薄い宿運を背負っていて、その母をもまた

喪ってしまっていた。

日本屈指の名人と称された仏像師を祖父にもつ少年のからだには、やはり、美を創り出す血が脈うっているとみえて、絵筆を持たせると、異常な才能のひらめきをしめした。

美保代は、武部仙十郎の許にともない、いずれかの名のある絵師の弟子にしてくれるように頼んでおいて、死んで行ったのであった。

談亭と金八が、その役目を引受けて、新太郎を、その裏長屋へ引取ってから、ものの一月も経たぬうちの凶事であった。

三

講釈場と筋ちがいのところに、軽業や曲独楽などの見世物の高小屋があったが、これに、数日前から、淡路人形座が、看板代りに、等身大の角眼の佐藤正清や、若男の勝頼や、娘頭のお初などを、高いところに飾り、また木戸口には、四斗樽ほどの巨大な酒顛童子を据えて、人目をひき、客足を寄せていた。

眠狂四郎は、この小屋の土間の一隅に、ひとり、ひっそりと佇んでいた。

ふしぎな人気がわいて、小屋は、ぎっしりと、すし詰めであった。

生粋の江戸芸は、河東節と野呂松人形に限られるとして、これが蔵前の札差や諸侯御用達商人たちの所謂旦那芸専務となって隆盛期を迎えている当時のことである。庶民は、その反動として、粗野で乱雑で、およそ行儀のわるい田舎人形の熱演に、喝采を送った、といえ

る。

狂四郎も、ふらりと入って、見物しているうちに、その荒けずりな素朴な人形の動作に、ふしぎな生彩のある美しさを見出したのであった。

野呂松や文楽とちがって、一人では到底扱いきれない大きな人形を、腕力をふるって操るのであったから、殊に時代物の荒物などでは、その動作は、かえって、繊細な技巧などふきとばすいきいきとした激しい躍動が魅力となっていた。

太夫もまた、人形の大振りにあわせて、顔面を汗にして、見台を叩き、首をうち振り、咽喉をしぼり、肩をゆさぶり――それを眺めているだけでも、面白かった。

「七本槍」では馬を八頭も出し「先代萩」では、大座のどんでん返しをやり、「仮名手本」の五段目では、人形使いが、勘平とともに花道を走って、見物のどぎもをぬいた。

――粋だの、通だのと、小細工に小細工を加えて、粉飾も沙汰の限りとなった習俗の中で、この粗笨な人形芝居の、潑剌とした天真の流露は、どうだ！　野暮というものの、小気味のいい生気はどうだ！

狂四郎は、一種の爽快感をおぼえずには、いられなかった。

まさに淡路人形には、芬々たる土の匂いがしていた。太夫、人形使い、いずれも、百姓であった。野良着をぬいで肩衣をつけ、こやしのしみついた手で人形を扱うのであった。

そのむかし、西宮えびすの神主森丹後が、同社家森兼太夫と争論のことあり、公事に負けて、勅免になり、所縁あって淡州産所村に来って、有りのすさびに傀儡を作って、これを農

夫たちに教えたのが、淡路人形の起源という。

困窮の農夫は、たちまちに、城主御免の四十八座の操を組織して、農閑期に、全土にわたって、打ってまわった。いわば、純粋に郷土の伝統から生まれた農民芸術であった。

筵の上に集まる見物衆は、浄瑠璃など生まれてはじめて聴く、貧しい者たちである。当然、芝居に対する礼儀作法を知らぬ。舞台をよそに、飲み喰い、餓鬼どもの騒擾も一向に咎めない。この噪音のまっただ中で演じられる人形劇は、すでに文楽などが残忍淫靡として棄ててしまったどぎついせりふやしぐさを、なお、平然として観せることになる。

玉藻の前では、九尾の狐が玉藻の前の腹を喰い破って、血まみれの腸をくわえてひきずり出す。伊勢音頭では、貢に斬られた十人の、ちぎれ胴やら手足が舞台へ散乱する。大江山では、酒顚童子が、四斗樽ほどの巨大な首を刎ねとばされて、のたうちまわる。

そして、この凄じい原始的な農民芸術は、野暮と化物は箱根より東に住まぬ筈の天下の御膝元花の大江戸で、いまや非常な評判をとろうとしているのであった。

桟敷の上に、金一封とか白米一車などという天地紅のビラが、びっしりと貼りめぐらされているのも、ただの景気づけだけではないようであった。

無道な刺戟以外に、魂の曠しさを癒やすすべのなくなった孤独な男が、ふと、土の匂いのする人形の所作に、妙に惹かれたのも、これは、故なきことではないようであった。

そしてまた、別の期待も、狂四郎の胸中には、あったのである。

「おさむらいさん——」

背後から呼ばれて、ふりかえると、十字架を背負った裸形の男の貌を、こちらの暗い眉目に似ていると見た娘お吉が、にこにこしていた。

「この次が、酒屋の段です。お園のあたまに、あの手絡がつけてあります」

「うむ――」

狂四郎は、頷いた。

お吉は、そのまま狂四郎のそばにならんで立つと、両袖を胸で合せて、つと、半身をねじってさわりの頂点の型をつくり、小声で、

「……去年の秋のわずらいに、いっそ死んでしもうたら、こうした難儀は、あるまいものを……お気に入らぬと知りながら、未練なわたしの輪廻ゆえ、たとえ添臥しかなわずとも、おそばにいたいと辛抱して、これまでいたのが、お身の仇、いまの想いにくらぶれば、一年前に、この園が、死ぬる心が、つかなんだ――」

と、そこまで、口ずさんでから、

「わたし、お園なんて、きらい！　めそめそ、いじいじして、阿呆らしい」

と、早口に云いすてた。

狂四郎は、思わず、苦笑して、お吉の横顔へ目をあてた。

お吉はけろりとして、江戸へ来てたちまちおぼえたのであろう、口三味線を入れて、端唄を、うたいはじめた。

　ぬしに逢う夜は

小萩の笑顔
かたみ小袖を波こえて
末の松山、末までも
かわるまいぞえ百夜草

——これが、捕えられれば磔刑になるかくれ切支丹か。

狂四郎は、どうにも、納得できぬ奇妙な気持であった。

四

——これは!

急に、狂四郎の眸子が青く燃えた。

舞台にあらわれたお園人形の貌が、妖しく、それだけ別の光で照らし出されたように浮きあがって、他の人形はかすんでしまったのである。

芝居人形の頭には、それぞれに区別がある。女形ならば、「安達原」の悪婆などの婆、「仮名手本」の戸無瀬などの嬶頭、「先代萩」の政岡などの年増、阿古屋や夕霧などの新造、そして、

「菅原伝授手習鑑」の八重や野崎村のお染などの娘がしら——。

お園人形は、当然、娘がしらでなければならなかった。

しかるに——。

その面長な白い相貌は、ういういしい純情の美しさのかわりに、いちまつの愁いと淋しさを湛えた、翳濃いものだったのである。

芦屋道満大内鑑の白狐、葛の葉のような、化生の幽気をただよわせる老け女形の首と、まちがえてしまったのではないか、と疑われた。

この一座は、これを娘がしらとして、あやしまずに、使っているのであろうか。それとも、娘がしらに故障がおこって、やむを得ず化生首を代用したのか。

かたわらには、もうお吉の姿はなかったので、問い糺すすべはなかった。

いや、狂四郎にとって、そんなことはさしたる疑問ではなかった。

それよりも——。

その相貌の妖しい美しさは、先夜、狂四郎が、蜂須賀家の下屋敷で見た月に潤う臈たけた佳麗のそれだったのである。

——あの女を写したのか？

狂四郎は、お園が、身もだえて、

〽おそばにいたいと辛抱して、これまでいたのが、お身の仇……。

と、片手のうしろ向きと呼ばれる優美な型をとった刹那、それが、白羽二重の寝召しをねじって、喘ぎつつ、

「でうすひいりよ……おん扶手——」

と呟いたあの女のすがたそのままと見えた。

い。斯くもみごとに写しとった入神の技倆を称えれば足りよう。
阿波の人形師が、蜂須賀家の上﨟の貌を写したとしても、これは、べつだん不思議ではな
ただ、この偶然の発見に、狂四郎の心が、われにもあらず、さわいだのは、水垢離をとって氷のように冷えた白い肌を、荒々しく犯したのみか、その柔肉の底から微妙な本能の蠢動が起るや、たちまちに、襤褸のようにふりすてたおのが残忍な所業を、まだ、なまなましい記憶として、苦汁の澱のように、肚裡にのこしていたからである。

——猿猴、月を取って……まだ、くたばる時節は来ないか。

狂四郎が、口辺に自嗤を刻んだ——その時であった。

左側の桟敷から、手拭いで顔をつつんだ折助態の者が、すっとつっ立つやいなや、大きく右腕を振った。

その手もとから飛んだ黒い塊が、本手（本舞台）の前の勾欄に、うち当るや、ぱっと割れて、白煙を噴いた。

同時に、右側の桟敷から、一人の武士が、飛鳥が掠めるに似たおそろしい迅さで、土間と仕切った横桟上を滑走して、舞台を襲った。その腰に帯びているのは四尺余の長刀であった。

白煙は、つづけさまに、舞い立つ幾条もの白い布のように、舞台上の宙を躍って、あっという間に、人形使いも人形をも、おしつつんでしまった。

その中へ——幕走りへ、一気に跳んだ野々呂甚内は、

「御免——」

一声をのこして、船底で茫然となっている人形使いの手から、お園人形を、さっと奪いとっていた。
この時、狂四郎も、目ざめたように、猛然と、行動を起していた。

五

長堤一列の柳は、二百八十余本とかぞえられる。
浅草橋から筋違橋まで、およそ十町の柳原堤は、日が昏れるとともに、人影を絶ち、灯火一個も置かぬ。北側が神田川、南側が武家屋敷がつらなり、夜に入るや、辻駕籠も、ここは、はやく飛ぶ——。
広小路の高小屋から、矢のように、とび出した甚内は、逃走路を、ここにえらんだ。そしてまた、狂四郎も、小屋のおもてで、甚内の速影を見失ったが、一瞬のためらいもなく、柳原同朋町の近道を突破して、夕闇にまぎれようとする甚内の後姿を、浅草御門の前方にとらえた。
甚内の凄じい脚力は、すでに、狂四郎の知るところである。
だが、これはおそるるに足りなかった。長距離は困難としても、この堤の長さぐらいは、狂四郎の足は、甚内との間隔をちぢめることにさして躍起にならずともよかった。
新橋前を過ぎ、和泉橋の地点に達した時には、その間隔は、二間余になっていた。
問題は、それからの攻撃に、あった。

甚内の腰には、四尺余の長刀があった。こちらの無想正宗は、二尺三寸であった。
こちらの一撃に合せて、甚内が居合抜きに背後へ円を描くであろう——切先と切先の差は、二尺である。
もし、甚内に、抜刀の神速がなければ、当然、こちらの一直線の斬り下しは、その背中を割るに相違ない。甚内の居合抜きは、背後へ円を描ききって、なお無想正宗の迅業(はやわざ)におくれをとるまい。
——よしっ！
狂四郎の脳裡に閃(ひらめ)いたのは、
——乱車刀を！
その秘技の応用であった。
聊(いささ)かの煩瑣(はんさ)を承知で「乱車刀」を、ここに述べておけば——。
そのむかし、宮本武蔵は、幾十度びの真剣試合において、常に一刀片手遣いであった、という。そして、その構えは、上段、中段、下段いずれにても、心に任せたと、丹治峯均筆記に見えている。
一刀片手遣い——すなわち、乱車刀である。
これは、常静子、松浦静山(まつらせいざん)の「剣攷(けんこう)」によって、明らかにされる。
乱車は、片手の太刀なり。木剣裏(うら)形にも片手の所作あり。この車といえるも、みな廻刀にして、乱とは定まれるところ無きを云う。因(よ)って使い分けるには、彼陽撃する者に、

我片手を以て対撃し、彼の双手を襷に、左下り、右下りと車撃し止む。夫れこの乱車は、目録に所ㇾ挙の八個の一刀にして、その外に真の乱車と云える術あり。尤秘せり。此形は、彼は陽刀にして動かざるを、我彼が左手を車撃すること二、三にして、その刀を左より右揚りに、彼が面部あるいは足部を迅撃す。この時、彼竟に発せずして止む。是則ちその形を教えたる者にして、真理に非ること自ら明か也。乱車は、乱撃にして、その定形あるに非ず、若しそれ定形あると云わば、人各異る心あり。刀家も亦流派多し、豈一定を以て敵対せん。然るときは使い分け、真乱の受太刀は、皆これその形法を示すがためにして、その実は、彼に乱撃を以て之に応ずること明か也。

もとより、乱車の無形にして神速自在、幻影奔車のごとき行使は、狂四郎の腕前をもってして、活きることであった。

「行くぞっ！」

満身からの一喝をあびせるとともに、狂四郎は、地を蹴った。

「………」甚内は、必殺の気合を口腔内に嚙んで、目にもとまらず、長刀を一閃、背後へ、びゅっと、切ってまわした。

その空間に、すでに、狂四郎の姿はなかった。

双の袖を翼と化したごとく、五体を、地上四尺の宙のものとした狂四郎は、地を蹴ると同時に鞘走らせた無想正宗を、下から、斜め上へ、きえーっ、と唸らせて、宵闇を截った。鍛えた本能が、甚内をして、さっと、首を沈めしめた。

それが、狂四郎の目ろむところだった。その左手にかかえられた淡路人形の首であった。

無想正宗が狙ったのは、甚内の首ではなく、その左手にかかえられた淡路人形の首であった。

そして、その首は、見事刎ねられて、寒空に生まれた星を慕うがごとく、高く飛び立った。

——南無!

甚内は、刃風に搏たれた戦慄に、総身を凍らせて、その場へ茫然と棒立った。

狂四郎の姿は、すでに、堤の斜面上にあった。甚内へは一瞥もくれず、堤を飛び越えた人形の首をもとめて、身を翻すや、その斜面をかけあがって行った。

遠く、にぶい水音が、ひびいたのをきいて、

「おや?」

と、足を停めた二人づれが、そこから一町ばかり先にいた。談亭と金八であった。狂四郎の帰府をたしかめに、武部仙十郎を、水野忠邦の上屋敷におとずれようとして、急いでいたのである。

恰度、清水山という、洞穴から年中清水が湧き出ている地点にさしかかっていて、むかしからの云いならわしで、この清水山には種々の怪異があったのである。談亭も金八も、ぞくぞくっと悪寒をおぼえて、顔を見合せた。

「けっ!　川獺め!　化けて出てみやがれ!」

「川獺うそうそ、うその皮だ。化けてなんざ出るもんかい」

そうは口走ったものの、二人は、急に怕（こわ）くなって、夢中で、足をはやめて行った。

宛然（さながら）、怪異がまことであることをしめすがごとく、妖（あや）しい白首をかかえた、ずぶ濡（ぬ）れの黒影が、清水山の茂みをわけて、しずかな足どりで降りて来たのは、それから幾分か後のことだった。

悪妻責め

一

晴れて、風もない、明るい朝であったが、底冷えする寒気が、陽ざしの中に盈ちていた。

昨夜、いつの間にか降った雪は、地面につもるほどの量ではなかったが、日陰の樹枝には、白くのこっていて、殊に梅などは、風情があった。

これを花と見まごうて飛んで来たのではあるまいに、梢に、鶯の声がして、これは、いかにも、この冷たい明るい朝景色に、おもむきを添えた。

隅田村堤のもとにある梅柳山木母寺――。

由緒ある古い寺院で、本尊は五智如来、なかにも阿弥陀如来の像は、聖徳太子の作と云い伝えられている。山門にかかげた木母寺の額は、これを号づけた近衛関白信尹が慶長十二年に関東へ下って来た際、翰墨を灑いで画した、ときこえる。

どういう風の吹きまわしであったろう、去年まで押上村の檀家もない貧乏寺龍勝寺にいた雲水空然が、ここの住職におさまっていたのである。

したがって、いま、眠狂四郎が、両手を懐中に置いた無腰で、ぶらりと庫裡から出て来た

としても、ふしぎはないことだった。

本堂の前を過ぎて、石段を降りると、右手に、松にかこまれた塚があり、小祠がまつられてある。梅若塚、という。

うき事を思い出でてや古塚に都のたよりまつ風の声

この塚にのこした近衛信尹の一首である。

狂四郎は、小祠の前に佇むと、遠いむかしの悲劇を想いやった。

……堀川院の寛治年間のことである。吉田少将惟房なる人物が、陸奥の国司に任ぜられて、赴任の途次、美濃の国野上の郷に立寄って、里長の家に逗留した。その家に、花子という容色秀れた白拍子が居り、惟房は、里長にねがって、これを妾とした。花子は班女の前と改めて、奥州宮城郡の府へともなわれ、やがて、一男を生み、梅若丸と名づけた。

惟房は、三年後任満ちて、班女の前と梅若丸をつれて、京へ帰った。爾来十年間、平穏な家庭がいとなまれた。

十三歳になった梅若丸は、叡山の月林寺に稚児として上った。当時、叡山の稚児は、身分ある者の子弟で、学問修業を目的としていたのである。

不幸は、それから一年後に、吉田家を襲った。

院の覚えも目出度く忠勤を抜きんでていた惟房は、守護していた夕告の御剣が何者かに盗み去られた事から、検非違使赤石盛景と争闘を起し、これを斬って、切腹して果てた。

父の非業の死をきいた梅若丸は、叡山にそのままとどまることに堪えきれず、山を下った。

ところが、大津街道にさしかかると、その麗（うる）わしい容子（ようす）を、奥州南部の人買い信夫（しのぶ）の藤太（とうた）に見られて、言葉巧みな誘拐（ゆうかい）に遭うた。はるばると武蔵国鳥越の里まで連れられて来たところ、すでに胸を患（わずら）っていた梅若丸は、もはや一歩も動くことが叶（かな）わなくなった。藤太は、無情にも、梅若丸を、路傍にすてて逃げ失（う）せてしまった。

通りかかった里人が、倒れている梅若丸を発見して、わが家へともなって、看護したが、その甲斐（かい）なく、

尋ね来て問わば答えよ都鳥隅田川原の露と消えぬと

文字通り血を喀（は）く辞世をのこして、この世を去った。

この美少年の無名の死を、里人たちが憐（あわれ）んで、相集うて、懇（ねんごろ）に塚を築いて埋葬してやったのが、これであった。

梅若丸の母班女の前は、愛児が大津街道で攫（さら）われて、東国へ拉致（らち）されたとき、狂気のようにあとを追って、尋ね尋ねて鳥越の里までやって来て、とある一堆（いったい）の塚の前で、里人が大勢集まって、念仏をしているのを目撃した。不吉の予感があって、近づいてみると、はたして、わが子の墓であった。

里人たちは、そこに昏絶（こんぜつ）した婦人の貌（かお）が、逝（い）った少年の俤（おもかげ）を写しているのを見て、その母親と知った。

班女が、里人たちの好意によって、髪を断ち、妙亀尼（みょうきに）とあらためて、総泉寺前に庵（いおり）をあんだのは、それから幾日か後のことだった。

しかし、法体となっても、わが子の非命を傷む心はかわらず、朝な夕な庵の傍の池のほとりに出て、水鏡におのが貌を映して、わが子の俤を偲んだ。ところが、ある朝、班女は、水鏡の貌が、見るも無慚に変っているのを見て、狂気し、袈裟をすてて、身をその池へ投じて、果てた。

この木母寺縁起をきいて、歌心のある者は、必ず、この塚に詣でて、一首をささげるならわしが、いつとなくできていた。

狂四郎の前の祠の蔀にさげられた幾枚かの短冊が、いまも、このならわしがつづいていることをしめした。

もとより、遠いむかしの伝説であり、その母子の哀れさに、この虚無の男の感慨があるという次第ではなかった。

ただ、「いにしへの塚の姿、あはれさ今のごとく」におぼえて、

　古塚のかげゆく水のすみだ河ききわたりてもぬるる袖哉

とうたうことのできる人の素直な歌情と、おのれの涸れた無明の剣気をくらべている狂四郎であった。

そして、これは、どうやら、まぬがれがたいおのが宿運と、皮肉にも、ここでもまた知らされたことである。

祠の陰に、おのれを狙う殺気があったのである。

二

狂四郎は、自嘲の薄ら笑みを、蒼白いおもてへ刷くと、
――どうする？
声なく、姿なき敵へ問うた。
そのままの姿勢で――動くのは、対手が動いた刹那であることを、その静かな立姿で予告した。
それなり……絵に入ったように、微動だにしない幾分間かが過ぎた。殺気が消えたのは、境内に跫音が入って来たためであった。
「おお……そこに、おいでになります」
声が、自分を指していると知って、狂四郎は、首をまわした。
淡路人形一座のあやつり師で、三輪市という年配の男だった。お吉から、信頼のおける男だとひきあわされて、狂四郎は、手絡のことをたのんでおき、ここにいることも教えておいたのである。三輪市がともなって来たのは、これもかなり年配の、見るからに謹直そうな武士であった。
狂四郎は、降りて、鳥居をくぐって出ると、
「迷惑をかけた。人形の首だけは、こちらにとりもどしたが、神田川に落ちて傷がついたし、芝居にはもう使えぬであろうから、譲り受けに、たずねようと考えていたところだ」

と、三輪市へ云った。

「そのことに就きまして……」

三輪市は、こわばった面持で、武士をひきあわせた。武士は、阿波藩邸留守居・間瀬幸兵衛と名のった。狂四郎は、二人をともなって、庫裡にもどった。

床の間に、お園人形の首が、据えてあった。

頭髪が乱れ、目蓋をふさいだそれは、生首のようになまなましい、傷ましいものに眺められた。三輪市の眉をひそめさせた。

間瀬幸兵衛は、座に就くや、すぐに頭を下げた。

「当藩江戸家老稲田八郎右衛門より悃願つかまつる。その人形首、何卒お手渡し下さるよう……」

——刺客を寄越すと同時に、くどき落しの者を寄越したわけか。

狂四郎は、すでに密使を国許へ送ろうとしたのが、江戸家老ではない、とさとっていた。手絡は、敵側の品だったのである。

狂四郎は、下屋敷へ忍び入って、稲田八郎右衛門に会った時は、彼が送った密使を敵側が討ったのではないかと考えていたのである。ちがっていた。

稲田八郎右衛門が、何故率直に、そのことを打明けず、わざわざ教えに来た者を闇に葬ろうとしたか。失敗してもなお、執拗に、あの抜刀術に秀でた男をつかって、生命をつけねらって、輟まないのか。

これは、あきらかに、蜂須賀家に起っている抗争の原因である重大な秘密が、他所へ洩れることを極度に警戒している証拠ではないか。敵も味方も、秘密をまもるという点では、一致している模様である。

結果として、両国の高小屋に、あの騒動を起させたのは、狂四郎であったといえる。

もはや、狂四郎自身も、あとへひけぬ立場にあった。

狂四郎は、間瀬へ、冷やかな眼眸をあてて、云った。

「御家老は、よほど、人を信じることに吝嗇な御仁と思われる。……お手前自身、こちらがやすやすと手渡すとは考えて参られたわけではあるまい。頭を下げてみたならば、わたしという人間がどう出るか——それを見とどけて参れ、と命じられたのではないか」

「…………」

間瀬は、ぐっと返答につまった。

「乗りかかった船だ。こちらは、乗せて頂こう」

はっきりとそう宣言しておいて、狂四郎は、ずっと後方にひかえている三輪市を見やって、

「騒動の起る前の日あたり、お前さんのところへ、わたしが預けた手絡を渡せ、と藩邸から使いは行った筈だな」

「はい。お見えになりました」

「お前さんもお吉も、そんなことは知らぬ、とそらとぼけた」

「はい。左様でございます」

「使いは、この御仁だったのか？」
「いえ、側用人をおつとめの奈良池瀬左衛門と仰言るお方でございました」
「お前さんがたのそらとぼけぶりが見破れない側用人だ。それから、こちらは、謹直一途のお留守居とお見受けする。……御家老も、どうやら、敵とたたかうに、持駒が不足して、御苦労なようだ」
間瀬は、俯向き、その侮辱に堪えた。
ほんのわずかな沈黙を置いてから、狂四郎が、云った。
「明朝、人形首を、下屋敷へ持参いたす、と御家老へ、おつたえ願おう」
間瀬は、はっと擡げた顔を、みるみるかがやかせて、
「お、お手渡し下さるか！」
「渡すとは申さぬ。持参する、と申した」
にべもなく云いすてて、追いたてるように、狂四郎の方から立ち上っていた。
間瀬が出て行き、三輪市もいとまを告げようとした時、狂四郎は、ふと、思い出して、
「あの人形の貌は、藩邸の奥女中を写したと見たが……お前さんは、きいているか？」
と、訊ねた。
三輪市は、ちょっとためらっていたが、
「実は、お殿様の奥方様を、細工人の天狗政という者が、遠くから、幾日も拝ませて頂きまして、苦心いたしたもので……」

と、こたえた。

狂四郎は、黙って頷いたが、胸には、つよい衝撃を受けていた。

一人になると、縁側へ出た。

織部灯籠のわきに、切り倒された臘梅が、うっすらと雪をのせていた。

それへ、遠い眼眸を投じ乍ら、

――おれが犯した女が、蜂須賀阿波守の簾中だったというのか！

暗い呟きが胸裡にあった。

三

蜂須賀家上屋敷の平御長屋の、野々呂甚内の住居では――。

杉江が、居間いっぱいに、あらゆる種類の帯をひろげて、ひそやかな愉しみに耽っていた。

この陰湿な気性の女の唯一の趣味は、古い時代からの帯をあつめることであり、珍しい品を手に入れた時のみ、生甲斐をおぼえるようであった。

よくも、こんなにたくさんあつめた、とおどろくばかりであった。

室町の頃の遊女が締めたといわれる糸を丸打ちにして端に総をつけた組帯（名護屋帯）、摺箔の間に秋の野に草尽しを縫った平帯（縫目を表にあらわさぬように絎けた帯）、黒地に梅桜松を縫付けた鉢の木帯、小鳥尽しを織り縫い散らして白糸の網をかけたおそろしくぜいたくなもの。金襴、今織、緞子、綾、天鵞絨、縮緬、綸子、竜文、回々織、紗綾、紬、変り八丈、

絖、更紗など……。
鼈甲、葵、石畳、唐草、唐花、七宝、そして花鳥のけんらんたる模様が波うつ海に、わが身をふんわりと浮かべて、孤独な愉悦に心を漂うにまかせている時、はじめて、杉江は、この上もなく優しい面持になっているのであった。

しかし、この愉悦も、長くは、つづかなかった。

玄関の格子戸が開いた。

もの静かに上って来る気配は、良人甚内のものであった。

たちまち、杉江は、その白い肌膚を氷のように冷たく、堅くひき緊めると、物陰にひそんで神経をくばる狡猾ですばやい野性の小動物のように、動かず、目を据えた。

甚内は、昨夜おそく、めずらしく、その小兵に険しい色を滲ませて戻って来たが、すぐにまた出て行き、それきり、今朝まで帰宅しなかったのである。

杉江は、知っていた。

甚内が、下命によって、人を斬りに出て行く時、そしてまた帰宅した時、四尺の長刀を一尺ばかり抜いて、その白刃へ、おのれの顔を映すくせがあることを——。

その瞬間の表情は、別人のごとく厳しく悽愴であり、杉江もまた、近より難い威圧をおぼえる。

すでに、杉江は、甚内が何者を斬ろうとしているのか、奈良池瀬左衛門からきいていた。

杉江と瀬左衛門は、半年ばかり前から、他人ではなくなっていた。したがって、甚内の行

動は、杉江に、一切つつ抜けにわかるのである。
昨夜、甚内は、藩邸へ戻るとすぐに瀬左衛門を、その長屋にたずねて、包まず、おのれの失敗を報告したのであった。
高小屋において、手絡をかけたお園人形を奪って逃走することに成功はしたものの、柳原堤で、眠狂四郎に追い迫られて、その首を刎ねられた一埒であった。
瀬左衛門は、露骨な渋面をつくって、聴きとったが、叱声のかわりに、わざと語気をしずかなものにして、
「明朝までに、お前が、人形の首と、眠狂四郎の首と、わしの前に、ふたつ並べることが、できるか、どうかじゃ」
そう云ったのである。
甚内が、そのあと、わが家へはちょっと寄っただけで、すぐに出て行ったのは、そのためであった。
そして、甚内と入れちがいに、瀬左衛門が、こっそりおとずれて、杉江との間に、淫靡な営みを持ったのである。
杉江は、すっと立つと、襖へ寄って、細めに開けて、座敷を覗いた。
長刀は、床の間の刀架に置かれてあった。
甚内自身は、障子に背を凭りかけて、胡坐をかいて、一睡すらもしていない、むくんだ顔を俯向けて、敷居の一点へ、茫然たる視線を落していた。

人目のない場所にいても、未だ曾て姿勢を崩したことのない男が、疲労濃く、肩を落して、胸もとをはだけて、虚脱の態で、心をすてているのであった。

——ふん……。

杉江は、胸の裡で、あざわらった。

——討てなかったのだ。

侮蔑は、しかし、次の瞬間、ひとつのおそろしい決意に、すりかえられた。

——この男がどうしても討てない対手が、いたのだ！

すなわち、その人物なら、甚内を斬ることができる、といえるのではないか。

杉江は、襖を開くと、座敷に入った。

「おつかれのご様子とお見受けいたしますが……」

いつにない優しい呼びかけに、甚内は、正直に怪訝の面持になって、妻を見やった。それから、あわてて、居ずまいを正した。

「無断で、家を空けて、相済まぬ」

「ご用むきのこと、存じあげて居ります」

杉江は、いそいそとした様子で、お茶をはこんで来た。

「忝ない」

いまの甚内にとっては、思いがけぬ妻の妻らしい振舞いは、すくいとなった。

甚内は、先夜と同じく、眠狂四郎を襲うべく、木母寺の庫裡に忍び入って、ねらいつづけ

たのであったが、ついに、はたせなかった。甚内自身、稀有の手練者であるだけに、対手がおのれ以上の剣士であることが、あまりにもよくわかり、その寝室へふみ込む隙がなかったのである。

はたして狂四郎が、先夜と同じく、こちらの侵入を察知したかどうかは、知らぬ。あるいは、甚内の方が、一人相撲をとったことになるのかも知れない。

甚内は、その寝室に、狂四郎が睡っているのか目をさましているのか、ついに夜明けがたまで、判定することが不可能だったのである。同じ位置に、微動だにせず蹲りつづけて、全神経を活き活きと五体に張りつづけるのは、これはまた、異常な気力を必要とした。甚内は、気力の限界をさとって、幾度か、捨身の動きに出ようとしかけて、そのたびに、名状しがたい力で、四肢が縛られるのを感じたのである。

寝室に、依然としてなんの気配もない――その不気味な静寂の持続が、甚内をして、自らを拘束させてしまった、といえる。

朝になって、甚内は、ぶらりと庫裡を出た狂四郎の後姿に、一瞬の隙を見出そうとしたが、それも叶わず、梅若塚の小祠の陰から、絶望的な殺気を送ることにとどめなければならなかったのである。

――わしが討ちとれる人物ではない。

いまにして、甚内は、はっきりとわかるのだ。

対手は、寝室で目ざめて、こちらが躍り込むのを待っていた。先夜のように、声をかけて

来なかったのは、一気に勝負を決定する肚をかためていたのである。
　ほっと、ひとつ、溜息をついた甚内は、妻が何か云ったのを、ききもらして、
「……？」
　見かえした。
　杉江は、顔を伏せたままで、くりかえした。
「眠狂四郎と申す浪人者は、貴方の腕前でも、討ちとりがたい使い手なのですか？」
「……うむ」
　甚内は、庭へ顔を向け乍ら、独語するように、こたえた。
「世の中には……想像もしなかったつわものが居る」

四

「眠さん――お客人じゃ」
　庭から、住職空然の声がかけられたのは、昏れて間もない頃あいだった。
「書院に待ってござる。……地獄の使い、ご用心――」
　あとの言葉は小声で告げておいて、遠ざかって行った。
　空然の警告はあやまたず、書院に一歩入った狂四郎は、そこに咲き匂う仇花を、毒のあるものと直感した。
　女は、挙措だけはつつましやかに、阿波藩家中、野々呂甚内の妻と名のった。

狂四郎が黙っていると、杉江は、ためらわず言葉を継いだ。
「貴方様のお生命をねらって居ります居合の者と申上げれば、おわかりかと存じます」
——あの醜男に、こんな美しい女房がいたのか！
愕いたのは、はじめて接する者の例にもれなかったが、さらに、狂四郎は、ふっと、この釣合わぬ組合わせに不純なものを予感した。
杉江は、伏せていた眸子を擡げて、狂四郎の冷然たる凝視を、聊かも怯じないで、受けとめた。
「お願いがございます。貴方様以外に、良人を斬り伏せることのできるおひとはございませぬ。お仕止め下さいませ」
抑揚のない、澄んだ美しい声音で、残忍なたのみを、すらすらと云ってのけた。
狂四郎は、あたかも、そのたのみを予測していたような気がした。それ程、この天性の美貌とおちつきはらった態度には、妖しい毒気が盈ちていたのである。
狂四郎は、敢えて、その理由を問おうとせず、無言の凝視をつづけた。
杉江は、気力つよく、目をそらさなかった。
「野々呂甚内は、わたくしの先夫の敵でございます」
鋭く、白刃を抜くように、そう打明けた。
狂四郎は、猶かたくなに沈黙をまもった。杉江は、つづけなければならなかった。
先夫寺島長八郎は、廉直の士であり、たまたま、わが家に立寄った城代家老より、ききず

てならぬ無礼の雑言をあびせられ、武士の意地として、これに一太刀をくわえて、自ら切腹する覚悟をきめたところへ、不意に、野々呂甚内が馳せ入って来て、背後から居合抜きの一撃をあびせたので、躱す間もなく、無念の最期をとげなければならなかった。

城代家老は、甚内の働きを大いに称して、殿へ言上して、君命として、無理矢理に、わたくしを妻あわせてしまった。いまにして考えるに、甚内は、かねてより、わたくしに対して邪恋を寄せていたのである。わたくしは、いったんは自害して果てる覚悟をしたものの、操をすてて、仇を討つ機会をとらえようと思いかえし、生きた屍となって城代家老の命令にしたがった。しかし、なにぶんにも、甚内に一瞬の油断もなく、いたずらに、三年の月日をかぞえてしまった。最近では、じぶんの力では到底討ちとれないと、あきらめかかっていたところ、予期もせず、貴方様という抜群の腕前の持主を、甚内が敵としたとききおよんで、ついに、意を決して、おたずねした次第である。何卒一臂をお仮し下さるよう――。

虚言は、決して、そらぞらしいひびきをもっては、なされなかった。いや、語るうちに、杉江は、はらはらと、泪を膝へしたたらせもした。

黙然としてききおわった狂四郎が、やおら口をひらいて、はなった第一声は、

「御主人の生命とひき換えにするのは、貴女の操にいたそうか」

それだった。

杉江は、俯向いて、

「やむを得ませぬ」

と、こたえた。

狂四郎は、にやりとすると、

「わたしは、浮世の習俗には、背中（そびら）を向けて生きている男だ。操を頂戴（ちょうだい）するに、場所をえらばぬ。そこへ、寝て頂こうか」

と、云いはなった。

畳の上へ、袂（たもと）で顔を掩（おお）うて、杉江が、仰臥（ぎょうが）するや、狂四郎は、立って寄り、きわめて、無造作に、その裳裾（もすそ）を――鹿（か）の子（こ）絞りの下着を、緋縮緬（ひぢりめん）の腰絹を、容赦なく、左右へ、ひきはだけさせた。そして、両脚もまた――。

……内股（うちもも）へ、ひやりとふれる刃金の冷たさに、はっと、杉江が、袂を払って、双眸（そうぼう）を瞠（みひら）いた時は、すでにおそかった。

抜身は、切先を畳へ突き立てて、白い股間（こかん）に直立し、刃を女の柔肉の襞目（ひだめ）へあてていた。

狂四郎は、端坐（たんざ）して、杉江の双の足くびを摑（つか）んで、微笑した。

「胴まで截（た）ち割るには、ひと曳（ひ）きで足りる。木樵（きこり）の真似（まね）を、わたしにさせるもさせぬも、そなた次第だ。どこまで莫迦（ばか）正直に本音が吐けるか、ひとつ、自身を試してみるがよかろう。べつに、こちらは急いでは居らぬ。無頼（ぶらい）は生得の根性と卑下した上で、こういう美女の恰好（かっこう）をいつまで眺めていても一向に退屈せぬあさましさを、慙（は）じては居らぬ。……まず、城代家老とそなたの密通のくだりあたりから、告白して頂こうか」

神殿の謎

一

「阿波藩邸随一の使い手が斬られたという噂をきいたが、お主のしわざかの？」
西丸老中水野忠邦の上屋敷の正門の扉が開かれたばかりの早朝、ふらりとおとずれた眠狂四郎と、書院で、さしむかうやいなや、側頭役武部仙十郎の口から、出たのは、その質問であった。
狂四郎は、薄ら笑っただけで、それにはこたえず、
「御老人、お手前は、江戸家老稲田八郎右衛門は、清廉謹直の士としてきこえていると申されたな？」
「左様、申したよ。わしは、面識もある。信頼してよい人物とみて居る」
「その稲田に比べて、城代家老の堀田釆女正は、さすって抓める小人のたぐい、とききましたが――」
野々呂甚内の妻杉江を白状させて、狂四郎は、それを知ったのである。
「堂に怡ぶ燕雀は後災を知らずでの、どこの国の城代も、似たり寄ったりじゃ。……稲田と

堀田のあいだに、暗闘でも起っているかな?」
狂四郎は、袂をさぐって、娘の髪を飾る緋鹿の子しぼりの手絡をとり出すと、仙十郎に手渡した。
怪訝の面持になった仙十郎は、すぐに、気づいて、両端を摑んで、ぐっと、ひき延ばしてみた。
「ほう——」
ありありと、次の文句が、記されてあった。
『下屋敷に病臥中の殿は、贋者に相違無之候』
狂四郎にも、これは、偶然の発見であった。
この手絡をかけておいたお園人形を、甚内が奪って逃走し、追跡した狂四郎は、その首を刎ねた。首は、高く飛んで、神田川に落ちた。ひろいあげて、木母寺へ戻った狂四郎は、手絡を、髪から解いてみて、この文句を読んだのである。すなわち、水に濡れたために、明礬の汁で書いた文字が、浮きあがっていたのである。
「ふうむ。これがまこととすれば、一大事だの。阿波守が、胸を患って、柳営行事一切に顔を見せぬようになって、もう二年ばかりになるが……いつの頃から、贋者にすりかわったかな」
「阿波守に、嗣子は?」
「まだ、ない。……ははん、そのことじゃな、暗闘の原因は——」

仙十郎は、にやりとすると、腕を組んだ。

しばらく沈黙を置いてから、仙十郎は、独語するように、云った。

「国許側では、将軍家の和子君を迎えようとはかり、定府側では、阿波守の姻戚から立てようとくわだてて居る――といったところが、まず、当って居ろうかな」

「阿波守は、すでに亡き者にされている、と考えてもよろしいか？」

「稲田八郎右衛門は、そのような暴逆を働くまい」

「しかし、贋者をしたてたのは、定府側であり、これをさぐったのは国許側です。定府側では、国許へ、この秘密が露見するのをおそれて、密使を追い討って居るのです」

「さて、わからぬことに相成ったの。稲田が、君子の皮をかぶった狐狼とは、到底信じられぬが……」

仙十郎は、首をひねった。

狂四郎は、すでに、おのれの独力で、この秘密をあばく肚をきめていて、水のように静かな態度であった。

ただ、仙十郎の意見と知識を参考にして、これから乗り込む蜂須賀家の下屋敷におけるおのれの行動を、過たないものにしようとしているのであった。

二

半刻ばかり後、ようやく人影の増した朝陽の明るい往還へ出た狂四郎は、これから巌墻の

下に立つ危険については、なんの緊張もおぼえぬ足どりで、歩き出していた。

仙十郎からきかされた、将軍家の公子公女をおしつけられた諸大名の悲惨ぶりが、脳裡(のうり)にあった。

当代家斉(いえなり)の子女は、五十余人あった。これらの公子公女が成長するにつれて、婿入嫁入(むこいりよめいり)は絶え間ないことになったのである。

仙十郎は、その一覧表を、狂四郎に、しめしたものであった。

淑姫（鎮子）は尾張中将斉朝室に
家慶（敏次郎）は有栖川熾仁親王女を
峰姫（美子）は水戸少将斉脩室に
斉順（菊千代）は紀伊大納言治宝養子に
斉朋（乙五郎）は伏見貞敬親王女を
斉衆（保之丞）は因幡少将斉稷養子に
斉民（銀之助）は津山侍従康孝養子に
浅姫（すみ子）は福井侯嫡子仁之助室に
元姫（幸子）は会津少将容衆室に
斉温（直七郎）は尾張中納言斉朝養子に
斉良（徳之佐）は館林侯武厚養子に
盛姫（国子）は佐賀侍従嗣子斉正室に

斉荘（要之丞）は田安右衛門督斉匡養子に
文姫（結子）は高松侯孫頼胤室に
高姫（修子）は越後村松堀丹波守室に
斉彊（恒之丞）は清水中納言重好遺跡に
溶姫（偕子）は加賀中将斉泰室に
斉省（紀五郎）は川越侯矩典養子に

そして、まだこのあとに、斉禧（松菊）、斉宣（周丸）、和姫（操子）、喜代姫（都子）、末姫（貴子）、斉善（民之助）、泰姫（益子）などの子女が、ひしめいているのであった。

仙十郎の想像では、阿波藩が迎えようとしているのは、松菊君であろうということであった。

婿取娶入、孰方にせよ、対手方の大名の疲憊は、甚しかった。

先年、佐賀侯鍋島斉正が、公女盛姫を迎えて、三十五万七千石の内証を窮迫させ、参覲の費用にもさしつかえた事実がある。

「道路の流言に、御入輿もすみければ、早く参府有之べきよし、内々御沙汰ありけれども、病と称し、今に東行の挙なし」

と、「道聴途説」にみえている。

しかも——。

将軍の女を迎えれば、御守殿様ととなえて、良人の方から毎朝御機嫌伺いをしなければな

らなかった。加賀前田家では、七歳の溶姫を迎えるために、現在の東大の赤門（御守殿門）を造り、その主殿を新築し、そして、大奥より八十六人の付人を受け入れた挙句、百万石の大大名ともあろう身が、その付人たちから、「加賀守、加賀守」と呼びすてにされなければならなかった。大奥から来た女中たちが、溶姫の穿物はとるが、加賀守の穿物は直さない。という噂は、市中にもひろがっていた。

また公子を婿として迎えれば、その大名は、わが実子を廃嫡にしなければならなかった。当然ここには、騒動が起る。若殿の家督を懇望して、その成育をたのしみにして来た家臣たちは、密接な利害関係を持つだけに、幕府の仕方の残酷さに怨嗟する。

勿論――。

ただ色に愛でて香に酔っていたずらに蓄えた二十一妾に生ませた子女に、知能の不足したのや、虚弱なのや、不具なのが多かったのは当然である。

「公言をはばかるが、どうやら、阿波藩が迎えそうな松菊君は、七歳になって、まだよだれをたらしてござると申すわい。……そこが、城代めのつけ目かも知れぬがの」

と、告げて仙十郎は、狂四郎に、にやりとしてみせたことだった。

――家臣の妻を寝取るような城代家老が、痴呆の公子を主君に迎えて、藩政を壟断しようと企てるのは、わかる。わからないのは、これをはばもうとする江戸家老が、何故に、贋者をしたてているかということだ。阿波守は、すでにこの世に亡いのか？　それならば、何故亡くなる前に、阿波守を隠居せしめて、新主擁立に、継承者を親族血脈に辿って、これを主

張する努力をはらわなかったか?

狂四郎は、これを疑問としていた。

市井一介の浪人者である狂四郎の目には、かえって、事理は、明白となっている。

一藩が一家の規模の時世である。君公を中心として、生命を懸けて忠義を誓う武士は、時として、家のため、国のためには、その君公自身を犠牲にする果断もとらねばならぬ。その処置によって、忠義は、次の主人に誓えばいいのであった。

封建の制度は、個人の君主をまもることではなく、一藩をまもることであった。生誕の遅速を盾にとって、長子の相続権を絶対のものにしたのも、その一方便であった。兄よりも弟の方がたとえいかに智能秀れていても、この法規がある限り、家中一統は、その相続をみとめず、争いは起らぬ。主人たる資格の第一を血統とすれば、強弱賢愚は勿論、いかなるものを持出しても争えず、争いのないところに中心を置いて、一藩の動揺を未然に防がねばならぬ。

世禄世職の武士は、君国のある限り、生活は保証されているのである。この利害勘定からいっても、個人の君主に忠節をつくすことが、かえって、封土の亡失をまねくとなるならば、敢えて、当代をしりぞけて、次代を据えることに尽力せざるを得まい。

——江戸家老は、あるいは、阿波守を、亡き者にしたのかも知れぬ。

狂四郎は、武士というものの歪められた人生に対して、ひそかに冷笑した。

三

蜂須賀家下屋敷においては、眠狂四郎を迎える用意はできていた。

長屋門脇(わき)の潜門(くぐりもん)の前に立つと、案内を乞(こ)うよりはやく、すぐに戸が開かれ、これを通ると、年配の用人が、鄭重(ていちょう)な物腰で、みちびいた。

重々しい、たたずまいの書院にいざなわれた狂四郎は、携(さ)げて来た包みを、膝(ひざ)の前に置き、結び目をといた。

お園人形の首であった。手絡も、すでに、かけてある。

待つ間もなく、入って来た江戸家老稲田八郎右衛門は、むしろ柔和な気色を湛(たた)えていた。

「御足労をかけた」

そう云ってから、じっと、人形の首へ、視線をそそいだ。

「これは、御当家御簾中(ごれんちゅう)の貌(かお)を写した、とききおよびましたが、左様ですか？」

すかさずあびせられた質問に、八郎右衛門は、無言で、狂四郎を見かえしたが、べつに眸子(ひとみ)の色を動かさなかった。

「これが事実ならば、てまえは、先夜、無断侵入の際、御簾中に出会うて居ります。……築山のむこうに建立(こんりゅう)された神殿に詣(もう)でて、水垢離(みずごり)をとって居られました。一柳二眼術の手裏剣に秀(ひい)でた気丈の御婦人でしたな」

「…………」

「てまえが、その御婦人に対して、無頼の振舞いにおよんだことも、ついでに、申上げておきます」
平然として、狂四郎は、云ってのけた。
八郎右衛門の顔色は、流石に、一変した。
「まことか？」
「恥をかくさずに、お知らせしている」
「…………」
八郎右衛門は、視線を人形の貌へもどすと、しばし、沈黙をまもった。
その表情が、もとの静かなものにかえるのを、見戍って、
——この人物は、できている！
と、狂四郎は、直感し、確信した。
やがて、八郎右衛門は、狂四郎を正視すると、云った。
「当藩の秘事をあばくことは、お主一人の存念か？」
「てまえが、公儀隠密などとは何のかかわりもない素浪人であることは、すでに、お手前様の方で、調べはゆきとどいている筈です」
「一命を危くしてまで、瀬を踏んで、淵を知ろうとする好奇の真意は？」
「昨日使いにみえたお留守居に申上げた通り、乗りかかった船には乗せて頂く。壁越し推量は、てまえの性分に合わぬ。他意はないことです」

きっぱりと、こたえた。

しかし、八郎右衛門は、眼光鋭く、かぶりをふると、

「お主が乗り込んで来た目的は、好奇心を満たすことのみとは思われぬ。そうでなければ、この人形首に似た女性を犯したなどと高言はいたすまい。そうではないか！」

と、迫った。

すると、狂四郎は、いっそ、はればれとした微笑で応えると、次の瞬間、背後に置いてあった無想正宗を把るがはやいか、抜く手もみせず、白い光を、きらっと宙に描いた。

八郎右衛門をして瞠目させ息をのませた——わずか一秒の何分の一にも足らぬ狂四郎の動きがぴたっととまり、刀身は鞘におさまって、背後にもどされ、ふたたび、書院に、ものしずかな対座がつづくかとみえたとたん——。

八郎右衛門の方を向いていたお園人形の首が、音もなく、額から、まっ二つに、ぱくっと割れて、左右へ半面ずつ、倒れた。

八郎右衛門は、見た。

その中から、青銅づくりの異教の神の磔像が、あらわれるのを——。

狂四郎は、微笑をつづけて、

「この像の貌と、てまえの貌を、見くらべて頂きたい。切支丹宗門に帰依した者が、おのが守り本尊のかんばせを、えたいも知れぬ素浪人に見出して仰天したという事実を、お手前様に、みとめて頂くことになる。……天狗政なる人形細工師が、御当家御簾中の貌を、人形に

写したと同様、何者かが、てまえの面(おもて)を、この磔像のものに写して、阿波国一円に潜伏する信徒たちに配ったと考えられる。これは、てまえにとって甚(はなは)だ迷惑な話だ。……もとより、御当家の継嗣(けいし)の問題とは無縁のことです。ただ、たまたま、その葛藤(かっとう)にかかわりあって、これを知ったてまえが、面(つら)の皮を剝(は)ぎかえす料簡(りょうけん)になったとしても、ふしぎはありますまい」

「…………」

八郎右衛門は、狂四郎が述べているあいだ、磔像を凝視していたが、もはや、問答は無用となったという様子をしめすと、ひくい声音で、

「お主が、この屋敷を生きて去るも、屍(かばね)となって出るも、その剣次第じゃ」

そう云って、たてきられた障子の彼方(かなた)の庭を指さした。

「お主の対手が、待って居る」

四

野々呂甚内は、青砂を敷きつめた広い平庭の一端に——刈込籬(まがき)の前に、ひっそりと立っていた。

菊水紋を模した青砂の掃目は、陽光にひかってうねる海原のように、美しかった。景石が、島影みたてに、二つばかり浮いているのも、すがすがしい。

ただ、これだけの単純な景観でも、夏の陽かげ、冬の光を受けて、季節をうつして、趣きがあるのであった。

甚内は、無心に、この美しい眺めに、心を容れていた。

闘志もなければ、恐怖もなかった。われ乍ら、ふしぎなおちつきをもって、先刻から、こうして、微動だにせずに、ひかえているのであった。

狂四郎の姿が、中門からあらわれた。

甚内のおちつきは、易らなかった。

……両者は、ゆっくりと、青砂をふんで、歩み寄った。

陽は高く、影法師は短かかった。

甚内は、十歩の距離をとって立ちどまると、垂れ目蓋の陰から、細目を、まっすぐに狂四郎にあてた。

鎌倉古街道上で、異常の情況裡に出会うてより、いくたびか、刃を合わさんとして、はたさなかった強敵である。

名乗るのは、いまが、はじめてである。

「野々呂甚内と申す。主命によって、やむなく、これまで、御貴殿の隙を屢々狙いましたる御無礼の段、平にお詫び仕ります」

あらためて、いんぎんに挨拶しておいて、しずかに草履をうしろへぬぎすてた。

狂四郎は、冴えた双眸を据えて、

「勝負にあたって、こちらに、条件がひとつ――」

と、云った。

「どのような？」

「お主の居合を拝見いたそう」

「………？」

甚内の貧しい相貌に、一種のはじらいにも似た色が刷かれた。正式の試合に、抜刀術はゆるされぬことだった。

曾て、宝山流の師範浅田九郎兵衛と、三間与一左衛門という居合の達人が立合う手筈となったことがある。ところが、九郎兵衛が、門人にむかって、「居合に勝つには、抜かせて勝つ以外に方法はない」と語ったときいて、与一左衛門は、「浅田は心得がある、もはや勝負は知れている」と云って、立合を中止した、という。

鞘の中に勝ちを含むこの術については、津軽信政も度々扇切に試みて、家来にもしめした挙句、居合は武芸に非ず、と評し去った、ときこえている。

「玉話集」にも――。

居合は、武芸に非ず、というは、抜打ちの勝負にて、出口を肝要とす。左様なれば、全く鞘の内にある所に勝ちはあるなり。先の人、刀を抜きたるに、思う図にて抜払うべきと思いぬる所が早や負なり。その上、仕損じ、先の抜きたる刀にて討たるる時は、猶以て大なる恥なり、先後の争いにて、勝負の批判はあり。人は抜き懸れども、出口にて致すべきと思いぬる所を、武道に非ず、武芸にあらずとするぞ、決して捨つるにはあらず。

したがって、当世にあっては、いかに抜刀術に秀でていても、正式の試合にあたっては、

対手と同時に、抜き合せなければならなかった。しかるに、狂四郎は、甚内に、逆に、居合を所望したのである。甚内は、おのれの居合をかろんじられたとは受けとらなかった。

対手は刀を構えたからには、当然、四尺余の長刀が抜き撃つ刃圏内へ身を運び入れなければ、勝負にならぬことであった。これは、死地をおそれぬだけの勇気だけではなし得ぬ捨身の業を具備していないかぎり、居合の迅技に拮抗は不可能の筈であった。

甚内は、狂四郎に、予測しがたい神速の反撃力がたくわえられていると、思った。甚内は、狂四郎の円月殺法がいかなるものか、知らなかったのである。

「拙技、お見せつかまつる」

甚内は、こたえた。

狂四郎は、かんまんな動作で、白刃を抜くと、きわめて無造作な足どりで、歩み寄るや、切先をつま先三尺の地上へ落した。

ひさしぶりに——。地摺り下段から、無想正宗は、明るい宙に必殺の円弧を描くべく、その緒についた。

……風も落ち、陽光のみが輝く、静寂の地上は、二個の動かぬ姿を、いっさいの生存感覚から解放していた。

両者は、完全なる真空の世界に立っていた、といえる。

移って行く時刻は、その真空の世界の外における現実でしかなかった。

と——。無想正宗が、地上に映したその刀影とともに、徐々に動き出した。

真空の世界の中で、抜きはなたれ、固着していた一刀が、そうして動き出したのは、思いもかけぬ奇跡のことのようにも眺められた。

きらっ、きらっ……と煌（きらめ）きつつ、二尺三寸の氷刃が、完全な円月を描ききるまで、甚内が、その魔気に搏（う）たれつつも、立像にみじんの変化もみせずに堪え得たのは、まさに、後日に語り継がれてよい見事な気力であった。

さらに、ふたたび——濛（もう）として妖（あや）しい剣気を燃やして、無想正宗が、いま描いた軌道を辿（たど）りはじめて、切先が、頭上の高みへ昇った刹那（せつな）、

「ええい——っ！」

人間がなし得る肉体と精神の合一の働きを、甚内は、天変か地妖（ちよう）の凄絶（せいぜつ）な図に化してみせた。狂四郎が、これを躱（かわ）すことは、不可能であった。頭上まっ向へ一閃（いっせん）して来た白光を、満身の気合を発して、びゅっ、と横薙（よこな）ぐ——。

四尺余の長刀にぶち込められた凄（すさま）じい必殺の力点を、無想正宗が砕くに、一分の狂いがあってはならなかった。

狂四郎は、それをなした。

ポキッ！

長刀は、鍔（つば）さき一尺あまりの個処（かしょ）から、折れて、地上へ落ちた。

狂四郎は、一歩さがって、刀を鞘におさめると、茫然（ぼうぜん）と自失した甚内に、ひくくおさえた

語気で、云った。

「これから、お主がなさねばならぬことがひとつある。それは、お主の手で、自身の女房を斬ることだ」

五

踵（きびす）をまわした狂四郎は、足早やに、宏大（こうだい）な庭園を横切り、築山を越えた。網代（あじろ）の竹垣内の神殿をめざしたのである。鳥居をくぐって行き乍ら、狂四郎は、物陰から、二本の手裏剣が両眼を襲って来ることを期待した。

来なかった。

土足のまま、階（きざはし）をのぼって、内陣奥にふみ込んだ狂四郎が、そこに発見したのは、高いところに黒漆塗の連子窓（れんじまど）をひとつだけ持った密室であった。扉は、花頭（かとう）の形をして、花菱（はなびし）は金網で掩（おお）うてあった。

花菱の隙間へ、片目を寄せた狂四郎は、薄暗い内部に、じっと蹲（うずくま）っている黒影をみとめて、躊躇（ちゅうちょ）なく、扉の閂（かんぬき）を抜いた。

扉を左右に開いた――その瞬間であった。

それまで木乃伊（ミイラ）のように動かなかったその黒影が、突如として、もの凄（すご）い奇声をほとばしらせたと思うや、脱兎（だっと）の勢いで、とび出して来た。

狂四郎は、敢えて、その黒影をとりおさえようとはしなかった。

疑いもなく、狂人だったからである。

――そうか。これが阿波守だったのか。

真昼のおもてへとび出した歓喜で、両手を高くかざし、白羽二重の袂(たもと)と裾(すそ)をひるがえし乍ら、ひらひらと鳥居をくぐって、駆けて行く後姿を、狂四郎は、いたましいものに見やった。

狂人となった当主を、闇(やみ)の中へおしこめて、贋者(にせもの)をしたててまで、一藩の安泰をはからねばならぬ大名というものの宿命を、狂四郎は、あわれんだ。

いくばくかの後――。

街道へ出た狂四郎は、もはや、高い築地塀(ついじべい)の奥の出来事には、なんの関心もないような冷たい無表情で、歩き出していた。左様――ものの四、五町も遠ざかったろうか。

背後から急いで来る跫音(あしおと)が、あきらかに自分を追って来たものとさとって、狂四郎は、頭をまわした。

紫縮緬のお高祖頭巾(こそずきん)を被(かぶ)った女性(にょしょう)であった。

狂四郎は、頭巾のかげに大きくひらいた明眸(めいぼう)が、自分の犯した水垢離(みずごり)の上臈(じょうろう)のものにまぎれもないとみとめて、微(かす)かな戦慄(せんりつ)をおぼえた。

「御用か？」

わざと、冷淡に問うた。

「わたくしをおつれ下さいませ」

用意した言葉を、はっきりと口にした。

「わたくしは、もう、貴方様（あなた）について参るよりほかに、生きるすべのない女でございます」

飛ぶ白刃

一

その日、眠狂四郎が、今戸橋近くの山谷堀に面した薄穢い舟宿で、目をさましたのは、暮れがたちかくであった。

畳の上へじかにごろ寝をしていた。搔巻が掛けてあったが、これは、卓子の向うにやすんでいる芸妓のしてくれたことである。

搔巻をはねのけて、うっそりと立つと、窓の小障子を開いた。

淡々と晴れた早春の夕空に、都鳥が、数羽ゆるやかに舞っていた。

窓からすぐに、物見台になっていて、防火の桶が据えてあった。狂四郎は、卓上から茶碗をとって、その水を汲むと、ひと息に、のみ干した。

酒にただれた腹に、冷たくしみて、心地よかった。

昨日、陽のあるうちから飲みはじめ、一夜ぶっつづけて、窓がしらんでから、畳に倒れたのである。

思いもかけぬ、奇怪なことが、狂四郎にそうさせたといえなくもない。

一双の半屏風で事足りる舟宿のうちでも、最も下等な部類に属する家をえらんだのであったが、出された酒を、ひと口含んで、

――これは！

と、おどろいたのが、はじまりだった。

すばらしいコクをもった美酒だったのである。

それから、こちらが、注文もしないのに、つぎつぎと、卓上へ運ばれて来た肴が、ただの割烹の為様ではなかった。

箸をつけてみて、

――平清あたりの、しろものではないか？

と、疑い、小女に訊ねてみると、はたしてそうであった。

当時、深川土橋の平清といえば、江戸随一の割烹を誇っていた。

「狂詩選」に、

　会席風流辰巳誇　坐鋪近対水之崕
　尾花梅本山本客　馴染連来此地沓

とあり、開店の摺物には、蜀山人の狂歌を、芙蓉の花でかざっていた。

　老いたるを養ふ菊の下露は
　　匂ひて中の淵とこそなれ

料亭で、浴場をこしらえたのは、この店をもって嚆矢とするといわれている。

らず、さめない工夫がしてあった。
硯蓋にのせた座付魚も、蜆の吸物も、鰻の蒲焼さえも、猪牙で大川を運ばれて来たにも拘

――誰のおくりものか？

見当のつかないことだったが、わざとそ知らぬ顔で、口に入れたのは、この男らしかった。
夜に入ってほどなく、衣ずれの音がして、きれいな声をかけて、ぱっと花が咲くように芸妓があらわれたのであったが、これは、一瞥して、辰巳屈指の流行っ子とみえた。藍返し毛万二つ割の二枚がさねに、塩瀬の袱紗帯、褄下を折返して、あかい鹿子の長襦袢をなまめかしくのぞかせた風情は、これが当時最も意気な仇姿だったのである。
塩瀬の袱紗帯だけでも、京へ織りに遣ったものに相違なく、百両ちかいねだんの品と思われた。高髷の島田に目だたぬようにさした櫛も、一流の絵師の下図に名工の蒔絵のものと、かたえに坐られて、狂四郎は、みとめたことだった。櫛ひとつ、五十両もするぜいたくが、さまでおどろくに足りぬことになっている時世であった。

「おりん、と申します」
嫣然として、銚子を把りあげたおんなの細おもては、天性の麗質をどのようにしてこうまでにみがきぬいたか、とあきれるくらい、かたちよく、白く透っていた。
狂四郎が、美妓があらわれてもなお、蒼白い貌を動かさず、態度も易えず、黙って飲みつづけたのは、虚無に心が沈んでいたためでもなく、このおんなを送りつけて来たのが何者か、という疑念にとらわれたためでもなかった。

気持が、別の場所に架けられていたからである。
おりんという芸妓にとっては、これは、ずいぶん薄気味のわるい客であったろう。もとより、じぶんをここへ送りつける者から、きかされてはいたに相違ないが——。
一夜を明かすあいだに、狂四郎の方から、口をきいたのは、
「お前は、美しすぎるようだが、ただの貧乏家からひろわれたのか？」
その問いだけであった。
おりんが、正直に、じぶんは流人の娘で、御赦免船で伊豆の島からつれられて来た者だ、と教える気持に、なったのは、のちになって思えば、いつの間にか、無意識のうちに、狂四郎の異相や態度に滲む孤独な寂寥の雰囲気に惹きつけられていたからであったろうか。
流人の娘、ときかされて、狂四郎は、はじめて、冴えた眸子を、おりんの顔へ据えたが、胸に来た感慨を言葉にはせず、そのまま、飲みつづけたのであった。
その様子は、おりんをして、急に、
——このおひとも、さびしい境遇なのだ。
と、じぶんに頷かせたものだった。
じぶんの方から、心が寄ろうとして、それをみじんも受けつけぬ冷たい男だったことが、後日にまで、その俤を深い印象として、脳裡にのこすことになった。
そして、明け鴉の啼くのをきいて、まず、狂四郎が、畳に倒れ、おりんは、それへ、そっと掻巻をかけておいて、じぶんも、うたた寝たのである。

……窓から流れ入る夕霧が、肌に寒かった。

狂四郎は、卓子の陰から、燃える長襦袢の裾をまつわらせたおんなの素足の、深爪を取って紅をさした白い美しいかたちを、ぼんやりと眺めていたが、やがて、床の間から、刀を把ると腰にして、そっと出て行こうとした。

おりんが、目をさまして、はっと起き上がったのは、この時であった。

「あの、……どちらへ、お行きなさいます？」

一指もふれずに立去ろうとするふしぎな客を、いまは、おりんの方が、未練気なまなざしで仰ぎ見た。

振りかえった狂四郎の表情は、冷やかであった。

「おれを、このまま、この宿へひきとめておけ、とたのまれたわけではあるまい。酒や女に、おれが、溺れない人間であることを、試してみた——それだけの話だろう。据膳をくらうことはきらいな方ではない。ただ、膳立てが気にくわぬ。尤も、お前が、腕がないと嗤われるのがいやなら、抱かれた、と報告してくれてもよいことだ」

二

芝居三座の猿若町を過ぎると、俗に謂う藪の内の細い横丁が、曲りくねる。

両手を懐中に置いて、ゆっくりと辿って行き乍ら、狂四郎が、尾け人のあるのに気づいたのは、このあたりからであった。

予期したことだった。
藪の内を抜けると、伝法院末下の三十余院の寺が、ずらりと山門をつらねる。猿寺は、屋根の瓦に猿の形をつくり、鳥寺は、屋根下の欄間に、木彫の鳳凰を舞わせている。
日が昏れて、もう、人影は、殆ど見当らなかった。
狂四郎は、わざと、一ノ権現の横手から、姥ヶ池のもの淋しい場所をえらんだ。
これは、偶然にえらんだことで、どうせ襲って来る奴があれば、池の水を赤く染めてやろうという気持だけであった。
一ノ権現の土塀が切れるところに、大道易者の大笠が、高く宙に浮いて、化物じみて見えたのは、おあつらえ向きに思われた。
――ひとつ、剣難の相でも観てもらうか。
珍しく、この男としたことが、浮いた心地になって、葭簀囲いの中へ寄ると、灯を置いた縁台のむこうの、見すぼらしい年老いた易者に向かって、
「たのむ」
と、云った。
易者は、無言で頷いて、縁台から筮竹五十本を手にとった。易は、この五十本のうち一本を除き、残り四十九本をひねくりまわして等分に分け、左手の分を四本ずつ二回に除いて行き、最後に残した本数に基いて、爻というものを立てて、卦を得る。
それを終った易者は、じっと、上目づかいに、狂四郎を仰いで、

「お手前様の差料が、不吉と出た」
と、云った。
「剣相がわるいのか？」
「まず――左様でありましょうな」
「剣相を観ることは？」
易者は、かぶりをふった。
「なかなか……。多くの人を殺められたのであれば、疵もすくなくあるまい。それらが大凶ならば、おすてなさるがいい」
――無想正宗を、すてろという。
狂四郎は、苦笑して、見料を投げて、葭簀を出た。
池畔は、林であった。深夜のおもむきをおびて、黒い梢の上に、星が遥か高かった。
狂四郎は、その闇の中に、人が隠れていると、予感し乍ら、平然と、足をはこんで行った。
尾け人は、もう役目を果したのか、うしろから消えていた。
大樹の黒い幹の脇を通り乍ら、その陰に、疑いもなく、待ち伏せている者の気配があるのを察知した。
背へ斬りつけて来るであろうと思いつつ、三歩、四歩……過ぎて、――はて？　と訝った。
殺気が、引いたのである。
振りかえって、

「おい――」
と、声をかけた。
「どうした？」
皮肉に問いかけたが、こたえぬ。
「怯じ気づいたのか？」
それなら、それで、こちらの知ったことではなかった。
狂四郎は、林を抜け出た。
草地のひろがった場所に、立木のかわりに、数個の黒影が、待ち構えているのをみとめて、苦笑になった。
一間の距離を置いて、立ちどまると、
「酒と肴と女を贈ってくれたのは、お主たちか？」
と、訊ねた。
こたえはなかった。
「孰方も、有難く頂戴した。おかげで、思う存分に、腕がふるえそうだ。お礼に、円月殺法をごらんにいれることになる。それが、おのぞみならば、だ」
すると、中央から、一人が出て、
「いや。貴公の剣には、これしきの頭数では、到底立ち向えぬと承知して居る」
と、こたえた。

「では、なんの御用だ？」
「貴公には、新太郎という養い子があろう」
「ある」
「その少年を、当方で預って居る」
「………」
武部仙十郎から、新太郎が誘拐されたことはきいていなかった。
憤怒が、五体に来た。
「わたしを捕えるために、子供を囮にしたのであれば、許せぬ！」
語気はおさえたが、対手方の肺腑を顫えさせるひびきを放った。
「いや、貴公を捕えるためではない。……大切なものとして預って居るし、目的は大きなところにある。懸念には、およばぬ」
「目的とは？」
「それは、貴公が、われわれの条件を容れた上で、打明け申そう」
「子供を返してもらおう」
「勿論、その積りで、こうして、待ち受けていた」
「日時と場所を指定してもらえれば、約束はたがえぬ」
「明朝辰の刻、芝伊皿子の修験院御嶽坊へ参られたい」
「承知した」

三

それから半刻（とき）あまり過ぎて、狂四郎が立寄ったのは、神田お玉ヶ池にある岡（おか）っ引（ぴき）佐兵衛の家であった。

下っ引が、狂四郎を見るや、あわてて、大声で、

「親分！　先生がいらっしゃいましたぜ」

と、叫んだ。これは、何事かがあったことを意味していた。

狂四郎が茶の間に通ると、如輪木（じょりんもく）の長火鉢（ながひばち）のむこうに坐っていた佐兵衛は、沈痛な面持（おももち）で、ちらと仰ぎ見たが、すぐ視線をそらして、しずかに、茶をいれた。

「お世話になる」

狂四郎は、座に就くと、頭を下げた。

一昨夜、ともなって来て、預けた女性（にょしょう）のことだった。

蜂須賀家当主が狂人であったことをたしかめておいて、その下屋敷を立去った際、自分の犯した水垢離（みずごり）の上臈（じょうろう）に追いつかれて、つれて行って欲しいと願われ、「貴方様について参るよりほかに、生きるすべのない女でございます」とくどかれて、やむなく、この家へともなって、預けておいたのである。

佐兵衛とは、二年ばかり前に知合って、なんとなくお互いに気心が通じあい、爾来（じらい）、その立場と年齢を超えて、親しい間柄（あいだがら）となっていた。

阿波守奥方という身分を承知して、かくまってくれるのは、狂四郎の思いつく知り人のうちで、佐兵衛しかいなかったのである。

狂四郎と佐兵衛は、はじめて顔を合せた時、次のような会話を交したものだった。

「お前さんは、十手をあずかってから、何年におなりだ？」

「四十年になります」

「当人も他人も、あまりいい仕事とは思っていない稼業でも、四十年もつとめあげると、お前さんのように、滋味あふれた顔や態度になる」

「おそれ入ります」

「実は、さっきから、ここで、ぼんやり、自分という人間を、べつの鋳型で造りなおすことを考えていたのだが、所詮、無駄な思案らしい。迷えば煩悩、悟れば菩提——というが、わたしのような悪業の徒は、どう悩んでみたところで、風を繋ぎ影を捕うというやつだ。……尤も、凡夫盛りに神崇めなしで、当分は図迂図迂しく生きて行きそうだが……」

「悟ろうと思うも迷い、と申すではございませんか。あっしは、無学文盲で、むずかしいことは、よくわかりませんが、だんだん年をくらうにつれて、苦しいことや悲しいことは、なるべくその日のうちに忘れてしまうようになりました。どうせ、てめえのようなごみ屑のような野郎が、じたばたしたところで、はじまらねえ。起きて半畳、寝て一畳、天下取っても二合半、公方様もてめえも、食って寝ることにちがいはありゃしねえ——と、まあ考えて、仰せつけられた御用をなんとかつとめ終えて、せめて畳の上で往生させて頂けりゃ、これで

思いのこすこたアない、と自分に云いきかせて居ります」
狂四郎は、佐兵衛のこの言葉を、いまでも、ときどき思い出すことがある。
狂四郎が、これまで出会った無数の人間のうちでも、最も出来た人物であった。
「旦那――」
佐兵衛は、狂四郎に、お茶をすすめておいて、沈んだ声音で、問いかけた。
「あのおひとを、こん後、どうなさいます？」
狂四郎は、膝へ目を落して、
「わからぬ」
と、こたえた。
ほんのしばし、沈黙を置いてから、佐兵衛は、ぽつりと云った。
「昨夜、自害しようとなさいました」
「え？」
愕然として、狂四郎は、佐兵衛を瞶めた。
「さいわい、あっしの気づくのが早かったので、大事にいたらずに、おとどめ申しあげましたが……」
「すまなかった」
「旦那が、冷たいことを仰言った――それが胸にこたえて、この世を儚くお思いなすったのでございましょう」

一昨夜、立ち去りがけに、
「このつぎ、いつ、お目もじ叶いましょうか？」
と、せつなげに目ですがりつかれて、狂四郎は、顔をそ向けると、
「お約束はできぬ」
と、こたえておいたのである。
腕を組み、暗然として、しばし微動もしなかった狂四郎は、やがて、つと立ちあがって、階段をのぼって行った。
まあたらしい夜具の中に、白蠟のように沈んだ﨟たけた面が、息もないかのように、ひっそりと、目蓋をとじていた。
音もなく、枕元に坐った狂四郎は、いたましげに、じっと、凝視しつつ、胸中に疼く悔いに堪えた。
罪の一切は、こちらにあった。
陰惨な出生によって、虚無の烙印を捺された男が、犯した女を憐みつつも、どうしてやることも出来ぬ業念を、いままた、おのれの裡に、どす黒く澱ませて、こうして、死を願いつつ仰臥している哀れなすがたを見戍らねばならなかった。
静香が、そうであった。美保代が、そうであった。そして、いままた、ここにも――。
こちらに、為し得ることといえば、ただ、こうして、見戍ってやるよりほかにすべはないのである。

詫(わ)びて、すむことではなかった。

と——。

とざされた目蓋の陰から、透明な泪(なみだ)の玉が湧(わ)きあがり、睫毛(まつげ)をおしあげ、眦(まなじり)へころりところげると、そこから、一縷(いちる)の糸になって、こめかみへ流れた。無限の悲しみが、その泪には、こもっていた。

狂四郎は、肚裡(とり)で、呻(うめ)いた。

この上臈を犯す時、

「そなたら信徒が目を伏せるもるたるの科(とが)が、どのようなしろものか、教えてやる。受けて、懺悔(ざんげ)の種にするがいい！」

そう嘯(うそぶ)いたものだった。

高慢、貪欲(どんよく)、邪淫(じゃいん)、貪食、懈怠(けたい)、嫉妬(しっと)、憤怒——それら七つの罪を全身にみなぎらせた男に犯されることによって、その信仰がうち砕かれるのを、狂四郎は、残忍に望んだのであった。

まさしく、女は、その柔肉の底から、快楽のつぼみをおし出し、恍惚(こうこつ)の花びらを拡(ひろ)げようとした。狂うた良人(おっと)を持った妻が、犯されることに、受難の信仰の陶酔をおぼえるうちに、いつか、それを、女のよろこびにすりかえたのだ。

女のかなしさが、そこにあった。

それまで、幾年間か、かくれ切支丹(キリシタン)として、おそろしい秘密をまもって、信仰に生きて来

た女が、女のよろこびを知った瞬間から、生きる目的を、そこに見てしまったのである。
女は、ぜずす・きりすとの功力から見はなされるよりも、破戒無慚の浪人者から、すてられる方が、堪え難かったのである。
もとより、狂うた良人を守って、一藩の安泰をはかる辛苦を、信仰によって堪えていた妻の座が、あとかたもなく崩壊しさった悲惨も、絶望の中に想われたことであったろう。
……さらに、幾顆かの泪の玉が、目蓋の陰から、湧きあがった。
狂四郎は、ついに、一語も吐かず、そっと、顔を近寄せて、口づけしてやっておいて、立ち上がっていた。

四

芝、伊皿子。
伊皿子とは、帰化の明人の名である。伊皿子が、江戸に住んで何をしていたか、つまびらかではない。ただ、幕府は、切支丹宗門を厳禁するにあたって、異国人を以て目明しとした例があるので、伊皿子もまた、その役目を与えられていたのかも知れぬ。
高輪台地に、その墓があったが、香華も供えられず、閼伽も手向けられず、荒草に掩われ、寒烟に鎖され、春禽秋蛩のほかに一顧もされないままにすてておかれていた。
ところが、一年あまり前に、この台地に、かなり宏壮な屋敷が築かれて、修験院御嶽坊と称して、御嶽講の庶民たちを、春秋二度ずつ、数千人も聚めて、非常な賑わいを見せるよう

になっていた。

平常は、無住のようにひっそりと、門扉をとざして、近づく人影もなかった。

辰の刻——狂四郎が、一梃の駕籠を供にして、出現したおりも、早春の風が鳴るだけで、明るい静寂が、丘上を占めていた。

若い士が二人、正門脇の潜戸を開いて、迎え入れると、案内したのは、ただ広い檜板の道場であった。

正面の大きな床の間には、

　一切業障海　皆従妄想生
　　若欲懺悔者　端坐思実相

と、普賢経の一章が、かかげてあった。

——この文句も、切支丹とかわりはない。

狂四郎が、端坐して、腕を組み、それへ冴えた目をあてていると、山岡頭巾をかぶった大兵の武士が、入って来て、上座に就いた。

「御足労をかけた」

重々しい口調で、云った。

狂四郎は、——只者ではないな、と直感した。大きな双眸に、なみなみならぬ光がたくわえられていたからである。

背後に、ひかえていた二名の若侍が、すすっと寄って来て、

「大小を――」
と、求めた。
「新太郎を、おもてに待たせている駕籠で、西丸老中の上屋敷内へお送りとどけ願いたい」
まず、その方を、さきに、狂四郎は、促した。
山岡頭巾の武士が、頷き、すぐに、年配の女中に背負われて、新太郎が、はこばれて来た。
薬でねむらされていた。
わずか一年のあいだに、はっとする程大きくなった姿を、狂四郎は、感慨をもって眺めやってから、
「どうぞ――」
と、大刀と脇差を、前へ置いた。
山岡頭巾の武士は、大刀を、すらりと鞘走らせて、うち眺めてから、
「無想正宗ときいたが――」
と、狂四郎へ視線を向けた。
「左様――」
「無数の生命を断って、猶、秋水たるを易えて居らぬな」
対手の感動を含んだ声音に、狂四郎は、ただ、微笑してみせた。
この時、一人の若侍が、上座に近づいて、鉄の小槌を、さし出した。
山岡頭巾の武士は、それを受けとるや、無想正宗を、膝の前へ横たえて、

「如何に、眠狂四郎――。刀は主を択ぶと申すが、千血にけがれた凶刃と化せる名刀は、もはや、厲ぐにあたいすまい。志をあらたむるに、新たな利刀を、腰に佩びては――？」

「それが、おのぞみとあれば、やむを得ぬ」

狂四郎は、平然として、こたえた。

武士と武士の約束であった。新太郎を返してもらった以上、狂四郎は、如何なる仕打ちに対しても無抵抗であった。

対手は、頭巾の陰で、にやりとすると、小槌を、頭上高くさしあげた。

「ええいっ！」

凄じい気合を、道場いっぱいに劈きわたらせると、発止と、打ち下した。

刃金の悲鳴は、余韻長く、そこにのこった。

折れて、飛んだ白刃は、掛物を襲い、「若欲懺悔者」の五字のうち、「懺」の一字へ、切先ふかく、ぐさっと、突き立った。

だが――。

何故であったろう。狂四郎の蒼白い面貌は、眉宇も動かさず、水のように無反応だったのである。

父子孤独

一

有明の灯が細くされた仄暗い部屋で、褥の中の新太郎は、つぶらな青い瞳をひらいていた。女中が、掛具の肩をおさえておいて、出て行ってから、かなりの時刻が過ぎている。薬でねむらされて、芝・伊皿子の修験院御嶽坊から駕籠で送りかえされた新太郎が、目をさましたのは、この武部仙十郎の長屋に着いて、しばらくしてからであった。

寡黙で、決して泪を人に見せぬ少年であった。

かどわかされて、見知らぬ場所にとじこめられても、一言も、帰りたいとは云わなかったし、一月あまりのあいだ、ひとりで、だまって、絵筆をとっていた。つき添った女中が、そのたくみさに舌をまいて、いつか親身な世話をするようになっていたが、それに応えてあまえる態度も、べつにみせはしなかった。

大切に扱うように、女中は命じられていたのだが、命じられなくても、そうしなければならない程、新太郎は、美保代の躾を身につけていて、立居振舞いが折目正しかった。それが、時として、女中には、少年らしくない冷たいものに感じられて、距離のあるもどかしさに、

ふと苛立ったことである。

あまりにも美しく生まれついていることも、女中をして、とまどわせた、といえる。

新太郎にとっては、べつに、苦しさや悲しさのないくらしであった。女中の心づかいは、充分わかっていたようである。

しかし、別れる際、女中は泣いたが、新太郎は、眸子も潤ませず、与えられた薬入りの白湯をのんで、ねむったのである。

女中が、「これをおのみなさいませ。夢を見ているうちに、もとのお家へ帰れます」とすすめたのだが、新太郎は、ちょっと、大きく目をひらいただけで、ためらわず、おとなしく、茶碗をとりあげていたのであった。この時が、当然来るものと、予測しているような、おちついた様子であった。それが、かえって、女中の胸をつまらせた。

目がさめて、女中の言葉が嘘ではなかったことに気がついたが、なんの感情もあらわさず、見成る武部仙十郎に、ただ、にこりとしてみせただけであった。

「辛かったかの、新太郎?」

そう訊ねられると、黙って、かぶりをふった。

「そちの父が、救うてくれたのだぞ」

そう云いきかされて、はじめて、うれしげに、眸子をかがやかせて、

「ほんとう?」

と、訊きかえし、

「うむ。もうすぐ会える」

と、仙十郎がにこにこと頷いてみせてくれるや、視線を遠くに置いて、

「父上に会いたい」

と、ぽつりと呟いたことだった。

……だが、五日過ぎて猶、狂四郎は、姿をあらわさないのである。

新太郎は、じっと、天井を仰ぎ乍ら、両手を、掛具から出すと、小声で、

「ひとつ、ふたつ、三つ、四つ……」

と、指折りはじめた。

きっちり、百までかぞえるや、新太郎は、ごそごそと匍い出た。

父に会っても、大丈夫なのだ。約束が、はたせるのである。

一年前の別れ際に、新太郎は、狂四郎から、云われていた。

「わたしが、もどって来るまでに、百かぞえられるようにしておくがよい。約束するね？」

新太郎は、頷いたのである。

——父上に会いに行こう。会って、百かぞえてみせよう。

新太郎の心がきまった。

深川の、仙台堀に添うた今川町の横丁に、父はもどって来ているにちがいない、と新太郎は思っていた。そこには、談亭や金八や文字若や——新太郎にとって、この上もない親切な人々が住んでいた。

この家から、そこへつれて行かれて、しばらく暮すあいだに、新太郎は、幼心にも、自分の住むべき場所はここしかないと、思いきめたものだった。

陽気で、無作法で、呑気（のんき）で、しかも、あたたかい雰囲気（ふんいき）は、それまで、新太郎の知らぬ世界であった。その中に入ると、幼い新太郎の方が、一番礼儀正しく、おちつきはらっていて、まわりの人々を、あきれさせたのである。

自由の空気を吸って、遽（にわか）にわがままになったり、いたずらを働いたりする少年ではなかった。

ただ――。

自分では、その仲間には入らぬが、男の子や女の子の遊びを眺（なが）めているのが好きであったし、すこしもあきなかった。紙鳶（たこ）、独楽（こま）、輪廻（わまわ）し、鞠（まり）投げ、押（お）っ競（くら）べ、面打（めんち）、縄（なわ）とび、道中駕籠、飯（まま）ごと、綾（あや）とり、十六むさし、道中双六（すごろく）、籠目（かごめ）籠目、淀（よど）の川瀬の水車、鬼ごっこ、天神さまの細道、ずいずいずっころばし、軍師拳（けん）、上がり目下がり目、手芸、謎（なぞ）掛け等々――。

そしてまた、すこし大きな少年たちが、隣町の少年たちと、町内の木戸口を城門として、棒や長竿（ながざお）や石礫（いしつぶて）でたたかう必死の喧嘩（けんか）の光景も、新太郎の手に汗にぎらせる眺めであった。

いま――。

父に会いに行こうと決めた心の中には、それらの光景もなつかしく描かれていたのである。

金八に背負われて行った道すじも、はっきりと記憶しているつもりであった。

大きな川に架（かか）った長い橋を渡って、右へ右へと歩いて行き、小さな橋をふたつ渡れば、今

川町へ行き着く筈であった。

孤独で生き抜いて行くための、ひとたび思いきめたら、まっすぐに突き進む意志が、小さな胸にたくわえられていた。

新太郎は、ひとりで、着物をきかえた。

二

長屋門の潜口(くぐりぐち)から、こっそりと、往還へ抜け出るまで、人目に咎(とが)められなかったのは、ふしぎなくらいであったが、新太郎は、それがあたりまえのように、振りかえりもせずに、さっさと歩き出していた。小脇(こわき)に大切そうにかかえた包みの中には、画紙と絵筆が入っていた。

高い海鼠塀(なまこべい)のつらなる大名小路を、おびえもせずに、通って行き、とある辻(つじ)に出た時、どこかの戻り駕籠に出会うと、

「駕籠屋どの――」

と、呼びとめた。

狐狸(こり)のたぐいが化けて出やがったか、と先棒後棒が、顔見合せて、身がまえるのへ、

「大きな橋まで、乗せて行っておくれ」

と、たのんだ。

提灯(ちょうちん)をとって、近づけた先棒は、丹念に、小さな姿を見まわして、どうやら化生(けしょう)ではないとたしかめてから、

「大きな橋って、坊やは、どこへ行くんだ？」
と訊ねた。
今川町という町名を知らぬ新太郎は、
「橋を渡れば、行くところがわかる。にぎやかなところにある大きな橋まで、つれて行っておくれ」
と、こたえた。
「にぎやかと云えば、両国だが――」
人の好い駕籠舁きたちは、さむらいの子が何か深い仔細があって夜道を急ぐのだろうと、自分たちの伜など思いもおよばぬ、その勇気の程に感服すると、引受けた。
呼吸の合った足なみで、飛べば、両国までは、半刻とはかからなかった。
興行物の打出し太鼓の鳴りおわった広小路は、宵の光景を一変させていた。昼から店を出していた野天商人たちは、荷を片寄せて、葭簀囲いにして、すでに四方へ散り、代って蝙蝠のように、日没からあらわれた甘酒と麦湯の店がずらりと並んでいた。高小屋から出て来た客の群はもうあらかた消えていて、これらの店は、芸人たちや遊びにんや折助や夜鷹連をあいてとするのであった。
新太郎を乗せた駕籠は、橋袂の番所の前で、停められた。
「坊や――大きな橋に、着いたぜ」
促されて、降り立った新太郎は、ちょっと不審げに見わたした。新太郎の記憶するのは、

新大橋だったからである。
しかし、この大川を渡ったむこうに、自分の行先があるとさとると、すぐに、にこっとして、
「ありがとう」
と、ていねいに頭を下げた。それから、腰の小刀を抜きとると、
「お金がありません。これをあげます」
と、さし出した。
「とんでもねえやな。駕籠賃なんざ、貰おうとは思っちゃいねえ。……それより、ここから、迷わずに行けますかい？」
「行けます。……さようなら」
すたすたと、歩き出していた。
橋を渡った向う両国は、広小路とはまたおもむきがちがい、引っ張りの見世物小屋がひしめきあっていて、まだ喧しい呼び声と三味線や太鼓の音を鳴りひびかせていたし、名物の坊主軍鶏や獣肉鍋の店が、明るい灯と匂いをおもてへ流していた。
新太郎は、ぞろぞろと行き交う群衆を縫って、わき目もふらずに、通り過ぎて行こうとした。
と——。
「あっ！」

かん高い女の叫びがあがって、人々は、一斉(いっせい)にあたりを見まわした。

ひとり、新太郎だけは、きこえぬように、すたすたとすすもうとして、ふいに、行手を、若い女にさえぎられた。

それは、淡路人形座のお吉であった。

新太郎の貌(かお)を一瞥(いちべつ)して、思わず叫んで、かけ寄ったのである。

息をはずませて、少年の肩へ手を置くと、

「坊や！」

と呼んで、あとは、絶句した。

極度の昂奮(こうふん)で、お吉は、なんと云っていいのか、わからなかった。

新太郎の澄んだ青い瞳(ひとみ)にじっと瞶(みつ)めかえされて、お吉は、全身が顫(ふる)えた。

——幼いぜずす・きりすと様！

奇跡に出会うた感動であった。

まわりに立ちどまった人々が、新太郎の貌(かお)を見て、ざわめくや、お吉は、あわてて、袂で掩(おお)うようにして、物陰へつれて行った。

「坊やは、お家はどこ？」

ももんじい屋の板壁から洩(も)れる光の中で、新太郎は、お吉の必死の視線を、無表情に受けとめた。

「家は、ない」

「ない?!　……そ、そうだね。坊やにお家はあるわけはないね。坊やは、ひとりぼっちだろ？　え──そうだね？」
「ううむ」
新太郎は、かぶりをふった。
「父がいる」
「父が──？　お父様がいるって？　だれ？　お父様って、だれ？」
新太郎は、あいての異常なしつっこさに、ふっと不快になった。
「だれでもよい」
「おねがい！」
お吉は、両手をあわせた。
「教えて！　坊やのお父様は、だれ？　どこにいるの？　……ね、後生──おねがい！」
新太郎は、ちょっと黙っていたが、お吉の哀願する表情に、心が折れたか、
「眠狂四郎」
ぽつりとこたえた。
「ああ──」
お吉は、そのこたえを予期してでもいたように、顔をかがやかせた。
「わかった！　……ああ、よかった！　うれしい！」
夢中で、お吉は、新太郎を、抱きしめた。

新太郎がもがいてはなれようとすると、やっと腕の力をゆるめて、
「坊やは、お父様とは、ながいあいだわかれていたんだね？」
新太郎は、こくりと頷いた。
「これから、会いに行くんだね？　おいでになるところがわかっている？」
新太郎は、東を指さしてみせた。
「ちがう、ちがう。その反対、隅田堤の木母寺というお寺にいらっしゃる。わたしが、つれて行ってあげます。……さ、行きましょう」

三

お吉と新太郎が、むなしく、木母寺で夜を明かした――その朝。
当の狂四郎は、渋谷宮益町の、きれいに水を打った町家通りを、蹄の音を高くひびかせて、馬を駆っていた。一人ではなかった。前後に、六名ずつ、黒い布で顔を包んだ武士たちが、馬脚を揃えていた。
狂四郎は、無腰であった。
修験院御嶽坊の御殿内に、五日間もとどまったのは、対手方の強制ではなく、狂四郎の方で勝手にそうしたかたちであった。
勿論、入れられた一室の周囲には、昼夜、厳重な監視の目が光っていたし、屋敷内は、隅々まで、その目が行きとどいている気配が感じられた。

あきらかに、ただの、修験道の道場ではなかった。社会に対しても非常な影響のある何かの大きな陰謀がすすめられている、と受けとって、まちがいはなかった。

表面を、修験道の経営と見せかけたのは、まさに巧みな手段であった。

そのむかし、貴族の依頼を受けて祈禱にしたがった修験者は、室町時代以降いよいよ定着して、一種の師檀関係を結ぶにいたったが、さらに、徳川の時世に入っては、民衆に接触して、実利主義の時潮に投じて、不動の地盤をきずいていたのである。

山伏が、民間にくい込むには、二つの方法があった。その一つは、山岳登拝、神社参詣の先達をつとめる。その二は、参詣者の手引きだけではなく、諸国の名山霊場の信仰に基づいて、その護符を配付することによって、庶民の不幸を癒す。……いったい、当世にあっては寺院外の者は、仮令いかに宗教的信仰を得ていても、葬式法要に関与することは、厳禁されていた。したがって、庶民は、死は寺院僧侶に、病気や災難のことは、これを山伏にもとめた。

迷信が、大きな力を有して、これを打破するよりも、忌み避けられた時代であった。

病気、災難一切は、霊神、荒神、生霊の祟りであり、それを遁れるためには、占卜に依って、その本元を究め、それに応じた祈禱符呪が施されなければならなかった。

密教的行法が、より神秘的な色彩をおびればおびるだけ、庶民が有難がるようになったのは、当然であった。

例えば——。

方位の祟りを設定するのは歳徳神(としとくじん)であるが、これを信仰するために、ただに歳徳棚(だな)や恵方(えほう)詣(まい)りだけではなく、さまざまな奇怪な祈禱方法を組みたてていた。丑年生(うしどし)まれの娘を素裸にして、この神の方角に仰臥(ぎょうが)させて、その腹部に、恵方の字を描けば、障りを除き得て吉瑞(きちずい)を得る、といったたぐいであった。

自然に、この信仰に組織が作られ、講社の結集となる。

公儀と雖(いえど)も、この講社に、容喙(ようかい)することは、遠慮しなければならなかった。講とは、元来、仏家の学徒が相集うて経論を講読することを意味するものであり、これが、祖徳を讃仰(さんぎょう)する会合乃至(ないし)継続的な結社に発展し、さらに、神社仏寺参拝を目的とする醵金(きょきん)組合、または神社仏寺の修築、営繕費をつくるための融通組合になったのであってみれば、為政者は、これを奨励する立場をとらざるを得ないわけであった。

——どうやら、この陰謀は、庶民を誑(たぶら)かす目的においては、山伏と同じらしい。天下をねらう大それた仕事とみた。俗の欲するところ、因(よ)って之(これ)を予(あと)う……政治の野望というものは、いずれ、その始めは、この様なものであろうが。

鋭くも、狂四郎は、そう看破して、平然と、五日間をすごしたのである。

無想正宗を折った頭領に面談したい、と申出たのは、昨夜であった。

座に就くや、狂四郎は、すぐに、

「わたしに、何をもとめられる？」

対手が辛抱強く待っていたであろう問いを口にした。

対手は、微笑して、

「松平信明が、隠匿した輸入金六十貫を、お主は、たしか、自らの所有にしたときいた。それは、いまだ、お主の手によって、何処かに秘められてあろう」

と、云った。

先の時代――松平定信が加判の列からしりぞき、次いで政治の主導権を握った松平信明は、丁銀に対して金貨が下落して、物価の高低を生じた不均衡を救うべく、勘定所勝手方組頭・兵堂掃部に命じて、金座に積まれていた六十余貫の輸入金を隠匿させたのであった。

信明がその金の処置を明示することなく、在職のままで逝き、その後を継いだ水野忠成は、財政困乏救済のための金銀改鋳および新貨の通用にあたり、是非とも、この隠匿金をさがし出さなければならなかった。

しかし、兵堂掃部は、いかなるきびしい糾問に遭っても、頑として、知らぬ存ぜぬとつっぱねて、ついに、この隠匿金を狙う虎狼の暗闘のただ中に仆れたのであった。

たまたま、これが渦中にまきこまれた狂四郎が、ついに、この金を、根岸の里・御行の松の不動堂の裏手の地中から掘り出したことは、この永い物語のはじめからの読者ならば、記憶するところである。

「あの金が、御所望だったのか」

狂四郎は、薄ら笑った。

「いかにも――」

対手が、頷くと、意外だったのは、
「さしあげよう」
あっさりと、こたえてみせたことだった。
但(ただ)し、此(こ)の後、新太郎を誘拐(ゆうかい)するが如(ごと)き卑劣な真似(まね)は絶対にしないという条件によってであった。
頭領は、承知した。
で——狂四郎は、その場所へ案内することになったのである。

四

その丘陵上に、まだ、春のおとずれはなく、吹き渡る風は、冷たく、音が嘈然(そうぜん)として鋭かった。
麓(ふもと)の楢林(ならばやし)の中、馬をすてた一行は、眠狂四郎をまん中に包んで、黙々として、斜面をのぼって行った。
狂四郎は、櫨(はじ)の大樹の根かたに並んだ三個の自然石をみとめると、猶おのれ一人だけ生きのこって、無頼の所業を重ねている苦痛が、胸に来た。
……そこに、三人の薄倖(はっこう)な女性たちがねむっていた。
中央が、母。
左が静香。

右が美保代。

「霊」の一字を刻んだ、それら三基の墓碑は、いずれも、狂四郎一人の手で、立てたものであった。

その母は、ころび伴天連に犯されて狂四郎を生み、それからの十五年を有髪の尼となって、広尾町の祥雲寺山内の離れで、笑いを忘れた暮しをつづけたのち、燈火の消えるようにさみしくこの世を去ったのである。少年狂四郎は、人知れず自分一人で、穴を掘り、遺骸をはこんで来て、葬ったのである。狂四郎が、一人で生きて行こうと決意して、為した最初の行動がそれであった。

静香は、兄を斬られた怨讐を超えて、狂四郎の異端者としての苦しみを解こうと決心し、かえって、その孤独の寂寥に惹きよせられて、処女を捧げてしまい、懊悩の果てに、自らの生命を断ったのである。死をえらんだ場所が、処女を捧げた杣小屋の中であり、馳せつけた狂四郎に抱かれると、「貴方の母さまのおそばへ、貴方の手で、埋めてくださいませ」と、云い遺したのであった。

そして、美保代は——狂四郎に犯されることによって、男を愛するすべを知ったこの女性は、四年のあいだ、常に絶えざる暗い兆によって未来をうち消されつつも、ひたすらに身うちに、熾のような思慕の火を燃えつづけさせて、ついに全き情熱の昇華を生み得ずして、再び病褥から起き上がらなかったのである。

美保代は、死の手が、そこまで迫った時、

「わたくしを、母さまのお墓へ、おつれ下さいませ」

と、願った。

狂四郎は、重傷を受けた身であり乍ら、あえて、美保代を背負うて、この丘陵へのぼった。

櫨の根かたへ、そのからだをおろしたとき、息は、すでに、絶えていたのであった。

不幸な、儚い三つの遺骸は、こうして、この世で愛しただ一人の男の手によって、ここに葬られたのである。

蕭殺たる冷風にさらされた墓碑たちは、もはや、永遠に過ぎ去った思い出によって、狂四郎の胸の奥を疼かせるのに役立つだけであった。

頂上に佇んだ狂四郎は、ひとつ、ひとつへ、沈んだ目を置いて、その心痛に堪えたのち、しずかに、その覆面の士たちを振りかえった。

「金は、ここにある」

そう告げた。

指さしたのは、美保代の墓であった。

「わたしの妻が、ねむって居る」

十二名は、沈黙をまもった。

「自分の妻の墓をあばく仕事だ。わたし一人でやらせてもらいたい」

この申出を拒絶する、なんの理由もなかった。

狂四郎の手に、鍬が渡された。

しかし――。

覆面の士たちは、三間あまり、遠ざかって、狂四郎を見戍った。

墓石は、脇へ除けられ、鍬は、ざくっ、ざくっと、土を掘り起しはじめた。

やがて――。

狂四郎のその仕事は、意外にも、ごく短い時間で、畢った。

鍬をすてた狂四郎は、膝を折って、左手を、穴の中へさしのべた。

固唾をのんでいた面々は、狂四郎が、すっくと立って、向き直るや、ひとしく慄然と、背すじに冷たいものを走らせた。

狂四郎の左手には、大刀が携げられていたのである。

左様、狂四郎は、六十貫の金塊のかわりに、ひとふりの剣を掘り出したのであった。

「お手前がたには、気の毒だが……頭目が折った無想正宗は、贋であった」

狂四郎は、薄ら笑って、教えた。

美保代を葬る時、これから先の生きて行く途上において無頼の業念の発することの尠きをねがって、無想正宗をも、ともに埋めておいたのである。

この一年間、腰におびた差料は、きわめてありふれた無銘の一刀であり、それを、自身では、無想正宗と思い定めて来たのである。だから、二つに折られても眉宇も動かさず、水のように無反応だったのである。

「二度とふたたび、この凶刃を把らぬときめていたが、把らせたのが、お手前がたの頭目で

あってみれば、その部下の生血を吸わせることは、やむを得まい」

狂四郎は、ゆっくりと、三歩ばかり出た。

「無縁仏となるのをきらう者は、退って見物してもらおう。全員が、それをのぞむなら、それは、有難いと礼を申してもよい。こちらは、不幸に逝かせた母親や女房の霊の前で踊る血狂いだ。好んでやる次第ではない。どうだ？」

冴えた眼眸を、一人一人の顔へ、ずうっとまわしたものだった。

その日の午後、飄然として、武部仙十郎をたずねて来た狂四郎は、新太郎が姿を消したときいて、顔色を変えたが、ひとりでこっそり抜け出て行った模様だと告げられるや、いっそ満足げな微笑を泛べて、云った。

「わたしの倅にふさわしい振舞いと云える。すてておきましょう。ひとりで生きて行くことを、暗示してくれた、と安心いたしたい」

くれない鏡

一

長らく御無沙汰(ぶさた)申上げました。御家内様お揃(そろ)いで御息災、お店も御繁盛(はんじょう)——おめでたいことでございます。

てまえのように、煤払(すすはら)いと餅搗(もちつ)きに国へ帰って、屠蘇(とそ)を汲(く)み雑煮(ぞうに)を祝うのもそこそこに、初結いのあたまへ笠(かさ)をかぶって、旅へ出るくらしをして居ります者には、こうして御膝元(おひざもと)で、大店(おおだな)をはっておいでのお方など、夢のように、うらやましい限りでございます。

左様、かぞえきれぬ数の草鞋(わらじ)を、道中にすてて、もう二十五年にも相成りますが、やはり、なんと申しましても、御膝元が、いちばんよろしゅうございます。

四里四方八百八丁——なにから、なにまで、ととのっていないものとてございませぬ公方(くぼう)様のお城をまんなかにして、お屋敷町、寺町、組屋敷、そして町家と、どこを通りましても、それぞれに、気持のよろしい眺(なが)めでございます。静かな大名小路でお見受けいたしますおさむらいが、頭の結び様、刀の造り錺(かざ)り、衣服の織色、行丈(ゆきたけ)の長短、羽織の紐(ひも)の結び具合にいたるまで、ひと目で、あれは何藩の御家臣とわかるお国風なのも、面白うございますし、御

旗本や御家人方が、ご身分分限に応じて、他国では見られぬ粋(いき)な伊達(だて)姿を競うておいでになるのも、御膝元ならではの景色でございます。

町家の活気に満ちたあきないぶりも、これは、公方様御用達(ようたし)や、各お大名方へのお出入りの誇りとみえますし、家職居職の職人衆も、江戸っ子の気性が、その腕をみがかせることになって、仕事ぶりの小気味のよさは、眺めていて、あきさせませぬ。

お屋敷稼業(かぎょう)の、渡り徒士(かち)、渡り押(おさえ)、陸尺(ろくしゃく)、中間(ちゅうげん)から、人足にいたるまでが、乱暴な言葉づかいにも、自身の分(ぶん)を守って、ほかの風俗を粧(よそお)うのを悪(にく)んでいることは、慎身(つつしみ)の心得と、ほめなければなりませぬ。田舎博奕(ばくち)打ちが、無職者(ぶしょくもの)を集めて、頭領面(づら)もおこがましく、絹ものなど、ぞろりと着流して、宿場女郎を妾(めかけ)にしてやにさがった風景など、まことに見られたざまではございませぬ。御膝元を、ちょっと離れた在所でさえも、もう、代官とか山分限者などのくらしぶりは、慎身など薬っ気もなく、野暮なぜいたくは、箸(はし)にも棒にもかかったものではございませぬ。

御女中、御新造、お内儀(かみ)さん、姐御(あねご)、山の神、中働きにお三(さん)、子守り――とそれぞれ、定めのみなりがあってこそ、こりゃア、世間もはっきりとすると申すものでございましょう。茶汲女(ちゃくみおんな)が、芸妓(げいぎ)に似るのを嫌(きら)う――この心意気じゃ、ございませんか。

お武家は、横丁や新道(しんみち)へは、絶対に足をふみ込まない。大町人も身柄(みがら)のあるお人は、職人の家を覗(のぞ)かない。大八車や小荷駄馬(こにだうま)の通る路(みち)は、おのずときまり、朝夕きれいに水を打った大通りは、物見遊山(ゆさん)、神仏詣(もう)での人々を、気分よく歩かせる。この心づかいが、江戸の市中

を、美しいものにしているわけでございます。

いや、こりゃア、とんだ御説教舌をたたきまして、申訳ございませぬ。

なに、てまえが、江戸へ出て参る愉（たの）しみは、もうひとつ、ほかにあるわけでございます。

……おあてになりました。その通りでございます。あのふしぎなご浪人さんにお目にかかる——それよりほかの愉しみではないのでございます。実のところ、あのご浪人さんにお目にかかれるという期待がなければ、失礼乍（なが）ら、こうまで、御膝元をほめちぎる次第ではございませぬ。

……江戸へ出て参りまして七日目——昨日の午（ひる）すぎ、とうとう、てまえは、あのご浪人さんにめぐり会ったのでございます。一念のおそろしさと申上げておきましょう。

浅草奥山の賑（にぎわ）いの中においてでございました。

あの楊弓（ようきゅう）店がならんだ地域の裏手に、開き木戸の土場（どば）と、野天芸人が、ところせましと投銭を乞（こ）うて居りますね。あそこへ、ふらふらと入って行きましたてまえは、刃物や蠟燭（ろうそく）を立てた籠（かご）のすり抜けやら、ビイドロ細工の阿蘭陀（オランダ）見世物やら、女太夫の曲馬やら、長崎蛇踊（じゃおどり）やら、足芸やら、六俵腹やら、猿狂言やらを、ひまにまかせて覗き歩くうちに、なんとなく、手裏剣撃ちをとり巻いた人輪の前列に押し出されて、あとへ退（さが）れないあんばいとなりました。

その手裏剣撃ちは、春には寒い白地の薩摩（さつま）がすりを着流した御家人崩れの態（てい）でべつに鉢巻（はちまき）も襷（たすき）もせず、ゆらりと立って居りましたが、その眼光に、正視されたら、思わず顫（ふる）えあがりそうな、凄（すさま）じいまでに威力があるのに、てまえは、牽（ひ）きつけられたのでございました。

肌の色が蒼白く、頬の削げた面差が、どこやら、あのご浪人さんの俤に似かようていたのが、てまえの足を永停めさせたと申せましょう。ちがって居りましたのは、あのご浪人さんの彫のふかいお貌に滲んでいる暗い色は、なんともいえない寂しい孤独なものでございましたが、その手裏剣撃ちの眉目に落ちている翳は、これは陰惨な、鬼気迫る、いってみれば死神にとり憑かれたような、肌も粟立つ不快なものだったのでございます。

口上は、若衆姿の、勝気そうな娘が、大袈裟な身ぶりで述べたてましたが、そのあいだ、手裏剣撃ちは、ただ、底光る目を、宙に据えて、身じろぎしようともいたしませぬ。

娘は、扇子をまわして、何十文かの鳥目を受けとると、立てた戸板の前で、両手両足をひろげてみせて、人型に、二十本の手裏剣を打たせることを、さも、おそろしさに堪え難い口調で申したことでございます。

まことに、それは鮮やかな技でございました。

槍の穂形の手裏剣は、三間の距離から、見物衆のきもをひやしつつ、娘の耳朶や頸や手くびや胴や脚めがけて飛び、紙一重のすれすれに、ぶすっぶすっと戸板へ突き立ったのでございました。しかも、それは、ろくに狙いもせずに、無造作な撃ちかたで、みじんも狂いませんでした。

娘が、すっと戸板から離れるや、みごとな白刃の人型がそこにのこって、やんやの喝采でございました。娘が、再びまわす扇子に、鳥目があふれたのは、申すまでもございませぬ。

次いで――。

戸板から抜きとった手裏剣の束を、娘から手渡された手裏剣撃ちは、はじめて、口をひらいて、

「これより、うしろ撃ちを御覧に入れる。但し、それがし自身、百発百中の自信はない。よって、十両はずむ御仁があれば、忝けない。あるいは、これが、妹の葬儀費となるやも知れぬ」

と、申しました。

二

その口上が、数十人の見物衆を、妙に陰気におし黙らせた——その静けさを破ったのは、人垣のうしろから、抛られた小判の音でございました。

「御奇特——」

手裏剣撃ちは、抛ったのがどんな人間か見とどけもせずに、小判をひろいとって、娘に呉れてやり、頭を反らし、胸を張ると、

「明の博学者方以智が、その物理小識に曰く。蘭子なる者、七剣を弄し、迭って之を躍らせば、五剣常に空中に在り、朱君これを驚いて異となせども、これは熟練のみ、術に非ず、と。……また、本邦に於いては、鳥銃の達人稲富一夢が、百歩にして柳葉を撃ち、茅屋の中に在って、屋上の鳥の啼声をもってその集まるところを察して、両眼をとじて撃って、過たぬ巧者なりしが、朝鮮陣に加わって、敵に向かっては一弾も中て得ず、という。……左様、いま

ご覧に入れた技は、まさに、術ではない、芸であった。しかし、これより御覧に入れるのは、芸に非ず。手先の巧妙にまかせて投げるのではない。神気をすまして、気合で打つ。すなわち、剣の極意となんらかわらず、術である。……気合で打つからには、神速を要する。一気五剣――一呼吸の間に、五本を打つ。しかと見とどけて、後日の語り草としてもらいたい」

昂然として、云いはなったのでございます。

一同、固唾をのんで、娘がうってかわった真剣な面持で戸板の前に立つのを眺め、そして三間の距離を置いて、うしろ向きに、手裏剣撃ちが、両足をしっかと大地にふまえるのを見成ったのでございました。

まともに、眼光を放って、投げて、人身すれすれに戸板に立てることだけでも容易の技ではないのに、背中を向けて、逆投げで、人身を傷つけないとすれば、これは十両が百両でも安い観ものと申せるではございませんか。

てまえは、このせつな、なにやら、不吉な予感がして、なろうことなら中止してもらいたい、とねがったのでございます。

が――もはや、手裏剣撃ちは、心気をととのえて、全身を刃物と化したごとく、凄じい様子をしめしました。

一瞬、漲った気合を劈かせて、左手に摑んだ手裏剣を、右手に奪って、左肩から後方へ――おそろしい迅業で、投げるやいなや、その一本目が、娘の前髪上へ当ったのを、てまえどもが見とどけて、はっと視線をもどした時には、もう、二本目を手のうちから離して居り

ました。

ひゅっ、ひゅっ、ひゅっ……と鋭い音で、宙を截った五本の手裏剣は、なんとまあ見事に、娘の顔の両側へ、両肩の上へ、両腋の下へ、突き立ったものでございましたろう。

まさしく、一気五剣――一呼吸の間に、五本を打ち畢ったのでございました。

それで、止めておけば、何事もなかったのでございます。

手裏剣撃ちは、さらに、一本を腰から抜きとると、

「これは、妹の乳房を狙う。それがしの一撃が勝つか、妹がこれを躱すのが迅いか――とくと、御覧あれ！」

と、高言いたしました。

息づまる瞬間を破って、

「えいっ！」

懸声もろとも、右手を閃かせて一条の白い光線を、左肩上から、生き的へ飛ばしたのでございましたが……

結果は、無慚にも、娘の口から、断末魔の悲鳴をほとばしらせることになったのでございます。

奇怪にも――娘は、その手裏剣を、躱そうとすらしなかったのでございます。ただ、大きく、眸子を瞠いたまま、くくりつけられたように微動だにせず、おのが胸に、それが突き立つにまかせたのは、どうしたわけでありましたろうか。

いえ、それにも増して、奇怪であったのは、手裏剣撃ちの、妹の絶鳴をきいた刹那の態度でございました。

仕損じた驚愕で、あっとなって振り向くのは、これは人間の本能ではございますまいか。手裏剣撃ちは、それをしなかったのでございます。そのままの姿勢で、かっと眦を裂いて、双眼をひき剝くや、おのが前にひしめく見物衆の頭上を越えた一点を、食い入るように睨み据えたではありませんか。

てまえは、思わず、つまさき立って、のびあがりました。

すると——。

人垣よりすこしはなれた地点に、あのご浪人さんが、ふところ手で、うっそりと佇んでおいでだったのでございます。

霊感と申せば、大袈裟でございますが、

——ああ！　旦那が、十両をお投げになったのだ！

と、てまえは、合点いたしました。

三

それから四半刻あまり後には、てまえは、跟いて来いとも仰言らぬのに、勝手にお供をして、今戸を抜けて、橋場の町家筋から、浅茅ヶ原の脇へ、道をひろって居りました。

例によって、ご浪人さんは、てまえの無駄なお喋りに、相槌を打とうとはなさいませんで

したが、その後姿に落しておいでになる孤独な翳は、これは以前よりもさらに濃いものになっていて、てまえの方では、きりきりと胸が痛むほど、そのお心の底の寂しさがかようて来て、口をつぐむわけには参らなかったのでございます。

　やがて、蘆草(あしくさ)の茂った細流れに沿うて、浅茅ヶ原を横切り、鏡ヶ池のほとりに出た時でございました。

　ご浪人さんが、ふと、足をお停めになりましたので、てまえは、はじめて、お喋りを中止して、お気色をそっと、うかがうことになりました。

　ご浪人さんは、視線を、その名のごとく、鏡のように澄みきった深みどりの水面へ投じられて、

「薬屋――」

　と、お呼びになりました。

「あの娘を、おれが殺したことになるのだろうか」

　てまえが、これに対して返答できた次第ではございませぬ。

　黙って居りますと、

「やはり、おれが殺したことになろう」

　と、沈んだ声音で、呟(つぶや)かれました。

「しかし、それは、お思いすごしではございませぬか？」

「薬屋――」

「はい」

「お前は、おれの目の光に、魔気があるとは、思わぬか?」

「そ、そりゃア……そんなことは、一向に、てまえには、感じられませぬ」

「正直に云ってもらってよい。……おれはこれまで、無心な者たちから、怯えられ、逃げられて居る。それは、おれのからだが、これまで手にかけた無数の人々の血汐でまみれて、屍臭を放っている故だ、と思うていた。自身でも、時折、とり憑いた怨霊で、肩を重いと感じていることだ。……しかし、おれは、こちらから好んで、凶厄を対手におしつけようとして、意識を働かせたおぼえはない。忌諱触穢に目をそむける者には、こちらから、身を退けるのにやぶさかではなかった。祟られるのを怖れて、厄祓いをする者があったとしても、おれは、これに腹を立てる人間でなかった筈だ。……ところが、おれは、あの娘を眺めていただけで、殺してしまったようだ」

「………」

てまえは、ただもう、息をのんで、おききしているよりほかに、すべはございませんでした。

「おれは、なんの邪念も抱かずに、あの娘の目へ、自身の目を合わせていた。それだけのことだった。娘の方で、ほんのわずかでも、怯えた気色をみせて居れば、おれは、顔をそむけたろう。娘は、平然としておれの視線を受けとめていた。……おれは、自身の目で、射竦めたおぼえは、みじんもない。にも拘らず、娘は、おれの視線を受けとめたまま、胸に手裏剣

を受けた。躱そうとしなかった。……わからぬ！」

沈鬱な横顔でございました。てまえは、目を伏せて、息苦しさに、生唾をのみ込まずにはいられませんでした。

ご浪人さんは、歩き出されてから、

「薬屋、恋に死ぬことのできる者は、幸せだな」

と、仰言いました。

唐突なお言葉でしたが、てまえは、すぐに諒解いたしました。

そのむかし、この鏡ヶ池に、身を投げて果てた遊女采女のことを、仰言ったのでございます。

……あの采女塚の脇にあった、采女が小袖を懸けたといわれる松も、とうとう枯れてしまいましたね。

若い頃、旅寝のつれづれにひらいた絵草紙の中の、鏡ヶ池の水面に浮いたあわれな遊女姿が、いまでも、まぶたのうらにのこって居ります。

文句は、こうでございましたね。

「吉原雁金屋が遊女采女は、天のなせる麗質なれば、紅粉の加わりなる色をもちいず、名妓のきこえあり、葛飾郡飯塚村中山院の若僧林山の、これに心をはこび、采女も深くこれを慕いければ、主人これを聞き、入り来る客のさわりなりとて、きびしく林山を制して近づけず、殊に人を忍べる出家のことなれば、一身にせまり、ある夜、雁金屋が格

子の前に来て、短刀を抜きて、自らその咽喉を突いて死せり、住所を明かさぬ僧なれば、その屍を日本堤へ運びて、捨てたり、いま、捨て坊主というは、これよりはじまるなり、釆女は、さらぬだに、この世のままならぬ、つらさ恋しさのわりなきに、人知れず袂をぬらし、十三夜の月の夜中、廓をそっと脱け出して、あたら十七の花の身を、浅茅ヶ原の鏡ヶ池へ投じて相果てたり。……

松の枝に懸けた小袖の裏に、記してあった辞世の歌も、てまえの好きな歌のひとつでございます。

　名をそれと云はずとも知れ猿沢の
　跡を鏡の池に沈めば

ご浪人さんは、てまえが、小声で、その歌を口にいたすのをおききになると、

「惚れた女が何人いた、薬屋！」

「野暮な男でございまして——旅の行きずりに、気まぐれに寝た女をかぞえるだけでございます」

「思い出すおもかげは、ひとつもないのか？」

「お嗤い下さいまし、九年前に死んだ女房の顔さえ、夢にも見ない奴でございます」

てまえは、そうこたえてから、ふっと、このお方には、忘れられぬ御婦人がおありなのだ、と思いました。

「——旦那」

「………」

「失礼でございますが、旦那は、大切なおひとを、お亡(な)くしなさいましたので？」

それには、ご返辞はございませんでした。

数歩行ってから、

「明日のために、今日を生きて居らぬ無頼の性根が、おれを生きつづけさせている。たわけた話だ」

その自嘲(じちょう)を、お洩(も)らしになりました。

四

ご浪人さんとてまえの進んで行く往還は、ちょうど、真西に向かっていて、沈みかかる陽が、ななめに、あかあかと落ちて居りました。

その夕陽をさえぎって、忽然(こつぜん)と申してもよい出現のしかたをしたのが、あの手裏剣撃ちだったのでございます。

顔を影にしたその立姿は、まことに、鬼気満ちたもの凄(すご)さであったと申上げても、はばかりませぬ。

その背後は、見わたすかぎり荒田が拡(ひろ)がり、おちこちの林が靄(もや)にかすんで、生ける幽鬼を立たせるにふさわしい蕭条(しょうじょう)たる冬景色といえたのでございます。

距離は、三間あまり、ありましたろうか。

ご浪人さんは、立ち停まって、なお、ふところ手のままでございました。

手裏剣撃ちは、右手に、かなり重げな包みを携げて居りましたが、それを、くさむらに置くと、ゆっくりと、一間あまり歩み寄りました。

てまえは、対手が抜く手も見せずに、手裏剣を撃って来るのではないかと——その恐怖に悚々として、生きた心地もなく、ご浪人さんの水際立ったお腕前を百も承知で居り乍ら、そのふところ手ののんきさに焦れ立たずにはいられませんでした。

「阿波浪人・吉野郷三郎」

手裏剣撃ちは、まず、そう名のりました。

「阿波か——」

ご浪人さんは、ひくく呟かれました。

「お主が、眠狂四郎なる戯名を用いる稀世の剣客とは、つい今、きき知った」

「…………」

「その邪凶の眼光を射て、妹を不動縛りにしたのは、気まぐれのしわざであろうが……許せぬ！」

吉野郷三郎が、そう云いはなって、右手を懐中に入れるのを眺めたてまえは、思わず、ぶるぶるっと胴顫い仕りました。

いえ——投げてよこしたのは、小判でございました。

さらに、三歩を迫って、

「勝負！」

語気に闘志をこめて、叫んだのでございます。

しかしなお、ご浪人さんは、依然としたたたずまいを、みじんも変えようとはなさいませぬ。

てまえは、大声をあげて、「ちがいますぞ！　眠様は、決して、お前様の妹御を不動縛りにしたのではございませぬぞ！」と叫びかえしたい衝動にかられたものでございましたが……。

もはや、てまえごときが口をさしはさむ余地のない、おそろしい緊張が、ここに、漲り渡ってしまったのでございます。

「抜け、眠狂四郎！」

云いつつ、吉野郷三郎は、白刃を腰から、すうっと鞘走らせて、ぴたりと、青眼にとりました。

それを見て、ご浪人さんは、はじめて、しずかな声を返されました。

「お手前は、胸を患っているのではないか？」

「それが、どうした？」

「このさき生きる日数が短いと知って、この勝負で、一挙に生命の灯を燃え尽そうという料簡なら、こちらは、迷惑な話だ」

「黙れ！」

影になった顔が、みるみる悪鬼にも似た形相と化して、
「それがしの病んだは、犯神して疾走の禍に遭うたのではない！　剣理を究めんがための刻苦によるぞ！　……貴様のごとき邪剣を両断してこそ、活然たる精気を蘇らせ得るのだ！」
云いもおわらず、吉野郷三郎は、水上を滑るように、すすすっと肉薄して参りました。
おもむろに、ご浪人さんが、両手を袖からお出しになった――その一瞬をえらんで、
「喝っ！」
紫電の刃風を、真っ向へたたきつけて参ったのでございます。
影を斬って、形をのがした――というのは、まさしく、この猛撃のことでございました。
おそらく、吉野郷三郎のまなこは、はっきりと、ご浪人さんの姿を、両断したと見てとったに相違ございませぬ。
それだけに、仕損じたと判るや、憤怒と屈辱と絶望と狂気が、嵐のように、その全身に渦巻いて、無心にもどるいとまもなく阿修羅となって、
「う……おっ！」
と、無謀きわまる突進を起したのでございます。
それは、まるで、白昼夢でもみているような光景でございました。
ご浪人さんの姿が、まるで幻影のように薄いものになって、むしろ、ゆるやかな動作で、襲い来たった対手と、すうっと行きちがったのでございましたが、いつの間に抜きはなったのか、その右手には、夕陽に煌く一剣があり、切先から、真紅の糸を引いていたのでござい

ます。

吉野郷三郎は、と見れば――。

一間余を奔ってから、一刀を杖にして、後髪を曳かれたように、すこしずつ顔を仰向けたとみるうち、口をいっぱいに開いて、濁った音とともに、がっ……ごぼっと、血の塊を噴きあげたのでございました。

それから、朽木が倒れるように、右へ傾くや、意識のないままに、おのが身を支えようとする本能で、刀をさしのべつつ、くさむらへ、どうっと横臥しましたが、そこは斜面になっていて、その急勾配をずるずると滑り落ちて行ったのでございます。

大きな波紋を描いて、そのからだが水底へ沈んで、ほんのしばらくすると、水面に、みるみる、鮮やかな真紅の色が、夕焼の乱雲が湧きあがるように、拡がって参りました。

永く後日にのこる、たとえようもない美しい眺めでございました。

はっとわれにかえって、てまえが、頭をまわしますと、ご浪人さんは、くさむらにのこされた包みへ歩み寄って、それを開いていらっしゃいました。

それは――おどろに黒髪を乱した、白蠟となった娘の首でございました。

ご浪人さんは、その首に添えられている小さな品をお把りあげになりました。

それは、自惚鏡のようなかたちをして居りましたが、蓋を開いて、目を落されたご浪人さんが、呟かれたのは、

「あの娘も、おれを、きりすとと見たのか！」
　そのお言葉でございました。
　それから、なんともいえぬ自嘲の薄ら笑みを、蒼い貌へ刻まれて、その品を、てまえにさし出して、申されたのでございます。
「薬屋、ひとつ、見くらべてもらおうか。……お前の薬袋に描かれた神農氏の威容に、そこいらの藪医者の鯰髭が似かよっている程度に、この青銅の磔像の面が、おれのつらと似ているかどうか――」

芳香異変

一

桃の頃室町近く御所が立ち
箱入の娘さん出る雛の市
賤ヶ家も雲井にまがふ雛祭
天杯を下女もいただく宵節句

めぐって、上巳雛祭りが来ていた。

大奥をはじめ、諸侯御殿方は、すでに昨年から、御用達、出入衆へ注文していた品々を催促して、日頃ひっそりとしている大名小路を、さまざまの包物を持った人々を足繁く往来させていた。市外から、桃桜山吹などを荷籠に盛って出て来て、花鋏の音を、ちょんちょん鳴らして行く花売りの姿が、どこでも見かけられて、江戸の春はまさに闌となる。

宵節句を迎えて、西丸老中水野越前守邸も、母屋はもとより、すみずみにわたって、あわただしく、人声や物音で賑っていた。

武部仙十郎の至急の使いで通用門を入った眠狂四郎の姿だけが、この浮きたった雰囲気になじまぬ暗い翳をひいていた。

武部家の書院に入ると、仙十郎はすでにそこに坐っていた。

「思い出す喃、四年前の大芝居を――」

仙十郎は、そう云って、にやりとした。

四年前、狂四郎に、将軍家拝領の小直衣雛を盗みとらせて、主君忠邦にその二個の首を刎ねさせた――あの冒険のことであった。

あの夜――闇の中で、美保代を犯した思い出は、つい昨夜の出来事のように、狂四郎の脳裡になまなましいものとなって、苦痛を呼ぶ。

皮肉にも、腕を組み、頭をまっすぐに立てた狂四郎の容子は、四年前と、一向に変ってはいない。むかいの座で、猫背をつくっている好々爺然とした仙十郎の姿もまた、全く同じである。

「お主にまた、今夜、たのまれて貰いたいことがある」

「女を背負わされるのは、御免を蒙りたい」

「はははは、よほどこりたとみえるな。……こんどは、盗むのは、どうやら、女の間者の方らしい」

「……………？」

「これを捕えるのが、お主の役割ということになる」

老人は、懐中から、一冊の帖子をとり出すと、狂四郎の前に置いた。
「大納言様御雛道具控」
と、記してあった。
めくってみると、御束帯、小直衣、御直衣、御狩衣（以上内裏御雛様九対）、御所人形、管絃楽御人形、御屛風（八叟）、御燭台、御厨子棚、御黒棚、御台火鉢、御輿、御大傘、御筒守、御長刀、御銚子、御餅桶、御喰籠、御三宝……等々、それぞれ、細密な絵にして載せてあった。
「西丸より拝領されたのか？」
「いや、お借りしたのだ。明日、未刻、大納言様（家慶のこと）が、お成りになって、この屋敷の庭で御雛祭りを催される……ちと、迷惑な仕儀じゃが、やむを得ぬ」
「この内裏のうちの、いずれが盗まれると云われるのか？」
「いや、内裏は盗まれぬ」
老人は、扇子で、つと、御所人形のひとつを指した。それは、玄宗皇帝、楊貴妃、童児の三人一組であった。
「これじゃて」
「どうして、これが狙われるのか？」
「童児が捧げて居るのは、これが、珍宝、漢代の玉にまぎれもない」
往古は、玉をもってこの上もない宝としていた。周礼にも見るように、一に蒼璧、二に黄

琮、三に青珪、四に赤璋、五に白琥、六に玄璜。いずれも天地四方を祭る時に用いた。また六瑞といって、六種の割符玉もあった。王は鎮圭、公は桓圭、侯は信圭、伯は躬圭、子は穀圭、男は蒲璧を執った。これらは、天子以下王公侯伯が、あるいは四方を鎮めて国家を統治し、あるいは上を安んじ下を撫し、あるいは行為を慎しみて身を保ち、あるいは五穀の豊穣を祈る義に取ったものの名称である。

「この玉は、日輪璧（天子が毎に供えて日を祀る玉）と伝えられているが、ちと形がちがう。楕円の日輪はあるまいて。また、数個処に透し彫があるのもいぶかしい。……お主、なんと観る？」

そう訊かれて、狂四郎は、その絵をじっと眺めていたが、

「薫香器と思われる」

と、呟いた。

「左様、薫香の玉に相違あるまい。……この珍宝を、かねてより、御本丸大奥で、御所望であった。が、なにぶんにも、この御所人形は、禁中より大納言様が頂かれた品であるために、そうやすやすとは、ゆずるわけには参らぬのでな――」

おそらく、欲しているのは、将軍家斉の愛妾の一人に相違ない。

「わたしに、雛飾りの部屋で、夜通し張り番をせよ、と云われるのか？」

狂四郎は、冷やかに、老人を見戍った。

「まあ、そういうことに相成るな」

「不審がひとつあります」
「なんじゃな？」
「大奥の無智な女性が、間者を忍び込ませてまで、欲しがる理由がわからぬ。金にあかしての骨董あさりが昂じた好事家が、これを是非にも手に入れたい、というのなら話がわかるが……。若い女性に、骨董趣味はありますまい」
「尤もな意見じゃな。……ついでに、その謎も、お主に解いてもらおうか」

二

雛の飾付けは、夕食後、厳重な監視のもとに、御成り座敷でなされた。
紅白の縮緬の幕を張り、さらにその前に金屏風がひきまわされた。
猩々緋の氈を敷いた雛段は三段。高さが京間ではない一間に、幅は八間。座敷から二の間まで延びる大きさであった。
御束帯、小直衣、御直衣、御狩衣などの内裏雛九対は、上段に、金襴の鏡蒲団の上に飾られた。二段目には、中央へ御所人形、その左右へ楽人七人立ちのものを三組、そしてその前へ御膳を供え、三段目には、能人形がずらりと並ぶ。
雛段には、桜の花を描いた吉野紙を朝顔にした燭台が、段毎に五つ宛、打違えに立てられ、灯を入れると、雛たちのすがたが、夢幻の世界のもののように、美しく妖しく浮きあがる――。

雛段下には、黒塗の花桶が三対、いっぱいに、桃と桜と山吹の花を咲きほこらせる。常ならば、飾付けが終ると、すぐに、女中たちが、本膳、二の膳、三の膳に、ほんものの料理を盛って、供えに来るのであったが、これは、仙十郎の命令によって、中止させた。また、御用達町人からの献上の品も、当然飾られるべきであったが、別の間の方へ積まれたまま、運ぶことを許されなかった。

家中えらばれた使い手の若ざむらいが四名、雛段近くに詰めて、夜を明かすことになった。

ところで――。

狂四郎は、飾付けの最中に、ふらりと現われて、御所人形の童児が捧げた玉を熟視した。それは、薄い黄色で、恰度蒸した栗に似た肌に、いちめん赤い斑紋を散らした、鶏卵大のものであった。

玉の色には、二種ある。天成の本色と外沁の色――俗に謂う沁と。

沁とは、玉が土中に在って、玉質に水銀の滲透するにしたがって、これに接触した外物の色を染渡らせたものの称である。

この玉は、甘黄といって、黄土の沁を受けたのである。さらに、その赤斑は、棺中で血沁すなわち屍体に接近して、滲み出したものである。

尤も、この知識は、狂四郎が、あとになって得たものであり、その時は、はたして薫香器かどうかをたしかめたにすぎなかった。

香を薫ずるにしても、これは、ただ、火で燻べるのではなさそうに思えるが……。

その疑問をのこして、狂四郎は、すぐに立去った。

その足で入って行ったのは、この屋敷の主人のみが入る文庫蔵であった。仙十郎のはからいによったのである。そこには、文字通り万巻の書が、整然として積まれてあった。儒学に関する諸儒の註解書、聖賢の各書、和朝の古書記録など、幕府が慶長の初年以来、漢学和学の泰斗たちをして謄写刊行せしめて来た書籍の大半がここに蒐められているとみえた。

しかし、狂四郎が、さがしにかかったのは、孔子家語や武経七書や大蔵一覧や古事記や貞観格や政事要略ではなかった。

欲するものを発見するために、狂四郎は、そこに一刻以上も、とどまることになった。

二更近く、仙十郎は、御成り座敷へ顔をのぞけて、狂四郎が、文庫蔵からまだ戻って来ていないのを知ると、訝しげに小首をかしげたが、べつにそちらへ行こうともせず、わが家へ引きとった。

狂四郎が、影のように姿を見せたのは、それから半刻あまり過ぎていた。

監視の士たちへ会釈しておいて、自身は、一人、二の間に下がって、壁に背を凭りかけた。

その無表情からは、目的を達したかどうか、窺い知る由もなかった。

三

さらに、それから半刻が移って——。

狂四郎は、身じろぎもせず、坐りつづけているうちに、ふっと、五体に備えた神経が、睡

魔に犯されそうになるのをおぼえた。

――はてな？

そうと気づいた瞬間、いつもなら、脳裡は鋭く明快に冴えるのだが、いま、一種の不快感がともなったのは、どうしたわけか？　座敷と二の間の様子は、依然として、静寂のまま、なんの変りもない。わずかに、燭台でゆらめく焔が、夜気の冷え沈むのを教えるように、じじいっ……と、時折音をたてるだけである。

「おのおのがた――」

狂四郎は、声をかけた。

士たちは、一斉に、振りかえった。

――ふむ！

狂四郎は、肚裡で、ひとつの発見に、納得するところがあった。四名の眸子の色が、やや濁っているのだ。これは、睡魔に抵抗している証拠であった。

狂四郎は、音もなく無想正宗を携げて、立った。心機の働きに、爽やかさを喪ったことに、微かな苛立ちがあった。

滑るように、二の間から座敷に移って、眼光を、徐々に隅から隅へと移した。四名の目もまた、狂四郎の視線を追った。

狂四郎の眼光は、上段奥の、床の間脇に障子を閉めた火頭窓を射て、停止した。

――いる！

と、見た。
「おい、そこの御仁！」
語気に、なんの鋭さも含めずに、声をかけた。
「眠狂四郎が、ここにいると知って、そこに潜んだのなら、生命をすてる覚悟だろう。庭へ出るがいい」
障子を開けて、広縁へ出ようとする狂四郎へ、士の一人が、
「遁しては！」と、叫んだ。
「無駄に、刀を携げて居らぬ」
狂四郎は、冷やかに云いのこした。
霊感——といっても、さしつかえはなかったろう。
火頭窓の外に潜んでいる曲者は、実はこちらが、気配を察知するのを、待ちうけていたのだと、合点されたことだった。
広縁へ出ると、もう彼方の雨戸が一枚あけてあった。狂四郎は、しずかな足どりで、そこへ歩み寄った。
総身黒ずくめの影が、月光のある白砂の庭に、すっくと立って、すでに、白刃を手にしていた。
築山もなければ、泉水もない、苔をのせた奇岩が島影見たてに処々に浮いているひろびろとした平庭を、おのが最期の地上とほぞをきめて、そうして、影法師を長く背後へ這わせた

黒い孤身が、狂四郎の眸子に、ふと寂寥の翳濃いものに映った。ゆっくりと沓石へ降り立つと、
「お手前は、若年寄支配下の庭番か？ それとも、やとわれ忍者か？」
と問うた。
こたえはなかった。
「前者であれば、お手前の家へ、遺髪を届ける労を惜しむものではない」
頭巾のかげの顔が、笑ったようであった。そして、それは、決して、陰惨な、絶望的なものではなかった。
死に臨んで、鮮やかといいたいくらい莞爾としてみせる。この心境は、どこから生まれたのか——。
身構えた姿が、理の修業によって悟り得た無心無念の位におちついているとは見えず、事の修練を極めた者のそれとも思えなかった。
鋭気も足らず、隙もあった。こちらの石火の機に応じて、撥ねかえすだけの速身を備えているとは、到底受けとれなかった。
にも拘らず、おちつきはらって、みじんもたじろがず、こちらの驕った口上に対しては、きわめて自然な破顔をむくいたのである。
狂四郎には、わからなかった。
沢庵が柳生宗矩に与えて剣法と心法との接触溶解を論じた「不動智神妙録」に、次の言葉

がある。

「応無所住而生其心。この文、訓に読み候へば、応に住る所無くして其心を生む、と読み申候。よろづのわざをするに、せうと思ふ心が生ぜねば、手も動かぬなり、心を生じてすれば、そのすることに心が留るなり、然らば、留まる所なくして心を生ずべしとなり。心が生ずれば、生ずる処に留まる。生ぜざれば手も行かず、行けばそこに留まる心を生ず。その事をなし乍ら留る所なきを、諸道の名人と申す也。仏法にては、この留まる心から執着の念起り、輪廻も是より起り候。この留まる心、生死のきづなにて候。花紅葉と見る心は生れ乍ら、そこに留まらぬ心を詮と仕り候。（中略）太刀をば打つけよ、打ても心な留めそ。一切打手を忘れて打て、人をきれ、人に心を置くな、人も空、我も空、打つ手も打つ太刀も空と心得よ。空に心を留められまいぞ」

この教えは、剣を把って立つ者にとって、黙裡において悟らねばならぬ根本義とされている。

もとより、魂の曠しさを癒やすすべを知らぬ狂四郎の剣には、かかる理と事を一致せしめた真我の清澄はない。孔子が曰う「それ心は水の如し。水なる哉」という理知の妙諦の覚得には程遠く、剣聖たちの世界とは次元を異にした位置で、凄じい戦闘力を発揮するのである。したがって、敵の姿が、有心の心をすてて、無心の心を、鏡のように、微塵のくもりなく、ぜんたいに澄みわたらせているのを見た場合、狂四郎の心気は、乱れる。これまで、そうであったし、勝利をこちらのものにしたのは、いつも偶然であったとおのれに云いきかせてい

る。

いま——。

眼前にする敵は、剣の法形の神秘を悟り得ていないのが明らかにも拘らず、全身を、無心の境地に置いているのである。

これは、どうしたことなのか？

狂四郎は、烈しい屈辱をおぼえた。

さっ、さっ、と裾を蹴って、近づいて行きつつ、両手を空けたままでいたのは、それ故であった。

敵は、「抜け！」とも叫ばなかった。

狂四郎を三歩の距離に入らせるや、無言の気合に五体を乗せて、斬りつけた。

その刃風の鈍いのろさを、あわれみつつ、狂四郎は、居合抜きに、無想正宗を、水平にはらった。

「うっ……む、む、むっ——」

呻きを口の内に嚙んで、二歩をよろめいた敵は、がくっと膝を折って、徐々に首をのめり込ませて行った。

暗然として見下していた狂四郎は、白砂に顔を埋めた敵が、微かに洩らす一言を、ききのがさなかった。

「……鈴香」

呼んだ名が、それであった。

四

狂四郎が、座敷に戻ってみると、監視の四士は、のこらず、首を垂れて、睡魔のとりこになって居り、御所人形童児が挙げた両手から、玉は、消えうせていた。

庭から跫音が近づいて来て、ひょっこりと姿を見せた仙十郎は、

「お主が、いま佇したのは、隠密らしいの」

と云いつつ、雛段を見やって眉宇をひそめた。狂四郎は、薄ら笑って、

「わたしが、あの男を斬るあいだに、玉が盗まれたのです。これは、彼らの予定通りの行動であった」

「ふむ――」

仙十郎は、正体をうしなった士たちを眺めて、

「この者たちは、どうして睡らされたかな？」

「わたしが、文庫蔵にいるあいだに、この段毎の燭台の蠟燭が、とりかえられた。宵にともしたのが燃えつきれば、とりかえるのに、不審はない。不審なのは、前の蠟燭は、一刻以上も保っているが、この蠟燭は、半刻も経たぬのに、すでに燃えつきようとしている。特殊の品に相違ない。睡魔は、この焰の中から泳ぎ出たというわけです」

数多い蠟燭をとりかえるのは、一人の女中の手ではおよばない。十名以上も入って来て、

蠟の溶け流れた燭台をきれいに掃除してから、新しいのを立てて行くのである。彼女たちは、その新しい蠟燭が、特殊な品とは夢にも知らずに、立てて行ったに相違ない。

「女中たちを、一人のこらず、ここへあつめて頂こう」

狂四郎は、云った。

「至急を要することです。寝衣のままで――」

「女中部屋を捜すわけかな？」

「その面倒は、無用です」

「ほう――どうしてじゃな？」

狂四郎は、それにこたえず、

「女中たちには、部屋捜しをすると思わせて頂ければよい」

老人は、狂四郎が何を目論(もくろ)んだか、ちょっと読みとりかねたが、すぐに、広縁へ出ると、大音声(だいおんじょう)で、

「一大事出来(しゅったい)じゃ！　宿直(とのい)の面々は、女中部屋をとりかこめい！」と、下知した。

御成り座敷にあつめられた女中は、六十七名であった。あでやかな辻(つじ)模様のきものを、まだ脱いでいない者も七、八名いたが、ほかは、すべて白羽二重の寝間着に、緋縮緬のしごきをしめていた。

狂四郎は、襖際(ふすまぎわ)、壁際へ、一列に坐らせると、座敷中央に端坐(たんざ)して、

「その右端から、自分の好きな万葉集の歌を一首ずつ、ゆっくりと、誦ってもらおうか」
と、命じた。
まことに、奇妙な取調べ方法であった。なぜそうするのか誰人も判らなかった。
右端の女中は、えらぶ歌によって、思いもかけぬ罪を被せられるのではないかと、悚々として、容易に、口をひらこうとしなかった。並ぶ女中たちも、同じ気色だった。
「おい――誦わぬか」
狂四郎は、穏やかな口調で、促した。
「万葉集でなければ、いけませぬか？」
女は、怯ず怯ずと問うた。
「好きな歌が、ほかにあれば、それでもよかろう」
「はい」
女中は、必死に、えらんだ挙句、千載集の成尋法師が入唐に際しての、その母のよんだ一首を、ひくく誦した。
「忍べどもこの別路を思ふにはからくれなゐの涙こそふれ」
次の女中もまた高僧の歌をえらぶのが無難だと思い、慈円の「詠妙経法師功徳品悉見三千界文和歌」を誦した。
「御法故身の浮草や晴れぬらむ四方の空にも四方の月影」
三番目の女中は、明恵の「非情にも三得ありといひつべしこころすむよの松風の声」とい

うのを――。
四番目の女中は、最澄の比叡山をよめる一首を――。
五番目も、六番目も、七番目も、そうしなければならないように、高僧の歌をえらんだ。
狂四郎は、目蓋をとじ、腕を組み、黙然として身じろぎもせず、女中の誦するにまかしていた。
やがて――。
その半数が、一人のこらず、高僧の歌を口にし終った頃、狂四郎は、ぱっとまなこをひらくや、冴えた光を、左端の女中から、ひとつひとつの顔へ、放ちはじめた。そして、誦す番を、もう三、四人で迎えようとしている女中の顔へ、狂四郎は、ぴたりと視線を停めた。
彼女は、目蓋をとじていた。なにかに堪えようとしている表情が、夜の光の中に、はっきりとみとめられた。両脇の同輩の目には、それが苦悶の色と受けとれるのであろう、もうすこしの辛抱だといたわる心づかいが見られた。
狂四郎の目は、だまされなかった。
その表情は、かくそうとしてかくしきれぬ恍惚たる愉悦を滲ませた淫靡の色にまぎれもなかったのである。
狂四郎は、やおら、立ち上がると、眼光をそれにあてつつ、
「老人――」と、呼んだ。
「なんじゃな?」

「盗人を捕える。縄を頂こう」
「ほう——いよいよ、判明いたしたか」
狂四郎は、縄を受けとると、しずかに、その女中の前へ、歩み寄った。
一同は、ひそと、固唾をのんだ。
「鈴香！」
女中は、狂四郎の口から、わが名を呼ばれて、はっと、双眸を瞠いた。
「そなたの男が、庭に佇れて居る。わたしが斬った」
「…………」
「べつに、おどろかぬところをみると、わたしに斬らせることは、決意のひとつであったようだ。ということは、そなたのために死ぬ覚悟をさせる程、男を惚れさせたが、そなたの方は惚れなかったという事実を明らかにするぞ。男は、そなたの名を呼んで、死んで行ったぞ。あっぱれであったとたたえられてよい最期であった」
「…………」
「そなたごとき冷たい女には、もったいない男であった」
瞬間——鈴香は、はじかれたように飛び立って、身をひるがえそうとした。
そこを待ち受けていた狂四郎である。
右手からはなたれた縄は、鈴香の片足くびを狙ってあやまたず、結び輪で、ぎゅっと締めあげた。次の刹那、狂四郎は、左手に摑んだ縄はしを、長押に架けられた槍の柄へ、ぱっと

ひっかけるや、ぎりぎりっと、ひきしぼった。

鈴香のからだは、反抗するいとまも与えられず、寝間着の裳裾を、緋の腰絹を、投網のように、ぱあっとうち拡げて逆立った。

無慚にも――狂四郎は、右手で縄をひきしぼりつつ、左手で、宙を泳ぐ一方の下肢を捕えて、ぐっと、大きく、股を左右に裂いた。

「老人――いかに？」

「…………」

仙十郎は、流石に、あまりの光景に、口を真一文字にむすんで、顔中を皺にした。

「匂い立つ芳香を、かがれるがよい。あの玉が、薫香器には相違ないとしても、火をもって燻べるのではなく、女性の柔肉の水で溶いて、匂わせる道具であったことを、この女中が、身をもって、正しい使用法を教えてくれました。……当家の文庫蔵に、漢代の遺著『雑事秘辛』があったのは、幸いでした。記していわく――天子、長枕の下に日輪璧をかくし、年破瓜なる美婦をえらんで、大牀に入れ、ひそかに、之を用う、璧は潤うて幽香を生じ、細腰雪膚は酔うて狂い、ついに嬌として哭く、と。……老人、幽谷から玉をひろいとるのは、貴方の役目だ。照れずに、ひとつ、やって頂こう」

髑髏屋敷

一

――はて！

花の便りに誘われて人出がとみに増した春昼、柳橋の橋上を、ゆっくりと渡りかけた眠狂四郎が、急に、じっと目を置いたのは、二間ばかり前を行く十徳に宗匠頭巾を被った老人の後姿であった。

一瞥して、浮世の俗事とは縁が遠くなり、江戸座の宗匠にでもおさまって、残りすくない人生を悠々自適しているかに見える、大きな町家の隠居姿であった。

頭巾の下の髷は、きれいな白髪であったし、川を下って行く屋形船へ視線を向けた横顔は枯れて皺深いもので、どう眺めても、七十の坂を越えていると受けとれるのだったが……。

狂四郎に、不審を起させたのは、その老齢にも似合わぬ若々しい足のはこび方であった。

かりに、どんなに若造りをしても、人は、その後姿の動きから、年齢をかくすことは難しいものである。おのずと、その過して来た職業の特徴を、年輪にしたがって、後姿に滲ませて、これがまた、あじわい深い観ものともなるのである。

この老人の後姿には、永い年月が刻みつける筈の風格がなかった。あるのは、まるで青年のような若い匂いであった。

並の人間なら、不用意に見遁してしまうか、ちょっと訝ったとしても、さまで気がかりにならないであろう。狂四郎は、そうではなかった。異常な興味をそそられたのである。

それというのも——。

老人の貌には、決して、生涯を幸運に過した者の大らかさはなかった。いや、むしろ、いちめんの皺は、何かおそろしい苦難を越えるために作られたに相違ない。狂四郎の目は、確信した。

——どういうのだ。これは？

この疑惑は、無数の死地を脱けて来た者として、当然起った。狂四郎自身、おのれの後姿に、老齢のそれにもまさる、暗い惨めな翳が落ちているのを知っていたからである。

……なんとなく、あとを尾けることになった。

老人は、橋を渡りきると、左へ折れて、柳が芽吹いた河岸道を、すたすたと行く。

向うから、仮装した花見客のひと群が賑やかに近づいて来たが、その中から、不意に、ひょっとこ面をつけた男が、何か叫んで走り出して来た。

老人とすれちがいざま、狂四郎の行手をさえぎって、ぱっと両手をひろげた。

狂四郎は、苦笑して、

「どうした、金八——」

と、云った。

金八は、面を鼻まで押しあげて、反っ歯を出すと、

「先生っ！　やいっ！」

呶鳴ったものの、あとがつづかず、咽喉仏を烈しく上下させた。

「みんな、元気か？」

「元気か、だと――こん畜生っ！　元亀・天正以来、貧乏人は、水だけ飲んで、ぴんしゃんしてらあ。人参飲んで首を縊るのは金持の芸当だい。先生っ、どうしてくれる！　勝手に、ふらっと江戸から消え去せちまって、一年ぶりに戻って来ても、帰ったぞ金八、とも声をかけずに――ふざけやがって！　あっしが、こんなにむかっ腹をたてても、そっちは糸瓜の皮だ。くそ面白くもねえ。お前さんのためなら、甲らが舎利になっても、働こうという者が、喚いているんだ。金八は、人のふところはすっても、胡麻は磨らねえんだ。先生っ、返答どうだ？」

いきり立って、つめ寄る金八に、狂四郎は、微笑し乍ら、

「まあ、その面をぬいで、顔を見せろ」

「びっくり、という栗がはじけて、目にとび込んで、くやし泪が流れているんだ。みっともなくて、滅多に拝ませられるけえ」

そう云って、金八は、水っ洟を、てのひらでこすりあげた。

狂四郎は、遠ざかった老人の後姿を、目で追いつつ、

「金八、早速だが、甲らを舎利にしてもらおうか」

「なに？」

「あの、むこうを行く年寄の懐中を抜いてみてくれぬか」

金八は、のびあがってみて、

「あんな爺いじゃ、張合いがねえが……」

「油断するな。只者ではない。みごと、抜けたら、吉原で、黒二つ星を抱かせてやるが、やりそこなったら、その腕一本台無しにされて、骨継ぎ医者行きだ。覚悟して、かかれ」

「水臭せえや、先生。蓮の台の半座を分っから、金八、死んで来い、と云ってもらいてえ。……よおし！」

二

羽織きせかけ
行先たずね
すねて、簞笥を背中で閉め
ほんにお前は罪な人
てなこと

いっぺん、云われてみたい、か——

つと、路地からあらわれた金八は、やぞうをきめて、ほろ酔いの千鳥足になっていた。

先廻りをして、老人が、そこに来るまで、待ちうけていたのである。

——先生は、只者じゃねえと云ったが、たかが死にぞこないの娑婆ふさぎ、皺でかくれた金壺まなこが、どう光ったところで、たかが知れている。掏り栄えはしねえ。仲間が見たら、嗤やがるだろう。

狙ったとたんから、その品物が生きものになって、自分の冴えた指の働きを待ちこがれている——その自信が、金八には、あった。品物の方から、指に吸いついて来ると云ってもよかったのである。目にもとまらぬこの迅技をやりとげた刹那の快感は、たとえ様もないものだった。

——やるぜ！

金八は、つき出した首を小ゆすりして、

　いやじゃや、と
　とびのくやつをばとらえ
入れて、泣かせるう
　きりぎりす、とくらあ

……とん、と軽くぶっつかって、頸からかけられた紐を、右手の掌に隠した小鋏で切る。と同時に、左手の人差指と中指が、懐中物を、するっと抜く。

いや、抜こうとした一瞬、金八は、右の手くびを、ぐっと摑まれて、

——しまった！

七十越えたおいぼれを狙って失敗した屈辱感で、かっとなった。摑まれたまま、対手(あいて)の目へ目を、ぐっと睨(にら)み合せて、

「花見時は物騒だ、年寄は気をつけな」

と居直った。

老人は、無言で冷笑した。

瞬間——金八は、「うっ！」と呻(うめ)いた。おそろしい力が、手くびにくわえられて、疼痛(とうつう)が、そこから全身をつらぬいた。

——骨が折れる！

商売ができなくなる、と脳裡(のうり)を掠(かす)めた——その恐怖が、金八に見栄(みえ)をすてさせた。摑んだ対手の片手へ、がぶっと齧(かじ)りついた。

次の刹那、

「たわけ！」

凄(すさま)じい一喝(いっかつ)をあびせられた金八は、自分の五体が、もんどり打つのを、自身でもたあいもないと感じつつ、河岸縁から落ちて行った。

七、八間はなれて、この光景を目撃した狂四郎は、

——やはり、そうか！

と、予感が当ったのに、にやりとした。

晴れた空の白い雲を映した水面が、高い飛沫(しぶき)を噴きあげて、大きく波紋を描いたのへ、老

人は、目もくれようとせずに、さっさと歩き出していたのだったが、金八を捕えて投げ込んでおいて、何事もなかったかのように去ろうとするその態度は、小憎いまでにきびきびしていたのである。

——尾けて、正体をあばくに足りる！

三

仙台堀に沿うて材木置場まで下って行き、要橋のところから左に折れて、本所各町の代地をひろって、まっすぐに進むと小名木川に行きあたる。そこに架けられた扇橋を渡ると、本多豊前守、大久保佐渡守、阿部播磨守、松平肥後守などの下屋敷の高塀がつらなって、もはや人影もなく、春の午後の陽ざしが、路上の物影を長く延びさせて、この静けさは、これはこのまま、黄昏の靄を迎えて、しっとりと昏れて行くのであろう。

尾ける者も、尾けられる者も、一定の距離を保って、ここまで、来た。

老人は、一度も振りかえらなかったが、尾けられていることは、すでに気づいていない筈はなかった。

狂四郎自身、気どられまいと要心した次第ではない。

大名の下屋敷がきれると、八右衛門新田がひらける。遠近に、林や竹藪がわだかまっているほかは、見わたすかぎりの田面が、渡って来る微風に、青麦の穂を波だたせていた。人家の聚落は、川の向うであった。

この一直線にのびた往還上に、見出される人影は、老人と狂四郎のみであった。ほかに動いているものといえば、堤でゆれている陽炎ばかりである。
つと——老人は、大きな欅の樹の立っている辻を、右へ曲って、脇道へ入った。その脇道もまた、南へむかって、まっすぐに走っていた。狂四郎も、つづいた。
ものの二町も行くと、道は林の中に入り、木洩れ陽が妖しいくらい鮮やかな明暗の縞を織って、通る者の気色までも微妙にあらためる。
——ここらあたりで、向き直って来るか？
狂四郎は、そう思った。
来なかった。
老人は、悠々として、さらに、脇道から、左へ——細い草径をえらんでいた。
狂四郎は、その曲り角に立ち停って、
——あそこか。
と、見た。
木立越しに、切妻の萱門が見えた。そのかなたに望まれる屋根も、萱葺きで、いかにも、茶禅一味の境地にある隠者の栖といったたたずまいであった。
はたして、老人は、その萱門をくぐって、姿を消した。
狂四郎が、追って、すぐに、ふみ込まなかったのは、恰度、この脇道の彼方に、一人の農夫が、足を停めて、こちらを、じっと眺めていたからである。

農夫は、来かかっていたのだが、老人を見かけると、急に、怯えて、その場に立ち竦んでしまったのである。

農夫は、老人は去ったが、あとから来た狂四郎がまだそこを動かぬので、どうしようかと迷っている様子をしめしたが、やがて、俯向いて近づいて来た。

狂四郎が、声をかけると、擡げた顔に、怯えた色があった。

「あの屋敷の主は、何者だな？」

「一向に、存じませぬが……」

「しかし、お前は、あの老人を見かけると、ひどくおそれたではないか」

「それは、旦那様――、あのお方を、このあたりのものは、みな、人間とは、思って居りませぬ。……貴方様は、どうなされたのでございます？」

「おれも、怪しんだから、尾けて来た」

狂四郎は、笑って、こたえた。

「危険なお振舞いでございます」

農夫は、狂四郎の異相に対しても、不気味なものをおぼえていて、警戒する様子だった。

「人間ではない、というと、どういうのだ？」

「化生かも知れませぬ。……あそこは、享保の頃まで、大きな旗本衆の下屋敷があった由でございますが、その後、とりはらわれて、ずうっと、空地だったのでございます。それを、あのお年寄が、三年ばかり前に、お移りになって来て、住みつかれたのでございます。……

おそろしい事が、起りはじめたのは、それからでございます」
「どんな事だ？」
「子供が、蟬とりに、あの林の中へ入って、儚いことになったのでございます」
「殺されていたのか？」
「それが……さっぱり、わかりませぬ。どこも傷ついては居りませなんだし、死顔も安らかでございましてね。それから、間もなく、同じ場所で犬が仆れたのでございます。……昨年の暮には、鶴が落ちて居りましてね、お役人が詮議なさいましたが、原因は、ついぞわかりませぬ。あのお年寄が、自分の全く関り知らぬことだ、とつッぱねておしまいになると、どうするすべもございませせなんだ。お役人は、そこに、鴉や雀の死骸もあった、と仰言っておいでございました。……化生だ、と噂するのもあたりまえでございましょう」
「住んでいるのは、老人一人か？」
「左様でございます」
狂四郎は、礼をのべて、つと、草径へ足をふみ出した。
農夫が、おどろいて、呼んだが、耳がないごとく、ずんずん進んで行った。
その屋根をとりかこむ疎林は、これはあきらかに、自然に生えたものではなかった。松、楓、樫、にしきぎ、あせぼ、楢、ぐみ、ほうの木、真弓、黄楊、などの常緑樹の一本一本が、吟味されて、植込まれたと見てとれた。
そして、疎林と寄植籬の間には、何故か、一間あまりの幅で、空地が設けられ、びっしり

と高麗芝が敷きつめられていた。

萱門には、この高麗芝を踏んで行き着くことになる。

その芝を、一歩踏んだ——刹那、狂四郎は、居合抜きに、無想正宗を鞘走らせて、ぴたりと、青眼にとった。

他人目があったら、狂気の振舞いとしか映らなかったろう。

前方に、敵影は、なかったのである。

狂四郎のまなこにのみ、その敵は見えた。いや、見えた、というのは、必ずしも、正しい表現ではない。狂四郎が、後日に語るに、見えた、とは云わない筈である。

その敵は、眼前数歩の地上に存在したが、肉眼がとらえた次第ではなかった。

磨ぎすまされた狂四郎の神経が、その存在をさとり、さとった刹那、見たという意識になったのである、

恐怖すべき怪異な生きもの——として感じられつつ、これが、天然の現象であることは、理性が判断した。

大気が、凝集して、巨大な円柱となり、しかも、凄じい迅さで回転している、とでも云おうか。

奇怪にも、その周囲は、微風も絶えた、静かな、明るい春景色なのである。

旋風ならば、木の葉や土埃を巻きあげて、これは、はっきり見とどけられる。それとはまったくちがった怪物であった。

もとより、狂四郎の知識をもってしては、判じ難い現象であった。わかるのはこれに巻き込まれたら、ひとたまりもなく、錐揉みにされて、絶息するであろうということであった。

——子供や犬や鳥のいのちを奪ったのが、これか！

凄じい迅さで回転する大気の円柱と、無想正宗との対峙は、いつまでつづくかと思われた。

白刃の徐々たる移動が、円柱の変りゆく位置をしめした。

狂四郎の気力も体力も、そのために、かなり消耗せざるを得なかった。

斬り込めば、刀もろとも、その円柱に吸い込まれてしまいそうであったし、刀を引けば、たちまち、襲いかかって来そうであった。

一瞬、

——勝つぞっ！

心中に、嘯いた狂四郎は、猛気を漲らせるかわりに、五体を真空内に溶いた。そして、刀身を沈めて、切先を地に摺らせた。

と——。

狂四郎の双手は、無想正宗を、閃々と陽光に煌めかせて、宙を截り廻しはじめた。

回転速度を、急激に迅めて行き、ついに、白光の円輪を描くにいたった刹那、

「ええいっ！」

満身からの気合を、空間に劈いて、きえーっ、と一閃、見えざる敵を、真二つに、断ち割った。

……なんの手ごたえもなかった。

幻は、幻でしかなかった。

あかあかと色を増して来た斜陽の中に狂四郎は憑きものが落ちたように、茫乎として、ひとり彳んで、ひとつ大きく肩で呼吸した。

四

それから、いくばくかの後、狂四郎は、両手を懐中に置いた元の姿で、萱門をくぐって、屋敷内にふみ入った。

みごとな庭といえた。

伽藍石を飛石に交えた書院式の露地であった。根幹の蟠屈する黒松や、婉麗な五葉松が、景観の中心を為していた。

飛石に、跫音をたてて、ゆっくりと、歩いて行き乍ら、母屋の雨戸が悉く閉められているのを見た。

その母屋の軒内に、雨落溝に沿うて、数十をかぞえる盆栽が並べてあるのが、目立った。近づいて、狂四郎は、それらひとつひとつが、吟味された素晴らしい逸品であるのを、みとめた。しかも、ひとつとして、同じ形のものはなかった。

石付きの蝦夷松、根連り五幹の五葉松、斜幹の錦松、直幹の真柏、筏吹きの赤松、懸崖の姫小松……等々。

ひねこびれた矮樹(わいじゅ)を、よくも蒐(あつ)めた、と云えばそれまでだが、尺に足らぬ盆上に、亭々(ていてい)として雲を衝(つ)く喬樹(きょうじゅ)を連想させ、あるいは、水声潺湲(せんかん)たる渓谷を渉(わた)る詩趣をおぼえさせる努力は、これは大したものとほめられねばなるまい。

狂四郎の視線は、そのうちの、一枚の岩板に小高く土盛りして、いちめんに小笹(こざさ)と蘚草(せんそう)で掩(おお)うた蕭条(しょうじょう)たる荒野の一隅(いちぐう)の景趣を現わした一盆に、吸い寄せられた。

じっと瞶(みつ)めていると、これは、往古の戦場の跡に、誰人(たれびと)が供養したか、一堆(いったい)の塚(つか)が築かれて、それが、いつとなく見すてられて、侘(わび)しく、蕭殺たる秋風に吹きさらされるままになっている、と叙(の)べていた――。

――ふむ！

狂四郎の眸子(ひとみ)が、鋭く光った時、数間さきの袖垣(そでがき)のところから、

「なんの御用か！」

と、咎(とが)める声が、かかった。

ここで、――はじめて、狂四郎と老人は、正視し合うこととなった。

「ただ、なんとなく、迷い込んだ者と思って頂こう」

狂四郎は、平然として、こたえてからまた、その盆栽へ、視線をもどした。

「これに、なんと、名づけられた？」

その問いに対して、老人の双眸(そうぼう)は、きらと底光った。

「風蕭々、と名づけて居り申す」

「どこで、手に入れられた？」

「天の恵みでござった」

こたえによどみがなかった。狂四郎は、しかし、冷やかに薄ら笑った。

「これは、あやかし、と見た。いかがだ？」

鋭利な刃物で切るに似た語気をあびせられて、老人は、咄嗟に、ぐっとつまったが、すぐに、破顔した。

「慧眼、おそれ入り申した」

自ら、その盆栽に近寄るや、小笹を鷲摑みにして、ぐっと引き抜いた。

塚と見せて――その中に匿されていたのは、一個の髑髏だった。

「ご浪士。てまえを尾けられたのは、何人の依頼によるのか、うかがおう」

「べつに、誰に頼まれたわけでもない」

狂四郎は、冴えた眼眸を、老人の貌へ据えて、

「お手前は、何歳におなりだ！」

「…………」

「三十前と察するが、どうであろうか？」

「ご明察――」

老人は、頭を下げた。

老人は、都築嘉十郎と云った。先祖は享保年間に、手落があって改易となったが、それまでは、闕所物奉行を勤めて、ここにかまえた屋敷も宏壮なものであった。闕所物奉行は、大目付直属で、財物官没の事を司り、その権限は、幕臣ならびに江戸市中に住む武家の事案に限られている。すなわち、罪があって、その財産が没収される時、この奉行が、一切をとりしきるわけで、その性質上、かずかずの余得がある。

闕所物奉行は、古来留守居の管轄であったが、元禄二年に、大目付支配となって、役高は百俵五人扶持であった。禄としては、かなりひくかった。

しかも猶、都築家が裕福を誇ったのは、その余得の故であった。

浪居となり乍ら、嘉十郎の代になっても、くらしに困ることはなかった。高価な骨董品が、まだ充分に蓄えられてこれを売り食いしても、嘉十郎一代は、悠々と自適することはできた。

三年前の某日、嘉十郎は、その骨董品を、売りはらってもよいのと、残しておくのと、えりわけているうちに、一枚の古絵図を発見したのであった。それは、とりはらわれた屋敷の見取図であったが、南隅に、鑿抜井戸が描かれて、「地下二間、黄金八百枚」と記されてあった。

嘉十郎は、半信半疑のままに弟の兵馬にこれを示して一度調べてみようと相談して、早速に、この屋敷跡へやって来た。

しかし、そこには、井筒も残されて居らず、兄弟は、さんざ捜しまわった挙句疲れはてて、叢中に倒れた。この時、嘉十郎は、枕にした土が、ごろっところがったのにおどろいて、あ

わてて起き上り、それが、髑髏であることを発見した。
その髑髏の口の中に、きらっと光るものがあり、つまみ出してみると、一枚の金の延板であった。
「ここだ！　ここに井戸がある！」
その一枚の金の延板が、遠い戦国時代のものであると判るや、嘉十郎は、髑髏が大将首にまぎれもないと、さとった。ここは、古戦場だったのである。
討死した味方の大将の首を、埋めるとともに、軍用金をも、隠匿しておいたに相違ない。
嘉十郎と兵馬は、無我夢中になって、鍬をふるって、一面に掘りかえした。
古井戸は、発見された。
嘉十郎が、からだに綱をゆわえつけて、その底へ降りた。はたして金櫃は、そこに在った。
狂喜して、それを綱でくくって、兵馬に曳き上げさせておき、さて、自分のからだを曳きあげる綱のたぐりおろされるのを待っていると、突如として、大石が落下して来た。これに微傷だに負わなかったのは、奇跡であった。金櫃が置かれてあった場所は、数尺横へ掘り刳られてあり、そこへ、嘉十郎は、何気なく身を寄せていたために、助かったのである。
自己擁護の本能が、嘉十郎に、沈黙を守らせたため、してやったと信じた兵馬は、念のために、あと一個の大石を落しただけで、去った。
嘉十郎が古井戸の底にとじこめられていたのは、三昼夜であった。地上へ遁れ出ることが出来たのは、偶然であった。夜半、嵐が来て、井戸端に捨てられてあった綱を、嘉十郎の頭

上へ吹き落してくれたのである。綱の端は、松の幹にくくりつけてあったので、これをつたって、よじのぼり得た。

恐怖と絶望の三昼夜が、おのれの頭髪を雪の白さに変え、貌を古稀の老齢のものにしているとは気づかず、裏切った弟に対する復讐心を燃えたたせ乍ら、生ける幽鬼の蹌踉たる足どりで歩き出した時――。嘉十郎は、彼方の地上に、金櫃をかかえて俯伏した兵馬の屍骸を見出したのであった。

黄昏の薄靄の生まれた野路を、狂四郎は、江戸の市中へ、ひきかえしていた。

名状しがたい、湿った感慨が、胸中にたゆとうていた。

……都築嘉十郎は、金櫃を弟の屍骸もろとも、そこへ、埋めたのである。嘉十郎は、賢明にも、弟が、金櫃から洩れ出る毒気にあたって仆れたとさとったのであった。軍用金を秘めた櫃に、猛毒をもとじこめておくのは、戦略のひとつであった。狂四郎に剣を抜かせた大気の怪物は、そこに埋められた金櫃から地上へ舞い出た毒気が生んだものであったろうか。

――そうか。あの白髪と枯渇の貌は、地下へとじこめられた恐怖と絶望によって、一変したのではなく、井戸底にのこっていた惨毒のためだったのか。

狂四郎は、みすみす莫大な黄金を眼前にし乍ら、それを得られずに、無慚な老爺と化した男をあわれみつつ、その正体をつきとめたおのれの徒労をも、自嘲していた。

花の人語鳥

一

異形（いぎょう）――まさに、それであった。
念仏信徒が、棺に納まる時の、白麻にいちめん南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）の六字の名号を記した経帷子（きょうかたびら）を着流して、悠々（ゆうゆう）と、白昼の往還を闊歩（かっぽ）して行くのであった。
藁（わら）でむすんだ総髪、朱鞘（しゅざや）の大小など、すべて装いは、そのむかし、加賀爪甲斐（かがづめかい）や水野十郎左衛門などの巨魁（きょかい）をいだいて市井（しせい）を横行した六法（ろっぽう）組・白柄（しらつか）組・大小神祇（じんぎ）組と称した旗本奴（はたもとやっこ）の再来を思わせた。
六尺越える偉丈夫で、相貌（そうぼう）も、それにふさわしく、双眸（そうぼう）に鋭利な刃物の反射光に似た煌（きらめ）きがあり、鼻梁（びりょう）秀（ひい）でて、唇（くちびる）は厚く大きく、額や口脇（くちわき）に刻まれた皺（しわ）の深さも、精悍（せいかん）な気宇をしめす特徴のひとつにかぞえられる。
大股（おおまた）に、ぱっぱっと蹴（け）る裾（すそ）から、燃えるような緋縮緬（ひぢりめん）の長襦袢（ながじゅばん）がのぞくのも、異様な観（み）ものであった、
しかも――。

その左肩には、一羽の漆黒の鳥をとまらせているのであった。鴉と見えるが、鴉にしては、すこし尾が短いようであった。

風もなく、しっとりとした花曇りの午後のこととて、往還は、人出で賑っていたが、この男の前後は、澪筋のように、人波がひろがって、その姿が、愈々、群衆の中で際立つことになる。

「なんでえ、おい、ありゃあ――?」

「浪人ぐらしが五代つづいての、さればさ、もうこうなっては、愚衆をおどろかすに如かず――群犬恠しむところに吠ゆ、って楚辞にあるて。商売往来に無い商売をねらったところ、当節、物好きが買ってくれるかも知れねえ」

「朝乞食に夕坊主というが、昼死人に出逢ったら、縁起がいいのか、わるいのか?」

「左様さな、お前さんの宗旨が法華ならこれはいかんな。法華と念仏、犬と猿――。どうだ、あの浪人者の眼光は、蛇の目を灰汁で洗ったたってえやつだ。炯々らんらん、ひと睨みされたら、蛙にかえらず、動くに動けず、可哀そうだが、今夜は病いの牀に臥す」

「てやんでえ。爺いめ、いい加減のことほざきやがって――」

「はははは、慌てる蟹は穴へ匍い込めぬ。用心はさっしゃれ」

「そういうてめえは、鼻のさきあたりから冷たくなって来やがったぜ」

「春秋高く鼻高く、七十年も風雨にさらして居ると、こういう具合に、世の中を鼻であしらうようになる。元来、年寄の鼻と猫の鼻と女郎の心は、冷たいものでな」

「へへ、小唄にあらあ、
　目で知らせ、あごで受けたる
　昨日と、かわり
　鼻であしらう、今日の仕儀
　憎や
　女郎は、金次第
　てなもんだ。こん畜生っ！」
周囲のざわめきなど、浪人者は、歯牙にも挂けずに、新大橋の橋板をふみ鳴らして、渡りかかった。
その折、むこう側から、遠駆けた帰途らしい騎馬の一隊が、馬脚をしずめて、ゆっくりとむかって来た。
先頭に立った、見るからにおっとりした面立ちの武士のつけている紋を仰いで、
「芸州侯だ」
と、人々は、ささやきあい乍ら、異形の浪人者との、間隔がせばまるのを、興味をもって、見くらべた。
浪人者は、橋のまん中を、悠々として進んで行き、騎馬隊の存在など、まったく目に入らぬ態度だった。
供の一人が、馬をあおって、主君の前へ乗り出して来て、浪人者を睨みつけた。

　浪人者は、平然として、その馬前に立った。
「控えられい」
　叱咤の語気で、咎める藩士を仰いで、浪人者は、無言だった。
「お主っ！　松平安芸守と知って、なんの反抗だ！」
　この瞬間であった。
　浪人者の肩にとまっていた鳥が、高らかに、
「阿呆っ！」
　と、叫んだのは。
「な、なにっ！」
　藩士は、さっと顔色を一変させた。
　浪人者は、大きく口を開けて、高笑いした。
「拙者が、申したのではござらぬ。鳥めの不調法――」
「故意に云わせたのであろう！　許しがたい」
　馬上に威丈高になった藩士から、うしろの安芸守へ、視線を移した浪人者は、
「浅野家におかせられては、代々、夫人の方が馬上の達者とききおよび申したが、御当代は、どうやら、そのおくれをとるまいとして、馬責めの御修業とは、殊勝のいたりとお見受けつかまつる」
　と、云いはなった。

「無礼者っ！」

藩士が鞭をふり下ろした。

躱すとも見せぬわずかな身ごなしで、それを空に流しておいて、

「そのお心掛けならば、夫人は、切腹なさるまい。お目出度い儀でござる」

と、さらに嘲罵をあびせた。

二

大名の奥方が、白い腹をあらわにして、真一文字に切る――この異常の例が浅野家にはあったのである。

加賀藩士の記録した「続・漸得雑記」に次の一文がみえる。

> 松平安芸守の御内室は、加賀宰相綱紀卿の御息女也。生得武勇の心ある女性にて、乗物打物に達し、殊に長刀鍛錬のきこえあり。召仕わるる女まで皆々勇気たくましく、殊に一騎当千の女ともいうべし。

切腹したのは、この女性であった。

良人は、芸州藩主七世の主――当時、諸侯中七賢人といわれた松平吉長であった。

時世は享保――。元禄を過ぎて、この頃になると泰平に狎れて、武士道の吟味なども置きすてられ、武家気質など少々滑稽なものに見えて来ていた。

尾張中納言宗春でさえが、吉原通いにうつつをぬかし、不行跡のかどで蟄居隠棲を命じら

れたくらいであって、大名の遊蕩は、盛んであった。

賢者と称された松平吉長も、四十半ばに達して、吉原の味をおぼえたのであった。下世話に謂う、七つ下りの雨と四十過ぎての色好みは止みそうで止まなかった。出入りの能役者、金剛座の脇師高安彦太郎を廓遊びの指南役にして、ついに、三浦屋四郎右衛門抱えの太夫、花紫、及び格子、歌野を落籍させて屋敷へ引取ったばかりか、芝神明前の陰間を二人までも請出してしまった。この時、老臣、重役以下一人として諫言する者はなかった、という。

のみならず、これらの遊女・陰間を、帰国の際に、供に召しつれるときめたので、夫人はついに、決意をして、対面すると、

「御政道の儀範たる御身が、遊興のあまり、遊び者を御屋敷へお引入れ遊ばすことさえ、あるまじき次第なるに、永々の御道中を国許までお召しつれになるなどとは、世間の耳目といい、殊に公儀へのきこえも如何なれば、何卒これればかりはお取止め遊ばしますよう――」

と、切なる進言をした。

しかし、吉長は、一語も口にせず、この諫止をしりぞけてしまった。

帰国出立の際には、夫人に対する暇乞いがあるべきなのに、このたびは、その沙汰もなく、行列は発足した。

夫人は、物見の窓から、そっと、遊女・陰間たちが美々しい行装で、さんざめかして出発するさまを見送ってから、うしろにひかえた局の一人へ、さみしく微笑をなげて、

「わたしは、妬婦であろうか」

と、もらした、という。
その夜――闌けるまで、居間に燈火をともして、夫人は、弟である加賀中将吉治へ、こまごまと遺書をしたためたのち、ものの見事に、腹一文字に掻切って、俯っ伏したのであった。伽の女中がこれを発見して、大騒動になった。局の外山、沢井、中﨟の豊田らが、夫人を抱きかかえて、医師に気付を、と連呼した。すると、夫人は、苦痛を怺えて、
「そち達は、日頃ほどもないうろたえをして、見ぐるしい、切腹するほどの者が、どうして生きるように刃をつかうものぞ。騒ぐにおよばぬ。豊田、はや、介錯をなされい」
と、望んだ。
吉長は、藤沢宿で、この悲報をきいた。しかし、法規として、夫人逝去のために、江戸へ引返すことは、ゆるされなかった。吉長は、遊女・陰間を、その場から、放って、夫人の霊に詫びた。
この惨事は、浅野家にとって、口にすべからざるタブーとなっていた。
それを、あろうことか、人出で賑う新大橋上で、高言されて、藩主以下、面々は、形相を一変させた。
「おのれっ！」
「不埒者っ！」
「遁すなっ！」
口々に叫んで、一斉に、馬からとび下りた。

群衆は、わっとどよめいて橋袂へしりぞいた。
刹那――。
浪人者の五体が、ひらりと翻転するや、かるがると、欄干上に躍り上がっていた。
藩士たちは、白刃を抜きつれて、それへ殺到した。
にやり――北叟笑みと受けとれる不敵な破顔を、そこにのこした浪人者が、次の瞬間にとったはなれ業は、天狗の翔けるに似た。
一間余を飛んで、安芸守がうちまたがった馬上へ、移っていたのである。
「しゃっ！」
「く、くそっ！」
仰天し、血相変えた藩士たちは、しかし、それにむかって、刃を送ることは叶わなかった。
「阿呆っ！」
浪人者の肩で、黒い鳥が、ふたたび、その罵言を吐いたのも、時宜を得て、まことに皮肉であった。
さっと、馬首をめぐらした浪人者は、
「ごめん！」
橋板を馬蹄で高鳴らせて、猛然と疾駆した。
無人の道を行くがごとき迅さに、群衆は、きちがいのように、わが身をどけた。
橋を渡りきると、左へ折れた。

ものの二町も行った地点で、四十二万石の太守は、襤褸のように、地べたへ抛り出された。そのまま、異形の浪士を乗せた駿足は、みるみる、彼方へ小さくなってしまった。

三

——骸骨の上を粧うて、花見かな。
八分ばかりに咲いた桜の花の下に仰臥して、眠狂四郎が、ふと、胸のうちで、呟いたのは、鬼貫の一句だった。
一樹だけ、遠く、ぽつんと離れて、咲いていた。
彼方の、隅田堤には、街道をはさんで、らんまんと、花の列がつらなっているのであった。
寺島村と須田村との境の地点、ここは、どうやら、古い寺院の跡なのであった。以前に、火事で焼けて、山門だけをのこして、空地となっていた。
ほかの樹は枯れたのに、この桜だけが境内にのこって、毎年咲きほこるのも、ふしぎと云えばいえた。
しだれ気味に、枝が、ひくく垂れて、天女の羽衣のように、狂四郎の痩軀を包むかたちになっていた。
——きれいだ。
と見惚れるよりも、春光に透かされた花びらの美しさを、儚いものに眺める——いうところの、花の下の半日の客、月の前の一夜の友の風雅の無心には、遠かった。

狂四郎は、昨日、少量の血を喀いていた。

午後になると微熱がつづくのは、江戸へ帰って来る前からのことだったが、この数日は、かなり高い熱を出すようになっていた。いまも、四肢のけだるさは、そのせいであった。

それでいて、午後を待って、この熱に、からだを浸すことに、安息にも似た気持を生んでいるのは、いかにも、この無頼の男らしかった。

熱が来るとともに、四六時中冴えている神経がにぶって、いっさいが物倦く、痴呆のように、どこにでも横たわって、茫乎としていられるからであった。

そうした状態の身にとって、この花の下は、まことに恰好といえた。

周囲は、畑がひろがり、菜の花が咲きみだれていた。高い空でさえずるひばりの声が、絶え間ないのに対蹠して、どこかで、間遠く、牛が啼くのが、いかにも、のどかなのであった。

――このまま、ここで、しずかに、息がひきとれるものなら……。

人の目にふれぬうちに、骸骨と化し、この樹のこやしになるのを想像してみる。

――おれがこやしになったら、あるいは、花は、血の色になるかも知れぬ。

そんなばかげた空想が、かえって、狂四郎の心を憩わせている。

孤独を、侘しいものにおぼえる素直さを、とりもどしているのであった。

……いつとなく、ねむったようであった。

街道の馬蹄のひびきが近づいて来て、ごく近くで停ったが、狂四郎は動かず、目蓋をふさいでいた。

跫音が、寄って来た。
「おぬし――木母寺に身を寄せて居る眠狂四郎という御仁と見た」
底力のある声で呼びかけられて、薄目をひらいた狂四郎は、その異形に、微かに眉宇をひそめた。
肩に黒い鳥をとまらせて、明るく莞爾として、
「拙者は、肥後浪人、遠藤竜三郎」
と、名のった。
狂四郎は、花の陰から、烟ったような淡い曇り空を見やって、
「なんの御用か？」
と、問うた。
生気をすてた、その寝姿を、遠藤竜三郎は、しかし、非礼なものには眺めなかった。生気をすてて居り乍ら、その寝姿には、みじんの隙もなかったからである。
「貴公は、円月殺法なる不思議の流儀を使うとききおよんだ。拙者、雲弘流を学んで、聊か、腕に自負を備える。……円月殺法を拝見つかまつりたい」
翳のない、りんりんとひびく声音であった。
「雲弘流！」
狂四郎は、呟いてみてから、やおら、身を起した。
「天真正伝神道流から流れた一流――きいたおぼえがあるだけだが……」

「いかにも左様。もはや、当代には、知られて居らぬ太刀筋でござるわ」
遠藤は、つと、黒い鳥を、肩からてのひらへ移すと、さらに、桜の枝へ、とまらせておいて、
「いざ——お立合いねがいたい」
と、促した。
雲弘流とは——、
奥州伊達家の士に樋口七郎右衛門不堪という剣客がいて、天真正伝神道流を学んで、のち一派を樹立して、弘流ととなえた。
弘流の教えは、
「参気伝、静和伝、活眼伝、活剣伝、未発伝——我消本然心」
と説き、物の中和を得るを本領とした。
同藩中に、氏家八十郎という人物がいて、七郎右衛門からこれを授けられて、後年、江戸へ出て、無住心剣の小田切一雲に逢い、その非凡に敬服して、門に入って、研鑽の結果印可を得た。巨雲と号し、流儀も、弘流を経とし、無住心剣を緯として、雲弘流を開いた。規範とするところ、組方は表六本、裏十二本。非太刀を容れることが能くなった頃に、はじめて、鉄面をかけて小蒲団で頭をつつみ、短刀の入身を習う。ついで、相寸の試合を練習し、相討合体を主として、死地に臨む稽古にはげむ。初伝を随順抄といい、後伝を中位三教録、それより奥に入って、三先の伝と称し、敷の位にいたる。いわば、これは、必殺相討ちの剣法で

あった。

巨雲には、直右衛門景雲という息子がいたが、生来病弱で、二十歳すぎてからようやく稽古をはじめた。ために、巨雲は、秘伝を授けるに能わずとして、その甥の鈴木弥次郎定長という天稟の士に与えた。これが、直右衛門を奮起させた。父はまもなく逝ったので、弥次郎を対手として、その伝脈を悉く継ぐことに一心不乱となり、ついに、抜群の技をつかんだ。

細川家に仕えて、肥後熊本に時習館ができるや、剣道師範となったが、秘伝を授けるに足るべき門弟が一人もいないのに失望して致仕して、剃髪して、隠棲してしまった。影法師と号し、爾来一語も剣道のことは口にしなかった。妻があったが、離別して、子もなく、熊谷蓮生坊を追慕して、念仏三昧で、晩年を送った。

名人が、辿りつく境地であった。

実は、この遠藤竜三郎は、景雲が、死を数年の後に迎える頃に発見した稀世の麒麟児だったのである。

四

狂四郎は、無表情で、かんまんな動作で立ち上がった。

「わたしには、剣をふるって妄心を払い、極意開眼などという料簡が、毛頭ない。立合って、のちに残るのは、むなしさばかりと申上げなければならぬ。無明から生まれて、無明に去る男と思って頂きたい。それをご承知の上で、たって、と申されるなら……」

沈んだ、ひくい声音で、そうことわった。

竜三郎は、ははは、と明るく、しかも闘志のある笑い声をたてた。

「兵法竜之巻に、あるではござらぬか。剣徳を鑑みるに、陰陽両気は、勝負なり、陰勝てば、則ち陽退き、陽勝てば、則ち陰退く、陰陽は元是れ一気なり、と。貴公は陰、それがしは陽——まさに闘うべき宿運と心得て、参上した次第。およそ、剣の道は、陰陽合して、一気石火と化する時こそ、真我のよろこびとなる。……来れば則ち迎え、去れば則ち送り、対すれば則ち和す、虚実を察し、陰伏を識り、大は方処を絶ち、細は微塵に入る、殺活機に在り、変化時に応ず——貴公の、その姿には、将に、その微妙の気配が潜む。斯道にこころざす者として、戦いを挑まざるべけんや」

昂然として嘯く対手に、狂四郎は、好意をおぼえて、微笑をさそわれた。

「では——」

「いざ！」

距離は、九尺あった。

竜三郎は、すばやく、刀の柄へ手をかけたが、狂四郎は、ダラリと両手を垂らしたままだった。桜樹は、狂四郎の後楯となった。

黒い人語鳥は、たちまち漲りわたった殺気には全く無頓着な目つきで、きょときょとと、わが身を包む花を見まわしていた。

竜三郎の瞠いた双眼は、炬となって燃え、狂四郎の切長な眸子は、冷たく一文字に冴えて

深い。
この眼色をくらべただけで、おのずから、両者の剣の奥義の認識が異質であることが明らかであった。
「おっ！」
六尺の巨軀からほとばしらせる一声は、凄じいものだった。鞘走った白刃は、火玉が舞うに似た輝きを発して、上段に構えられた。その上段は、しかし、ただの法形とはちがっていた。
両腕を、しぼるようにすぼめて、左のこぶしを額にあて、刀身を頭上へ直立させる珍しい構えであった。自ら、その視界をせばめ、そして、敵に隙を与えるとすれば、両腕の外側の線だけであった。
いつ頃からともなく、「胎内刀」ということばが、つたわっている。
狂四郎も、いまだ、一度も、それを見たことはなかったが、
――あるいは、これが？
と、考えられた。
下段にとった敵に対する上段の構えとして、一太刀必殺の凄じい迅業を「胎内刀」と、となえるという。
すでに、狂四郎は、無想正宗を、地摺りに落して、水のごとく静かな陰の姿勢になっていたが、対手の構えが、まさしく、円月殺法を抑えるものであるのを、みとめざるを得なかっ

た。

緩やかに宙を截ってまわす円月の移行は、対手の狭い眼界から、はみ出さざるを得ぬ。はみ出した刹那、竜三郎が、猛然と打ち込んで来れば、これを、右旋あるいは左転して、撥ねかえすことは、さして難事ではない。

おそるべきは、その白刃は、上段から唸りをたてて斬りつけて来るのではなくさか落しに、こちらの腹部を突き刺して来る迅業を孕んでいると、みえた。すなわち、その胎内の猛気を、こちらの胎内に突き込んで来る一撃に相違なかった。胎内刀は、未発の位といわれている。自ら眼界をせばめて、心機を、その一撃のために潜めて、待つのである。

狂四郎は、無想正宗を、地から根生えたように、動かすことは不可能となった。

もし、為すべき技がありとすれば、刀身を、地摺りから、徐々に、中段へ、移すことであったが、これは、狂四郎のとらぬところであった。青眼は、陽刀である。その尖鋒に、鋭気をほとばしらせて、敵を威圧するのである。いまだ曾て、狂四郎は、これをえらんで、敵を斬って居らぬ。常に、敵から、仕掛けさせ、襲わせてこれを斬る——これが、この男の、せめてもの自慰となっていた。

「…………」

「…………」

春日遅々たる中に、二刀は、そのままどれくらいの時を刻んだろう。

竜三郎の、こぶしをあてた額には、漸く汗が滲んだ。狂四郎の顔色は、死人のように蒼く、

翳の濃さを増した。
……と。
突然、狂四郎の頭上で、
「阿呆っ！」
人語鳥が、短く、鋭く、叫んだ。
その刹那が、竜三郎に、満身の猛気を炸裂させた。
「ええいっ！」
全生命を、その一条の白い閃光につらぬかせた。
桜樹がゆれ、花びらが、ひらひらと舞い落ちた。その舞い落ちるさまが、この場合、いかにも、のろく、まのびたものに眺められた。
おどろくべし。竜三郎の剣は、直径八寸あまりの幹を、突き通して、むこうの面へ、三寸ものぞかせていた。
狂四郎は、根かたへ倒れていた。身を倒して、この一撃を躱す以外にすべはなかったのである。
……むだな勝負はおわった。
うつろな眸子に、枝にとまった黒い人語鳥が映っていた。
「阿呆か——」
そう呟いてみて、しずかに目蓋をふさいでいた。

仮象記(かしょうき)

一

むかし、わずか廿歳で逝(い)った、見目(みめ)うるわしい才媛(さいえん)が、十八歳のおりに記した日誌に、次のような一文がある。

いつしかも、田舎だつ家居のおろそけなる高垣(たかがき)もめづらしう、武蔵野は菫(すみれ)の色濃きところなりけり。見はやしつつ行くに、おのがじし、ひと夜寝(い)ぬべしなどとはいへど、ここは、過ぎて、大井てふ駅(うまや)にやどりぬ。

あさけの駒(こま)の鈴の音してゆくは、我も勇むここちせり。むかし公儀(おほやけ)よりたまひたるを、鳴しつらんが、うつりて、さらぬ馬どもの頭に、ちひさくて、かくるにやと、しらぬ事を云ひ定むるもをかし。

空少しあかりたるほど、春の野の朝露に、浅みどりなる梢(こずゑ)どもの、ほのぼのと霞(かす)みわたれるは、たとふべきものなんなき。人目なげなる垣ほの桜の、侘(わ)び顔に、うつろふが、をかしうて、見まもり居りたるを、あるじとおぼしくて、手なふれそ、といふべき気色してあめるを、をこになりて、惜しむとも、立たん嵐(あらし)はいかにせん、散る花毎(ごと)に手をさ

さへまじ、とおぼゆる……。

どういうのであったろう。

足の向くにまかせて、春の武蔵野にさまよい入った眠狂四郎は、草にかくれた杣径をひろい乍ら、なんとなく、むかし読んだこの一文を思い出していた。

名も知らぬその才媛の白い細おもてが、眼裏に泛んでいた。そして、その細おもてに、優しい微笑を湛え乍ら、二年の後にはこの世を去る身をはこんで行ったのが、この径のようであった。

……熱もあったし、酔うてもいた。

母と美保代と静香のねむる丘陵上に、ぶらりとあらわれて、その足を、なんということなく、武蔵野の中へさまよい入らせて来たのであった。

大きな瓢に満たしていた酒を飲み干して、それを路傍へすててから、もう半刻も経つであろうか。

死場所をもとめて、さまよっている——そんな意識も、脳裡のどこかにあった。

両手を懐中に置いて、野を鳴って来る風に吹かれるにまかせた飄々たる足どりで、行くのである。

この男としたことが、珍しく、眸子を濁らせ、痩せてとがった肩のあたりに、堪えがたい孤独の寂寥を濃く滲ませて、三歩あゆんで、よろめき、五歩すすんで、息を切っていた。

空は曇っていて、黄昏のように、地平に近い樹々の梢にだけ、明るい色がのこっているよ

うであった。ふんで行く径の、土も石も草も、しっとりと湿って匂っていた。頭上にさしかわした木枝のあたりに、靄に似た薄白い空気が、ものうげにたゆとうている。

云おうようのないむなしい倦怠と疲労が、狂四郎の全身に、重くこもっていた。

なにもかも——生きていることが、面倒になっていた。

——どうやら、こうして、困憊したからだを、あてもなく、さまよわせることだけが、おのれにのこされた、ただひとつの振舞いのようだ。

雑木の林を抜け出て、湿った匂いから解放された狂四郎は、行手に高くそびえた椎の木を、酔眼に映した。

鉛色の空の下に、静かな、荘厳ともいえるすがたを、どっしりとそそり立てた老樹が、ふしぎな神気を、かよわせて来た。

狂四郎は、一瞬、眸子を光らせたが、すぐ、自嘲の薄ら笑みを口辺に刷くと、かぶりをふって、径をそれた。

鶴寄せらしい堤がつづいていて、そこを越えると、沼があった。

ふいに、沼の岸辺で、水鳥が羽音をたてた。沼藻に似た灰色の水鳥であった。原始の時代からねむったように、そこに、ひっそりと在る沼に、生きものが棲んでいることに、ふと、狂四郎は、郷愁に似た感慨をおぼえつつ、踉々と行きすぎて行った。

二

やがて――。
狂四郎が、入って行ったのは、楢の林の中に建った一軒の家であった。
いかにも奥床しい門構えの屋敷であったが、どことなく荒廃した感じは掩いがたかった。
若芽の萌え立ったこの季節に、雑色の花をきらう風雅な心づかいが、そのたたずまいを、暗いものにみせているのであろうか。
門を入ると、若葉のあいだに陽炎が烟っているようであったが、それは、なぜか、妖気にも似て、草庵の寂寞とは自らちがった凄味を狂四郎に感じさせた。
深い土庇の玄関に入って、
「おたのみ申す」
と、呼んでみたが、おのれの声だけが、うつろにひびいて、屋内は、無人のように気配がなかった。
「おたのみ申す」
狂四郎は、かさねて呼んで、片手をのばすと、障子をひらいた。
意外だったのは、そこの畳に、両手をつかえて、一人の女が、すでに、いたことであった。
狂四郎としたことが、その気配をさとらなかったのである。
「おいでなされませ」

禄をはなれた武家の妻女らしい地味ないでたちの女は、澄んだ声音で挨拶して、作法正しく頭を下げた。

「一夜の宿をお借りいたしたい……。星をいただいて、平気でねむることのできる人間ですが、ふと、御当家を発見して、誘い込まれた次第です。おもてなしは御無用にねがいたい。これはこちらからご辞退申上げる……。御主人が首を横に振られるのでしたら、たっておたのみはいたさぬ」

「しばらく、お待ち下さいませ」

女はしとやかに、立って、奥に入ったが、待たせもせずに、もどって来た。

「杣小屋同然の部屋でございますが、よろしければ、お泊まり下さいませ」

「忝けない」

廻り縁からみちびかれたのは、低い菰蒲天井の茶室であった。

八畳の中央に、炉が切ってあり、火も入っていた。

床の間には、段紙にしたためられた和歌の懐紙が掛けてあった。

　わかれには田の面の雁もわびぬめり

　　心よりにし、みよし野のさと

と、読めた。

これは、狂四郎の記憶にある歌であった。咄嗟には、思い出さず、しばらくしてから、

「あ――」と、よみがえらせた。偶然のことであった。歌は、あの名も知らぬ才媛の作った

一首であった。
懐紙の下には、孟春花が、幽かな風情よろしく、活けてあった。
女は、炉の向かいに坐って、茶をたてた。
みごとな点前ぶりであった。茶道の奥義にかなっているに相違なかった。
指一本の動かしかたに、気品を湛えて、且つみじんの隙もないのを、床柱に凭りかかり乍ら、狂四郎は、見ていた。
奇怪であったのは――。
女が、狂四郎の前に、黒茶碗を置いて、
「粗茶にございます」
と、すすめておいて、つぎに、狂四郎の横の無人の席の前へ、同じ言葉を口にして、赤茶碗を置いたことだった。
いや、さらに、自分のかたわらに親しい何人かがいるごとき所作で、楽焼の茶碗をさし出しておいて、自身も、つつましく、一服喫したのであった。
狂四郎の横には、同判者が居り、自分のかたわらには、この家のあるじが坐っている――そうきめた振舞いであった。
――古い茶道には、こういう振舞いがあるのか？
狂四郎は、思って、べつに糺そうとはしなかった。
茶は、精気を増すような、高い香をもっていた。肥料をやらぬ、野生の茶の若芽こそ、ま

ことの香気をはなつと、いつか狂四郎は、きいたことがあった。これが、それであった。

点前が終っても狂四郎と女のあいだに、一語も交されなかった。それでいて、この静寂は、重苦しいものではなかった。互いに、水のように、穏やかに、つつましく、じっと動かずにいられたのは、あるいは、茶の香気に心が澄んだせいであったかも知れぬ。

ふいに——。

「はい」

と、女が、こたえて、立った。

部屋の外から呼ばれた態度であったが、狂四郎は、その呼び声をきかなかった。それでいて、狂四郎の胸中に、なんの疑惑も湧かなかった。女が呼ばれたから、立って行くのだ、と見送ったばかりである。

三

女が、褥の用意ができたことを告げたのは、それからほどなくであった。

睡魔は、おそって来ていた。

見事な手蹟の反古紙を腰張りにした次の間の四畳に入った狂四郎は、そこに敷かれた床に、枕が二つ据えられてあるのを見出して、眉宇をひそめた。

一個は黒塗り、もう一個は朱塗りであった。

「わたしひとり、やすませて頂くに、ふたつ枕は、無用のことと存ずるが……」

——それとも、この女が、夜伽でもしてくれるというのか？
女は、狂四郎の凝視に、ほのかな微笑をむくいた。
「夫婦のちぎりに、この黒と朱の枕をおもちいになりますれば、幸多い未来のことが、夢に占われましょう」
そう云った。
これは、しかし、狂四郎の不審に対する返答ではなかった。
狂四郎は、口をひらきかけたが、思いかえすと、乱れ函に置かれた寝衣へは、目もくれず、枕元へ、大小をならべると、黒の着流しのまま、黒塗りの枕の方へ頭をのせた。
濃霧のように、睡りが、五体をおしつつんだ。
……いくばくの時刻が移ったろう。
狂四郎は、ふと、かたわらに、女の仄かな匂いがあるのに気づいて、目蓋をひらいた。
——美保代！
朱塗りの枕に、おもたげに、髷をのせて、じっと、自分を瞶めている白蠟のように冷たく沈んだ貌は、まさしく亡き妻のものにまぎれもなかった。
その眼眸の色は、自分を瞶めていながら、自分の方を瞶めているのではなかった。冴え冴えとひらいた黒い眸子は、一種神秘な光を湛えて、これは、こちらの視線を透して、はるかな遠いところを見ていた。
狂四郎は、ためらいつつ、その繊腰を引き寄せようとして、はっとなった。からだは氷の

ように冷えていた。

——おれのために、水垢離をとったのか？

この疑いを、声にして問おうとすると、美保代は、色褪せたくちびるを、わななかせた。

突然——。

言葉のかわりに、その口を衝いて出たのは、いのちのかぎりの思慕を、一時にほとばしらせる慟哭であった。

美保代は、その凍ったからだを、狂四郎に、しがみつかせると、

「……いやです！　お死にになっては、いやです！　……美保代は、貴方より、さきに、死にとうございます！　……いやです！　いやです！　たったひとりに、のこされるのなど、いや！　いや！　……」

慟哭しつつ、いっさいのつつしみをかなぐりすてて、身もだえて、かきくどいた。

——おろかなやつ！

狂四郎は、冷えきった、しなやかな肢体を抱きしめ乍ら、いとおしく、呟いていた。

それなりに、そうして抱きあったまま、どれくらい動かなかったろう。

美保代のからだが、徐々にあたたかみをとりもどして来るのが、感じられていた。

と——。

美保代が、ほんのすこし、身じろぎして、かすかな声で、

「手が……」

と、云った。

「手？」

狂四郎は、胸をずらせた。しかし、美保代は、吸いついたように、顔を、そこにうずめて擡(もた)げようとしなかった。

「手がどうした？」

「……う、うごきませぬ」

「うごかぬ？」

いそいで、その白い細い、春葱(しゅんそう)に似た十指を握ってみると、石のように硬直していた。折りまげることも、のばすことも、不可能であった。美保代は、わが胸をおさえたままで、強く抱き締められ、しびれたのを、それなりに怺(こら)えていたので、両手から全く血をうしなったのである。

狂四郎は、十指に、熟練した圧力をくわえはじめた。しかし、それは、頑固(がんこ)に柔軟さをとりもどさなかった。

必死にもみほぐしているうちに、自分の顔へあてられた視線を感じ……それが、美保代のものでないという直感が来るや、狂四郎は、総身に戦慄(せんりつ)が走るのをおぼえた。

あいては、いつの間にか、静香にすりかわっていた。

左様、四年前の初夏、嵐に追われてにげ込んだ杣(そま)小屋で、狂四郎は、静香を抱き、十指の感覚が喪失してしまうまで、生まれてはじめて抱擁される衝撃に堪えた処女のいじらしさに、

深い感動をおぼえたものだった。

狂四郎は、茫然として、美保代からすりかわった静香の貌を、見戍った。

と——みるみるうちに、その貌は、あきらかに死相を呈して来た。

とじたまぶたの陰から、ぷっくりと涙が湧き出て来て、睫毛の上へ盛りあがった。

狂四郎は、思わず、刻々と生命を薄れさせて行く儚い、若い、肢体を、ひき寄せた。

静香の最後の努力が、両手を、狂四郎の頸にすがらせた。

「あ、あなたの……母さまの……おそばへ、……あなたの、お手で……わたくしを……埋めて……くださいませ……。わたくしの屍を、母さまのお墓へ、おつれ下さいませ」

かぼそいが、澄んで、はっきりした声音は——おお、いつの間にか、美保代のものであった。

狂四郎は、もはや、あいてが、静香でも美保代でも、どちらでもかまわなかった。

「わたしが、背負って行ってやろう」

「……うれしゅうございます」

狂四郎は、魂の消えゆくからだを背負うべく、身を起しかけた。

この時であった。

闇の中に、冷やかな笑い声がひびいたのは——。

四

愕然としたことであった。

円相床を背にして、うっそりと端坐して、腕を組んでいるのは、まぎれもなく、眠狂四郎自身だったのである。

「おれが、斬れるか、狂四郎？」

影の狂四郎が、問うた。

「そちらが斬って来れば、斬ってみせよう」

狂四郎は、こたえた。

「ふん……。どうやら、貴様は、このひとつ家を、化生妖怪の宿と見た。化生妖怪など斬る刀は持たぬ、と心中で呟いて居る」

この言葉は、まさしく、云いあてた。

影は、皮肉な口調でつづけた。

「貴様が、化生妖怪の宿と思うたことは、とりもなおさず、貴様の心中に、化生妖怪がすくうて居るのを意味する」

影は、やおら、立ち上がった。

「心中に化生妖怪がすくうならば、必ず目に見えて来るものだ……。貴様の力では、これは、斬れまい」

影は、一歩、すっと出た。

「抜くか、狂四郎！」

その声のおわらぬうちに、狂四郎は、枕元の無想正宗を掴みとりざま、目にもとまらぬ迅業で、鞘走らせた。

一閃は、むなしく、闇を裂いただけであった。

影は、一間の距離に退いていた。

「ふふふふ、愠ったな。……この世に、もう一人の眠狂四郎がいることは、これは、気に食わぬが道理。貴様は、おれを、狂四郎ではないと思っている。仮象の姿と見た。隠れた本体をあばこうとしている。どうだ？」

慥に、それも云いあてた。

化生妖怪が、自分の姿を借りた、と見たこちらの心中を読みとることが、化生妖怪の証左ではないか。

狂四郎は、しずかに、立った。

「斬る！」

「みごと、斬れるか？」

「斬る！」

すすっと滑り出て、ぴたっと、青眼にとった。

影は、無手で、攻撃を待った。

狂四郎の眸子（ひとみ）に、その影が、背後から微光をあてられたように、闇の中に、鮮やかに、浮きあがった。
「ええいっ！」
機根の神気を発して、上段から、きえーっ、と斬りおろした。
影は、まっ二つになった。
次の瞬間――。
狂四郎は、褥の上へ、飛び退って、無想正宗を、地摺（じず）りに構えていた。
まっ二つになった影は、さらに、四つになり、八つになり、……見よ、十六人のおのが姿が、そこに、ずらりと並び立ったのである。
狂四郎は、目蓋をとじた。
そして、完全なる暗黒の世界で、気魂を鎮（しず）め、おのが身を虚空（こくう）に溶いて、無に還（かえ）すや、しずかに、切先（きっさき）を、まわしはじめた。
……無想正宗は、闇中に、美しき円月を描き終った。
しとやかな呼び声が、かかったのは、この時であった。
「お客様――」
いつの間にか、この家の女主人が入って来て、枕元に坐っていた。
「悪い夢をごらんなさいましたご様子……よかれと思うて、夫婦（めおと）枕をさしあげたのが、仇（あだ）と相成りましたのでございましたなら、お詫（わ）び申上げなければなりませぬ」

名状しがたい深い重い疲労があって、狂四郎は、目をあけることも、口をきくことも、もの倦かった。

「お詫びのしるしに、わたくしを、夜伽させて下さいませ」

そう云われて、はじめて、薄目をひらいた狂四郎は、

「この家には、そなた一人でお住まいか？」

と、訊ねた。

「はい」

女は、おもてを伏せて、懺悔するように語りはじめた。

「貴方様をお見うけいたしました時、このおひとこそ、と思いきめたのは、わたくし自身にも、よくわからないことでございます。仮の世の、仮の宿で、ゆくりなくも、むすばれる宿縁であろうか、と予感がいたしました次第でございます。……わたくしにも、二年前までは、主人が居りました。貴方様にも、奥様がおありだったに相違ないと存じました。それで、わたくしは、心をしずめるために、貴方様の奥様も、主人も一緒につどうたつもりで、作法をいたしたのでございます。御不審の儀、おわかり下さいませ。ただ、点前をいたし乍ら、わたくし自身の心は、もう運命の支配を受けて居りました。……おねがいでございます。おなさけをおかけ下さいませ」

女は、婀娜ともみえる、ほんのりと薄化粧を刷いた細い気品のあるおもてに、微笑を泛べると、褄を鳴らして、くるりとうしろ向きになった。

黒繻子の帯を解き、地味な鼠色の、細く小さな碁盤格子の小袖を、するりと肩から落すや、意外にも、その下は、燃えたつような鹿の子の下着であった。それを惜しげもなく脱ぎすてて、蟬の羽のような薄い、水色の肌襦袢いちまいになると、やおら、向きかえった。

爛熟した堅肥りの白い肢体が、夕陽の光に透かして水底に人魚の肌を見るように、その青い綾羅のかげに、仄かに、妖しい曲線を描いた。

「おゆるし下さいませ」

逡巡いもなく、掛具をあげて、狂四郎の横にすべり入ろうとする瞬間、裾の捌きを狂わせたとみせて、纏うた鱗を剝ぎ落すように、豊かな内腿をあらわにして、狂四郎の視野いっぱいに拡げた。

するすると、褥のなかへ、身をかくすと、

「……あさましいと、さげすまれますな」

と、ささやきつつ、ひたと、顔を胸におしつけて来た。

柔軟な、熱い肌身が、しっとりと、重く、絡んで来るのを、狂四郎は、一息を置いて、かかえた。

とたんに――。

「う、むっ！」

狂四郎は、奥歯を嚙んで、おのが迂闊に、呻いた。

女の五体は、たちまちに、巨大な巌のように、冷たく、堅いものと化して、矢庭に、狂四

郎を押しつぶそうとのしかかったのである。
肉がねじられ、骨が鳴り砕けるかと思われた。
渾身の力をふりしぼって、女体をはねかえそうとしたが、びくともするものではなかった。
すさまじい喘ぎを起しつつ、狂四郎は、しかし、なお、自嘲の意識をのこしていた。
その意識を、みじんに砕いたのは突如として、はじけた哄笑であった。
「はっはっはっは……狂四郎、思い知ったか！」
——おのれ！
噴きあげて来た憤怒は、生まれてはじめてといってもいいものだった。
「どうだ！　狗猪もその余を食わず、と申すが、貴様の、その汚穢の態こそ、賤み悪まれるにふさわしいぞ。疲馬も、嗤え。たわけ！」
——く、くそっ！
狂四郎は、全身で唸りを発して、自由をとりもどそうと、もがいた。
悪夢は、そこで破れた。
茫乎として、ひらいた双眸が、映したのは、朝の陽光の澄んだ、淡々とした空に、葉照りの樹枝を張った椎の大木の荘厳さであった。
——おれは、ここに倒れて、夜を明かしたのか……
光にたわむれ乍ら、葉裏がかえっていたが、風音のない——美しい野の朝であった。

狂四郎は、ひとつ家の女の貌を、思い出そうとした。しかし、それは、どうしても思い出せなかった。

悪夢は、おのれの未来を予告しているように、まだ脳裡にたゆとうてい乍ら、狂四郎の四肢は、徐々に、生気をとりもどして来た。生きることに疲れたこの無頼の男を、猶生きつづけさせるために——。

快楽寺

一

予感というものであったろう。

その寺の山門をくぐり乍ら、眠狂四郎は、ふと、胸に滅入るものをおぼえた。

山門も、甃石も、彼方の本堂も三重塔も方丈も、まだ新しかったし、樹木も若かった。

仙台堀から相生橋を渡り、松平和泉守の下屋敷の裏手にいたると、町家通りのまん中に、この寺があった。万年町をへだてて、古い寺がびっしりとならんでいるのだが、この寺だけが、深川では、近い時代に建立されたものであった。

というのも——。

二十年前、永代橋が墜落する一大椿事が起ったことがあり、八百余名が水へはまって、四百数十名が溺死した。この亡者を回向するために建立された寺だったのである。

深川富岡八幡宮の神事は、山王、神田の両祭に次ぐ盛典であったが、安永以降、本社再建のためにその神事を中止していた。文化四年春に、神殿が新たに成り、且つ三十四年目にあたるので、その祭礼には、氏子各町の意気込みは大変なもので、山王、神田の両祭をしのぐ

山車、曳物を出すことになった。

しかも、恰度、その日が、深川霊岸町の浄心寺において、身延山日蓮大菩薩の開帳にあたった。

そのために、府内の老若男女の殆どが、永代橋を渡ろうとする雑踏を呈した。ところが、たまたま、この日の午前十時に、橋下を、将軍家代参の船が通る達しがあり、橋の両袂を縄張りして、通行止めしたため、西詰におしよせた群衆は、凄じいおしあいへしあいの光景となった。

縄が切られるや、この生きた津浪が、一挙に押し出して来た。隅田川に架けられた橋のうち、一番細く、長い仮橋は、この重みに堪え得ず、忽ち、東詰一間を残して、長さ十二間が、めりめりと二つに折れて、崩れ落ちたのであった。

崩れ落ちる無慚の光景に悲鳴をあげつつも、後からどっと押して来る人波に、後退するすべがなく、惨たる地獄図を現出することとなったのである。

氏子各町が、この溺死した亡魂得脱の如来をまつる一寺をつくったのは、当然であった。あわせて、公儀が、本堂わきに、弥陀、釈迦、大日の三楽を安置する仏堂をつくって、牢死、刑死の囚徒の幽魂追福をはかったのは、これは、聊か、当寺の旨趣とくいちがってはいたが、いつの間にか、世間は、悲惨な横死人を葬るべき場所として、両国橋東詰の回向院と同じに考えるようになっていた。

いま——。

山門をくぐり乍ら、ふっと、狂四郎が、胸に滅入るものをおぼえたのは、しかし、この寺がそうであることを念頭に置いていたからという次第ではなかった。
いわば、無心に道をひろっていて、不意に、物陰に殺気を感じるそれに似ていた。
連れがいた。
下谷御成街道の刀屋であった。
久松町や芝日蔭町などにある新古を問わず、賎価物だけを扱う店とはちがって、上作しかあいてにしない刀屋で、主人の見識は、定評があった。
今日、たのんでおいた無想正宗の研ぎができたと報せを受けて、狂四郎が、立寄ると、主人は、ひとふりの大刀をさし出したのであった。
長曾禰虎徹であった。
「これは、後期の作でございますな。真鍛作之と添銘してございます」
真鍛とは、刀の中の心金を、外の面金と同様に、よく鍛えて作ったことを意味する。精鍛した心金の一端が刀の中心になるので、中心の錆色が、美しく、朽ちこみもすくない。
「錨の古鉄をまぜて鍛えた、と伝えられて居りますが、この黒味がかった肌の出た様子は、まさしく、その証しでございましょう。みごとな名品でございます」
「この虎徹が、どうした？」
「以前、拝見したことがございます。南町奉行所の与力で、渡辺小右衛門というお方がお持ちでございました」

渡辺小右衛門は、あの永代橋墜落の際、どっと押し出した人波の中に交っていて、咄嗟に、この人なだれをくいとめるすべは、唯ひとつの手段しかないとさとるや、凄じい懸声もろとも、差料の虎徹を抜きはなって、一人の町人の首を刎ねざま、

「動くなっ！」

と、威嚇したのであった。

これは、絶大な効果があった。

もし、小右衛門が、この非常手段をとらなければ、猶数百人が、水中へ顚落したに相違なかった。

「渡辺様は先年お亡くなりになりましたが、そのすこし前にお目にかかりました折、虎徹をいま一度拝見いたしとう存じますとねがい出ましたところ、お笑いになって、あれは、阿弥陀如来の腹に入れてしまった、と仰言ったのでございます。てまえは、その時は、罪もない町人を生贄にしたのを深く心にお責めになり、二度と、虎徹を陽の目に当てまいとお誓いになったのだと存じ、そのまま、引きさがって参ったのでございましたが……」

偶然にも、今朝がた、風采のあがらぬ浪人者が、店をおとずれて、この虎徹を、百両で売って行った、という。

「どうして、そのご浪人さんに手渡ったのか、よほど、おたずねしようと思いましたが、おたずねしたら、急に売るのをおやめになりはせぬか、と不安をおぼえまして、欲しさにはやって、言い値でお引取りしたのでございます」

しかし、どうにも落着かず、渡辺家に手代を趨らせたところ、虎徹のことは亡主から何もきいていない、という返辞をもってかえって来たのであった。小右衛門が逝った時、すでに、虎徹は、屋敷には無かったのである。

「まさか、渡辺様が、他人におゆずりなさる筈もないし、どうした次第であろうか、と腕を拱ねいていたところでございました」

狂四郎は、ききおわると、

「小右衛門は、お前さんに、虎徹を阿弥陀如来の腹に入れてしまった、と云ったのだな？」

「左様で――」

「では、ひとつ、溺死寺へ行ってみようではないか」

そう云って、狂四郎は、主人を促して、ここをおとずれて来たのである。

二

「お前さんは、方丈へ行って、住職に会って、小右衛門が、虎徹を当寺に奉納した筈だが――と、これはこちらが知っていて、たしかめに来た、という態度で、きり出してみてもらおうか」

なぜ、その態度をとらなければならないのか、刀屋は、訝しく思いつつも、承知した。

狂四郎は、本堂をまわって、後堂――奥の院に、むかった。

「もし！」

左方の大師堂の陰から、険しい声が、かかった。
「どこへお行きなされます？」
若い納所が、鋭い眼光を送って来た。
「奥の院に入る」
狂四郎は、わざと正直にこたえた。
「なにを申される！　途方もないことを――」
ぱっと走って、狂四郎の前をふさぐと、
「みだりに近づいて、仏罰を蒙られまいぞ！」
と、呶鳴りつけた。
狂四郎は、冷やかに薄ら笑うと、
「ただの咎めだてにしては、その形相は大仰すぎるが――」
「なにっ！」
瞬間――風のように躍った狂四郎は、納所に、呻きを洩らすいとまも与えずに、あて落した。
地べたへ崩折れたのを跨ぎ越して、さっさと、後堂に近づいて行った。
廻廊に上がって、ずうっと見わたした狂四郎は、ただちに合点して、つき当りの吹寄格子を板に組んだ脇障子にすすんだ。これは、厳重に鍵がかかっていたが、狂四郎は小柄を抜いて、苦もなく、はずした。

薄暗い内陣に、ふみ込む——。
狂四郎は、見た。
およそ一丈ばかりの阿弥陀如来の木製座像が、脳天からまっ二つに断ち割られて、半体は横倒しになっているのを——。
その胎内は、空洞であった。
——この中に、虎徹が納められていたのだな。
勿論、それは、渡辺小右衛門のねがって為したことであったに相違ない。
歩み寄った狂四郎は、この両断が、一太刀によるものと、みとめた。まことに、鮮やかな、水際立った手練といえた。
——それにしても、この丈余の高さを、一太刀で斬るとは？
ふつうの差料では、かりに床を蹴って、飛び上がったにしても、これは不可能事であった。
——四尺以上の長刀で、居合抜きでやれば、やってやれないこともなかろうが……。
胸中で、そう呟いたとたん、狂四郎は、
——あ！
と、ひとつの俤を脳裡に思い泛べた。
野々呂甚内であった。
刀屋は、虎徹を売りに来た人物について、風采のあがらぬ、なんとも貧しげな、しかしいかにも律儀そうな、と云っていたではないか。

——あの男が、この如来を斬って、虎徹をぬすんで、売った、というのか！
信じられぬことだったが、この冴えた両断ぶりは、甚内のしわざとすれば、頷ける。
蜂須賀家から退転して、ついに、賊を働くまでに零落したのであろうか。
あれだけの腕前を備えていれば、いかに長刀が無用の時世とはいえ、世すぎの具にできぬ筈はあるまい。かりに大道芸として売っても、人の足をいくらもとどめられよう。
——賊を働く人柄には思われなかったが……。
不審をわかせつつも、狂四郎は、如来像に、像自身が噴いたように、べっとりと血汐がかかっているのをみとめた。
人を一人、斬り仆しているのである。
——像もろとも、斬ったか？

三

狂四郎は、後堂を出た。
あて落した納所の姿は、地べたから消えていた。
ゆっくりと方丈へむかって歩き出し乍ら、そこいらの物陰に、自分を狙う目がひとつふたつではないのを感じた。
——寺が、用心棒をやとっているというのは珍しい。
両手を懐中に置いて、それらの目へ、背中をさらしつつ、本堂の前へ出て、まっすぐに、

方丈へ近づいた。
玄関に立つと、別の納所があらわれたが、これも、敵意を持つ表情をしめして、すぐに引っ込んだ。
それがもどって来るのを待たずに、狂四郎は、もう上がっていた。
書院には、刀屋が、ひとり、ぽつねんと坐っていて、狂四郎が入ると、ほっとした面持で、
「ひどいものでございます」
と、笑った。
「住職は、あらわれぬか？」
「いえ、お会いしたことはお会いいたしましたが……」
狂四郎に云われた通りの口上を述べると、一語も返さずに、すっと立って行ったきり――
それきりだ、という。
狂四郎は、障子を開けた。
枯流れに井筒、伽藍石、石橋を配した凝った書院露地であった。
陽が傾いて、影が濃くなっていた。
「昏れるまでのひとときを、あいては、かせいでいることだ」
呟いてから、狂四郎は、刀屋をかえり見て、
「虎徹を売りに来た浪人者は、目蓋が鬱陶しげに垂れてはいなかったか？」
と、訊ねた。

「あの御仁をご存じでございますか？」
刀屋は、狂四郎が当てたのにおどろいて、問いかえした。
——やはり、あの男であったか。
「野々呂甚内という。阿波藩にいた。四尺余の長刀を帯びていた。わたしが、その長刀を折ったことがある」
「………？」
「どうして、あの男が、奥の院の如来を両断して、胎蔵剣を盗み去ったか——わからぬ」
「胎蔵剣？　あの虎徹が、でございますか？」
「そうだ」
狂四郎が、頷いた時、どこか遠くから、華やかな女の笑い声がひびいて来た。
「長船屋——」
「はい」
「この溺死寺は、どうやら、回向院とはちがって、表沙汰になることをはばかる何かの副業をいとなんでいるようだ」
「は——？」
刀屋は、ぱちぱちとまばたきをしたが、
「そう申せば、待って居ります間に、どこかの奥女中らしい紅網代の乗物が参りましたが……そこの丸窓の障子の隙間から見て居りますと、乗物のまま、奥へ通って行きました」

「あの笑い声が、そうだな」

狂四郎は、逡巡わず、素跣で、縁側から庭へ降りると、飛石をつたって行った。

大和葺きの中門をくぐると、深い木立の陰に、風雅な茶亭があった。貴人口前に、女の草履があるのをみとめておいて、狂四郎は、躙口前へ、音もなく忍び寄った。

「……ほほほほほ」

女の笑い声が、また、流れ出て来た。狂四郎は、その草履によって、女が、大奥の中臈と見てとった。

「藤江殿は、もう三十七歳ではありませぬか。それが、四月にもなって堕胎すのでは、泣き喚くのも、むりはありませぬ。……ほんとに、あの齢をして、四月まで、みごもっていることに気づかなんだとは――ほほほほほ」

それにこたえる男の声は、ひくくて、ききとれなかった。

――そうか、副業は、これだったのか。

狂四郎は、にやりとした。

陰惨な因果によって殪れた人々を葬る目的をもってつくられたこの寺に、別名を快楽寺と号けたのは、氏子たちの、深川っ子らしい洒落であったろうが、いつの間にか、その名を文字通りに受けとった女たちが、忍び通いするようになっていたのである。

狂四郎は、踵をかえした。

飛石を戻り乍ら、またもや、木立の陰に、自分を狙う目を感じた。

泳がせておいてやる——といった対手の気の永い監視ぶりが、こちらには、かえって面白いのであった。

強敵であることが、のぞましいのである。

書院に上がった狂四郎は、刀屋に、笑って云った。

「わかったぞ、長船屋。山門に、暖簾をかけたらふさわしい商いがいとなまれて居る」

「暖簾——と申しますと？」

「子持縞に錠を染め出した暖簾だ」

「なんと仰言います」

「堕胎を、やって居るのでございますか？」

当時——仲条流婦人療法の店には、その印の暖簾が、かかげられていたのである。

「うむ」

「あきれましたな」

「しかも、どうやら、公儀黙許と考えてよさそうだ。大奥の女中たちは、すべて、ここで、堕胎して居るらしい」

刀屋は、いまいましげに舌打ちして、

「退散いたしましょう、眠様」

「ところが、看破されたからには、生かして山門を出さぬ心構えの模様だ」

「貴方様を、でございますか」

狂四郎の腕前を知る刀屋は、対手がたをあわれむ口調で、

「盲、蛇に怯じずでございますな」

「いや、むこうは、すでに、わたしを眠狂四郎と知って、慎重にかまえて居る。討ちとる自信もあるようだ」

「冗談ではございませぬ。貴方様が、むざとは、お負けになる筈がありませぬ」

そうは云いつつも、刀屋は、いつどこで生命をすてても惜しくはなさそうなこの男のまき添えをくらってはたまらない、という意識がのぼったか、急に、おちつかぬ様子になった。

その肚裡を読みとったように、狂四郎は、腕を組んで、いっかな動こうとしなかった。

四

——ままよ、なるようになれ！

ついに、刀屋も、度胸をきめて、黙り込んでから、半刻が経った。

薄闇がしのび入って来て、書院のすみずみの輪郭を、朧ろに溶きはじめた。庭の眺めは、濃淡の黒一色にぼかされ、そよぐ風は、冷えて来た。

「行こうか、長船屋」

この黄昏を待っていたように、狂四郎は、やおら、腰を上げた。

「御用心なさいまし」

「お前は、離れて、見物して居ることだ」

玄関を出て、ものの十歩もあゆんだろうか。

本堂のわきから一人、鯨鐘楼のうしろから一人、そして、山門下から一人——三名の覆面の武士が、音もなく、たちあらわれた。

狂四郎は、その一人一人へ、しずかに、冴えた眼眸(まなざし)をまわしてから、

「長船屋。見物の場所としては、あの無縁祠(ほこら)の前あたりがよさそうだ」

と、教えた。

刀屋が、烈(はげ)しく動悸(どうき)をうたせ乍ら、狂四郎から離れて、そこへ寄った時、

「眠狂四郎！」

底力のある声が、方丈の縁側から、かかった。

同じ覆面をした武士であった。

すでに、狂四郎の背後、左右から迫る敵は、距離を二間にちぢめていた。

桑楡(そうゆ)まさに迫らんとす——の観があった。

いずれも、秀(すぐ)れた手の内をみせるに相違ない悠々(ゆうゆう)たる態度であった。

「当山住職に代って、引導を渡す。おぬしを葬(ほうむ)るにふさわしい死地だ」

縁側上の敵は、そう嘯(うそぶ)いた。

「その文句は、そっくり、そちらへ返上いたそう」

狂四郎は、にやりとして、云いかえした。

「お手前がたは、公儀庭番であろう。大奥の女中どもの堕胎の秘事をまもってやるための番

人を命じられて居るのであろうが、そのあじけなさを顧みる性根を持たぬ面々ならば、この寺に、無縁仏としてまつられるにふさわしい」

「番人となったおかげで、貴様のような恰好(かっこう)の闖入者(ちんにゅうしゃ)を討ち取るよろこびを与えられたぞ。これまで、貴様のために斬られた朋輩(ほうばい)の讐(あだ)を、いまこそ復(かえ)す！」

「わたしは、これまで、それと同様のせりふを、いくたびもきいた。だが、常に、勝利は、無頼の身の方にもたらされた。どういうのであろうか」

「思いあがるな！　僭上(せんじょう)の邪剣を誇示する性根こそ笑止！」

「そのせりふも、どこかできいた。こっちも、そのおりの返答をくりかえそう。……邪剣のもとに伏すものは、もっと笑止！」

左右、背後の敵が、一斉(いっせい)に、抜刀するにまかせて、狂四郎は、微動もせず、じっと、正面の敵へ、目をあてつつ、

――甚内が、虎徹を盗み去った時、この連中は不在だったと思える。さもなければ、いかに、あの男でも、この連中に包囲されては、無事ではあり得なかったろう。

そのことを考えた。

まさしく――これまで出会ったどの強敵との場合と比べても、すこしも劣らぬ容易ならぬ殺気が、ひしひしと五体に感じられたし、正面の敵だけが刀を抜かぬのも、おそろしい攻撃手段をかくしていると読みとれた。

意外の業(わざ)に対しては、その一刹那(いっせつな)の神気をもって、これをはずすよりほかにすべがないこ

とを、これまでの無数の経験が、狂四郎に教えている。

――これは意外の業を使うな！

と看破することが、まず、肝要であった。

看破した瞬間から、狂四郎の全神経はその攻撃に対して、石火の動きをとるべく、磨ぎすまされる。

けものが、地震を予知して、一日前にその場所から去っている――それにも似た、自分自身でも信じがたい程の本能の閃きを生み、しかも、けものとはちがって、その危機を平然と迎えて、間髪の変に応ずる力を試して、みじんもあやまたないのであった。

のみならず――。

意外の業が襲って来る場合のみ、狂四郎は、自ら進んで、それを誘うことになるのだ。

いまも――。

狂四郎は、刀こそ鞘走らせはしなかったが、ふいに、全身に、鋭気をみなぎらせると、すっと地面を摺って、二歩出た。

ぱっ――と。

敵の左手が、薄昏れの中で、躍った。その掌中から、燦として煌き出たのは三個の星石であった。

宙を截って光芒を曳いたそれらは、華煥とも形容するに足りた。

文字通り、小さな流星であった。

狂四郎の双眸にむかって、吸いよせられるように、飛んだのである。

身を沈めて、これらの光石を頭上に通過せしめた時、狂四郎は、晦(くら)んで、盲目であった。

めしいとなることは、あらかじめの覚悟であったごとく、次に、敵の右手から放たれる物こそ、おそるべき凶器であると、咄嗟(とっさ)にさとったところに、他の兵法者とちがう直感力の働きがあった。

はたして——。

唸(うな)りをたてて、襲いきたった物を——その唸りの音を、

——鏢(ひょう)だな。

と、ききわける余裕を持って、

ぴしっ！

ぴしっ！

と、無想正宗で、打ち落していた。

鏢とは、掌中に納められる程度の大きさの、鉄の円鐶(えんかん)に先の尖(とが)った針を植えた飛道具で、これまで、狂四郎は、甲賀忍組(しのびぐみ)から投擲(とうてき)されたことがある。

盲目となり乍ら、狂四郎は、なんの危な気もなく、六個まで打ち落した——その時、縁側まで一間余の近くに、進んでいた。

狂四郎の、この鮮やかな防禦(ぼうぎょ)しつつの肉薄が、投げた敵自身に、背筋に氷をあてられるような恐怖の念を意識せしめる結果となったのは、皮肉であった。

「うーむむっ！」

縁板を蹴って、抜き討ちに、猛獣の跳躍をみせた敵は、しかし、この攻撃が恐怖の念を撥ね払うあまりの爆発であるゆえに、勢いの凄じさがかえって、破綻を含んでいるのではないか、と自身で、ちらと思い掠めていた。

予感は正しかった。

狂四郎の頭上を翔けて、地上へその足さきを着けた時、魂魄は、その身から離れていた。

どうっ、と地ひびきたてて倒れ伏す敵影を、水のように澄んだ眸子に映してから、狂四郎は、無縁祠の前で、固唾をのんでいる刀屋に云った。

「長船屋。研ぎを自慢してもいいぞ。手ごたえがないくらい、切れ味は冴えている。のこりの方々も、痛みをのこさぬように、一太刀であの世へ送るから、しかと見とどけてもらおう」

絶望刀

一

夜明けの薄あかりが、どこからともなくしのび入って来た蘭房に、仄かに、花の香が、匂っていた。

床の間に、木蓮が白い厚い花弁を、ぽってりとひらいているのであった。

昨夜は、まだ、つぼみであった。銀の炉でやわらかい光を放っているさくら炭と、その上にかかって、幽かな松風をひびかせている鉄瓶が、花弁をひらかせたのである。

野々呂甚内は、先刻から、褥の中で、その温雅と隠逸をひそめた艶麗な風情に、目をあてていた。

禿児が、炭をつぎ足しに入って来て、目ざめたのである。

吉原の角町一帯が焼けて、この今戸橋ぎわへ一時移っている——仮宅という。

吉原が、祝融の災に遭うのは、べつに珍しいことではない。そのために、仮宅が、べつの町につくられる。一廓を作るわけではなく、一般通行人の繁く往来する町家通りに構えられるために、廓内とはちがった趣きをおびて、かえって繁昌することになる。

甚内が、この今戸橋ぎわの仮宅に登楼してから、もう十日以上になる。

店は、角町で随一の大籬であったし、えらんだ敵娼は、最高の呼出し花魁であった。あがるなり、無造作に出した百両が、ものを云ったことである。

そのまま、一歩も、部屋から出ない流連であった。

寡黙で、陰気な、歌ひとつ唄えぬ客であった。花魁は、じぶんを抱いている時も、何か別のことを考えているような薄気味わるさに、鴇手にそっと両手を合せたものだったが、肯き入れられず、金のきれめまで我慢していなければならなかった。

甚内自身、流連で、過去のすべてを忘れることはできずにいるのであった。どす黒い澱が、胸底にあって、これは、生きている限り浄化されないようであった。

いまも——。

ぼんやりと、木蓮の花を、薄闇の中に眺め乍ら、臓腑が腐っているような不快な気重さに、からだを横たえている。

かたわらで、花魁が、やすらかにたてている寝息も、心を滅入らせることにしか、役立っていなかった。

十日の昼夜、倶に起伏しし乍ら、この女とは、心のふれ合うところは、すこしもないのである。

と——。

「……ふふふ」

夢の中で笑って、花魁が、寝返って来た。
とたんに、甚内は、孤独な憂悶をふりはらうために、そろそろと片手をのばして、緋縮緬の下をさぐった。
目は依然として、木蓮の花へあてていたが、おのがてのひらが、あつい柔らかな太腿にふれた瞬間、その白い花弁がなまめかしいものに変るのをおぼえた。
そろそろと、太腿の内側へ、五指を滑り込ませようとすると、ふいに、花魁は、それを知ってか知らずか、また、くるりと、むこうへ寝返った。
そのはずみに、島田髷から、するりと、櫛がひとつ、落ちた。それは、甚内が与えた高価な鼈甲づくりの品であった。
　傍人は知らず夢中のこと
　ただ見る玉釵の時に枕に墜つるを
とは、楊衡が「春夢」にうたった艶冶な情景であるが、落ちた櫛へくれた甚内の眼眸は、陰惨な暗い色を湛えていた。
——この櫛のために、わしは、とうとう、辻斬強盗にまで墜ち果てたのだ。
この櫛は、甚内が、妻のために購ったのである。

二

蜂須賀家を退転してからの甚内の生活は、苦しいものであった。

その苦しさに堪えられる男であったが、堪えられなかったのは、自分に対する妻の侮蔑であった。

蜂須賀家の下屋敷で、眠狂四郎とたたかって、敗れた時、甚内は、云われた筈であった。

「これから、お主がなさねばならぬことがひとつある。それは、お主の手で、自身の女房を斬ることだ」と。

甚内は、しかし杉江が斬れなかったのである。

杉江の冷淡な態度に三年間堪えつづけて、日々につもったその不快な記憶を、肩に重すぎると感じつつも、奇怪なことに、いつの間にか、甚内には、杉江のいない家庭が考えられなくなっていたのである。

妖しいまでに、男という男を愁殺する色っぽさを湛えた杉江の美しい姿態を、甚内は、いかなる犠牲をはらい、どんな屈辱をしのんでも、うしないたくなかったのである。

杉江の方は、退転後、甚内の心情を底まで見透して、酷薄にも、一夜さえも、からだを宥そうとはしなかった。

その宵、甚内は、ついに堪え得ず、杉江の牀に入ろうとした。すると、杉江は、冷やかにあざわらうと鼈甲の櫛でも買うて来てくれる才覚がなくて、なんで欲求に応えられよう、と拒絶したのであった。

甚内は、その場で、衣服をつけると、黙々として夜の街へ出て行った。

翌日の午すぎ、戻って来た甚内の懐中には五十両の櫛があった。

その時——。

わが家の見える横丁へ曲りかけて、むこうから、杉江が、急ぎ足に、どこかへ出かけようとする姿を見出し、自分でも思いがけぬ険しい直感が働いて、身を躱すと、やりすごしておいて、あとを尾けはじめたのであった。

杉江は、大通りへ出て、辻駕籠をひろったが、これはかえって尾行には都合がよかった。

やがて、半刻のち、その駕籠が、大川を渡り、仙台堀に沿うて下って行き、万年町へ出て、町家通りのまん中にある寺へ入って行くのをみとめた甚内は、それが溺死寺と知って、疑惑をふかめた。

忍びの術を心得た甚内が、境内の奥まで、人目にふれぬように入り込むのは、きわめて容易なわざであった。

物陰にひそむ時間は、あまり長くなかった。

甚内は、妻が住職にともなわれて、方丈を出て、本堂に入るのを、見とどけた。

あとを追って本堂にふみ込んだ甚内は、そこに、二人の姿がないと知るや、ためらわずに、後堂へ足を進めたのであった。

内外陣境欄間の笹竜胆唐草の透彫から、そっと、薄暗い内陣を窺い見た。

一瞬、あっ、となった。

畳の上に、じかに、纏うた衣裳を打ち拡げて、大きく開いた白い豊かな脚線を、腰絹の緋色に、鮮やかに浮きあげて、その股間に、男を蹲らせた光景は、まさしく、三年前に、国許

において、杉江の先夫寺島長八郎の屋敷の離れに覗き見たそれと、同じではないか！

ちがっているのは――。

あの折は、男が、城代家老堀田采女正であったが、今は、青頭の桑門であることだけであった。

動悸烈しく、甚内が見戍るうちに、住職は、さらに、手を添えて、杉江の下肢を押し拡げさせて、顔をしだいにひくめて行こうとした。

――おのれっ！

三年間、堪えに堪えていた忍耐は、その刹那、甚内の五体で、みじんに砕けたのであった。

……花魁の髷から落ちた櫛を、じっと凝視しつつ、甚内の脳裡には、あの淫靡な光景が、まざまざと甦って来た。

かたわらで、花魁が、もぞ、とうごいた。

「おや、ぬしは、お目ざめかえ」

云ってから、「さむ！」と呟いて、襟をあわせた。

「春の日」の連句に、

　肌寒み、一度は骨をほどく世に
　　傾城、乳をかくすしののめ

という付合がある。

甚内の身のうちに、にわかに、欲情が燃えた。あのいまわしい記憶に、それをあおられた

といえる。

女の胴へ、腕をまわした。

すると、

「およしなんし！」

つめたく、ふりはらわれた。

「昨夜の、退の亥時の柝の音を境にして、ぬしのお金は尽きた、と報せが来て居ります。ほどよう睡っておいでだったから、そっとしておいてあげたのは、わちきのなさけ。……ほほほほほ」

花魁は、するすると、褥から、抜け出ると、懶そうに、からだをくねらせてから、新造を呼んで、手を叩いた。

屈辱には馴らされた甚内であった。

黙って起きあがると、衣服をつけた。花魁は、手つだいもしなかった。

階下へ降りると、そこは、まだひっそりと闇が罩めて、夜であった。

潜戸を抜け出ると、ひろびろとした往還には、朝靄が流れて、人影もなかった。

何処へ？

甚内は、あてもなく、歩き出していた。

三

今日も――。

まだ午まえだというのに、向島の桜並木は、もう半ば葉桜になっているにも拘らず、茶番好みで押し出して来た群衆で、見わたすかぎり、うずまっていた。

花の下に短冊をかけて、しずかに花の名残を惜しみ、清酒を酌みかわす風流は、郊外も遠い場所に、名木の一本桜をえらんでのことだった。

向島、道灌山、飛鳥山、御殿山などは、町内総出とか、三味線踊りの師匠が弟子を引連れるとか、ワイワイ講中とか、いずれも二十人三十人と群をなして、花見の扮装を競いあうことになる。

たとえば――。

いま、屋形船、供の屋根船、通い舟、茶舟など十数艘をのりつけて、どやどやと土手へあがって来た仮装行列など、まことに、目を瞠らせるばかげたぜいたくぶりであった。

目下、市村座で出している田舎源氏の狂言を、そっくり模したもので、光源氏、奥家老、女小姓、側女中の扮装をしたのは、いずれも裕福な町家の主たちとみえた。引連れた深川の芸妓たちには、紬茶信夫摺縮緬の仕着を揃えさせて、芝居の出方や幇間にも揃いの羽織をきせていた。

光源氏になった町人は、白塗り白無垢に、金拵えの小太刀を佩いて、幇間が、組んだ人馬

にうち跨って、得意げに胸をそらしていたが、この半日の上機嫌のために、三百両を下らぬ散財袋を撒いたろうと、見物する人々の私語がきこえた。

あちらの土手では――。

三味線踊りの師匠が、娘盛りをずらりとならべて、揃いの手拭い、揃いの日傘で、踊らせていたし……。

こちらの土手では――。

酔っぱらった職人が、まだ江戸に馴れない勤番侍をとっつかまえて、口ぎたなく悪態をついていた。

帯刀のてまえ、やむなく慮外討ち、というのは、むかしのことだった。花見の無礼は、公儀黙許のことであったので、藩邸では、その意旨にさからわぬように、藩士たちが市民と悶着を起さぬように、厳重に忠告して、送り出していた。

そこをつけ込んで、江戸っ子たちは、喧嘩をふっかけて、侮辱をくわえる。花見の場所では、武士の体面は、むしろ、恰好の酒の肴にされた。

まだ若い勤番侍が、さんざからまれて、ようやく逃げ出したあと、酔漢は、どたんと仰のけに倒れて、放尿をはじめた。

四尺余の長刀を腰にした、風采のあがらぬ小男の武士が、そこへさしかかった。

酔漢は、いきなり、その噴水を、ぱっと、そちらへ、ふりかけようとした。

身がるく数尺さがった野々呂甚内は、その酔態を、垂れ目蓋のかげから、じっと見やって、

――町人の方が、どれほどか、気楽であろう。
と、思った。
「やいっ！　この野郎！　向島の土手を――何事ぞ、花見る人の長刀、って、てめえのこったぞ！　べらんめえ――」
よろよろと立ちあがるや、腕まくりして、酔眼を据えた。
「へん、花は桜木、人は武士、てなことぬかして、なぜに女郎にふられやす――ときやがらあ。さむれえの相場なんざ、当節、浅黄木綿の古着ほどにもつかねえや。いいか、千石取りと威張りくさっても、米一石六十目換えにして、たかが六十貫の身代じゃねえか。六十貫の町人なんざ、そこいらの小ぎたねえ質屋だぞ。銀五百貫で分限といい、千貫目の上を長者といわあ。……どうだ、てめえなんざ、十石五人扶持てえところが、相場だろう。花見なんざ、おこがましいや。さっさと戻って、女房と顔つき合わせて、傘貼りでもしやがれ」
まくしたてて、つめ寄って来た。
甚内は、その胸を、かるく、とん、と突いた。
「な、なにをしやがる！」
よろけて、目を剝き歯を剝いて、辛うじてふみとどまった――その脇を、甚内は、すうっと通り過ぎた。
つかみかかろうとした職人は、影が掠めるに似た迅さに、たたらをふんで、空を泳いだ。
甚内が、二間あまり遠ざかった時、職人のあたまから、髷が、ぽろりと落ちた。

ばさっと、切れ髪が顔へ落ちかかって、職人は、きょとんとした阿呆面になった。

まわりの人々は、笑うかわりに、唖然として、甚内の後ろ姿を眺めやった。抜いて、刎ねて、腰に納めたその一瞬の迅業を、誰も目にとめていなかったのである。

それから、ものの二町も行ったところで、甚内は、姉弟らしいひと組が、盆踊り風に、古い俚謡を手踊っているのを、立ちどまって、眺めた。

姉は、おかめの面をつけ、弟は、ひょっとこの面をつけ——古味のある滑稽な文句に合わせる揃えた手拍子足拍子が、巧みで面白かった。

惚れて見る目は、糸より細い
　悋気する目は、角が立つ
あの子気の毒、白歯で身持ち
　きけば殿御は、旅の人
恥かしいぞえ、牡丹の花を
　見に行くわたしは、鼻が獅子
ままにならぬと、お櫃を投げた
　そこらあたりは、ままだらけ
鬼が餅搗きゃ、閻魔がこねる
　傍で地蔵が、嘗めたがる
昨夜見た見た、大きな夢を

　　奈良の大仏、蟻が曳く
　店にゃ親指、奥には小指
　　外にゃ人指し、その手をはなせ

まわりをとりまいていた群衆は、姉弟が踊りおさめて、お辞儀をすると、どっと、手をたたいて、ほめそやした。

姉は、おかめの面をはずした。これは淡路人形座のお吉なのであった。少年は、ひょっとこの面をはずそうとしなかったが、新太郎に相違なかった。

お吉は、花笠をさかさにして、まわった。小銭が、ぱらぱらと投げ込まれた。

と――。

お吉は、何気なく向けた視線が、甚内の貌につきあたると、はっと、笑顔を消して、表情をひきしめた。

甚内の方では、見おぼえはなかった。

幾日ぶりかで、その鄙びた、純で清らかな踊りに、心を洗われる思いになっていた甚内は、急に、その娘から、きついまなざしをそそがれて、とまどった。

お吉は、甚内が投げた小銭をつまみあげると、

「お前様には、貰わないよ！」

きりつけるように云って、ぱっと投げかえした。

「おい、姉ちゃん、なんぞ、このおさむれえに、恨みがあるのか？」

「親の敵なら、おれがひとつ助太刀を——」
「嘘をつけ。このあいだ、てめえ、伜の喧嘩に親が出やがって、十歳の餓鬼に向う臑をかっぱらわれて、悲鳴をあげやがったくせに」
「あれは、おめえ、隣町の清元の女師匠の伜だったから、わざと加減したんだアな」
「女師匠にはへそくりをかっぱらわれて、その伜には向う臑をかっぱらわれて、ざまアねえや」
「そういうてめえは、嬶を親方にかっぱらわれてやがら」
「なに！」
「浪速難波のかったい惣嫁、京で辻君、江戸では夜鷹、てめえの女房は、宿場の女郎、それぞれ、ちゃアんと、分相応に股をひろげてやがら」
「こん、畜生っ！」
つかみあいがはじまった。
そこを、すっとはなれた甚内は、五、六歩行きかけて、頭をまわした。
「人斬り甚内！」
鋭い、その一声を、耳にしたからであった。
甚内は、なお自分にそそがれているお吉の視線を受けとめて、わずかに、口のはしを痙攣させた。
——人斬り甚内！

阿波藩では、おのれが、ひそかに、こう呼ばれていることを、甚内は、知っていた。
暗澹たる絶望が、胸に来た。

四

橋場への渡し場を彼方にのぞむ往還を、なかば無意識に辿り乍ら、甚内は、うつろな胸中で、いくども、おのが異名を呟いていた。
以前は、他人の口から、それをきかされても、自分のこととは思えないおちつきがあって、耳もとを流しやることができた。
いまは、それを、なまなましい実感をもって、受け入れなければならぬ。
——よい！　人斬り甚内でよい！　わしは、その異名通りに生きてみしょう！
その狂暴な意識も湧いていた。
「……おぬし！」
ふいに、近くから、低いが、よく透る声が、かけられた。
一度きけば、忘れられぬ声だった。
——眠狂四郎！
甚内は、屹っとなって、視線をまわした。
右手に山門だけをのこして、火事で烏有に帰した寺院跡があった。
境内であった空地の、ちょうどまん中に、すっかり葉桜になった一樹が立っていたが、そ

この根かたに、狂四郎は、仰臥していた。

左様、先日、経帷子をつけて、肩に人語鳥をのせた異形の肥後浪人・遠藤竜三郎を迎えて、凄絶の試合をした其処に、今日も来て、茫乎として、春日を過していたのである。

竜三郎の剣でつらぬかれた幹の傷痕はまだなまなましかった。

甚内は、山門をくぐった。

一間の距離に甚内が彳むや、狂四郎は、やおら身を起して、

「虎徹を売った百両で、今日まで流連荒亡したとみえる」

「…………」

甚内は、云いあてられて、微かに、顔面を歪めた。

「無頼に生きて来たわたしの目はごまかせぬ。以前のおぬしとは、人相が変った。険しい剣気もむき出されて居る」

「…………」

「おぬしが虎徹を売りつけた店が、わたしの知合いであった。あるじが疑念を話したので、溺死寺へ行き、奥の院に入ってみて、阿弥陀如来を斬ったのが、おぬしと断定した。冴えた両断ぶりであった。あのように見事に斬られては、胎蔵剣を盗み去られたとしても、寺側では、文句のつけようがあるまい」

甚内は、そう云う狂四郎へ、憑かれたような異様に光る双眸を据えていたが、

「拙者は、あ、あそこへ虎徹を盗むために、忍び入ったのでは、ない！」

と、呻くように云った。

狂四郎は、じっと見かえして、ややしばし沈黙を置いていたが、

「おぬしが、仏像もろとも斬ってすてたのはおぬしの女房だったのか？」

と訊ねた。

「さ、さよう——」

甚内は、頷いた。

「斬るのが、おそかったようだな」

「…………」

「だが——よく斬れたな？」

「……逃げようとしたからでござるよ」

甚内は、目を伏せると、苦汁をおし出すように、こたえた。

たしかに、あの場合、杉江が、あわてふためいて、逃げようとしたのでなかったならば、なお、いまだ、甚内は、その白いからだを、生かしておいたに相違ない。

甚内が、内陣にふみ込んだ時、はね起きた杉江が、即座に居直って、斬るなら斬るがいい、と冷然たる様子をしめしたならば、おそらく、殺意すらも起し得なかったろう。他人には窺知することをゆるさぬ、世の常ならぬ夫婦の、奇怪な心情が、そこでもつれあい、綯交って、それが、断ちがたい絆ともなって、二人を連立たせて、わが家へ帰らせたであろう。

ところが——。

杉江は、夫婦になって、はじめて、醜悪なまでにぶざまな周章狼狽をしめして、裾を乱して、遁れようとしたのであった。杉江は、良人に対して、はじめて恐怖をみせたのであった。糸に曳かれるように、それを追った甚内は、あらんかぎりの悲鳴をほとばしらせて阿弥陀如来の座像にすがりつく妻を、背後から、居合打ちに、両断したのであった。

われにかえったのは、それから、幾秒か後であり、目にとまったのは、杉江の死骸の上に載っているひと振りの剣であった。それが、如来の胎内からころがり出た品だった、と気づいたのは、それを携げて、ふらふらと、山門を出て、しばらく歩いてからであった。

すなわち、甚内は、虎徹を盗んだという意識は、なかったのである。

狂四郎は、感慨をもって、甚内を見戍りつつ、さらに訊ねた。

「おぬしが女房が、堕胎そうとしたのは、他人の子だと、気づいたからか？」

「堕胎す？」

愕然となった甚内は、形相一変させた。

——では、あれは！

不義の現場ではなかったのだ。

「…………」

狂四郎は、いたましげに、甚内の苦悶凄じい態を眺めた。

と、みるみるうちに——。

甚内の垂れ目蓋のかげから、どっと、泪があふれ出た。この変化は、甚内の心中で、理路

を辿ったものではなかった、といえる。
不義の現場を見咎められたのであったならば、妻は、平然として、居直ったのであろう。
堕胎の現場を、見咎められたので、罪の意識から、狼狽して、遁れようとしたのだ。
——子は、わしの子であったのだ！
甚内は、そう直感したのである。
突如——。
異常な唸り声を、春昼の宙へ劈かせると、甚内は、四尺の長刀を、電光のごとく、狂四郎に、送りつけた。
間一髪の差で、これをのがれて、樹幹のわきに、立った狂四郎は、つづいて、襲って来る第二撃、第三撃を、余裕をもった敏捷さで、躱した。
甚内が、第四撃を、と大上段にふりかぶるや、はじめて、狂四郎の、凄じい叱咤がとんだ。
「止さぬか！　斬られたくて、斬って来る者を、このわたしは、いまだ斬ったことはない！」

闇にいる男

一

煙のように春雨の降っている真夜中の庭に、花の匂いがあった。

闇の中に、花の白い色だけが、地底からでも明りを吸いあげているように、仄かに浮き出ているのであった。

音を忍ばせて、塀を越えて侵入して来た覆面の三名の武士が、植込みを抜けて行き乍ら、その花に袴をふれて、ひとひら、ふたひら散らした。

いずれも、極度の緊張で、花など目に入らず、匂いもかいではいなかった。その余裕のなさが、この直後に迎える彼らの運命を、地に散った花びらに暗示していたのだが……。

庭も、さして広くなく、建物も大きくはなかった。

侵入者たちは、袖垣のわきに立って、無言で、まだ縁に雨戸をたてていない母屋を、じっと見やった。障子が、雨夜の闇に朧ろに、白かった。しかも、ちょうど、まん中の一枚が開けられていて、座敷は、真暗なのであった。

――この時刻に、どうして、開けているのか？

三名の心に、その疑惑は、当然、湧いた。今夜自分たちが侵入することは、この家の者たちにさとられている筈はなかったのだし、これを誘いの罠とは思えないことだった。

一人が、遽に不吉な予感をおぼえて、何か云いかけようとして、云えば怯じ気づいたと受けとられると、思いかえした。

二人は疑惑をふりはらうと、ためらわずに、足をふみ出した。

縁側に沿うて、黒く口を空けたそこへ達するや、ともに鯉口をきっていた。

油断もなかったのだし、躍り込む用意はできていたにも拘らず、その奥の闇の中に、闇よりも濃く、ひとつの人影が彳んでいて、こちらを見おろしているのに気がつくや、率然と総身に戦慄が起った。

二人は――そして、一間後方の一人も、同時に、刀を鞘走らせていた。

猶、幾秒間か、座敷の黒影は、不気味に動かなかった。この息づまる対峙は、侵入者たちにとって、おそろしく永い時間に感じられた。

と――。

右にいた一人が、地を蹴って、縁側に飛び上がって、一方の障子を、烈しい音をたててひき開けた。

……はじめて、これに応じて、座敷の黒影は一歩ふみ出て、

「阿波藩の御連中であろうか」

底力のある寂声で、云った。

「天誅っ！」

絶叫しざま、上段にふりかぶって、躍り込んで行く者に、もう一人が、おくれじとつづいて、走り入った。あとの一人も、縁側上へ立った。

きえーっと、唸りを生じて、闇を搏つ刀身の、うすい光が見えた——と同時に対手の黒影は、そこからかき消えていた。

その動きは、攻撃者たちの目にとらえられぬ迅さだった。

第一の攻撃者が、たたらをふんで、襖へつき当り、そのまま、ずるずると崩折れた時、第二の攻撃者もまた、だっと斬りつけて延びきった胴を、ぞんぶんに薙ぎはらわれて、異常な濁り声を咽喉底から搾りつつ、徐々に、前へのめっていた。

そのあとに来た静寂の深さは、異様なまでにもの凄かった。

縁側にいた生残った一人は、完全に茫然自失のていだった。

二人の同輩が、ともに、たった一太刀で、この世を離れ去り、畳に倒れて、もう、もがきもしないのであった。

その黒影は、ただ、音もなく、部屋の位置を移しただけで、水際立った腕の冴えをみせたことなど、嘘のように、ひっそりと、立っているのであった。慥に、二人を仆した証拠を、右手にダラリと携げた白刃に語らせ乍ら——。

生残った者の虚脱ぶりは、対手が、ゆっくりと、こちらへ向かって来るのを、自分とは何の関りもないことのように眺めたことでも、明らかだった。

「おぬしだけが、生きて戻っては、はずかしかろう」
冷やかに、そうあびせられたのは、一間に足らぬ距離に迫られてからであった。
はっ、とわれにかえるやいなや、恐怖本能で、縁側から、庭へ跳び退った。
身を翻して、無我夢中で逃げはじめたが……迫って来る気配の感じられぬことが、かえって、背中にしらじらしい空虚を貼りつける焦燥となって、恐怖の悲鳴をほとばしらせたい衝動を呼んだ。
侵入して来た縄梯子を垂らした個処へ逃げ戻って、はじめて、視線をまわす余裕をとりもどし、追手の影のないのをたしかめて、ほっとした。
あれだけの手練者が、自分をこんなにかんたんに遁れさせる筈がない、という意識が来なかったのは、追われる恐怖が凄じかっただけに安堵もまた大きかったためであったろう。
急いでよじのぼって、塀をまたぎ越し乍ら、もう大丈夫だ、と自分に言いきかせた——それを待っていたように、短剣が、木下闇から、飛んだ。
「あーうっ！」
ふかぶかと突き立った背中を、海老のように曲げて、五体は、かんまんに傾くと、広い往還へ落ちて行った。
偶然であった。
傘もささずに、微醺をおびて、ゆっくりと足をはこんで来た眠狂四郎が、にぶい地ひびきをたてて、ころがったこの姿を、一間もへだてずに、目撃したのである。

すばやく、抱き起してみて、たすからぬとさとるや、
「おい――遺言があれば、きこう」
と、耳もとで、叫んでやった。
「……げっけい……げっけい寺の――」
「うむ。月桂寺というと、牛込河田窪にある秀吉寺のことだな？」
微かに頷いた。
「その月桂寺が、どうした？」
「天女の像を、き、きる！」
「きる？　斬りすてるのか？」
「さ、さよう――」
がっくりと、落ち入った。
狂四郎は、雨の中へ、そのなきがらを横たえると、しずかに立ち上がって、頭をまわした。濡れた闇の彼方に、こちらの様子を窺っている人の気配があるように直感された。勿論、影も見わけられず、耳につたわって来た音があった次第ではない。並の人間のものと違った鋭い感覚が、自身で働かすつもりはなくして、自然に働いていて、本能のように、目をそちらへ向けさせて、必ずそこに、ひそんだものをさとらせることになるのであった。
対手は動かぬ、と知って、狂四郎は、ふところ手で、悠々と歩き出していた。
――月桂寺の天女を斬る、か、なんの意味か？

これは、そこへ、身を運んでみるよりほかはないことだった。

二

来いと云われて、その行く夜さの
足の軽さよ、うれしさよ

やぞうをきめて、眠狂四郎のあとから金八が、久しぶりのお伴で、はずんだ陽気な声をたてて行く。——

牛込河田窪の、尾張、松平などの宏壮な大名屋敷の高塀のつらなった広い往還を辿って、月桂寺前へ至る。

「おや、山門は閉ってやがら。どこの寺だって、山門なんざ、夜鷹と同じに、年中あけっぴろげなもんだが——」

「ここだけは、別だろう」

この江戸で、豊太閤秀吉を祀った唯一の場所が、この月桂寺なのであった。江戸名所図会にも、このことは、遠慮して記されてはいない。

家康の覇業が成るや、朝廷でさえ、豊国大明神の神号を廃したくらいである。秀吉を祀る土地は、全土に何処にもない時代に、徳川氏治下の江戸にあって、この寺のみがその霊牌を置くことを黙認されているのは、いわれがあった。

天正十八年、秀吉は、小田原を討滅して、更に旗を奥羽に進めた時、足利左兵衛督義明の

女および成田下総守氏長の女を召して妾とした。京師へ凱旋するにあたって、氏長の女を還して、ひとり義明の女のみを携えた。秀吉が薨ずるにおよんで、義明の女は、落飾して尼となり、月桂院といった。

将軍秀忠の夫人は、淀君の妹で、月桂尼とは、幼少から親しく、これを江戸に招いて、一寺を建立して、与えた。すなわち、この寺――平安寺であった。

月桂院は、三基の位牌を祀って、晨昏その冥福を修した。中央に、先祖である足利将軍尊氏、左に義父である古河公方義氏、右に豊太閤秀吉を――。

月桂院は、八十八歳の高寿を保って、明暦元年をもって寂し、寺号は月桂寺とあらためられた。爾来、三基の位牌は、そのままに、後代に祀られつづけているのである。

しかし、なにぶんにも、秀吉を祀る寺に、公然と参詣するのははばかりあることであり、寺院側でも、公儀へ遠慮するかのように、常に山門を閉ざして、ひっそりと静謐をたもっているのであった。

ただ、当寺には、足利尊氏の御台所が所持していたという安産宝珠があって、この霊珠を拝すれば、難産の憂いがないと云い伝えられているので、そっと裏門をくぐる婦女子はいたのである。

「裏へまわろうか」

狂四郎は、金八を促して、旗本屋敷町を通りぬけて、薬王寺門前から、袋寺町の通りに入った。

すると——。

意外だったのは、静かだと予想していた往来に、ぞろぞろと列をなす賑わいがあったことである。彼方の月桂寺裏門を出入しているのであった。

「へっ、こりゃ、おどろいた。今年の春は、妊み腹の大当りか……。どうです、先生。猫を抱いた年増までが、神妙な面して参詣してやがら。

猫が、ころべば、
にゃん、と啼く
年増が、ころべば、
なんと泣く
いく、久しゅう、と
泣くであろ

てなあんばいで、孕んだか」

あたりはばからぬ大声に、年増は、咎めるように振りかえった。

とたんに、眸子を、狂四郎の貌に釘づけて、息をのんだ。

この驚愕の表情は、狂四郎の方で、これまで見せつけられたおぼえがある。淡路人形座のお吉が、そして、松平阿波守奥方が、見せた表情であった。

——この女も、かくれ切支丹か？

「金八——」

「へい」
「あの年増の胸をさぐって来い」
「胸を？」
「自惚鏡を持っている筈だ」
「どうなさるんで？」
「そいつに、おれの面が刻んであったらおなぐさみというところだ」
なんの意味かわからない乍ら、金八は、狂四郎のそばから、つと離れて行った。

女心のかなしさは
惚れて、こがれて
待ちわびて
逢えば、手軽に
脱がせた羽織
なぜに、こんなに
きせにくい、とくらあ

小意気な文句をうしろにきき流して、狂四郎は、裏門をくぐって行った。

三

——これは！

無頼な、虚無の男が、はっとなったことだった。

鐘楼にならんで、ま新しい祠がひとつ建てられていて、美々しい牡丹唐草の桟唐戸が左右に開かれ、参詣人の群は、蟻の列が甘きにつらなるように、その前で折りかえしていたのだが、歩み寄って、そこに祀られた一幅の画像を一瞥した瞬間、狂四郎は、大きな衝動を受けたのである。

画像は、東方阿閦仏の浄土に住む理想の美女を描いたものと、見てとれた。

仏教に説くところの極楽浄土を、女性の方面より分類すると、だいたい四種に分けられる、という。

一には弥勒菩薩の浄土、二には東方阿閦仏の浄土、三には西方阿弥陀仏の浄土、四には大日如来の密厳浄土である。

このうち、阿閦仏の浄土の女人が最も理想の容色と心を有する。

経に説いて——。

阿閦仏刹の女人は、妊身産時に身疲極せず、意に疲極を念ぜず、ただ安穏を念ず、また苦あることとなし、と。

いわば、子安の女人でもあるわけであった。

安産宝珠の霊験を、この画像をかかげることによって、さらに、あらたかにしようというのであろうか？

——うまく偽装した！

狂四郎が、衝動のあとに、冷やかに薄ら笑ったのは、目的が安産信仰でない、と看破したからであった。

画像の装いは、いかにも、阿閦仏刹の女人のそれに見せかけて、実は、さんた・まりあ像のすがたではなかろうか。その右手に抱いた嬰児（えいじ）は、幼いぜずす・きりすととおぼしい。

そして――。

女人の貌（かお）は、あの阿波守奥方に生き写しであった。

――だが、これは、かくれ切支丹の、まことの信仰の実践か？

狂四郎の脳裡（のうり）に、次に来たのは、この疑惑であった。

公儀をはばかる秀吉寺に、切支丹の聖母像をかかげて、かくれ信徒を呼び聚（あつ）める大胆不敵な行為は、あまりにも、野望が露骨といえる。

幕府に対する挑戦（ちょうせん）とも受けとれる。

これは、世間にひた隠しにして、その信仰をまもりつづける帰依（きえ）の人々の手で為（な）し得る業（わざ）とは、到底思えない。

何か、別の、大きな政治上の陰謀が、陰でくわだてられている――その予感が、狂四郎の胸に湧いた。

「おっ、こりゃ、すげえ」

いつの間にか、かたわらに、金八が寄って来て、目をまるくした。

「観音菩薩にしちゃ、生き生きしすぎて、有難てえよりも、もやもやっと、妙な料簡（りょうけん）になり

そうだ――といったら、あっしが下種ってえことになりやすかね？」

「お前の目の方が正しいようだ」

狂四郎は、金八がそっとさし出した品を受けとった。まさしく、お吉や阿波守奥方の所持していたのと、すんぶんちがわぬ青銅の磔像を秘めた、自惚鏡であった。

つと――狂四郎が、階に土足をかけて上がった。

勾欄うちに端坐していた二人の僧が、おどろいて立ち上がり、

「何をなさる！」

目に角をたてて、はばもうとしたが、狂四郎の動きの方が迅かった。

抜く手を見せず、無想正宗を一閃するや、画像は、悲鳴をあげて、胸から腰のあたりまでを、さあっと、刳り截られた。

階を降りる狂四郎の右手には、刳り截ったその画布があった。

「言語道断な！」

「なにを血迷うての振舞いじゃ！」

血相変えて、つめ寄る僧たちを無視して、すたすたと歩き出した狂四郎は、群衆の中から、思わず知らず口をついて出るおらしょの声を、ききのがさなかった。

四

記憶のいい読者ならば、狂四郎が、瀬川図書という若い旗本の家にあった雪舟「寒江独

釣」が二枚、いずれも真物である奇怪な事件を解いたことを、おぼえているであろう。

それは、懐風堂という骨董舗が、藤兵衛という酔いどれ名人をつかって、一枚の「寒江独釣」を、二枚に分離したのであった。

月桂寺を出た狂四郎が、その足で、おもむいたのは、懐風堂の店であった。

藤兵衛はまだ生きているか、と訊ね、離れで相変らず飲みつづけているという返辞に、

「これを、上下に剝いでもらいたい」

と、懐中から、刳り截った画像の一部を、さし出した。

懐風堂は、離れへ、狂四郎を、案内した。

「お安いご用でございます」

藤兵衛は、その画布を前にひろげられるや、久しぶりにおのれの神技をふるえる昂奮にかられて、みるみる、しゃんと、五体に鋭気を通して、眸子を光らせた。

竹刀を把って、片膝で画地の中程をふみおさえ、上一文字の端をつまんで、ぴいんと張った姿勢には、鵜毛でついた隙もなく、名人たる腕前が聊かもおとろえていないことをしめした。

四半刻も経たないうちに、首と足のない画像は、みごとに、二枚に、分離された。

狂四郎は、下のほうを、手にとった。

ありありと浮き出ている美しい豊かな裸身と、その頸にかけられている十字架を眺めて、

――やはり、そうか。

と、合点した。

画像が、ただの筆法で描かれたのではない、と見たのは、正しかった。

絵師は、まず、一糸まとわぬ裸身を描き、その頸に十字架をかけさせておいて、その上を阿閦仏刹の女人の衣裳で塗ったのである。

その日のうちに――。

狂四郎は、阿波藩邸に、江戸家老稲田八郎右衛門をおとずれて、阿波守奥方は、帰っているかどうか、たしかめた。

実は、あずけてあった岡っ引き佐兵衛の家に、藩邸から迎えが来て、奥方はかえって行った、という報せが、狂四郎のもとにあったのは、かなり前のことであった。

美千代――という、狂うた良人を守って、一藩の安泰をはかる辛苦を、信仰によって堪えて来た不幸なその婦人は、破戒無慙の浪人者に犯されることによって、はじめて、女のよろこびを知った瞬間から、生きる目的を、そこに見たのであった。

しかし、所詮は、すてられる身とさとって、自害をくわだて、それも果されずに、生きた屍同然の身を、牢獄にひとしい屋敷へはこばれて行った、と思われていたのだが……。

稲田八郎右衛門は、狂四郎の問いに対して、この人物としては、はじめて苦渋の色を、その面上に刷いた。

「奥方は、当邸に戻っては居られぬ。お主が守っていてくれるとばかり思うて居ったが、いつの間にか、敵の手に渡って居った」

「敵——と云われると？」
「敵と申すよりほかはあるまい」
八郎右衛門は、何故か、説明するのを避けた。
「てまえが、その敵から、奥方をとりかえしましょう」
そう云ってから、狂四郎は、ちょっと皮肉な微笑を泛べると、
「お手前様は、てまえが、そう申出るのを、待っておいでではありませんでしたか？」
「…………」
八郎右衛門は、こたえなかった。
「とりかえしたあかつき、奥方を、御当家へおかえしするかどうか、これは、てまえの存念次第にさせて頂きたい」

五

藩邸の表長屋の通用門から出た時、狂四郎は、提灯を携げていた。八郎右衛門から渡されたものであった。
行きがけには、月かげがあったのだが、落着かぬ花時の空模様は、もうその十三夜の光をかくしていて、濃い闇につつまれた街道であった。
風も出ていて、築地の上の樹々の梢を鳴らしていた。
——ひと雨来るのか。

意識には、それがあっただけであった。
実は、油断してはならぬ状態に、この身は置かれていたのである。
八郎右衛門が、送って来て、玄関で、云ったのである。
「お主が、ここへ来たことは、もう、敵に知れて居ろう。出れば、待ち伏せられていると考えてよい」
「それは、てまえも、考えていたところです」
狂四郎がこたえると、八郎右衛門は、沈痛な面持で、
「軽く見ないがよい。お主が、これまで対手にした敵のうち、もっとも力のあった者とくらべて、まさるとも劣りはすまい」
「それが、てまえのような男には、生甲斐ということになりましょう」
八郎右衛門は、用人が持って来た提灯を受けとって、狂四郎にさし出した。
「おそらく、お主が、三町とたどらぬうちに、この提灯を、抛ることになろうかの」
意味を含んだ言葉だった。
礼をのべて、街道へ出て、歩き出し乍ら、狂四郎は、例によって、危機にそなえるなんの緊張も持たなかった。
二町あまりを行って——左右が深い森になった。
待ち伏せている者が、いるとすれば、この木下闇の中であった。
平然として、足をはこんで行く——。

……と。
どこかで、微かな音がした。
——なんの音か？
咄嗟に、目ざめたように、狂四郎の脳裡を掠めたのは、短筒が狙撃の用意をしたことだった。
銃口が、ぴたっと、ねらいつけられたのを、自身の背中に、感じた。
地に伏せるための心構えを生み、すぐに、それをすてたのは、卒然として、八郎右衛門の言葉を思い出したからであった。
——そうか！
赤い滲み灯の中で、ふっと、笑った。
次の刹那——。
狂四郎は、身をひねりざま、提灯を、右の木下闇めがけて、投じた。
提灯は、そこの大きな樹の幹に当って、轟然と、炸裂した。
蠟燭には、爆薬がひそめてあり、これを投ずれば、炸裂するしかけになっていたのである。
ぱあっと白昼の明るさにかえったとみるや、濛として拡がる白煙に追われるように、樹陰から、一個の影が、軽やかに、後へ跳び退った。
右手には、短筒が握られていた。
狂四郎は、にやりとして、

「そちらの飛道具に対して、こちらには、この用意があった。……お互いに、人を殺す武器を腰にし乍ら、こうした真似（まね）をするのは、慙（は）じてよいことだ。この次の勝負は、使いなれたのでやろうではないか」

そう云いのこすと、しずかな足どりで、遠ざかって行き、二度とは、ふりかえらなかった。

裸女屋敷

一

「うめえことを云(い)やがるぜ、諺(ことわざ)ってやつは——」
どうやら、吉原(なか)からの朝帰りらしい金八が、まだ宿酔(ふつかよ)いのふらふら足で、木母寺の境内へ入って行き乍(なが)ら、独語をもらしていた。
「牛は水を呑(の)んで乳とし、蛇(へび)は水を呑んで毒とす、か。金八は水を呑んで、酔醒(よいざめ)の味を知らあ」
本堂の前を横切って、大きな百日紅(さるすべり)の樹(き)がかぶさっている車井戸に寄ると、棕梠縄(しゅろなわ)をたぐって、釣瓶(つるべ)に一杯汲(く)みあげて、咽喉(のど)から胸へこぼれるのもかまわず、ごくごくと飲んだ。
「うめえっ！」
そう叫んだとたん、頭上から、
「阿呆(あほう)っ！」
奇妙な声音で、あびせかけたものがある。
「何っ！」

目を剝いて、ふり仰ぐと、釣瓶柱の屋形の上に、一羽の黒い鳥が、ひょこんと、とまっていた。
金八は、鴉だと思って、
「けっ、縁起でもねえ、まっ黒野郎め、消え失せやがれ！」
きょろきょろと、小石を物色していると、背後から、
「色の黒いのは、吉祥だぞ、金八」
狂四郎の声が、かかった。
「冗談じゃねえ。人間、色と欲とで苦労するって――焼餅だとか、塗炭の苦しみだとか。九郎判官義経だって、苦労して、いくさに勝って、兄貴に殺されてまさあ」
「盗っ人の親玉を、大伴の黒主というぞ。福の神はえびす大黒、お前のような巾着切りを玄人と申すではないか」
「へへ、苦労も闇に、手と手がふれて、閨の小夜衣よし薄くとも、互いに誠をかさねづま、ってまっ暗闇もわるくはねえんだが……なにしろ、びっくらさせやがる。鴉が、口をききやがるなんて――」
「これは、鴉ではない。尾が短いし、くちばしのかたちが、ちがう。秦吉了という鳥だ」
「へえ？」
狂四郎は、左手をさしのべた。鳥は、ひょいと、手の甲へとび移ると、巧みに、ぴょんぴょんとはねて、肩へととまった。

金八は、薄気味わるそうに、眺めて、
「どうなすったので？」
「昨夜、更けて、死人とともに、やって来た」
「死人？　そら、ごらんなせえ。吉祥どころか――」
「寺へ死人が送られて来るのに、ふしぎはない。この鳥は、その死因を明らかにするために、ついて来たらしい」
狂四郎は、笑った。
離れに戻ると、あらたまった口調で、
「この鳥を肩にとまらせて、お前が、江戸中をねり歩くことになる」
唐突に、命じた。
昨夜――三更をまわった頃、梅若塚の前に、一梃の駕籠が置きすてられているのを、納所が発見して、何気なく、たれを揚げてみて、仰天した。
がっくりと首を垂れた死人が乗っていた。しかも、白麻に南無阿弥陀仏の六字の名号を記した経帷子を着て――。
住職の空然から報せを受けて、起き出て来た狂四郎は、一瞥して、肚裡で呻いた。
桜花の下で、円月殺法に挑戦して、引分けの豪剣をしめした雲弘流・遠藤竜三郎の、変りはてた姿に、まぎれもなかったのである。
狂四郎を呻かせたのは、頸根から胸部へ斬り下げた冴えた手練ぶりだった。

――この男を、一太刀で仆す者がいたのか！

これは、大上段から、まっ向に打ちおろした豪快な業の跡であり、遠藤竜三郎の上段にとった胎内刀に対して、これを使い得たのは、尋常一様でない自信といわなければならなかった。そして、見事に、勝っているのである。

遺骸の懐中には、狂四郎に宛てた短い一文が挿しはさんであった。

「餓狼すでに仆る。狂狗、前轍を踏む勿れ」

狂四郎は、主人のなきがらとともに駕籠にゆられて来て、その枕元に、きょとんとかしこまっている人語鳥へ、目をあて乍ら、

――おのれ自身を、狡狐にでも比しているつもりか。

と、心中に、冷笑しつつも、決意したことだった。名も顔も知らぬこの強敵を、必ず討ってみせる、――と。

二

三日過ぎて、人語鳥を肩にとまらせた金八が、江戸中をうろつきまわった疲れもみせずに、とっとと、木母寺へ戻って来た。

「胸にある程口へは出せず、出せば、阿呆とひと声に、わが身をなげく肩は鳥、とくらあ」

離れに、惘然として仰臥していた狂四郎は、やおら身を起して、

「ご苦労――」

　と、云った。
「苦労の仕甲斐が、あったんだかなかったんだか……ともかく、あっしのカンに、はてな、と来たのは、たった一度でさ」
「一度でよい。何処でだ？」
「桜田の、あそこは、御用屋敷と云うんですかい。長屋から、出て来たさむれえが、この阿呆鳥を見たとたんに、目を光らせたので、あっしが、近づいて、飼主をご存じじゃござんせんか、と訊いたら、おっそろしく冷淡な顔つきで、一向に知らん、とにべもねえ返辞をしやがった。たった、それだけでさ」
「見合わせた顔は、この鳥について、何か知るところがあった様子なのだな？」
「と、あっしゃ、見てとったんだが――」
「よかろう」
　狂四郎の鋭利な直感が働いていた。
　日比谷門外の、鍋島家のかこいこみになった区域にある御用屋敷には、公儀庭番が住む。
　将軍家の直命によって、隠密御用を勤める庭番は、その出入を厳秘に付して、行動の他に漏れることをふせぐために、散宿は禁じられていて、御用屋敷にのみ住んで、一切外間との交際を断っていた。
　思えば、庭番という役は、おそるべき非人間の生涯を送るべき宿命を背負わされていた。
　その職掌は、八代将軍の時、つくられた。御用御取次の手を経ずに、奥の番より御直御用

という下知があり、庭番は、左手に竹箒をもって、御駕籠台下（江戸城大奥と中奥の中間）で下座して、台命を拝した。左手に竹箒をもつのは、元来、その名称のごとく、内庭の監視に任ずる閑職だったのである。八代将軍が、ふと思いついて、これを諸大名の動静を探る隠密に使って以来、任務がこれに移ってしまったのである。

　将軍家より、じかに手元金を与えられる場合もあり、また勘定所より路銀の支給を領掌することもある。ただちに、大丸呉服店の一室で、予て備付けの農商工、僧侶、売卜者などに変装して、何処へともなく、出発する。もとより、懸命の任務である。中道で発覚して、非業の最期を遂げる者も尠くない。あるいは、忍び入った地において、一家を成して、十年も二十年も帰らぬ者もいる。いずれにしても妻子眷族に、便りを寄せることは宥されなかった。その費用は、勘定奉行指定地付近の代官に対して、一定金額の支給を委嘱する令状を持っていたので、心配はなかった。

　その庭番が、人語鳥に目をとめたことは、金八をして、江戸中をうろつきまわらせることが無意味ではなかったと知る。

　狂四郎は、動かずに、待つことにした。

三

　はたして――。

　その日の昏れがた、木母寺に一人の訪客があった。三十前後の武家の妻女であった。

方丈の書院で、狂四郎と対座しても、妻女は、べつだんの表情もしめさずに、おちついた声音で、
「主人をお斬りなされたのは、貴方様でございましょうか?」
と、訊ねた。
これは、遠藤竜三郎の正体をあきらかにする言葉であった。
庭番の一人が、金八のあとを尾けて、この木母寺をつきとめ、それを、この妻女に報せたのである。すなわち、遠藤竜三郎は、隠密であったということになる。
もとより、あの異形を誇示して、肩に人語鳥をとまらせて、市井を横行したのは、それだけの目的があったからであり、御用屋敷のおのが長屋にも住んではいなかったに相違ない。
狂四郎に真剣勝負を挑んだのは、兵法者として円月殺法をやぶって、剣理の妙をきわめようとしたのではなかったと、今にして判明する。狂四郎を討ち果すことも、その任務のひとつであったろう。
「わたしが斬ったのではない。何者かに斬られ、当寺へはこばれたのです。これは、信じて頂こう」
しずかに、こたえてから、狂四郎は、立ち上がり、
「墓へ御案内しよう」
と、促した。
墓地に出て、その一隅に盛られた土饅頭にぬかずく後姿を、遠く見まもり乍ら、

——何を語りかけているのか？

ふと、狂四郎は、湿った感慨にとらわれた。

良人が非業の最期を遂げても、これを公に、詮議してもらう訴えを宥されぬ身は、その墓にも、暗い宵をえらんで、人目を忍びつつ、詣でなければならないのである。

ここを訪れることにも、よほどの決意をもたなければならなかったろう、と推察された。

黙禱は、長い時間を費して、つづけられた。

やがて、妻女が立ち上がった時、背後に、狂四郎が歩み寄っていた。

「御主人の仇は、このわたしが討つことに相成ろう」

まず、そう云った。

「…………」

妻女は、俯向いて、こたえなかった。

「御主人の遺骸を、当寺へ送りとどけて来たのは、わたしに、よけいな手出しをすれば、貴様も、このざまになるぞ、という威嚇のためでした。ところが、おどかされて、黙ってひきさがるのは、性分に合わぬようにできている男で——これまでがそうであったし、これからも、死ぬまで、そうありたいと思っているのです。嘘はついて居らぬ、と信用して頂きたい。……貴女の御返答が、わたしに、御主人の仇を討たせる日を、早くすると考えているのですが——」

「…………」

「御庭番の妻たる身として、敵の立場にある無頼者には、こたえられないのは、ごむりもないが……」
「いえ」
急に、かぶりをふって、妻女は、ふりかえった。
「わたくしは、良人の職務を大切なものとは、すこしも考えて居りませぬ。人と生まれて、この世で最もあわれな、惨めなつとめだと存じて居りました」
「………」
こんどは、狂四郎が、黙っている番であった。
「良人は、それでも、職務に身も心もうち込むことに生甲斐をおぼえていたのでございましょうけれど、妻であるわたくしのくらしは、なんのために生きているのか、じぶんにもわからぬことでございました。……十年前、良人は、わたくしが、嫁いで十日目に、家を出て、行方を断ってしまいました」
「………」
「江戸へもどって参りましたのは、昨年の暮でございましたが、それも、御長屋の方からきかされただけで……とうとうわたくしは、会わずじまいでございました」
微かな溜息が、狂四郎の胸を打った。
しばらく、墓地には、重い静寂があった。高い樹立の梢を鳴らして渡る風の音も、かえって、この静寂をふかめるのに役立っているようであった。

ふいに、妻女は、はっきりと教えた。
「良人は薩摩に忍び込んで、十年間、すごしたのでございます」
――そうか！
狂四郎は、眼前の煙幕が散ったように、自分に合点した。
――あの胎内刀を、大上段から一太刀でやぶったのは、自源流だったのだ。
自源流は、薩摩にのみ伝えられている豪壮無比の剣法であった。
「貴女の御主人が、蘇鉄の根元に、笄をさし込んでおいたのではありませんか」
狂四郎は、宵闇の中で、皓い歯をみせた――。
蘇鉄問答――この逸事は、すでに、公儀にかかわりをもつ者で、知らぬ者はいなかった。
某日、島津斉興が、将軍家へ御機嫌伺いに出た。
家斉は、日常の語らいをしているうちに、ふっと、思い出した様子で、
「お許のところの庭には、見事な蘇鉄があるそうな」
と云った。
斉興は、「それは三田の屋敷の庭の蘇鉄のことを御意あそばすか、それとも、装束屋敷の方のを――？」
と反問した。
すると、家斉は、からからと笑って、
「いや、薩摩の庭の蘇鉄のことじゃ」

と、云った。

斉興は、苦笑して、

「御冗談を仰せられます」

と、かぶりをふった。

薩摩の庭を、いまだ曾て、公儀の士で踏んだ者は一人もいなかったのである。将軍家が、そこにある蘇鉄について、知っている筈がなかった。

「冗談ではない」

家斉は、急に、まじめな面持になると、

「帰国のあかつきに、一番大きな蘇鉄の根元を掘って見よ。葵の紋を彫った笄が埋けてあろう」

と、明言した。

愕然となった斉興は、三田の上屋敷にもどるや、ただちに、国許へむけて早馬をとばさせた。

家斉の言葉に、まちがいはなかった。

――いかに、国境を厳重にし、公儀を無視しようとしても、隠密を忍び込ませて、その企てるところはのこらず調べあげてみせるぞ。

と、暗におどかしたのである。

近時、幕府単本位政権に対する批判が、国典の研究者たちの思想とむすびついて、漸く、

天下の大勢は、潜運黙移、尊皇主義に向かいつつあった。この思想が、瞭然として、倒幕の運動に移る趨勢こそまだなかったが、公儀としては、これを未然に、禍根を断とうとしてあせっていた。

江戸表においてこそ、表面なんの不穏の空気もなかったが、京にあっては、処士横議の取締りは厳しく、不穏浪士の詮索に、寧日ない状態であった。

そして、捕縛される浪士の中には、必ず薩摩出身者が、交っていたのである。

公儀の、薩藩に対する警戒心は、日々にたかまっていた。

遠藤竜三郎は、薩藩に擡頭している尊皇思想の状況を探る隠密だったのである。

突然――。

暗い梢で、

人語鳥が、啼いた。

「阿呆！」

狂四郎は、胸中で呟きすてた。

――人間と人間が、殺し合う。鳥には阿呆としか見えぬ。その阿呆な行為を、これから、おれは、やりに行く。

四

今宵も、小雨が闇の中に落ちていた。

風が絶えて、まっすぐに、糸を引くように、落ちて来る雨は、意外につめたかった。
小石川大下水に沿うた往還で、伝通院の森を左手に仰ぐ地点であった。
先手組や大御番組などの旗本屋敷町でところどころに寺院の土塀をはさんでいるもの寂しい通りで、傘もささずに、ゆっくりと歩いて来た狂四郎の孤影が、辻番所の灯に浮きあがると、通り魔に似た凄味をただよわせて、番人のねむ気をいっぺんにさました。
やがて、大下水から、南への往還へ曲って、久保町へ入り、なおしばらく歩いてから、狂四郎は、立ちどまった。
「……ここだったな」
自分に頷いて、板塀を仰いだ。
先夜、背中に短剣を打ち込まれて、塀の上から落ちて来た者に出会わした場所であった。
それが、阿波藩士であり、ほかに二名が、屋敷内で斬られたことは、江戸家老稲田八郎右衛門の口から、きかされていた。
狂四郎は、遠藤竜三郎もまた、この屋敷にふみ込んで、仆された、と推定したのである。
尊皇倒幕を名目として、おそらくは薩藩出身者を中心として、大きな組織をもつ徒党ができていて、これがかくれ切支丹を利用して、何かの陰謀をくわだてている――と判断すれば、これまで解き難かった謎の部分が、容易に納得されるのである。
稲田八郎右衛門が、徒党の正体を知っていて、敢えて、狂四郎に告げようとしなかったのも、これは首肯けるところである。

もとより、徒党の本拠は、こんな小規模な構えではないに相違ない。

ここには、自源流の水際立った冴えをみせる当面の強敵が居るだけ、と判断してよかった。

今宵、狂四郎の為すべきことは、その強敵をやぶって、ここにとらわれているであろう阿波守奥方——美千代を、とりかえすことであった。

塀を乗り越えて、庭に入った狂四郎は、べつに気配を消しもせず、ふだんの足どりで、建物に近づいて行った。

闇は濃く、阿波藩士たちが忍び入った先夜とちがい、植込みの花の白い色は、その中に溶けて、見わけられなかった。それとも、もう雨に散ったのであろうか。

雨戸をたてていない母屋の障子を、朧ろな白さに見てとったのは、狂四郎の目が闇に利くからであった。

縁さきまで近づいて、ぴったりと閉じられた障子の内へむかって、狂四郎は、視線を送って、動かなくなった。全神経が、闇に瞠いた眸子に凝集した。

音はしないが、人はそこにひそんでいると、鋭く神経が直感していた。

——どう出て来るか？

対手を動かせるための忍耐は、すでに用意している。

雨中に身じろぎもせず、剣気を沈めて、待つ——この状態こそ、この男が自身の生きている確証をつかむ時である。

——どちらかが幽明界を異にすることになるのだ。急ぐ必要はない。ゆっくりやろう。

言葉にすればそんな不敵なおちつきであった。

と——。

狂四郎の平静をみだしたのは、突然、燧石を打つ音がして、障子が、灯影に、ぼうっと、明るくなったことであった。

敵は、自らすすんで、その影を見せようというのである。

——どうする？

焰のまたたきにつれて、障子に映る人影がゆらめきつつ、かたちを大きくした。有明行燈を前に置いて、障子に近づいて来たのであった。

狂四郎の立つ位置を透視するごとく、ぴたりと正対すると、

「参ったか、眠狂四郎！」

と、呼びかけて来た。

狂四郎は、こたえず、じっと目を据えているばかりであった。

黒影は、障子に手をかけるかわりに、腰から一刀を抜きはなつと、すうっと、大上段に構えた。

「来いっ！」

障子を顫わせて、大きく叫んだ。

狂四郎は、ふっと、薄ら笑って、

「自源流は、姿を匿すのを得意とするのか」

と、冴えた声音を投げかえした。

対手は、もはや動かず、無言をまもった。これは、こちらが動くまで、粘り強く、そうするのだと見てとれた。

狂四郎は、猶(なお)、幾秒間か、うっそりとした姿勢を保って、雨に濡(ぬ)れていた。

焔のまたたきが、つづくばかりであった。

急に、ざあっと、音たてて雨が強く降りそそいで来た——その一瞬。

「行くぞっ！」

狂四郎の口から、その宣言がほとばしったと思うや、五体は疾風のごとく、縁側へ躍りあがっていた。

しかし——。

狂四郎が襲ったのは、向かい合った黒影に対してではなかった。左方——二間のむこうの、灯影の映らぬ暗い障子めがけて、猛然と、飛んだのであった。

向かい合った黒影が、びゅっと、障子を斬り下げた時には、もう狂四郎は、めざすところへ達していた。したがって、そのひと振りは、いかにも、間抜けたものに見えた。

それよりも——。

その暗い障子に、人が一人、ひそんでいて、狂四郎に看破された狼狽(ろうばい)を、ひくい唸(うな)り声にして、抜き打ちに、障子を横薙(よこな)いだのであった。

向かい合った対手は、実は、囮(おとり)であったのである。

狂四郎は、横薙ぎの一閃を、充分の余裕をもって、躱しざま、無想正宗を鞘から滑り出させた。ぴいん、と刀の折れる鋭い響きが、雨の闇をつらぬいた。

刹那――敵は、折れ刀をすてて、畳の上を一間あまり跳び退く音をたてた。その手はしびれている筈であり、勝利は完全に、狂四郎のものとなっていた。

「おぬしは、闇を好む御仁らしい」

狂四郎は、云いかけた。

「こちらも、べつだん、おぬしの顔を見とどける必要もみとめぬ。ただ、勝負に敗れた以上、いさぎよく、今宵は、ひきさがってもらえるかどうか、だ」

沈黙があるだけだったが、その沈黙を承知したものと、狂四郎は、受けとった。

「囮になった御仁の方でよい。阿波守夫人をとじこめてあるところへ、案内をたのみたい」

狂四郎が案内された土蔵のなかには――。

一糸まとわぬ裸像を、太柱にくくりつけられた美千代が、なかば気を喪って、がっくりと、首を垂れていた。

その前に――床いっぱいに、絵絹を散乱させて、一人の絵師が、筆を把っていた。血走った双眸には、描くことよりほかに生きるすべを知らぬ、狂人と紙一重の才能を持った者のみが放つ光があった。

武士道異聞

一

「円月殺法のお手の内、是非とも拝見いたしたい」

西丸老中水野忠邦邸の表長屋にある武部仙十郎家の書院に入って来て、自分は隣家に住む使番夏目金十郎の弟数馬、と名乗って、すぐに、そうきり出して来たのであった。

まだ二十歳を越えたばかりの、前髪をつけてもいいような面立(おもだち)であった。直情の気質でもあろうが、江戸の水に染まっていない荒削りな野性の匂(にお)いをただよわせて、これは、眠狂四郎のような男の目には、新鮮で、小気味のいいものに映った。

久しぶりにふらりと、老人をたずねて来てみて、夕刻帰るときいて、待つことにして、出された酒に口をつけたところであった。

孤独で、酒杯を重ねる雰囲気(ふんいき)を擾(みだ)す不粋など、若い田舎者には、もとより、気づかぬことであったし、あるじの帰りを待っているひまに一手教えてもらおうと思い立ったら、矢も楯(たて)もたまらなくなったに相違ない。

数日前に、出府して来たばかりで、かねて国許(くにもと)で、狂四郎の剣についての噂(うわさ)をきいたもの

であったろう。
「わたしのは、邪剣と云われている。ごらんに入れる兵法ではない」
いったんは、肯き入れなかった。
数馬は、冷やかにことわった。
「真剣でもよろしいのです。斬られても悔いはありませぬ！」
不敵に、そう云いきってみせた。
狂四郎は、じっと、若々しい、生気の盈ちた面貌を見やった。
「よろしい。お対手しよう」
「ご承知下さるか！　忝ない」
「おのぞみ通り、真剣で——」
「かしこまった」
とび立つようにして、数馬は、書院を出て行った。
やがて——。
数馬は、白鉢巻を締め、なめし革の襷を綾どり、袴のもも立ちをとり、一刀を携げて、庭の飛石を白足袋で踏んで出た。
足場をえらんで、さっと白刃を鞘走らせると、びゅっびゅっと素振りを三、四度くれてから、ぴたっと腰に納めた。
書院から縁側をつたって来た狂四郎は、そのさまを眺めて、蒼白な殺げ頰に、薄ら笑みを

刷いた。
視線をまわした数馬は、不審げに眉宇をひそめた。
狂四郎が、無腰でいたからである。
庭下駄をツッかけた狂四郎は、植込みに寄って、ほんのりと紅を含んだ白い大きな花をひらいた辛夷の一枝を、無造作に手折った。
それから、やおら数馬に向きなおると、
「まいろう」
ひくく云った。
数馬の面上に、侮辱された憤りの色が滲んだ。
国許では、師範と立合って、互角の腕前を発揮して、麒麟児と称せられた若者であった。
——よし！　わしの剣が、華法でないことを示してやるぞ！
花を持つ片腕に血煙りをあげさせてやる闘志を全身にめぐらせると、一足引いて、下肢を八文字にとるや、抜きはなって、ぴたっと青眼に構えた。
狂四郎の方は、空いた左手を懐中に置いたまま、うっそりと彳んで、構えるでもなく、辛夷の枝を、胸前にかざした。
数馬は、花になかばかくれた異相の貌へ、らんらんと燃える眼光を送り乍ら、じりじりっと間合を詰めはじめた。
狂四郎のすがたは、どの部分を見ても、隙だらけであった。細められた目蓋のかげの黒瞳

には、鋭気らしい光は全く泛（うか）べられていなかった。

書院で、盃を把（と）っていた時と同じく、その表情には、ただ、物倦（ものう）げな暗い色が漂うているばかりであった。

数馬が、自身のはりつめた神経に、ふれて来るなんの気魄（きはく）もしめさぬ対手の静かさを、ふと不気味に感じたのは、皮肉にも、おのれの刃圏内にその痩身（そうしん）を容（い）れた瞬間であった。

それが、ふっと、一刹那（いっせつな）の躊躇（ちゅうちょ）となった。

と——どうしたのであったろう、水をあびたように、総身に戦慄（せんりつ）が走った。

狂四郎は、依然として、同じ姿勢をとって、眸子（ひとみ）を動かさず、瞬きもせずにじっと数馬を見戍（みまも）っているにすぎなかったのだが……。

——うぬっ！

まるで、金縛りに遭った者が渾身（こんしん）の力をふるって綱を切ろうとするかのごとく、数馬は、必死の勢いで、刀を上段に、ふりかぶろうとした。

その時であった。

突如として、隣家の数馬の家で——凄（すさま）じい呶号（どごう）と物音が起ったのは。

二

数馬が、呪力（じゅりょく）を解かれたように、表情を一変させて、

「ごめん！」

と、狂四郎にことわって、抜身をそのままに、わが家へ馳せ戻ってみると――。

碁盤がひっくりかえり、石が散乱した座敷に、兄の金十郎は、顔面を血だらけにしてもがいていたし、碁敵の御判役室崎修之進は、床柱を背にして、斬った脇差を猶両手摑みにして、狂気宛然の形相で、肩を大きく喘がせていた。

数馬は、狂四郎に試合を所望すべく庭さきを横切る際、二人が笑い乍ら、烏鷺をたたかわしている光景を見ていた。

何かのはずみで、どちらかが対手の態度を不埒と憤って、口論となり、この惨状をまねいたものに相違なかった。

「これは！」

数馬の胸に、驚愕とともに、おそろしい絶望が来た。

実は、数馬は、室崎修之進の妹小夜と祝言して、夫婦養子として、大阪にある藩邸留守居役金谷惣左衛門の家に入るために、出府して来たのであった。

許嫁の兄に、わが兄を斬られたのである。

部屋住みの身として、家中の若ざむらいたちが羨望する幸運を、つい手がとどくところに摑もうとした矢さき、兄たちが演じた惨たる喧嘩沙汰であった。

数馬は、眠狂四郎に真剣で挑んだおのれのおろかな行為を忘れて、

――なんたる狂愚！

絶望を憤怒に変えて、修之進を睨みつけた。

なかば虚脱していた修之進は、数馬に眼光を射られて、はっと意識をとりもどすと、その右手に携げられた白刃に、みるみる恐怖をあおられて、ずるずるっと、足を横匐（よこば）わせて、遁（のが）れかかった。

それに向かって、数馬が、一歩ふみ出すや、修之進は撥（はじ）かれたように、跳びあがって、廊下へ走り出た。

「待てっ！　卑怯者（ひきょうもの）っ！」

数馬は、猛然と、追った。

すでに、家の内ばかりか、周囲も騒然となっていた。

裏長屋の、どの家からも、叫び声があがって、あわただしく、人がとび出して来ていた。

……数馬は、庭の北隅（ほくぐう）の生籬際（いけがきぎわ）の蛍燈籠（ほたるどうろう）まで、修之進を追い詰めた。あとは、一太刀あびせることだけであった。数馬は、ゆっくりと、構えを中段から上段へ、移しはじめた。修之進は、眼球をとび出さんばかりにひき剝（む）いて、悲惨な恐怖の歪（ゆが）みを顔面に作った。

「数馬様っ」

のどを裂くような女の叫び声が、数馬のふくれあがった殺気を擾（みだ）した。

――もう駄目なのだ！　万事終りなのだ！

肚裡（とり）で、呻（うめ）きつつも、数馬は、うしろから、袖（そで）を摑まれると、刀身を宙に停止させた。

「数馬様っ！　おねがいですっ！」

「はなせっ！」

「おゆるしになって！　……兄をお斬りになっては、もう――」

「仇討だぞっ！」

「い、いいえ！　なりませぬ！　兄たちの諍いは、兄たちのあいだのこと……。意趣討ちではありませぬ。貴方が兄を斬っては、正しい成敗にはなりませぬ」

「はなせっ！　仇を討たねば、弟たるの面目が――」

「いいえ！　お裁きは、ご重役から――」

「うるさいっ！」

女をふりはなそうとする隙に、修之進が、脱兎のごとく走り出した。

「うぬっ！　卑怯者がっ！」

追おうとして、すがりついた女の重みに、足が苔に滑った。

三

数馬は、座敷のまん中に坐って、宙に目を据えたまま、身じろぎもせずにいた。

障子をたてきり、縁側から声をかける者に対していっさい沈黙をまもっていた。

兄の遺骸は、居間に移されて、そこには多勢の人々がつめかけていたが、数馬は、その死顔を見るのも厭だった。

弔問に来た藩士たちが、しきりに廊下を行き交うていたが、座敷に数馬がいるとは知らず、

「数馬は、修之進をわざと、にがしたというが――」

「修之進の妹にとめられての」
「……女の髪毛は、象をつなぐ、と申すが、はははは」
他人の不幸に対する本能的な快感を声音に含める者たちもいた。
数馬は、歯をくいしばり、両手で袴をちぎれるばかりに摑みしめた。
やがて、あわただしく、廊下を走って来る跫音がして、
「数馬様、飯倉様がお見えでございます」
と、用人が告げた。
数馬は、しかし動かなかった。
留守居役飯倉嘉右衛門は、修之進兄妹の伯父にあたっていて、数馬と小夜をめあわせて大阪の金谷惣左衛門の家に入れる仲人であった。
「数馬は、ここか！」
険しい声音で呼んで、障子をひき開けて入って来た嘉右衛門は、六十越えた、一瞥しただけで家中の小言役といった風格の老人であった。
「数馬、敵は仮す可からず、時は失う可からず、という史記の言葉を存じて居るか！」
先ず、そう云って、睨みつけた。
数馬は、俯向いたまま、無言だった。
「小夜に泣きつかれて、兄の敵を逃がすとは——いざという場合に、武士道の吟味を忘れ居って……なんのために、今日まで、剣を修業いたした？　もののふの道は、義を第一とし、

作法を守り、廉恥を知る気概を性根に据えてこそ、臣下としてのつとめがはたし得るのじゃ。……貴様、修之進を斬れば、小夜との縁組が破談となり、金谷の家が継げぬ、と怯じたか？ 六百石がフイになるとおそれたか？ たわけ！」
「………………」
「数馬、返答せい！ なぜ、おのれの腕で討てる敵を、取逃がした？」
数馬は、こたえることができなかった。
嘉右衛門は、ふりかえって、
「小夜！」
と、呼んだ。
廊下に坐って、うなだれていた小夜がおそるおそる、入って来た。
「お前は数馬が兄を斬ると、破談になると思って、とどめ居ったのか？」
小夜は、ますます、うなだれた。
「そうであろうが……娘だてらに、浅慮もきわまる。数馬に恥をかかせて、この縁組が成立つかどうか、考えてみい！」
きめつけられて、小夜は、袂で顔を掩うと、畳の上へ俯っ伏して、烈しく歔欷きはじめた。
嘉右衛門は、数馬に向き直ると、
「よいか、数馬！ 貴様が、泣きすがる小夜をはねのけて、見事、兄の敵を討ってこそ、仲人たるわしの致し様もあろうと申すものだぞ。恋をすて、六百石をすて、義のために、武士

の道を正しく踏んだ貴様を、このわしが、むざと見すてると思うか。たとえ、小夜が、兄を討った貴様に、不服を抱こうとも、わしが、伯父として、仲人として、面目にかけて、貴様との祝言を、立派に挙げさせ、金谷の家を継がせてやったのだぞ。貴様の方で、小夜をしりぞけるなら、わしが、小夜にまさる娘を、えらんでやり、意地でも、六百石を貴様のものにしてやったであろう。……この恥は、貴様一人の恥ではない。他藩にきこえて、嗤い者になったならば、この様な不心得者に禄を与えている水野家の恥辱となることが、わからんか！」

「………」

「数馬！　仲人として、申し渡す。小夜との婚儀は、取消すぞ」

「やむを得ませぬ」

「なんじゃ、そのしらじらしい態度は！　貴様、これだけの恥をさらし乍ら、一語の詫びも吐けぬのか！　胸中、一片の悔悟もないと見たぞ！　……貴様ごとき不届き者を、この家の相続人にすることは相成らん。たとえ、殿が、寛大の処置をとれ、と仰せられようとも、他藩へのきこえもはばかる。断じて、このわしが、相続させぬぞ。……修之進を討取っておいてこそ、金谷の家に入れずとも、この家を相続できたのだ。あるいはまた、貴様と小夜との間に出来た子を、相続に立てるよう、取扱ってつかわすことも考えられたのだ。不覚者めが——」

嘉右衛門は、それから、小夜にむかって、

「小夜、伯父の申し分に不服があるか？」
と、云った。
小夜は、身を起して、微かに、かぶりをふった。
「兄を救いたい一心はわからぬではないが、いずれは、切腹して、責をつぐなわねばならぬ者を逃がして、許嫁の男に恥をかかせたあさはかさを、充分に肚におさめておけい！」
「はい。……わたくしが、わるうございました。おゆるし下さいませ」
小夜は、両手をつかえて、平伏した。
嘉右衛門は、立ち上がって、
「小夜、参れ――」
と促して、さっさと出て行ってしまった。
数馬は、小夜が、なんの未練気もなく伯父について行くのを、全神経で感じた。
一人のこされた数馬は、そのまま、凄じい目つきで、宙を睨み据えたなり、微動もせずにいた。
堪えがたい孤独感が襲って来ていた。家中一統がことごとく、自分から面をそむけてしまったような気がした。せめて、小夜一人だけでも、伯父に反抗してくれていたならば、救われようがあった。
小夜も立ち去ってしまったいま、数馬は、ただこうして、暗澹たる孤独地獄の中に、坐りつづけているよりほかに、すべはなかった。

しかし、その状態は、影のように入って来た一人の人物によって、やぶられることとなった。

顔を擡(もた)げた数馬は、うっそりと立って、坐ろうともせぬ眠狂四郎を、茫然(ぼうぜん)と仰ぎ見た。

「いまの老人は、武士道の吟味について、講義されたようであったな」

「……………」

「問題は、お手前が、あの講義を、正しいことと受けとったかどうかだ」

「……………」

「武士道の吟味が、人間にとって第一義の大切なものか、これは、素浪人のわたしなどには、わからぬ。ただ、わたしにも、はっきりとわかるのは、武士道の吟味を口にする者が、必ずしも、人間として吟味されて、立派だとは云えぬということだな」

「その証拠を、お手前は、見たくはないか」

狂四郎は、そう云って、皮肉な微笑を口辺に刻んだ。

四

わが家へ戻っていた飯倉嘉右衛門は、修之進が来たと用人に告げられると、

「ここへつれて参れ」

と、命じた。

居間に入って来た修之進は、土色の顔にまだ異常な昂奮を滲ませ、髪を乱し、返り血をあびた衣服もそのままであった。

数馬に襲撃されるのをおそれて、家へは逃げ込まず、どこかにかくれていたものに相違なかった。

嘉右衛門は、いまいましげに、その惨めな様子を眺めやったが、

「たわけ者めが——」

ひくく、罵った。

修之進は、崩れるように坐って、哀訴するように、瞥と伯父を見やったが、すぐ、俯向いた。

「修之進、お前には、切腹する度胸があるか？」

問われて、修之進は、悪寒に襲われたように、膝に置いた手を、ぶるぶるっと顫わせた。

「度胸なぞ、あるまい。……度胸もないくせに、朋輩を斬って——おのれは切腹、家は断絶ぐらいの事を念頭に置かなかったか。たかが、碁石の一目二目の取りあいのことで、逆上して、人を殺すなど、あきれはてた短気者め。……小心ならば小心らしく、碁打ちをやるなら、何故に無腰でやらなんだ！　莫迦めが——」

「伯父上！」

修之進は、必死の形相で、嘉右衛門を瞶めた。

「何卒、助命を、お上にお願いして下さいませぬか。格別の慈悲を仰いで……」

「それを、先程から、思案していたところじゃ」

嘉右衛門は、吐き出して、腕を組んだ。

「お、おねがい仕ります！」

修之進は、額を、畳にすりつけた。

しばらく、沈黙を置いてから、嘉右衛門は、

「喧嘩の理由を、こうせい」

「は――？」

「金十郎が、お前をだまして、御判を捺させ、用度金を借り受け、柳橋かどこかの芸妓につぎ込んだ。お前は、だまされていたことを知ったが、数馬と小夜との婚儀のこともあり、内聞ですませるべく、自身の貯えで、用度金をうめて、金十郎にその旨申し伝え、至急に調達するよう促したところ、口論となった。どうじゃ、これは？」

修之進は、活きかえったように、顔をかがやかせた。

「伯父上、ご恩の程は――」

「しっ！　声が高いぞ」

嘉右衛門が制すのと、次の間との仕切り襖が、音たかくひき開けられるのが、同時だった。

愕っとなって、振りかえった嘉右衛門と修之進は、蒼白なおもてに侮蔑の色を刷いた数馬を見出して、一瞬、石と化したように、驚愕の表情をこわばらせた。

数馬は、一歩大きくふみ込んで来ると、

「小父上が申された武士の道とは、おのれの甥の生命を救うために、死者におぼえのない罪の濡れ衣をきせることでしたか！」

と、あびせかけた。

もとより、嘉右衛門に、返答できる筈もなかった。

睨み合う、緊迫した沈黙は、修之進によって、狂気の発作にでも襲われたような、言葉にならぬ恐怖の叫びで破られた。

数馬は、修之進が、目も鼻も口も歪めて、ずるずるといざりつつ、中廊下側の襖際へ逃げようとする有様に、残忍な冷笑を泛べると、

「修之進！　尋常に立合う覚悟はないのか！」

「………………」

修之進の血走った眸子に、みにくい哀訴の色が滲んだ。

「なければ、やむを得ぬ！」

数馬は、ゆっくりと、三歩あまり進んだ。

「伯父上っ！」

修之進が、援けをもとめる悲鳴をあげ、

「数馬、待てっ！」

と、嘉右衛門が叫んだ。

次の瞬間——。

数馬は、ツツツ……と畳を滑るや、抜き討ちに、修之進を真っ向から、斬り下げた。
肉と骨を断つにぶい音とともに、血潮が噴水のようにほとばしって、襖いちめんへ、ぱっと、はねかかった。
それをじろりと見やった数馬は、
「数馬っ！」
呶号（どごう）しつつ、嘉右衛門は、つっ立ち上がるや、床の間へ走って、差料を摑（つか）んだ。
「小父上の腕前は、口ほどに達者ではござるまい」
と云いすてて、血潮襖を開けると、ずかずかと奥へ行って入った。
「乱心者じゃ！　出あえっ！　出あえっ！」
嘉右衛門は、絶叫し乍ら、庭へとび出すべく、障子をひき開けた。
とたんに――総身に、冷水をあびたように、立ちすくんだ。
縁側には、眠狂四郎の痩身が、背を見せて、佇んでいたのである。
動かぬ後姿は、嘉右衛門に、不気味な威圧をくわえた。
嘉右衛門は、狂四郎が向きかえりざま、一太刀あびせかけて来るような戦慄（せんりつ）をおぼえて、ごくっと、生唾（なまつば）をのみ込んだ。それから、じりじりとあと退（ずさ）って、身をひるがえすや、次の間へ走った。
「乱心者じゃぞっ！　出あえっ！」
嘉右衛門は、玄関へとび出して、咽喉（のど）をふりしぼった。とともに、狂四郎が、うしろから

迫って来る恐怖で、足袋跣で、おもてへ馳せ出ようとして、あっと、仰天した。
いつの間にか、冠木門のところに、狂四郎の後姿が、移って、うっそりと立っていたのである。
この時――。
奥で、女の断末魔の悲鳴があがった。
――数馬め！　小夜を斬った！
嘉右衛門は、烈しい眩暈をおぼえた。こんどは、自分が斬られる、と感じたのである。
門の外には、藩士たちが集まって来ていたが、狂四郎によって、扉は閉じられ、しかも、その当人が、まもっているのである。
嘉右衛門は、中廊下を出て来る数馬をみとめるや、反射的に、刀を抜いた。
数馬は、すでに、兄と妹を斬った刀を腰に納め、なんの乱れもない態度にかえっていた。
嘉右衛門が、青眼に構えている前へ来ると、冷たい目をあてて、
「うろたえられるな！　老いぼれ犬を斬る刀など、拙者は持たぬ」
と、云いすてた。
狂四郎は、扉を開いた。
ひそとして、固唾をのんだ一同にむかって、云いはなつ狂四郎の声音は冴えていた。
「夏目数馬、武士道の吟味を知るため、ただ今、兄の敵を討ち果して、当邸を退転いたす。これをはばむ者に対しては、この眠狂四郎が、代って、おあいていたすことになる」

忠義父子

一

五月五日——端午。

今日より、武家方の礼服は帷子になり、町家では、単衣にかわる。たとえ、まだうすら寒い日であっても、当時は、このならわしを勝手にのばすことはしなかった。気分をあらためるためであったからである。

この日は、市中、どんな貧しい家でも柏餅を食べ、職人は節句休みをし、子供たちは手習いの師の許へ祝賀をのべに行く。

武家方大奥では、絹縮緬と絹糸をもってつくった薬玉を、屋内の諸処へつるす。その名の通り、匂いの薬を籠めてあるために、緑風にゆれるにつれて、ゆかしい香をただよわせる。

通りは、進物を抱えた人々の往き来で賑い、菖蒲売りの声が、いちだんと高くひびく——。

そして、どの家の軒にも、菖蒲は葺かれているのであった。

山下から、下谷広徳寺前へ入る通りは、左右が旗本屋敷で、平常はもの静かなのであったが、この日は、正月にまさるともおとらぬ数の礼服姿が、袴を鳴らして行き交うていた。

ひとり、そのなかを、眠狂四郎の黒の着流し姿が、佳辰とは、なんのかかわりもない孤独の翳を、とがった肩のあたりに落して、ゆっくりと歩いて行く。そのうしろで、やぞうをきめた金八が、盛装した武家娘を、目の栄耀にして、きょろきょろと右顧左眄するさまが、おもしろい対照といえた。

「へへえ
　皐月五月雨よもぎに菖蒲
　わたしゃお前に幟ざお、ときたか、
　鯉も色よく吹きながし
　武者人形に鷹弓矢
　飾兜に青竜刀
　鍾馗で惚れて、金時かけて、
　抱いてくるんだ柏餅
まことにはや、いずれが、あやめ杜若花、という眺めさね」

でたらめをうたい乍ら、武家娘が視線を向けると、わざと、ひょうきんに首を振ったり、腰を振ったりしてみせて、忍び笑いさせていた。

「金八――」

狂四郎が、前方を向いたまま、呼んだ。

「へいっ――何でそろ？」

「菖蒲(あやめ)や杜若花ばかりに、見とれずに、仏前草(しきみ)も交っていることに、気がつくがいい」
「縁起でもねえ。……どこに？」
横へ出て来て、首をのばした。
狂四郎が、頤(あご)で示したのは、二十歩あまりさきを行く中年の武家の妻女であった。
「ありゃあ、なんの変哲もねえ武家後家じゃござんせんか」
「あの後姿には、死神がとり憑(つ)いている」
「先生、いつから八卦見(はっけみ)におなんなすった？」
「自害をすると見た。場所もあててみせる。亡(な)き良人(おっと)の墓前で、だ」
「こいつは、趣向だ。作法床しい武家後家の追腹じゃねえ追いのど突きなんざ、まだお目にぶらさがっていねえから、とくと拝見いたしやす。……先生、はずれたら、どうしなさる？」
「昼の蛍(ほたる)にしてやろう」
「有難てえ。夜の遊びに疲れて昼は、露をたのみの草の上、と来た」
狂四郎が、何故(なにゆえ)に、その切下げ髪の武家の妻女の後姿を、一瞥(いちべつ)しただけで、覚悟の程を読みとったか——これには、例によって、狂四郎の鋭い直感力が働いたことと信じて、金八は、遽(にわか)に、緊張して、自然出足もはやくなった。
しかし、つと追い越して、巾着切(きんちゃくきり)特有のすばやいぬすみ見をくれたが、その妻女のおもてには、ものしずかな、すずやかな表情があっただけであった。

二

陽が傾いて、墓碑の片面だけがあかるく浮きあがっていた。
墓地特有の静寂が、たそがれの濃い陰翳を、森厳なものに印象づける——
ここは、それぞれ由緒ある家柄の武家の墓碑がならんだ一郭で、眺めは、古雅とさえもいいたいような、美しいたたずまいなのであった。
狂四郎と金八が尾けて来た妻女は、南端にある墓碑の前に、ぬかずいて、それきり、もう長いあいだ、自身も石と化したように動かないのであった。
狂四郎と金八は、中空に大きく樹冠を拡げた樟の大樹の陰に立って、これを見戍っていた。
辛抱を必要とする見物であり、金八の方は、焦れて、幾度も、狂四郎の顔色を窺っていた。
狂四郎の冷たい無表情は、みじんも易らなかった。
やがて、妻女は、動いた。
金八は、妻女が、紫色の扱きをとり出して膝をしばるのを眺めて思わず、ごくっと生唾をのんだ。
狂四郎の言葉は、的中していた。
——やりやがる！
金八は、狂四郎に何か囁きかけようとして、そのあまりの冷然たる様子に、声をのみ込んだ。

妻女は、地面に正座すると、しずかに、懐剣を、胸から抜きとって、鞘をはらい、杉原紙で、きりきりと刀を巻いた。

狂四郎たちの立つ地点から、其処まで、約十間余の距離があった。

当然、狂四郎が阻止するものと思い込んでいた金八は、妻女が、目蓋をとじて顔を仰向け、切先を燦と夕陽に煌かせて、のどに擬すや、

——いけねえ！

「先生っ！」

思わず、呼んで、

「ど、どうなるんで？」

「死ぬだけのことだ」

狂四郎は、まばたきもさせず、青く冴えた眸子を据えて、躊躇なく、こたえた。

「そ、そんな——」

あわをくって、金八が、樹陰からとび出した——その瞬間、妻女は、作法みごとに、おのがのどを突いた。

明るい宙に、血は、数尺も噴き散った。

あっと棒立った金八は、妻女が、懐剣を、のどから抜きとりざま、胸を深く刺して俯っ伏すまでの動作を、ただ、茫然と見戍った。

はっとわれにかえって、

「先生っ！」

と、怒鳴って振り向くと、狂四郎は、すでに、樟の大樹をはなれて、数間かなたに、後姿をみせていた。

しばらくの後、幡随院門前町の小料理屋の二階にあがった狂四郎と金八は、金八の日頃のおしゃべりが出ないままに、妙に重苦しい座を持つこととなった。

金八は、いまいましかった。この人のためなら生命も惜しくはない、と思い込み、命じられれば、どんなはなれ業でもやってのけるし、げんに、これまでそうして来たというのも、世間のまともなくらしの埒外で生きているようにみえて、いざとなると、人間の一番大切なものがこれだと示す鮮やかな機宜に出てくれることへの信頼があったからこそである。無学で、やくざな金八にとって、狂四郎の行動こそ、生きて行く上での規範となり、それが自身のよろこびともなっていたのである。

それが、今日こそは裏切られた。

その不快さは、金八の気分を堪えがたいものにしていた。

台の上へ、銚子が十数本も並んでも、金八は、酔わなかった。

床柱に凭りかかって、目蓋をとじていた狂四郎が、やがて、

「金八——おれを、さげすんでいるようだな」

と、云った。

「なさけねえと思っていまさあ」
金八は、しめった声音で、こたえた。
「悩みや悲しみで死のうとした者であったら、おれは、止めたろう」
「じゃ、あの後家は、よろこんで死んで行ったと仰言るんですかい？」
「よろこんで——かどうかは知らぬ。ただ、はっきりとしているのは、あの女は、もしおれが止めようとしたら、おれをさげすんだであろうということだ。あの女には、この端午の日に、自害することだけが、のこされていた」

三

もう二十日ばかり前になろうか。おれは、三田の有馬上総介の上屋敷裏手の坂道を通りかかった際、ふと何気なく、右手の丘を見やって、足を停めさせられた。
おれに興味を起させる光景は、大人の斬りあいよりも、子供の無心な遊戯であることは、お前も知って居ろう。といって、もはや、子供たちからも面をそむけられるおれが、そこにその無心な遊戯を見出しても、足を停めるまでにはいたらぬ筈だった。
おれが、興味をおぼえたのは、その遊戯が、生死を賭すばかりの熱意をこめられて為されていたからだ。
一瞥しただけでは、のどかな初夏の風景だった。
まだ前髪立ちの、十四、五歳の、小姓と思える少年が、鞠を投げているだけのことだった。

鞠は、五色の糸でかがられた綺麗なしろものであったし、少年は、眉目麗しかったし、遠い距離を置いたのであれば、微笑ましい光景と見て、おれは、通り過ぎて行ったろう。

　少年のおもてには、異様なまでに必死の色がみなぎっていたし、繰返すその技の、一投一投に、狂気じみた真剣味がこもっていた。

　歩数をかぞえて、距離を測り、それから充分に身構えると、渾身の力を聚めて、投げる。鞠は、空中に弧を描いて飛び、丘上に立つ一本松の根かたに落ちる。

　おれは、黙って、四半刻も、その単調な繰返しの動作を見戌っていた。

　たぶん、その幹に当てたいのであったろうが、力がおよばないのだ。

　やがて、疲れとともに、手もとが狂って、鞠は方角をまちがえ、おれの足もとまで、ころがり落ちて来た。

　おれは、それをひろいあげてみて、普通の鞠よりもはるかに軽いのを知った。

　おれは、受けとりに降りて来た少年を、からかってみた。

「この中に火薬を仕掛けて、憎い敵に、投げつける——そんな意趣でも抱いて、練習をしているのか？」

「それがしは、敵など持ちませぬ」

「では、懸想した女中に、恋文でも封じて、投げるつもりか？」

　おれは、笑って云ったのだが、これは、偶然にも的中していた。

　少年の顔色が、その企図をかくさなかった。

「当ったな」
「当りました」
少年は、率直にみとめた。
「……それから、それがしは、切腹いたします」
この言葉は、昂然と、胸を張って吐かれたものだった。
「切腹とはおだやかでないな」
「武士の意地です」
「どういうのだ？」
おれは、鞠を、丘の上めがけて、投げてやった。鞠は、一本松の幹に当った。
少年は、おどろきの眼眸を、おれにあてて、しばし、息をのんでいたが、急に、堰を切ったように、喋りはじめたことだ。
少年は、真神佳之助といい、有馬上総介の表小姓だった。佳之助の父儀八郎は、その身直にして影を曲げず、といった至誠廉直の士で、先代の主君上総介が吉原がよいの味をおぼえて内証逼迫を知りつつ、厚袱の仕掛や金襴緞子の俎帯を、馴染女郎に呉れてやるのを憂えて、いくどか諫言したが、これが一向に肯き入れられないとみて、ついに、腹を切って、血書を記しのこした、という。それでもまだ、主君の遊興はおさまらず、公儀の手によって、隠居させられたそうな。
当代上総介は、これはまずまずの人物で、儀八郎の忠義にむくいるために、佳之助を召し

て、太刀持ちの表小姓にしたわけだった。
お前もきいて居ろうが、大名のすまいの表と奥は、御錠口で厳重に仕切られている。主君の出入のほかは、常に錠がおろされている。主君の出入は、鈴を合図とする。
佳之助は、主君について行き、御錠口で、太刀を、表使いの女中に受渡ししているうちに、澄江という三歳年上のその女中から、恋文を渡された。
太刀は、帛紗で受渡す。恋文は、その帛紗にひそめてあった。
佳之助は、それが五通を越えるまでは、知らぬふりをしたそうな。やがて、女に負けた。三度に一度の返辞が、二度に一度となり、ついに、その度毎のやりとりとなった。
もとより、恋の文句も、しだいに烈しいものになって行ったろう。
お前の伝でやれば、書送る、文もしどなきかな川で、抱いて寝よとの沖越えて、岩にせかれて散る波の、雪かみぞれか、みぞれか雪か、解けて淡路の二つの文字、というところだ。
晴れて添えなかった節は一緒に死のう、と誓いあって、三月が過ぎた。
女が男を振る時の冷たさは、これは、お前に教えるまでもあるまい。文字通り、てのひらをかえす。
ある日、佳之助がさし出す太刀を、澄江は、顔をそむけて受取った。翌朝、主君が奥から出て来る時、帛紗の中に、澄江の返辞は、ひそめてなかった。二人の仲は、そこで、切れた。
切れなかったのは、十五歳の少年の、一途にのぼりつめた恋慕の情だった。
間もなく、佳之助は、太刀持ちの役を替えられたが、これが、老女に訴えた澄江の讒口に

よるものと判るとともに、主君のお声がかりで、澄江が、近習の一人に嫁ぐことになったときいた。

女に裏切られた男の怒りは——これも、お前には、先刻承知のところだろう。去年、山下の水茶屋の女を、半殺しの目に遭わせた若い巾着切がいた、ときいて居る。

恋しさあまって、憎さが百倍——。この料簡は、巾着切も小姓もかわりはない。いや、はじめて、恋をおぼえた童貞の狂気だ。女郎摺れした巾着切の逆上とは、くらべもなるまい。

ただ、そこは、氏素姓のちがいで、巾着切はとびかかってはり倒すが、小姓の方は、鞠の一手を思いついた。

すなわち、女のくれた恋文をのこらず、鞠の中に仕込んで、主人や女中たちの面前で、女の顔へ、たたきつける——これだ。

そして、おのれは、その場で、腹を切って果てる。

いかにも思いついたものだ。若気のあやまちを、自身で片づける手段としては粋の小味がきいて居る。

「おぬしは、切腹の作法をご存じか？」

おれは、訊いてみた。

「父のあい果てた場を見とどけて居ります」

「成程——」

その壮烈な光景が、脳裡に刻まれていて、これをえらぶにいたったに相違ない。

「母上は、おいでか？」
「居りまする」
「おぬしが、もし、そのような果てかたをすれば、嘆きは深いであろう」
おれが、柄にもなく、そう云うや、意外だったのは、その返答であった。
「いいえ、それがしの覚悟の程は、母もすでに知って、許してくれて居ります」
おれは、唖然となった。
普通の母親なら、驚愕して、その企てを阻止することに必死になるのが、当然ではないか。名を惜しみ、誉を求めて、武士の道をつらぬくために生命をすてるのであれば泪をのんで、これを為さしめる母親も居るであろうが、女に裏切られて憤死しようとする息子を、黙って許す武家女房がいるとは、信じ難いことだった。
その良人は、主君を諫めるために、切腹したのではなかったか。その子たる者が、何事ぞ、恋に狂って憤死しようとするのを、母親として、どうして、見のがそうとするのか？
これは、おれの胸に、不快な疑惑を生んだ。
「くどいようだが、母上は、たしかに、おぬしの企てをみとめられたのだな？」
「お疑いなら、母に会うて、たしかめて下されてもよい」
「母上は、おぬしに思いかえすように、いさめられはせなんだか？」
「一語も叱ろうとはいたしませんでした。男子の面目がそれで立つものなら、いたし方がない、と申してくれました」

「すこしも、とりみださずにか？」
この問いに対して、佳之助は、屹っとなるや、
「それがしの母は、どんな不幸に遭うとも、はしたなく自分を見失うような女性ではありませぬ」
と、こたえた。
そのこたえが、ますます、おれに、怪訝の思いをさせた。
そのように、婦道をまもることにきびしい母親が、何故に、まだ前髪も落さぬわが子の、武士にあるまじき振舞いを、未然にくいとめようとせぬのか？
しかし、これは、他人のおれの容喙すべき筋合ではなかった。
おれにしてやれたのは、鞠の投擲のコツを、少年に教えてやることだけであった。
……そうしておいて、おれは、その場を去った。
遠くはなれてから、おれの脳裡に、ふと、古い俚謡が、泛んだ。

　わしと、お母さと、糸とっていたら
　東窓から、文のり投げる
　わしに当らで、お母さに当る
　お母さ、わしょ見る
　わしゃお母さ見る
　採るに採られぬ水の月

おれが、はっと気づいたのは、さいごの〝水の月〟という句についてであった。
すべて、影というものは、暗いと考えられている。しかし、ただひとつ、例外がある。それは、水に映った月かげである。これは、明るく光っている。
おれは、少年の話をきいて、きわめてありふれた疑惑を起していたおのれのおろかさに気づいたのだ。
影の中には、光る影があるように、母親の中には、息子の死を望む母親もいるのだ。

四

おれが、その上屋敷の表長屋に、真神佳之助の母親をたずねたのは、それから四日後だった。
いかにも、有馬家の内証逼迫を物語る貧しいお長屋であった。
書院とは名ばかりの、畳も襖(ふすま)も、この家が建った時からそのままなのではないかと思わせる古びたたたずまいであった。
ただ、柱や廊下板が、みがき込まれて、美しく黒光りしているのが、容儀作法正しく生き継がれて来たことをしめしていた。尤(もっと)も、それが、室内の空気を、ひえびえとしたものにしているのは、まぬがれなかったが——。
あらわれた少年の母の容子や態度は、おれの想像たがわず、そのひえびえとした空気の中に坐るにふさわしかった。

指一本の動かしかたも、きびしい式法に叶っていた。

おれは、挨拶をすませるや、ただちに、訪問の目的をきり出した。

「……御子息が、恋文を封じ込めた鞠を、裏切った女に投げつける企てを、貴女が、母親として、何故に、おゆるしになったか、後学のために、おきかせ願いたい」

すると、妻女は、眉毛一本動かさずに、

「これも、お家のおんためと、存じまして、許しました」

と、こたえたものだ。

おれの推測は、はずれてはいなかった。おれは、恋文を封じた鞠を、裏切った女に投げつけることが、結果としては忠義となる――それなればこそ、母親は、敢えて息子を死なせようとしているのだと、そこまでは、判断し得ていた。ただ、その行為が、どうして忠義となるのか――この謎は、その母親に解いてもらうよりほかはなかったのだ。

「つまり、当藩先代侯は、遊里がよいにうつつを抜かされたが、御当代にも、淫事に狂う徴候があるのですな？」

これには、妻女は、俯向いて、なんともこたえなかったが、無言が肯定を意味していると受けとれた。

「貴女は、御先代に対して、御主人が為した忠義の行為を、御子息にもなさしめようと決意された？」

「はい――」

妻女は、はっきりと頷いた。

「孟子に、上好む者あれば、下必ず焉より甚しき者有り、という言葉がございます。わたくしは、たまたま、せがれが、ひそかに書きのこした遺書を発見いたしまして、お上の気風に染まったふしだらぶりに、ただただなさけない思いがいたしました。世の常の母なれば、その遺書をつきつけて、きびしくいさめるところでございましょう。わたくしは、その時、別の考えを持ったのでございます」

「………」

「わたくしは、せがれに、遺書をぬすみ見たことは告げましたものの、叱責するかわりに、決意したからには、みごとに腹を切って、男子の面目を保つがよい、と申渡し、自らの手で、女の文をまるめて、五色の糸で巻きくるみ、鞠をつくってやったのでございます」

そこまで語ってから、妻女は、影のように立って、書院を、出て行った。

戻って来た時、その手には、鞠がたずさえられていた。

「これが、その鞠でございます」

おれは、それを見て、合点がいった。

――そうであったのか！

「すると、御子息が持って居られた鞠の中には、殿様への諫言状が封じてあったのですな？」

「左様でございます」

母親は、同じ鞠をつくって、すりかえておいたのだ。

息子は、そうとは夢にも知らずに、必死の練習をやってのけたのだ。

……遠く、入相(いりあい)の鐘が、鳴った。

妻女は、顔を擡(もた)げて、なんの感情もあらわさぬ静かに澄んだ眼眸(まなざし)を、宙に送ると、云ったことだ。

「せがれが、みごとに、父に習うて、腹を切ってくれましたかどうか——もう、報(しら)せが参る時刻でございます」

狐（きつね）行列

一

江戸における天文学が、盛んになったのは、八代将軍吉宗（よしむね）の時世からである。吉宗は、屢々（しばしば）暦家を召して、享保（きょうほう）三年には渾天儀（こんてんぎ）を作り、また測午儀を作って吹上御苑（ふきあげぎょえん）中に置いた。一方、学術の開発に意を注いで、宗教書以外の洋書輸入の禁をゆるめたことも、有名である。

天文台がはじめて建てられたのは、その頃であり、これは、神田の囚獄の隣地にそびえていたが、のちに高輪（たかなわ）台地に移されて、爾来（じらい）、天文方が、日出の時限や最高度を測ったり、群星の運行を調べたりしていた。すでに、地動説は、将軍家治（いえはる）の時代に、麻田剛立（あさだごうりゅう）によってその理を明らかにされていた。

ちなみに、当時においてすでに、帆足万里（ほあしばんり）は「窮理通」を著わして、天文を論じ、銀河の存在を示し、恒星を説き、太陽が恒星の一にすぎないことを明らかにし、太陽系、黒点、日食月食の理を述べている。科学は、遅々とではあるが、封建の世にも、進歩していたのである。

眠狂四郎が、武部仙十郎の添状をもって、ぶらりと、高輪台地の天文観測所をおとずれた

のは、端午の佳辰がおわって、霖雨期に入ったのを思わせる照り降りのむし暑い一日であった。

べつに、天文暦術をききに来たのではなかったが、迎えた天文方の杜部欣次郎という青年が、その道に、異常な熱意をもっているために、一刻あまり、くだくだしい説明を、我慢してきかなければならなかった。

暦学の歴史について——はじめに用いられていた宣明暦が、保井春海によって改められ、さらに宝暦暦、寛政暦と作りかえられるまでの経緯を、杜部欣次郎は、まるで、狂四郎が、そのことに、自分と同様興味を抱いていることにきめて、熱心に語ったのである。

「……しかし、当代の寛政暦も、駄目なのです。清の時憲暦を基礎として、これを実測によって、京の子午線基準に直したものなのですが、支那の暦法がそもそもまちがって居るのです。暦法は、西洋に学ばなければいけません。……ラランドの暦書、というのがあります。私は、いま、これを読んでいますが、これこそ、本当の暦法を教えています。……太陰の朔望をもって、月を立てて、太陽の運行に合わせるから、二、三年間に必ず、閏月を置かなければならないのです。こんなばかげた話はありません。ラランドの暦書によれば、季候に早晩の変りがありません。四年毎に一日の閏を置けばよろしいのです。そうすれば、七千年の後に、わずか一日の差を生ずるにすぎないのです」

こういう、およそ退屈きわまる話を、狂四郎は、黙って、きいたのち、望遠鏡を覗かせて欲しい、と申出た。

欣次郎は、なお弁舌をふるいたげであったが、狂四郎がさきに立ったので、屋上に設けられた観測台へ、案内した。

四方が玻璃戸になり、江戸全景はもとより、武蔵野の果てにかすむ蜿蜒起伏の連山や、薄墨を刷かれたような房総の遠山が、のぞまれた。渺茫たる大海原には、布帆軽鷗が浮び、目をめぐらせば、富士の白嶺が、手にとるように、間近く感じられる。

だが——。

狂四郎が、国友一貫斎の作になるグレゴリー式の反射望遠鏡に、目をあてて、求めたのは、空でもなければ、地平の果てや海原の彼方でもなかった。

この観測所から、ものの五町もはなれていない地点——修験院御嶽坊の屋敷であった。

幼い新太郎を拉致して、狂四郎をおびき寄せ、その差料を二つに折り、輸入金六十貫の隠匿場所を白状させようとした奇怪な徒党のすみかであった。

表面を、修験道の経営と見せかけてはいるが、これは公儀の容喙を避けるための方便で、庶民を誑す目的においては山伏と同じだが、実は天下をねらう大それた陰謀が、その御殿内で、おしすすめられている、と狂四郎は、断定したのである。

すなわち——。

尊皇倒幕を名目として、おそらくは薩藩出身者を中心として、大きな組織がつくられていて、これがかくれ切支丹までも利用している事実につきあたった狂四郎は、蜂須賀阿波守奥方——美千代を救い出した時、率然として、その本拠こそ、修験院御嶽坊だな、と思いあた

ったのである。

……掌を指すように、御殿内が、くまなく、見わたせた。

「ふむ！」

何を目撃したか、狂四郎は、微笑を、口辺に刻んだ。おのれの直感が、正しかった、と知った。それだけ、たしかめて置けばよかった。

この時――。

同じく、一閑張り望遠鏡を目にあてていた杜部欣次郎が、急に、「ははは……」と、高い笑い声をたてた。

「眠殿。ご覧なさるがよい。あの街道――袖ヶ浦の前あたりのところを。安倍晴明という陰陽道の愚物が作った暦日の迷妄の亡霊が、まだ、大手をふって、歩いて居りますぞ……。くだらぬ！　一年間の日数に、吉凶を割りあてて、何の日は転居はいかんとか、何の月に祝言するのは吉だとか、勝手に縁起をくっつけて、御幣担ぎをやるだけではあきたらず、人間が、ついに、狐狸の真似をするとは、なんという蒙昧無智愚劣！」

二

まさしく――。

それは、奇妙な光景であった。

総勢三十余名が、いずれも白装束をつけ、のこらず、白狐の面をかぶっているのであった。

先頭の者は、この白昼に、灯を入れた提灯を持っていた。そのあとを、油揚げを山に盛った三方をかかげる者がつづいていた。中央を行く輿には、紋服小袖に裃をつけて、白狐の面を俯向かせた男が乗っていた。輿のうしろからは、家紋入りの油単をかけた長持が、十棹もつらなっていた。そして、最後尾の者は、右手高くさしあげた松明から、赤黒い焔を燃えたたせていた。

狐の嫁入り——行列は、それだったが、それならば、当然、輿の中には、千代重ねの白無垢に、綿帽子をかぶった花嫁が乗っているべきなのに、反対に新郎が乗っているとは、頷けぬところだった。

沿道は、たちまち物見高い野次馬の群でうずまったが、しかし、いずれの目にも、珍しいものを眺める好奇の色はあっても、軽侮の光はなかった。

「なんでえ、おい、ありゃア？」

と、隣へきき、

「越前屋の婿取りよ、誓願によって、婿は、高山稲荷へお詣り仕り奉っているんだ」

と、説明されると、

「なある、——あとで、気に入らねえで追い出す段になったら、狐に化かされていたことにすりゃ、言い訳が立たアな」

と、合点していた。

「どうだ、おめえも、ひとつ、どこかの色後家のところへ、狐の婿入りしちゃ——」

「へへえ、おらア、もっぱら、女狐をあさっているからのう」

「そう云や、てめえ、古狸の面だ。狐なんぞとからかう主が、化けりゃ恐ろし古狸、って——」

「置きやがれ。こう見えたって、建仁寺をつくらせりゃ、天下の名人だあ。おかげで、手間賃が倍になって、毎晩たらふく、腹つづみを打ってら」

「べらぼうめ、庭師は二十文と相場がきまってるぞ。あんま上下十六文、百足は毘沙門、鼠は大黒天、猿は庚申、狐は稲荷、鳩は八幡、鴉は熊野権現——猫が面を撫でりゃ雨が降るし、障子に鳥影がさしたら客が来らあ。てめえが、くしゃみしやがる時には、嬶が間男してらあ」

「こんこんちきな、こんちきな、ってな」

　いつの世にも——。

　迷信というものは、絶えることはない。殊に、泰平久しく、庶民が安逸に慣れ惰弱に流れ、形式儀礼ばかりが面倒になると、この傾向は一層甚しくなる。

　盗難除けに不動を、火防に妙義社を、水防に水天宮を信仰し、観音とか地蔵とかが、霊験あらたかときくと、十里百里を遠しとせずにやって来る。浅草観音の仁王の股をくぐると疱瘡が軽くなるし、亀戸天神のお守札は雷を除けてくれるし、芝の四万六千日に売る青酸漿は、小児の百日咳をくいとめてくれる。京の四条京極の官者殿に、夷講の日、参詣すれば、それまでさんざん嘘をつき、詐っていても、その罪を免れる。したがって、年中、客をだまして

ばかりいる遊女が、続々と詣でる。誓文払い、という言葉は、ここからはじまったのである。
日蝕月蝕は日月の病であるから、家を挙げて謹慎して声をたてる者もない。雷鳴は雷神の仕業であるから、蚊帳をつり、線香を焚き、正月の松を燃やして、これを避ける。旱天には、百万遍が唱えられ、霖雨には天道念仏を喧しくする。人魂を見た者は多いし、幽霊の存在を疑う者はなかった。

方位の吉凶、夢判断、さては、長座の客を立たせるのに、箒を立て下駄に点灸し、笊を井戸につるして眼疾の平癒を希い、石垣に雪駄を挟んで咳を止めようとし、榎樹に飴をぬりつけて田虫を治そうとした。

反物を裁つにも、洗濯するにも、家を出るにも、人に会うにも、下紐の解けるのも、眉根の痒くなるのも――いっさいがっさい、日常の振舞いで、吉凶にむすびついていないものはなかった、といえた。

とすれば――。

いま、仰々しく、大真面目で、しずしずと狐の婿入り行列を、高山稲荷の境内にくり込ませる仕業も、人々の目に、さまで奇異と映らぬのは当然であった。

小網町一丁目にある呉服店越前屋が、家憲をまもる行事だったのである。

初代七郎右衛門は、明暦の頃、無一文の乞食同然の姿で、江戸へ出て来て、さまざまの商売に手出ししたが、悉く失敗してしまった。ついに、首を縊る恰好の松の枝ぶりをもとめて、高山稲荷の境内にふらふらと入って来た。ところが、思いがけなく、その松の枝に穢い木綿

袋がつるされてあった。手に把ってみると、十両あまり入っていた。好運は、その瞬間から、七郎右衛門におとずれたのである。

当時、呉服商は、たいてい掛売りしていて、即時に代金を払う必要はなかったが、そのかわり、正価に二、三割の掛値を加えてあった。七郎右衛門は、この習慣を破って、商品には悉く正札を付して、一文も掛値を加えなかった。代金は、即時払いときめた。これが当った。

たちまち、店の間口は、ひろげられ、手代の頭数は、増した。

五代を経た今日では、店の間口は六間、奥行十間の大構えとなり、四十数人の手代がずらりと居並んで、それぞれ、一人一種の部類に分れて、専門に取扱っていた。こうすれば、手拭い一筋、足袋一足と雖も、自由にえらばせるばかりでなく、至急を要する衣類に、顧客を待たせておいて、そのあいだに、仕立てて渡すしくみまでも可能であった。

初代七郎右衛門の遺言は、

「自分は、高山稲荷大明神様に、子孫七代の運を一身に享けるよう願掛けした。だから、これからあと、それぞれ、子孫七代の運を自身にさずかるように、願掛けをしなければならぬ。もし、そのあいだに、信仰にそむく代が出れば、その者は、まぬがれて来た累代の禍を、一挙に一身にひき受けることになろう。心に刻んで、信仰をおろそかにせぬよう——」

それであった。

妙な理屈であった。二代目は、子孫七代の運を繰上げてもらったとしても、自分を含める七代の運は、初代に奪われているので、八代目の子孫の運をわずかにもらうだけとなる。三

代目も然(しか)りである。したがって、この信仰は、代々、絶対に欠くことはできないのであった。初代が、子孫に、変心させないための巧妙にしくんだ仕掛であった。

ところが――。

四代を継いだ先代の頃、跡取り息子が、蘭学(らんがく)などに凝りはじめて、狐などをまつった神に礼拝しなくなった。

あわてた先代は、息子を勘当して、娘に婿を迎えて、店をゆずることにしたのであったが、その際、稲荷大明神に誓って、以後、越前屋においては、男の子が生まれれば里子に出し、代々婿養子にあとを継がせることを家憲にしたのであった。女の方が、稲荷信仰を、まちがいなく行えるという見通しであった。そして、婿を取る場合、狐行列をつくって、高山稲荷に詣でて、信仰を誓わせることにきめたのである。

ところで、当代にいたって、さいわい、生まれたのは、女の子ひとりきりであった。それが、年頃となったので、さだめによって、本日、婿取りとなった次第であった。

いつの間に、観測所を出て、この境内にあらわれたのか、眠狂四郎は、その狐婿が、輿から降り立って、しとやかな歩調で、社殿へすすむ姿を、とある神木のかたわらに彳(たたず)んで、じっと見戍(みまも)っていた。

と――。何を発見したのか、狂四郎の蒼白(あおじろ)い頬(ほお)に、皮肉な冷笑が泛(うか)べられた。

――そうか。まさしく、狐だな。稲荷大明神を、詐ろうというわけか。人間の欲と無智がつくりあげた信仰も、ここまで至ると、狂気の沙汰(さた)ということだ。信仰をつづけるためには、

その神をも詐らねばならぬ矛盾も生じる。

おぞましさに、狂四郎の足が、狐婿にむかって、自然と二、三歩進み出た。

頸根を押えて、その正体をあばいてやろう、という気持が動いたのである。

この時、すぐ近くで、遽に烈しい女の嗚咽が起こって、狂四郎の足を停めさせた。

頭をまわしてみると、神木の陰で、両手で顔を掩うているのは、まだ十七、八の小間使い風の娘であった。

三

小伝馬町の大丸屋、駿河町の越後屋、日本橋通一丁目の白木屋とともに、江戸屈指を誇る越前屋の、その宵の祝言は、三百余人の客を聚めて、一人当り十二両と、後日につたえられる豪華な宴であった。

一例をあげれば、座の中央に据えられた蓬萊の島台は、洲崎の砂が銀、三ノ山の松竹梅が金、鶴は銀、亀は鼈甲、高砂の尉媼は珊瑚、そして鯉も金むくで、その目は真珠であった、という。

媒人が高砂の謡ひと節をめでたく納めて、新郎が座を立ち、ついで、花嫁が紅小袖に服をあらためて、別の広間で、色直しの盃事が行われて、両者手をたずさえて、寝所に入ったのは、二更をまわった時刻であった。

寝所の初夜のかざりは――。

島台は鶺鴒（せきれい）、肴台（こうだい）は若松、屏風（びょうぶ）は鴛鴦（えんおう）、そして、紅梅縮緬（ちりめん）七宝総縫いとりの褥（しとね）は、天一生万物始を表わして、北枕に敷かれてあった。

それぞれの柱の下には、奉書折にのせた小香炉から、床しい香りが、漂い出て、めでたい夜気に溶けていた。

褥にならべられた大和錦（やまとにしき）の枕子（まくらふとん）が、なまめかしい風情（ふぜい）である。

ところで――。

寝所に入ったとたんに、思いがけずに変化した新郎と花嫁の態度が、並みの初夜とちがった光景を呈した。

屏風の前に立った花嫁は、綿帽子をとると、なんのはじらいもなく、新郎が膝（ひざ）まずいて、金襴（きんらん）の帯を解いてくれるにまかせたのみか、紅小袖を足もとに落して燃えるような緋縮緬の下着になると、さっさと、夜着の中へ、身をよこたえていた。

それにひきかえて、新郎は、そっと、屏風の陰にかくれて、紋服をぬいだ。白羽二重の寝間着すがたであらわれた時、いかにもはずかしそうに、肩をすくめ、袖で胸をおさえるようにして、褥の裾（すそ）へまわって坐ると、両手を畳につかえて、一礼しておいて、怯（お）ず怯ずと、花嫁の脇（わき）へ、入ったのであった。

……さきに、手をさしのべて、抱き寄せたのも、花嫁の方であった。

新郎は、目蓋（まぶた）をとじて、しんなりとかぶさって来た花嫁の口を受けた。

それなり……ふたつの若いからだは、ぴったりと吸いついて、動かなかった。

やがて、新郎の細腰が、花嫁の重みに堪えぬように、嫋々ともだえた。

それをきっかけにして、花嫁の四肢は、急に、いきいきとうごめいた。やんわりと肩にかけていた片手を滑らせて、新郎の胸のうちをさぐりつつ、一方の膝で、白羽二重の前を割って、熱い柔らかな内腿の奥へ辿った。

それまでは、ただ、口を合わせていただけであったのが、本能に教えられて、ともに絳唇をひらいた。

接吻――という。吻は、歯吻、口吻などの語があるように口辺、また口先のことである。ふたつの唇が合うように物事がよく合うのを、吻合という。接吻とは、ただ、唇を合わせることであり、ともに口を開けて、歯をふれて、舌を用いるのは、謂わない。この行いは、正しくは、口子嚼郁という。

郭舎人の詩の一句に「妃女の唇を齧むに、甘きこと飴の如し」とある。

本能の必然的な要求である。

新郎も花嫁も、十代であったが、これを知るや、遽に、血をたぎらせて、大胆になった。ふたつのからだは、烈しくわなないて、力のかぎり締め合った。息苦しさに離れた唇は、たちまち、吸いついたし、身もだえにつれて、からんだ双つの下肢は、拡げられ、捻じられつつ、まとうたものをすてて、ゆたかに盈ちた肉と肉とを摩擦させた。

そして、ためらい乍らではあるが、花嫁の片手が、新郎の胸のうちから抜け出て、胴を辷り降り、おのが太腿とあいての太腿の密着したところから、その熱さに焼けるような痙攣を

起しつつ、まさぐり入ろうとした——とたんであった。
母屋と寝所をつなぐ渡廊に、大勢の跫音がひびいた。あるじの七郎右衛門を先に立てた、六、七名の覆面の士であった。
渡廊に据えた金網行燈の明りに浮きあがった七郎右衛門の顔には、生きた色はなかった。
「ここか——」
一人が、七郎右衛門にたしかめて、障子を、ひき開けた。
新郎と花嫁を寝所に送り込んで、やれやれと、居間で夫婦がくつろいでいるところへ、いきなり、侵入して来た一団であった。
一人が、抜く手も見せぬ迅い峰打ちで、女房を失神させておいて、
「初夜牀へ、案内せい」
と、云いはなったのである。さすがは、これだけの大店を張るあるじであった。
「不粋なお振舞いは、お腰のものてまえ、後日の恥になるのではございませぬか」
と、やりかえした。
すると、対手がたは、せせら嗤って、
「われわれは、ただの押込みではない。御用盗と思え。但し、理由なくして、金子を強奪はせぬ。今宵の祝言に、不審があり、それをたしかめた上で、強奪の理由とする。貴様自身、胸におぼえはある筈だ！　立て！」
と、叱咤したのであった。

七郎右衛門は、やむなく、観念して、案内して来たのである。

……屏風が、蹴倒された。

褥の中で、ひしと抱きあった若いからだは、無慚に、掛具をひんめくられて、あらわになった。

次いで——。ひきはなされ、仰臥させられるや、二人の足くびは、侵入者たちの手にかかった。

「ひっ！」

「あ、ああっ！」

新郎も花嫁も、魂消る悲鳴を発して、もがこうとしたが、むだであった。

ふたつの下肢は、容赦なく、左右へ大きく、ひき裂くように拡げさせられ、纏い布をむしられた。新郎は、女であり、花嫁は、男であった。

「越前屋——」

指揮格の人物が、嘲笑を含めた声音で、呼んだ。

「考えたものだな。先代に、男の子が生まれたら、里子に出す、と定められたおかげで、貴様は、伜を娘として、育てあげなければならなかった。年頃になったが、伜であるからには、婿を取るわけには参らぬ。そこで、えらび出した娘を、男にしたてて、狐行列をさせた。これで世間の目はごまかせた。稲荷大明神も、賽銭の多額に免じてまあ、黙認してくれることになったらしい。浮世のことは金次第で、どうでも左右できる、と考えた貴様の料簡が、見

遁(のが)せぬぞ。われら、天下の為(ため)、貧民の為、一身をすてて、政道改革を企図する党として、貴様ごときやからの財力を削り取ることもまた、中正の所業と心得る。日月に私照なく、万民は、すべて、その世路(せいろ)をゆたかにする権利がある。貴様ら、ひとにぎりの商人どもに、天下の富が占められることは、断じて許されぬ！」

威嚇(いかく)して、要求したのは、三千両であった。

御用盗と称する一団は、裏通りから照降(てりふり)町の往還をまっすぐに辿って、荒布橋(あらめばし)ぎわにつないであった船へ、千両箱をかつぎ入れる手筈をととのえていた。

その橋袂(はしだもと)まで、七郎右衛門を、人質として、ひき立てて来る周到さであった。

月の光の増した深夜は、風音だけが空にあった。

「船頭――」

石垣を降りた一人が呼ぶと、それにこたえて、艫(とも)に蹲(しゃが)んでいた者が、やおら、身を起した。

「なんだ？」

透し見て、鋭く咎(とが)めるのへ、月かげの顔が、笑ったようであった。

「おぬしらが、せしめるとすれば、三千両が見当であろうか、と思っていたが、当ったようだな」

「貴様っ――眠狂四郎だな！」

「わたしの方も、初夜の寝所へふみ込む野暮な真似を考えていたのだが、おぬしらがやって

くれると知ったので手間をはぶいて、ここで待つことにした次第だ」
　狂四郎は、視線を移して、
「越前屋は、お前か」と、呼び、「伜が孕ましている小間使いがいることを、お前は、知っているか。知っていて、伜に、妙な祝言をさせたのなら、この三千両は、小間使いへの手切れ金になろう。もし、知らなかったのであれば、生まれる子が女であるのを祈るがよい。三千両は、この眠狂四郎が頂戴することになる」
　その言葉のおわらぬうちに、白刃が宙を躍って来た。
　狂四郎は、水音高く落ちたのへ、目もくれずに、鮒れた無想正宗を携げて、ゆっくりと、石段をのぼって行った。
「おぬしらは、修験院御嶽坊にひそむ面々と見た。国も肉親もすてて来た御仁たちだ。心おきなく、斬らせて頂こう」
　円月殺法の、水際立った腕の冴えが、ここでも、六個の生命にむかって、存分に発揮されることになった。

夜盗橋

一

両国の川開きが終ってから、数日過ぎたある早朝のことだった。
江戸の朝は早い、とはいえ、陽のさしそめたこの時刻に、人の集まる場所といえば、井戸端ぐらいのものである。
通りには、せいぜい豆腐屋と納豆売りが、のんびりした声をたてて過ぎて行く。まして、大きな屋敷のある往還は、打ち水できよめられて、しばらくのあいだは、全くの無人の静寂が、つづく。
ところが、今朝は、ここ——芝口の河岸道には、顔も洗わずに家をとび出して来た連中が蝟集して、大変な騒ぎであった。
江戸っ子の野次馬根性で、何事が起ったかも知らずに、あわただしい跫音をきいて、走って来た連中が、大半で、
「なんでえ、おう——土左衛門か？」
「土左衛門なら、百本杭だあ。第一、土左衛門ぐれえで、こんなに人が集まるけえ」

「そういうてめえ、何がなんだか、わからねえのだろう？」
「だから、こうして、覗いているんじゃねえか」
川面には、十数艘の猪牙が出ていて、若い衆が、しきりに、鉤のついた棹で、水底をさぐっているのであった。
汐が引いていて、岸の石垣や杭は、浮きあがり、鉤は、底にとどく模様であった。
この頃の川水は綺麗であって、透して見ることもできるくらいであった。汐留橋を過ぎたところでは、白魚も獲れた、という。
根気の要るこの作業は、夜明け前からつづけられていた。
人々の好奇を呼んでいるのは、若い衆が、はおっている半纏の背中の印であった。丸の中に、佐の字が入っていた。これは、駿河町で名主を勤める両替屋「佐倉屋」を示すものであった。
佐倉屋といえば、江戸で五指のうちにかぞえられる金持であった。
両替屋というのは――。
金銀銭の相場をたてる。これには、金銀を取扱うものと、銭を取扱うものと、二種にわかれる。前者を本両替といい、後者を脇両替という。真の両替屋というのは、本両替のことで、この資産は親子の間と雖も知らしめなかった。非常に莫大な資産であったことはたしかであった。資産の大小、本家、別家などの関係によって、自ら親両替と子両替とに分れ、子両替は、自分の店の遊金を以て、親両替に預けるようなしくみになっていた。子両替が取付けに

遭えば、親両替にあてて手形を振る。これを引受けてビクともせぬだけの金力を、親両替は、有っていたのである。

今日の銀行と同じく、両替屋こそ、商人の死活を左右する隠然たる権力者であった。しかも、銀行よりもはるかに巨利をむさぼったのは、預金に対しては、利子をつけなかったことである。ただ、当座勘定だけで、預金者には、振出手形を渡す。勿論、この手形は、何時でも、両替屋へ持参すれば正金になるので、兌換券同様に流通した。

佐倉屋の手形ならば、小判と同じ価値があった。

当時の預金の目的は、第一は、安全な保管であって利殖ではなかったし、第二は、なるべく多額の預金をして、両替屋の信用を買い、他日の資金借入れの便宜を得ようとするためであった。そのために、取引きしている両替屋によって、その店は確実だと保証されれば、商人の信用は不動となるのであった。

本両替中でも、最も大きな店である佐倉屋が、若い衆をくり出して、川の底を探索するのであったから、これは、何事だろう、と群衆が、好奇の目を投げて、その結果を知ろうとするのは、当然であった。

そのうち、誰が云い出したともなく、昨夜、十余名もの徒党を組んだ強盗団が、押入って、千両箱をびっしりと詰めた大函を奪い取り、車で運ぼうとしたところを、廻り方同心に目撃され、奉行所へ急報されたので、あわてて、この川へ抛り込んで、逃げ去ったのだ、と口から口へ伝えられはじめた。

「大函ってえのは、おめえ、千両箱が、百も入っていらアな」

「べらぼうめ。十万両の嵩と重さを知らねえか。おれたちの長屋よりも大きいやな。そいつを、どうやって、担ぎ出せるんだ。担ぎ出せたとしても、どぶんと、この川へ沈めりゃ、水を塞止めて、今頃は、溜池があふれて、愛宕下一帯は、洪水だあ」

「大層もなく、ほらをふきやがる。大函につまっている千両箱は、たったの五箱よ」

「たった、とぬかしやがら。たった一両の小判も拝んだこともねえくせに、五千両を、気やすく、たった、たアなんでえ」

「たった浮名を川竹に、って小唄にあらあ。流す鳥さえ、つがいはなれぬ鴛鴦の、中にさす月すごすごと、別れの辛さに袖しぼる、へへ、濡れ手で粟の、五千両――ほんに、欲しいじゃないかいな」

「やいやい、よだれをたらして、しがみつきやがるねえ」

二

ふしぎなことに――。

奉行からの出役の姿は、どこにも見当らなかった。佐倉屋が強盗団に襲われたともなれば、物々しい与力出役があり、同心、岡っ引、手先などが、ぞろぞろとしたがっているのが当然であろうに、これは、人々の不審を呼んだ。

実は、群衆の中に、たった一人だけ、廻り方同心が、交っていたのであるが、服装を、ふ

つうの武士とかわりのないものにしていたのである。廻り方同心は、八丁堀独特の小銀杏を結い、竜紋の裏のついた三つ紋付の黒羽織をつけて、御成先着流し御免で、袴をはかないので、すぐに、それと目立つのであった。

まだ三十前の、武芸で鍛えた逞しい体躯をもったその同心は、上司の指令によって、侘しい貧乏御家人の態を装って、顔を、鼠色の布で、包んでいた。

佐倉屋を襲ったのが、ただの強盗団ではなく、また、奪ったのが、金子よりも重大な代物であるという推定が、奉行所に、隠密の処置をとらせることになったのである。

……押入られたのは、駿河町の本店ではなく、日比谷稲荷に程近い、日陰町通りに面した別邸であった。

片側が、大きな大名屋敷になっていて、昼間でも人影の尠い地帯であった。

主人の仙右衛門は、五日に一夜の割で、別邸の方へ泊まりに来ていた。最近、嬌名高かった吉原芸妓を落籍させて、そこに容れていたのである。

仙右衛門が泊まりに来た夜をねらって、押入って来たのは、予め調べあげていた証左であった。

文字通り、音もなく、闇の中を忍び入って来た徒党であった。

女を抱いて寝ていた仙右衛門が、はっと目をさました時、すでに、覆面した武士が四名、室内に立っていた。

佐倉屋の大屋台を背負っている大町人の貫禄があるだけに、仰天してはね起きるような、

みっともない驚愕ぶりはみせず、わずかに、枕から頭を擡げて、おちついた眼眸をまわし、
「御用なら、あちらの座敷でお待ち下さいまし」
と、云ったものだった。
対手がたは、無言であった。
一人が、掛具をはねのけた。女が、目をさまして、悲鳴をあげて、とび起きようとするのを、仙右衛門は、ぐっと押えておいて、自身の方が、ゆっくりと起き上がった。白い胸も脛もあらわな女を、掛具で掩ってやる余裕をもって、畳へ坐ると、
「うけたまわりましょう」
と、云った。
「大名貸及び商人貸の証文、また、大阪両替屋との取引き上の振出し手形いっさい、この家の方にかくしてあると知って居る。それを出せ！」
脅迫は、それであった。
仙右衛門は、これをきいて、この連中が、ただの夜盗ではない、と直感した。
両替屋の貸出には、大名貸と商人貸のふたつがある。大名貸は、信用貸ではあるが、秋季廻米の売上高から返済を受ける約束であった。尤も、二年先、三年先までの領米まで、抵当にするのが、当時の常識となっていた。商人貸は、勿論担保を取った。いずれも、非常な高利であった。
佐倉屋ともなれば、大名貸は、その件数は、大変なものであった。

すでに、天下の実際上の権力は、こうした大町人の手に移っていたのである。
小川顕道の随筆『塵塚談』にも、
武家は人を治め、商人は治めらるるの法なるに、今は町人が、人を治むる世の如し。
と記されている。
もし、佐倉屋の大名貸の証文が、この怪しい徒党の手に渡れば、被害は全土の大名におよぶといっても、さまで誇張ではない。
どういう目的をもって、奪おうとするのかは判断し難かったが、仙右衛門としては、死んでも、渡せなかった。
「金子ならば、いくらでも御用立ていたしましょう」
仙右衛門は、そう云いはって、寸毫もたじろがなかった。
この拒絶は、予期していたところとみえて、強盗団には、拷問の用意があった。
卓子の上へ、十本の蠟燭が立てられ、仙右衛門は、双手の指を、その焰にあてられたのである。
おそろしい呻きをふりしぼりつつも、仙右衛門は、その苦痛に堪えた。
堪え得なかったのは、それを目撃させられた妾の方であった。
「それは、文庫蔵の奥の三重壁の中にあります！」
口走った女を、振りかえって、睨み据えた仙右衛門の形相は、凄じいものだった。
「よし――」

つきはなされた仙右衛門は、覚悟をきめた面持（おももち）にかえると、もはや、いたずらに、反抗しようとはしなかった。

強盗団は、文庫蔵の扉（とびら）の錠前を壊し、奥の三重壁を破った。

鉄製の大函は、その中に、在った。

仙右衛門は、一語も発せずに、強盗団の敏速な作業ぶりを見戍（みまも）っていたが、大函が、蔵前へ運び出されるや、

「どなたか、てまえに、刀をお貸し下さいまし」

と、ねがった。

一人が、渡してやると、仙右衛門は、居間に戻って、そこにわなないている女を、一太刀で斬（き）りすて、おのれも、咽喉（のど）を刺しつらぬいて、俯（う）っ伏（ぷ）したのであった。みじんも、とり乱した気配をみせず、見事な最期（さいご）であった。

その間、屋敷内は、静寂であった。奉公人は、悉（ことごと）く縛りあげられて、口に膏薬（こうやく）を貼（は）られていたのである。

ただ、強盗団の不覚は、手代の一人が、こっそりと、柳橋の舟宿へ、水茶屋の女と逢曳（あいび）きに行っていたのを知らなかったことであった。

手代は、そうっと、戻って来てみて、奉公人たちの哀れな姿を発見して仰天したが、夜遊びするだけあって、機転が利（き）き、また、音をたてずに忍び出て行って、自身番へ、つッ走ったのであった。

折よく、自身番に休憩していたのが、いま、身なりをかえて群衆にまじっている廻り方同心守辺恭次郎であった。

機敏な青年同心の打つ手は早く、網は漏れなく張られた。

しかし、いかんせん、強盗団は、使い手が揃っていた。一人も捕りおさえることは不可能であった。ただ、大函の異常な重量が、それを持って遁れさせなかったのは、さいわいであった。

強盗団は、それを、川へ投じて、何処かへ姿を消し去ったのである。

川へ投じた以上、これをあきらめずに、一味の一人が、また、戻って来て、様子を窺うに相違ない、と――守辺恭次郎は、それらしい人物を、群衆の中から捜し出そうとして、鋭く目を光らせているのであった。

三

川底を探る作業は、およそ二刻――辰の刻までも、つづけられて、その努力は、むなしかった。

ようやく、群衆は、辛抱しきれず、それぞれの仕事の場所へ散って行った。とはいえ、途中から見物しはじめる者もかなりいて、河岸縁には、まだ、蟻の行列のように、ひとつらなりの頭数はあったが……。

と――。

見物人の頭を、一斉に、反対の方角へ振り向かせる出来事が、起った。

「弥太、待て！」

呶号したのは、遊び人風の若い男であった。

三間あまりさきを歩いていて、おのれの名を呼ばれて、振りかえったのは、堅気の装をしていたが、これも無職者に相違ない証拠は、その眉間を走っている凄い刀創であった。

「ふん——」

弥太というやくざは、対手が、懐中に右手を入れて、あきらかに、匕首を摑んでいるのを見てとっても、聊かも動じないで、ふてぶてしい嗤いを、口辺に刻んだ。

「てめえ、いつ、御赦免になったんだ？」

「ぬけぬけと——どの口で、訊きやがる！」

若い男の双眸には、威嚇ではない殺気がみなぎっていた。

弥太は、しかし、頭から呑んでかかった態度を、見物人に誇示するように、じりじりと迫られても、べつに身がまえもしなかった。

この青二才の突き出す匕首など、しゃらくせえ、といった、喧嘩の場数をふんだ落着きぶりだった。

たぶん、この若い男が、捕えられて、島送りになったのは、弥太のせいなのであったろう。

「新吉、人様の目が多すぎるぜ。話をつけてえのなら、場所をえらびな」

「ほざくなっ！　ここで出会わしたが百年目だ！　てめえに、思い知らせてやることばかり

を、夢にまで見て、島の三年をすごして来たんだ。遁さねえぞ！」

「逃げも隠れもしねえから、日時と場所をきめろ、まちがいなく、行ってやる」

「その手には、もう乗らねえ。覚悟しろ、弥太！」

新吉は、じりじりと迫りつづけた。

どうやら、弥太の方は、刃物を呑んではいないらしく、両手を脇に下げたなりで、襲撃に備える鋭い目つきになった。

距離が、一間にちぢまると、新吉は、匕首を、白鞘ごと、懐中から、抜き出した。そして、それを、両手で摑みしめて、

「毒虫め！」

呻くように、あびせた。

守辺恭次郎は、ほかの場合であったなら、当然、間へ割って入ったに相違なかった。いまは、定廻りのいでたちもしていないし、十手をひらめかすのを避けねばならなかったので、ほかの人々とともに、固唾をのんで、見戍っているよりほかはなかった。

新吉が、さらに、二歩出るや、弥太も、油断ない身構えをとった。息詰まる数秒の睨みあいがあって――。

「野郎っ！」

喚きざま、新吉は、さっと、右手をふりかぶった。反射的に、弥太が、地を蹴って、その右手へとびついた。

「危いっ！」
思わず、口走ったのは、守辺恭次郎であった。
青年同心は、知っていた。新吉の巧妙な攻撃手段を。
新吉が、ふりかぶった右手には、鞘の方が摑まれていたのである。
これは、喧嘩の奥の手なのである。白鞘の匕首を、懐中から抜き出した時、左手で柄(つか)を、右手で、鞘の方を持つ。
剣術が謂(い)う汐合(しおあい)のきわまった刹那(せつな)をえらんで、さっと、鞘を握った右手を、ふりあげれば、敵は、本能的に、それが白刃と受けとって、すばやく、おさえにかかって来るのだ。その瞬間、左手に摑んだ抜身で、敵の腹を突き刺すのである。
武芸の鍛練をせぬやくざが考え出した、虚を衝(つ)く方法であった。新吉は、これを、島で、囚人の一人から教えられたものであろう。
年期の入っている筈の弥太が、これに、まんまと、ひっかかった。
新吉の左手は、充分の余裕をもって、弥太の脾腹(ひばら)へ、ふかぶかと、九寸五分(くすんごぶ)を刺し込もうとした。
その一瞬——。
「うっ！」
と、唸(うな)って、新吉は、左手を、はねあげた。匕首は、宙へ飛んだ。
左手には、小柄が、突き立っていた。

弥太は、身を翻(ひるがえ)して、脱兎(だっと)のごとく、遁れ去った。
新吉は、凄じい形相になって、小柄の飛んで来た方角を睨んで、そこに、うっそりと立つ異相の浪人者へ、
「な、なにをしやがる！」
と絶叫した。
眠狂四郎は、薄ら笑って、
「対手がいかに憎むべき敵でも、無手の者を、小細工で仆(たお)すのは、卑怯(ひきょう)であろう。この次に出会った時、堂々と果し合うがいい」
と、云いすてておいて、まっすぐに、守辺恭次郎の前に歩み寄った。
新吉の方は、狂四郎のうしろにしたがっている老人をみとめるや、とっさに、踵(きびす)をまわして、走り出した。それは、神田お玉ヶ池の岡っ引、佐兵衛だったからである。
狂四郎は、佐兵衛にそれと指示されていたとみえて、恭次郎へ、目をあてると、
「廻り方同心とお見受けする」
と、云いかけた。
恭次郎の方は、すでに、この異相の浪人者が何者か、知っていた。
「差出がましいことを申上げるが、お手前が、ここで、目を光らせているのは、徒労ではなかろうか」
「何故でござろう？」

恭次郎は、なぜか畏怖し、なかば反抗意識を湧かせつつ、狂四郎を見かえした。
「いまの、無職者たちの喧嘩を御覧になっても、おわかりと思う。すべて、極意というものは、虚とみせて実、実とみせて虚。いや、これは、お手前には、講義されるまでもなく、先刻御承知の筈」
「すると――貴殿は、この川底を探ることは、右手に摑んだ匕首の鞘をさがしているようなものだと、申されるのか？」
「まず――」
狂四郎は、いかにも頭脳の働きの敏捷そうな青年同心に、微笑を送った。
「では、抜身の方は、何処に？」
「それは、川に捜させるがよかろうかと申上げておこう」
狂四郎は、謎めいた言葉をもらしておいて、ふりかえると、
「佐兵衛、その無駄な探索を、そろそろ止めさせてはどうだろう」と、云った。
「かしこまりました」
佐兵衛が合点すると、恭次郎は、自分が無視されたような苛立ちにかられて、
「貴殿が、それを、奪いかえして下さると云われるか？」
咎めるような口調になった。
「左様、そうなろう」
「何刻？」

「深夜に奪われた品ならば、深夜にとりかえすことに相成る」

四

夜二更——。

大川の上には、強い風が出て、かなりの波が立っていた。一艘の屋形船が、風と波にさからって、河口に漕(こ)ぎ出されたのは、この時刻であった。屋形の中の灯(ひ)は消されていたし、二梃櫓(ちょうろ)の迅さが、ただならぬ気配をしめしていた。

御浜御殿と尾張侯の下屋敷のむかいあった掘割に入って、船は、風と波からまぬがれるや、さらに、その速力を増した。

空に星かげがあったが、川面は暗く、遠目には、船のかたちも見わけられないくらいであった。櫓音が、ひびくので、船が通るのだな、とわかるだけであった。

風は、中空を渡っていて、音が鋭く、これは、人の耳をおびやかすひびきをもっているために、地上には、全く人影は絶えているようであった。

左様——汐留橋の橋上を除いては、である。

そこには、二個の黒影が、彳(たたず)んでいた。

屋形船が、御浜御殿の表御門前の橋をくぐって、右折して、この掘割に入って来たのを、そこから、闇を透して、みとめて、

「来たようだ」

と、呟いた声は、眠狂四郎のものであった。傍にいるのは、守辺恭次郎であった。

それより半刻ばかり前に、すでに、佐倉屋の大函は、川からひそかにひきあげられて、駿河町の本店へ引渡されていた。それは、この汐留橋の下に、井桁に組まれた杭にひっかかっていたのである。

強盗団が、それを投じたのは、難波橋のてまえであったから、そこから流されて、芝口橋をくぐり抜けて、遠く、この汐留橋下の杭にひっかかったわけである。

奇妙だったのは、大函は、船頭二人の手で、やすやすと船へひきあげられる軽さだったことである。

――これは！

と、おどろいて、見戍る恭次郎に、狂四郎は、云った。

「函の中で重量を保たせていたものが消えれば、当然、軽くはなる」

「と申されると？」

「佐倉屋は、用意周到であった。万が一の危険に備えて、貴重の書類を容れた手文庫を、さらに大函におさめて、まわりに、塩を詰めて、異常な重量にしておき、容易に担ぎ出せないようにしておいた。火災に遭うても、塩は強い。水害に遭えば、塩は溶けて、函は浮き上がる。いずれにしても、塩とは、考えたものだが、これは、戦国の時世に生まれた智恵だ。

――夜盗の方で、これを看破したのは、流石であった。看破したからこそ、平然として、川へ抛りすてて、立去った。塩が溶ければ、函は、流れて、この汐留橋の杭にひっかかること

は、たなごころを指すように明白な話。彼らは、佐倉屋の若い衆たちの無駄な探索を、遠くから、あざ嗤い乍ら、ゆっくりと、夜の来るのを待っていればよろしかった。左様さ、わたしという男が、横あいから現われるということを勘定に入れないために、おのれの所業もまた無駄骨折りになるのを、気づかずに、だ」

解いてみれば、あっけないいくらいのカラクリであった。……

……屋形船は、数間の近くまでのぼって来た。狂四郎は、青年同心に、云った。

「生かして捕えても、泥を吐くような連中ではない。わたしに、一人のこらず、斬らせて頂こう」

ねずみ誕生

一

「……旦那」
呼ばれてふりかえった狂四郎は、夕靄のたゆとうた河岸道に、豆しぼりで頰かむりをして、桶を荷った金魚売りを見出すと、微笑した。
「次郎吉か――」
「おひさしぶりでございます」
鼠小僧は、一年ぶりでめぐり会う狂四郎に、心からなつかしそうな眼眸をあてて、寄って来た。
「化けていなければならぬ程、世間も次第に物騒になって来たな」
「左様で――」
「いつ、江戸へ帰って来た？」
「先月、富士講中の中へまぎれ込んで、白の鉢巻に白木綿の行衣で、舞い戻りました。六根清浄の御山の御利益を受ける身じゃござんせんが、数珠をたすきにかけたり、背中で鈴を

鳴らしたり、金剛杖をついたり。神妙にしているうちに、カンがにぶって、どうにも旦那のいらっしゃるところが、尋ね当てられないしまつでございました。われ乍ら、ヤキがまわって、こりゃア、なさけない次第でございました」

「お互いに、冥利冥加には、縁が遠いな」

「蛞蝓も一代、沙魚は飛んでも一代――でございますか」

包み顔が、笑ってみせた。

「ふふふ……鰻はのめっても一代、か。ひとつ、鰻で、一杯やるか」

狂四郎と次郎吉が、上がったのは、柳橋の横丁にある薄穢い川魚屋の二階であった。親爺が変屈で、桶から摑みあげるとたんの手ざわりで、膏の乗らない奴と知ると、未練気もなくすててしまう名人気質をもっていた。おかげで、ひどく貧乏していたが、食通には、その名を知られていた。

たしかに――一刻半も待たせて、運んで来た蒲焼は、口のうちで溶ける美味さだったので、盃の数も重なった。

次郎吉は、爪楊枝を口にした時、ふとしんみりした口調で、

「これで……もう、娑婆に、思いのこすことはございません」

と、云った。

「年貢を納めるつもりか？」

「こんど、舞い戻って来た時から、考えて居りやした」

「自身の方から、両手を揃えて、さし出すこともないであろうが……」
床柱に凭りかかって、物倦げな、遠い視線を、宙に送って、狂四郎は、呟いたが、ふと、虚しい笑いを泛べると、
「それもよかろう」
と、云ってから、視線を、次郎吉に移した。
「お前が、盗っ人になったのは、仔細があったのか？」
「いえ、べつにありやしません。料簡が曲っていただけのことでございます」
「それにしては、よく名を売ったものだな」
「ひょんなきっかけからでござんした」
そうこたえて、次郎吉は、思い出し笑いを洩らして、
「退屈しのぎに、旦那に、鼠小僧縁起でもきいて頂きましょうか」
と、云った。
それが、盗っ人らしい懺悔だと、自分に云いきかせたのであったろう。

二

次郎吉は、堺町中村座の木戸番定七の長男に生まれ、十六歳まで、松平讃岐守の御抱え建具師星十兵衛の徒弟になっていた。実家へ帰ってからは、町方鳶人足になり、博徒の群に交って、ひどい道楽者になってしまい、挙句に、勘当された。盗っ人になったのは、文政五年

頃からで、入墨追放に処せられたのは、それから三年後であった。

ある秋の日の午後。

二十五歳の次郎吉は古渡り唐桟に、花色繻子の帯をしめて、はやり丸顔に、細銀杏のさきを平なでにした――いなせな仕事師風の身なりで、浅黄の手拭いを吉原冠りにして、吉原仲の町を、ぶらぶら歩き乍ら、ときおり、生あくびをかみころしていた。

流連五日――揚屋町の丁子屋で御職をはる花魁をあいてに、有金つかいはたしていた。

馬道で、一杯ひっかけるのも、心細い小銭しかのこってはいなかった。

「どうにか、ならあ――で、今日も逝くか」

やぞうをきめた次郎吉は、いっそのんきな表情になると、

主をかえした、そのあとは
枕二つに、身は一つ
君は今
駒形あたり、ほととぎす
血に泣くよりも
なお、つらい

遊里にも、ふと、人影のなくなる、静かな、のんびりした白昼のひとときがある。いまが、そうであった。

「すしや……すう……しい……」

のどかな鮓売りの声が、遠くで流れていた。
桜の並木の下を、白襟紋付の着崩れた茶屋芸奴が、どうやら宿酔いらしい足どりで帰って行く姿が、あるばかり——。
「おイ。ちょいと、そこの兄哥」
むこう側から、声がかかって、次郎吉が、見やると、懇意の講釈師神田伯山が佇んでいた。上田の小袖に、竜文の合着、清元銀杏の髷をきれいになでつけた、恰幅のいい五十男であった。
「次郎吉じゃねえか、おめえ——」
「へえ……師匠、おひさしぶりで……」
次郎吉が、会釈すると、
「たいそうもなく粋になりやがったの」
と、近寄って来て、そこいらで、ちょっとつきあえ、と誘った。
この神田伯山はもとは座敷仕方話の上手な落語家で、一分線香即席三題咄を、下谷広小路広徳寺前の孔雀茶屋で開演して、大当りをとったりしていたが、途中から、張扇に転向したのであった。しかし寄席で、演史軍談を語らせておくには惜しい人物であった。戯文の達人で、気骨もあり、また和漢の史籍に通じていた。
尤も、当時は、講釈師は、庶民の間に、かなり尊敬すべき存在であった。その一例を挙げれば、軍談昼席には、短冊形の盆に、菓子を盛って、客のあいだあいだに出して置き、自由

に取るに任せていた。一個八文ずつであったが、誰ひとり代価をごまかさなかった、という。講釈場が、落語や色物の席と、厳然と区別されていた所以である。

いわば、江戸の兄哥株は、講釈師によって、教養を得たということになる。魚河岸とか青物市場などは、昼前が忙しく、午後になると用が尠くなるので、湯屋の二階や髪結床の奥で、平凡碁や将棋をたたかわすか、そうでなければ、講釈昼席の定連となって、甲越軍記、太閤記、真田三代記、あるいは、お家騒動、武勇伝、義士銘々伝などに耳をかたむけて、義に勇み、節を尚び、意気に感じ、人情に厚い江戸っ子気象をみがいたのである。

やがて、雷神門うちにならんだ二十軒茶屋の一軒に入り、さし向かうや、伯山はいきなり、

「次郎吉、おめえ、久離御帳外（江戸追放）の身になって、博奕が本職か？」

と、云った。

「まア、そんなところで――」

「くだらねえ。おいらは、小僧だった頃のおめえの利発さを見て、こいつは、たたき込めば、相当なしろものになる、とひそかに見込んでいたんだが……。いいか、次郎吉、目をひらいて、世間を広く見わたしてみろ。いまの御時世ぐれえ、町人にとって面白え世の中は、またとねえのだぜ。ほんとうに浮世を愉しんでいるのは、公方様でもなけりゃ、大名旗本でもねえ。蔵前の札差、駿河町の両替屋、そして、大問屋と名のつく連中だ」

「その通りでござんす」

「御勝手元は空っけつのくせに、金紋先箱供揃いだけ美々しく、下に下に、の制止声だけで、

町人百姓を、へいつくばらせることができると考えている大名なんざ、もう、張子の虎ほどの威力もねえやな。吉原の総籬なんざ、鼻もひっかけねえ。三枚肩の駕籠で、えいほうと、大門をくぐる威勢のいい客筋は、町人にかぎられちまった。……こんな御時世に、賭場の小銭をかきあつめて、小格子女郎に鼻毛をぬかれて、いい気になっているおめえは、てめえの才覚を知らねえで、あんまりなさけなさすぎらアな。……こいつは大物になりそうだ、とにらんだ目に狂いがねえのが、おいらの自慢だったが――どうやら、おめえだけは、見そこなったらしい」

びしびし、ときめつけられて、次郎吉は、しばらく俯向いて、何か考えこんでいたが、ふいに、屹っと頭を擡げると、

「師匠――」

あらたまった語気で呼んだ。

「なんだ？」

「白状するぜ。……このあっしが、大名屋敷をねらう盗っ人だ、と云ったら、どうしなさる？」

「盗っ人！」

「左様でさ。このあっしなんだ、鼠小僧というのは――」

「なんだと？」伯山は、息をのんだ。

巷間に、鼠小僧と名のる賊が、諸大名の屋敷に忍び込んで、大金を奪って行くという噂は、

最近かなりひろがっていた。
三間四間の塀をどうやって、渡るものか、丈余の塀を躍り越え、高い屋根から飛んでも、綿のように物音をたてぬ身軽さで、柱をのぼり、天井裏をつたい、自由自在に邸内をかけめぐって、宿直の警衛士を尻眼にかけて、悠々と御手元金を盗んで去る——と、誇大に云いふらされている鼠小僧が、この次郎吉だという。
「ふうむ!」
伯山は、唸った。
「おめえか、鼠小僧は——」
「声が高えや、師匠」
「成程、おめえは、自分の才覚を、盗っ人稼業で発揮したってわけだな。……なぜ、大名屋敷をねらう?」
「それは、それ、いま師匠が云ったように、大名どもは、邸の構えや行列は、見かけだけは、いかめしいが、うしろを覗けば、からだらしがねえ。門を一歩くぐってみると、中風の婆あみてえに、しまりがねえんだ。第一、大名の奥向、長局なんざ、役人も遠慮して立入らねえから、万一見咎められたって、ぞろっぺいに裾をひきやがった女中や、てらてらのお茶坊主どもが、うろうろがやがや、さわぐすきに、鼻唄まじりで、逃げられまさあ。それにひきかえて、町家は、油断がならねえ。金を持っていやがるから、家の中が、途方もなく厳重でさ」

そう語って、次郎吉は、にやりとしてみせた。
「兜をぬいだ、次郎吉」伯山は、両手を膝に置いて、頭を下げてから、
「おいらは、君子じゃねえ。盗っ人であろうが、かたりゆすりであろうが、そいつに筋金が一本通っていりゃ、文句はつけねえ。……だがな、次郎吉、おめえ、どうせ、やがては獄門になる、とほぞをきめた上からにゃ、ひとつ、味方をつくっちゃ、どうだ？」
「味方というと？」
「江戸八百八町の町人たちを、てめえの味方につけるんだ」
「冗談じゃねえや。そんなことができる筈がねえ」
「ふふふふ……盗った金を、ぜんぶ放蕩ざんまいに、費いはたさねえで、そのうちのいくらかを、貧乏人に、いっぺん、撒いてみねえ、ということよ」
「成程──そいつは、気づかなかった」
「軍師がたは、この伯山が、高座で受持ってやらあ。……おめえが捕まって、市中ひきまわしの折、町中が、われんばかりに、やんやの喝采をあびせたら、こいつは、前代未聞の大芝居というものだ。団十郎だって、その人気はおよびもつかねえやな。……男と生まれたからには、これぐらいの心意気があってもよかろうじゃねえか」

三

そこまで、語ってから、次郎吉は、苦笑し乍ら、当時を顧みる遠い目つきになった。

「たわけた話でございました」

「…………」

狂四郎は、あらたにはこばせた銚子を、盃に傾け乍ら、次郎吉のしんみりとした口調を、なによりの肴にしている風情だった。

「伯山が、下谷池ノ端の本牧亭の檐角の籠格子に、鼠小僧義侠譚長講相勤候、という天地紅のびらを貼ったのは、それから一月あまり後のことでございました。……それまでに、あっしの方は、八丁堀や深川の貧乏裏店へ、包み金を抛り込んで歩いて居りましたが、なに、盗んだ金の、ほんの一部で、餓鬼どもの飴代にもあたらないケチな撒きぶりでございました。大半は、あいかわらず、酒と女に費ってしまっていたんで――」

しかし、伯山の名調子に乗った鼠小僧は、その日のうちに、江戸市中一円に、義賊としての面目をひろめて、絶大な人気者となったのであった。

伯山によって生まれた鼠小僧次郎吉は、捨児であった。

神田江川町に住む、鼠と渾名される博奕打ち吉兵衛に、大川端に捨てられていたのをひろいあげられた。吉兵衛夫婦は、子無しであったので、この捨児を実子のように、育てたが、十三歳になった時、いずれはわかることだからと、

「おめえは、実は捨児だった」

と、打明けて、捨てられた折につけ添えてあった達筆な手紙を読んできかせた。

それによれば――。

父は、藤堂家の藩士であったが、些細なことで、殿の勘気にふれ、追放を受けて、江戸へ出たものの、世渡る路に疎いため、零落し果てて、ついに、わが子も捨てなければならなくなったのである。

それまでは、町内でも模範とされるおとなしい、利発な少年であった次郎吉は、この事実をきかされるや、子供心にどんな烈しい心境の変化をおこしたものか、急にふてぶてしくなり、養父から厳重に禁じられていた博奕を、こっそり習い、乾分どもと賭場を押しまわって、鮮やかな勝ちっぷりをしめしはじめたのであった。そして、十六歳になるや、もう廓がよいの味もおぼえていたのである。

やがて、十八歳になった春の一日、両国広小路の並び茶屋の落間で、ひとりぽつねんとしていると、どうやら博徒らしい数人連れが、どやどやと入って来て、悪党話をはじめた。そのうちの一人が、仲間の口をおさえて、

「どんな親分だって、大阪の淀辰にゃかなわねえ。手下も百人以上もあり、世間には、博奕打ちで通っているが、実は日本一の大泥棒よ。きびしい吟味のあるところを、どうして凌ぐか知らねえが、白昼平気で京大阪をのしあるいて、木っ葉役人なんざよせつけねえ貫禄は大したものよ」

と、知ったかぶりに、云いちらした。

次郎吉は、これをききとめて、

――よし！

と、咄嗟（とっさ）に、肚（はら）をきめた。

次郎吉は、父が藤堂藩を追われて、ついに子まで捨てるはめにいたった、と知った時、子供心に、この世の中に、大名、武士、百姓、町人と分けられた仕組に対して、憤然となったのである。そして、父を追放した藤堂家ならびに諸大名へ、自分一人の力で、復讐（ふくしゅう）してやろう、とかたく心に誓ったのである。

――大名さむれえは、威張りかえりやがって、町人百姓を犬ころみてえに斬り殺しても、無礼打ちでお咎めのねえような世の中なら、おいら、一番、世間がやんやと喝采するような、でっけえ悪事をやってやるぞ。とかく、金というやつは、不廻りだ、金持はますます倉をふやしていきやがるし、貧乏人は、いよいよぴいぴいして飢え死（じに）しかける。こんな間尺の合わねえ浮世なら、無慈悲の大名やお大尽から、金を盗みとって、貧乏人へほどこしてやる大盗っ人が一人ぐらいはあらわれてもよかろうじゃねえか。

と、わずか十三歳の小僧が、一念発起して、心で養父母に手を合わせ乍ら、みるみるやくざの色にそまって行ったというわけであった。

「……で、はるばる東海道を越えて、大阪へ行き、日本一の淀辰の家に、わらじをぬいで、盗っ人修業を、みっちり三年積み、江戸へ舞い戻るや、第一番に、忍び入ったのが、藤堂様の上屋敷、ということに相成ったわけでございましたな」

「実際に、藤堂家からも、お前は、盗みとったのではないか？」

狂四郎は、笑って、訊（き）いた。

「三度も忍び入ったのは、藤堂様だけでございますが、なに、復讐なんて殊勝な料簡ではなく、あのお屋敷の奥間が、いちばん、だらしがなかったからでございますて」

そうこたえて、次郎吉は、われ乍らよくもまあ、たくさんの大名屋敷を荒したものだ、と感慨深げに、かぶりをふった。

「ところで、お前は、盗っ人をやり乍ら、人間の味をつけたようだが……伯山に踊らされているうちに、義賊らしい性根をわがものにしたのか？」

狂四郎に、問われて、次郎吉は、ちょっと、考えていたが、

「妙なものでございますね。講釈師に、きっかけをつくってもらって、義賊になる初仕事が、あまりうまくいったおかげで、どうにも、てめえの根性を人情深くしないわけにはいかぬ気分になったものでございました」

伯山によって、義賊にしたてられた次郎吉は、それを裏書きする、ひと芝居をうたなければならなかった。

忍び入ったのは、大名屋敷ではなく、麴町(こうじまち)三丁目にある三河屋という酒屋であった。奥の間の金簞笥(かねだんす)の抽斗(ひきだし)から、口分けした金子(きんす)を、ひとつにまとめて盗みとり、跡白浪(あとしらなみ)と立ち去った。

この酒屋をえらんだのは、この家の不幸な事情を調べ、義賊の筋書きをはこぶにふさわしかったからであった。

昨年あるじが亡くなってから、その女房が、十五になる長男を芯にして、三人の幼児をかかえて、身を粉にして、働きづめ、閉めていた店をどうやら再び開くまでにこぎつけ、店蔵もおもてだけ塗り直し、景気よく、門口に樽を積みあげた――その矢先だったのである。売り溜や問屋へ払う九十両余を、そっくり盗まれては、母子は、ふたたび立ち上がる気力もなくなろうというものである。

はたして、翌朝、次郎吉が、ふらりと、おもてまで行ってみると、戸を閉じて、商いを休んだ様子。となりの煙草屋へ、何食わぬ顔で立ち寄って、それとなく様子をきいてみると、いま見舞いに行って来たばかりの婆さんが、いい聞手がきたとばかり、しゃべったことは、およそ想像した通りであった。母子は、首を縊りかねない絶望ぶりだ、という。

こう来なくては、せっかく盗んだ甲斐がない、というものであった。

その夜、次郎吉は、ふたたび、三河屋へ忍び入った。唐紙越しに、きき耳をたてていると、息子の声が、

「やっぱり、おっ母さん、おいらが奉公に出るよ。駿河屋さんなら、五年分の給金を前貸ししてくれるよ」

と、云い、

「……でも、お前――お前に、行かれちまったら……」

と、母親の声は、泪でしめっていた。

次郎吉は、頃あいをはかって、さらりと唐紙を開いた。

「おっと――大きな声を立てなさるのは禁物。今日は、盗みに入ったんじゃねえ」

びっくりする母子を制した次郎吉は、浅黄手拭いの陰から、親しみ深い微笑を送って、居間へふみ込むと、

「おかみさん、若旦那、おめえさんがたを、こんな悲しい目に遭わせたのは、まことに、申しわけございません。昨夜の賊は、このあっしなんだ。今日、様子をきくと、あっしが金を盗んだ故に、せっかく売り出しなすったのに、また戸を閉めるしまつになったときいて、金をお返しに上がりやした。はじめに、事情がわかっていりゃ、盗みになんぞ入らなかったんだ」

そう詫びて、紙に包んだ金を、母子の前にさし出した。

「あっしが、持って行ったのは、九十三両二分、よくあらためて、請け取りなせえ。わずかのうちとはいえ、とんだ心配をおかけいたしやした。堪忍しておくんねえ」

頭を下げた次郎吉は、すっと立って、影のように廊下へ出て、しずかに、唐紙を閉めた。

それきり、ことりとも、物音たてずに、消え去った。

母子は、夢でも見ているような心地で、顔見合わせたまま、しばらく呼吸もひそめていたが、やがて、包み紙をひらいてみると、まさしく、口分けしたままで、もどって来ていた。

それればかりか、ほかに、五両添えてあった。

包み紙には「返済金認書」として、

昨夜貴殿方へ忍び入り、御断り申さず、金子九十三両二分、借用恐れ入り候、右に付家

業を被休候段、何とも申訳無之、聊か乍ら利分として金五両を相添え、元金返済仕り候間、御開店可被成此段申入候、先ずは返納金証書 如 件

江戸無宿鼠小僧

三河屋殿

と、達筆に記されてあった。この一文が、伯山の筆になるものであったことは、ことわるまでもない。

この小さな事件は、瓦版となって、江戸市中へ、ばらまかれた。

こうして、義賊としての鼠小僧の人気は、不動となったのである。

夜更けて、狂四郎と次郎吉は、川魚屋を出て、河岸道を、ぶらぶらとひろって行った。

一歩おくれた次郎吉は、細月の光をあびた狂四郎の後姿を眺めやって、

――淋しいお方だが……生きていなさる。

そう思った。

盗っ人稼業にも倦いたから、ここらあたりで、いさぎよく、小塚原で梟首になろう、と覚悟をきめた自分の方が、この孤独な無頼の浪人者よりも、ずっと、気楽なように思われる。

――この方は、ご自身で死ぬことが、おできにならぬように、生まれつきなすった。死んで行く者を、黙って見送り乍ら、なんの目的もなく、生きつづけて行きなさるのだ。

次郎吉の胸が、微かに疼いた時、狂四郎が、ふりかえって、云った。

「次郎吉、どうせ捕まるなら、お玉ヶ池の佐兵衛の縄にかかってやってくれ。それをさいごの仕事にして、あの親爺も、十手を返上するだろう」

さかだち供養

一

朝霧が動いて、白い幕があげられるように、くろぐろと、緩い傾斜の丘陵の疎林が浮きあがったとみるうちに、陽がそこへ落ちて、美しい眺めになった。

霧は、あかい陽ざしに追われるように、しばらく野の面を匐っていたが、やがて、消えはてて、朝の光が、地上に盈ちた。

ちょうど、この頃あい、丘陵の疎林の中から、ひょっこりと、ひとつの影が、あらわれるのであった。これは、ここ一月あまり、雨の日以外は、決して欠かされることのない、その人物の行動であった。

無腰で、よれよれの盲縞の木綿を着流しているが、武士であった。

飄然として、この鎌倉古街道の古い宿駅十日市場へあらわれて、旅籠のあるじの世話で、雑木と竹に掩われた狭間——ふたつの丘陵の踵趾に位置する渓あいの古い家をゆずり受けて、住みついたのである。

脂肪過多の膨れた目蓋を、鬱陶しげに眸子へ垂らした、貧しい、貌もさること乍ら、用件

以外は啞のようにかたく口を緘じているし、物腰につきまとう陰気さが、いかにも零落し果てた印象を与える。

もし、見る人が見れば、魚籠を携げて、飄々として、朝風の中を歩む姿に、一分の隙のない厳しい武道の修練がひそめられているのに、――はて？　と小首をかしげるに相違なかろう。農夫や子供たちの目には、ただ、得体の知れぬ浪人者としか映らず、軽侮をともなう存在でしかなかった。

この人物が、ここへ移り住んでから、ひとつ話題をつくる行為をした。

丘陵から渓間へ移る薬研形の坂路に、一基の石地蔵を立てたことであった。農夫の一人が、その理由を訊ねたが、微笑しただけで、こたえなかった。

そのほかに、この人物に関する噂といえば、鶴見川の鮎を、釣らずに、手摑みにすることであった。これは、常人では、とうていおよびもつかぬ特技であったが、見物する者には、その獲りかたが、いかにも、こともなげな、いっそ、のろくさい動作によるので、なんでもないしわざに眺められるのであった。

魚籠をのぞいてみて、見物人は、その数の多さに、あきれることだった。当座のくらしは、その鮎を、十日市場の旅籠へ売って、しのいでいる模様であった。

……野々呂甚内は、終の栖を、この土地にもとめたのである。

阿波藩の江戸側と国許側とに分れての騒動にあたって、甚内は、命によって、国許へ向かって帰路を急ぐ密使田所源次郎を、この古街道上に、斬り仆し――それがきっかけとなって、

ついに、藩邸を退転しなければならず、また、不貞の妻をも殺してしまったのである。

甚内が、路傍に石地蔵を立てたのは、田所源次郎の霊魂供養のためであった。

向島堤で、斬られることを望んで、眠狂四郎に斬りつけて、その心底を看破され、凄じい叱咤をあびせられた時から、甚内は、自らを生ける屍と思いなしたのである。

昨日も、今日も、そして明日も——単調な、孤独な時間が、無言裡に過ぎて行く。このくらし以外には、もはや、甚内には、おのれの余生は考えられないようであった。

いま、前後に人影ひとつない長い堤の上に出た甚内は、川面へ視線を投じて、微笑した。

——今朝は、多いぞ。

そう直感した。

今年は雨が尠く、流れは、底まで澄みきっていた。尤も、堤の上から一瞥しただけでは、魚のすがたは見わけられる筈もないのであったが、甚内の予感は、常に当るのであった。

河原に降りて、着物をぬぎすて、見事に鍛えられた、裸身を、朝陽にさらすと、別人のように、その茫漠とした表情も一変したかにみえた。

ゆっくりと、水苔でぬるぬるした石塊をふんで、水の中へ歩み入る——。

その細目は、もう、陽ざしの透ったきれいな水底を、すばやく掠め過ぎる魚影を、とらえていた。

しかし、そのまま、甚内は、四半刻も、そこに、岩と化したように微動もせずに立っていた。陽が昇るにつれて、川面の反射が変って行くのを凝視しつつ、まったく無心の状態であ

った。

武器を用いるならば、このような忍耐は、不必要なのであった。甚内は、それを避けた。

手で摑まれる魚には、よくよく運がなかったと、あきらめてもらう——そんな気持であった。

……一瞬。

甚内の双手が、すっと水中に入る。

上半身を、やおら起した時には、その十指は、大きな鮎を、摑んでいた。

無造作に、それを、うしろに置いた魚籠に投げ入れておいて、また不動の姿勢をつづける……。

三尾めを摑みあげたおりであった。

突然、甚内の無心を擾す鋭い女の悲鳴が、対岸で起こった。

目を擡げた甚内は、屛風のような断崖上で、数個の影が、眩しい陽光を撥ねて、烈しくもつれ合う光景を見出した。

一人の若い女を、男たちが襲っているのであった。

咄嗟に、甚内は、魚を捨てて、小石を三、四個摑みとるや右手をおどらせた。

一個が、右手から飛んだ次の刹那には、もう左手から、二個めが飛んでいた。

しかも、それらは、正確に、男たちを、次々に、のけぞらしていた。

おかげで、やっと、からだの自由をとりもどした女は、しかし、救い主が川の中にいるとは気がつかず、何か烈しい叫びをそこにのこして、ぱっと、崖縁から空中へ跳んだ。

裾が、ふわっと大きく舞い翻るや、赤い蹴出しの下から、白い二本の脚が剝かれて——甚内の眸子に、鮮烈な印象をのこした。

投身者にとって、さいわいであったのは、落下したところが、深緑色の瀞であったことである。

高い飛沫をあげて、水中へもぐった女が、ぽかっと浮きあがったのは、数間も下流であった。

その時すでに甚内は、そこへむかって、敏捷に、流れを蹴って、浅瀬を走り、急な深みに至るや、鮮やかな抜手をきっていた。

二

十年あまり前まで、変り者の絵師が住んでいたという家であった。その絵師が、人に忌みきらわれる癩病患者であったために、生前はもとより、無人となってからも、誰一人近づかず、見すてられていたのである。

荒廃しているとはいえ、絵師の隠棲した草庵であった。風雅のなごりをとどめたたたずまいであった。

根岸の里などにみられる、いかにも墨客騒人の住居らしい構えを、そっくりこの僻地に移したともいえそうであった。

屋内を飾った品が、業病のおかげで、何ひとつ持去られず、そっくりのこっていて、孤独

を愉（たの）しんだ前住者の風雅心を偲（しの）ばせた。
茶亭造りで、古来の禅家の書院飾りを模したものらしく、床の間には、押板飾という祖語の掛物があり、前には、三具足（みつぐそく）が据（す）えてあった。水屋棚（だな）には茶道具が揃（そろ）えられ、香炉、茶碗（ちゃわん）、花入、そして、絵道具箱など……。
甚内は、この家に入った時、自分のような不粋な人間が住むには、もったいないと、忸怩（じくじ）たるものがあったくらいである。
ゆくりなくも――。
はじめて迎えた客が、意識なきずぶ濡（ぬ）れた投身者であったのは、まさしく、自分がこの草庵のあるじたる資格なき不粋者よと、苦笑させられたことであった。
永い年月をくゆらせた香煙が、壁にも柱にもしみ込んだ風雅な室に、昏々（こんこん）とねむる若い女を前にして、甚内は、黙然として、腕を組んでいる。
偶然であった。
甚内は、この若い女を知っていた。
向島堤で、眠狂四郎に出会うすこし前に、花見客を集めて古い俚謡（りよう）を手踊っている姉弟らしいひと組を眺めたが、この若い女は、その姉娘に、まぎれもなかったのである。
その時、小銭を投げた甚内と視線がぶっつかるや、娘は、急に、険しい面持（おももち）になって、
「お前様には、貰（もら）わないよ」
と、投げかえしたものだった。

立去りかける甚内の後姿へ、さらにあびせた一言は、
「人斬り甚内！」
それであった。
河原へかつぎあげて、水をはかせ、衣類をぬがせて、自分の着物でつつんでやりかけて、
――おお！　これは、あの時の娘ではないか！
と、おどろいたのであった。
ねむりつづける寝顔は、美しかった。血の気の引いた蠟色の肌膚が、かえって、かたちのいい眉やとじた目蓋や鼻や唇を、陰翳の濃いものにしていたし、夢のない全くの意識の喪失は、その表情に甘いあどけなさをたたえさせていた。
甚内の冷静をわずかにみだすとすれば、掛具の陰から、ちらとのぞいている円い柔らかな素肌であろうか。
濡れた衣類を、のこらず剝いだ瞬間には、なんの刺戟も受けず、ただ、血のあたたかみをよみがえらせてやるのに、必死になったものだったが……。
この娘が、淡路人形一座の者であり、眠狂四郎と親しい間柄であることは、もとより、甚内の知るところではなかった。
陽ざしが移って、寝顔に、当った。眉が、微かにひそめられた。はじめて、その表情が、生きている動きをしめしたのである。
甚内は、ほっとすると、急に、空腹をおぼえた。

——おかゆでもつくっておいてやらねばなるまい。

陽ざしは、もう午後のものであった。

甚内が、腰をあげかけた——とたんに、お吉の目蓋が、ぱっちりとひらかれた。潤みをおびた美しい眸子には、かなり前から意識をとりもどしていたとみえて、甚内を見あげる光に力があった。

「ほう……気がついたか」

甚内が、あげかけた腰をもどして、やさしく云いかけると、お吉は、食い入るように、眼眸をあてて、

「お前様が、たすけて下さったのですか？」

と、たしかめた。

「偶然であったな」

「…………」

お吉は、つと顔をそむけると、この偶然に戸惑う表情をつくった。

「いま、粥をつくって進ぜる」

甚内は、立って、台所へ入った。

行平鍋の蓋が、ぼっぼっと、湯気で噴きあげられはじめた時、甚内は、うしろの気配に、振りかえった。

お吉は、掻巻で、からだを包んで、そこに立っていた。

「やすんでいるがよい。もうすぐ、できる」
「……お前様は、わたしを、慍っておいでではないんですか？」
　お吉は、さっきの口調とはうってかわった怯ず怯ずとした声音で、訊ねた。
「なにを慍る？」
「わたしは、お前様に、お鳥目を投げかえしました。人斬り甚内、とあざけりました」
「理由があったのであろう」
「ありました。お前様は、わたしの一座から……舞台の最中に、お園人形を奪いとって逃げました」
　これをきいて、甚内は、お吉をあらためてしげしげと見まもって、
「そなたは、あの淡路人形座の者であったのか——」
「あい」
「それならば、わしを許し難いと悪んだのも無理はない。あやまる」
　甚内は、頭を下げた。
　大きく目をひらいて、じっと甚内を瞶めていたお吉は、
「人斬り甚内、なんて、嘘ね。お前様は、いいお方ですね。……わたし、お詫びします。あ——まだ、お礼を云ってなかった。たすけて頂いて、どうも有難う存じました」
　その場へ、ぺたっと坐ると、両手をついて、お辞儀をした。掻巻の前が割れて、白いゆたかな胸や腹があらわになるのを、はじらいもせずに——。

甚内は、あわてて視線をそらして、ややきびしく、たしなめた。

「やすんでいるがよい。そなたは、疲れて居る」

三

お吉は、健啖（けんたん）であった。

四杯めを平げて、白湯（さゆ）を茶碗に注（つ）いで、把（と）りあげると、くすっと、肩をすくめて、笑った。

甚内も、微笑した。

「お前様は、どうして、こんな淋（さび）しいところに住んでおいでなのですか？」

「世をすてて居る」

「なぜ――？」

「左様さな……」

甚内は、風が出て来て、ざわめきはじめた竹藪（たけやぶ）へ、目を送り乍ら、他人事（ひとごと）のように、こたえた。

「人斬り甚内、と云われることが、うとましゅうなったのであろう」

お吉は、甚内のみにくい、むくんだ横顔を見戍（みまも）っていたが、

「わかった！　お前様が、どうして、ここに住んでおいでなのか――」

と、云った。

甚内は、お吉を見かえした。

「お前様は、ここで、殺したお人の供養をなされているんですね？」
「………」
「あの丘のむこう側の街道で、お前様が、馬で駆けるおさむらいを追って、斬りかかるのを、わたしは見ていました」
甚内は、咄嗟に、この言葉を受けとりかねて、眉をひそめたが、次の瞬間、
「あ――」
と、思い出した。
あの時、眠狂四郎の連れらしい娘が、すこし離れた地点に佇(たたず)んでいたが、この娘であったのだ。
「そうであったか。……それならば、そなたが、わしを、鬼のような男と思い込んだのも、当然であったな」
甚内が、ほっと溜息(ためいき)をもらした――その時。
雑木林の中を、こちらへ近づいて来るかなりの頭数らしい跫音(あしおと)が、きこえて来た。
お吉の顔が、緊張した。
「来やがった！」
「そなたを襲った者たちか？」
「はい。……丘の上の阿弥陀(あみだ)堂の前で、山博奕(ばくち)をやっていた、やくざたちなんです。おまいりに登って行ったわたしを、見はりの男たちが、わるさをしようとしたものだから、腹が立

って、お前たちは、もぐりの山賊野郎ばかりだろ、と云いかえして、壺振りのいかさまをあばいてやったんです。そうしたら……」

いま思い出しても、くやしげに、お吉は、説明しつつ、のび上がって、庭の彼方を見やった。

山博奕というのは、縄張りというものの厳重な渡世では、かたく禁じられている隠れ賭場であった。すなわち、その土地の親分の目をぬすんで、人里はなれた場所をえらび、四方に見張りをたてておいて、地べたへじかに畳を敷いて三間盆をつくり、たった一日だけ開くのであった。これは、近くの大きな神社で祭礼がある前後の日に、そこの正式な賭場に集まって来る客足をこちらに向けさせて、テラ銭をかすめ取るしくみであった。いかさま賽を使って、素人衆からまきあげるのは、あたりまえのように考えている手合いがやる野天博奕であった。

甚内は、立って、障子を閉めると、

「ここを動かずにいるがよい」

と、命じておいて、玄関へ出て行こうした。

「あ——刀を」

お吉が、床の間にたてかけてある四尺余の長刀を取りに、立とうとすると、甚内は、ふりかえって、かぶりをふった。

「わしが、こんど刀を抜くのは、自身が死ぬ時だと、思うて居る。博奕打ちどもを対手にす

るのに、刀は要るまい」

すでに、無職者の一団は、門を入って来ていた。

玄関の格子戸を、しずかに開けて、一歩出た甚内は、うしろ手で閉めると、対手がたの機先を制して、

「おぬしたちが奪いに来た娘を、渡すのはことわる」

べつに語気もつよめず、そう云った。

風采のあがらぬ、無腰の小男を、無職者たちは、

――なんだ！

とばかり、せせらわらって、眺めた。

一人が、のそのそと近よって、

「おい、浪人――。おめえ、まさか、狐か狸が化けたんじゃあるめえな？」

「化けたのかも知れぬ」

「しゃらくせえっ！」

度胸自慢で、喧嘩の場数も踏んでいるのであろう、抜き打ちに馴れた素迅い動作を発揮した。

甚内は、その一撃に対して、むしろ緩慢ともみえる身振りをしめした。躱すというよりも、地べたへ落ちている竹切れをひろうために、身を跼めたら、その上を、白刃が流れてくれた、といったあんばいだった。

「野郎っ！」

仕損じかたが、あまりに小莫迦（こばか）にされたものであったので、かっと逆上した対手は、狂犬のような形相になって飛びかかって来た。

こんどは、甚内は、一歩も退（さが）らず、一直線に、すっと、竹切れを突き出した。

それは、他の連中の目に、まことに、奇妙な光景に映った。

大きく長脇差（ながわきざし）をふりかぶったまま、自ら望むがごとく、おのが顔を、竹切れの鋭くとがった先へ、持って行ったのである。尖端（せんたん）は、吸い込まれるように右の眼球を刺した。

異様な悲鳴をあげつつ、夢中で刀をふり下ろしたが、それより一瞬はやく、竹切れを抜きとった甚内は、次の贄（にえ）をえらんで、するすると進み寄った。

「畜生っ！」

喚（わめ）いて、斬りかかるのを、ぽんと軽くはらいざま、やはり、その右眼を、ぶすっと刺した。

あまりに無造作な、おちつきはらった行動であった。

眉毛（まゆげ）一本動かさぬ無表情ぶりも、遽（にわ）かに、無職者たちには、薄気味わるいものに思われて来た。

「次は、おぬしか？」

すっと、竹切れがさしのべられるや、その者は、たちまち、恐怖を全身に滲（にじ）ませて、あと退（ずさ）った。

小ずるく、跫音しのばせて、背後へまわった者が、いきなり、刃風をあびせかけたが、く

るっと向きなおって、竹切れを突き出す甚内の動きの方が、迅かった。前二者とまったく同じに、右眼をつぶされて、けだものじみた唸り声をたてつつ首をねじる有様が、無職者たちの心中に決定的な恐怖を与えた。

四

何事もなかったような態度で、茶室へ戻って来た甚内を、お吉は、搔巻にからだを包んだまま、牀に坐って、迎えた。

「むこうの刀を奪いとって、斬ったのですか?」

「いいや、斬りはせぬ。……三人が片目になって、去んだ」

そのことは、それだけの会話で、忘れられた。

その宵は、甚内にとって、愉しいものだった。お吉は、快活に、おしゃべりをした。幼い頃の思い出や、淡路人形一座のことなどであったが、次から次へとあまりにいっぱい湧いて来て、いくら早口におしゃべりしても、時間が足りない、といったお吉の様子が、微笑ましく、甚内は、絶えず、微笑をかえして、うなずいてやった。早口のあまり、滑稽な云いまちがいをやったりすると、甚内は、思わず、声をたてて笑い出し、自分にもこんなに、明るい笑い声がたてられるのか、と意外なよろこびをおぼえたくらいであった。

朝——。

霧が散って、陽ざしが、斜めにさしそめた頃、お吉は、いとまを告げた。

お吉は、ひとり、淡路へ帰ろうとしているのであった。

甚内は、いかに勝気とはいえ、娘ひとりの永い旅路を思いやって、胸がつまった。

渓間（たにま）を抜けて、新緑のしたたる武蔵野の原野を見はるかすところまで送って出て、

「くれぐれも、気をつけて参るがよい」

父が、わが娘をいとおしむに似た気持で、云った。

「お前様も、つつがなく、おすごしなさいませ」

ていねいに頭を下げて、数間はなれるや、お吉は、何を思ったか、両の袖（そで）をぴんと張り、とんと一足、土を打ったとみるや、ツツツ……と滑り出て、かたちをきめた。

甚内は、はっと、目をひらいた。しなやかに、なまめいた後姿には、みじんも隙がなかった。

……お吉は、踊りはじめた。

「頃は、寿永の白拍子、祇王（ぎおう）祇女とてふたりあり、雲井の縫いのうしろ帯……」

――見事な！

甚内は、胸の裡（うち）で、叫んだ。

「……君を初めて見る時は、千代を経ぬべし姫小松……御前の池に亀（かめ）浮び、鶴も群れいて千（ち）歳経る（とせ）、羽袖をかざすしおらしや、響く扇のとりどりに、三度び返してかなでける――」

くるりと、からだをまわした時、上気した顔には、美しい微笑が刷（は）かれていた。

「……互いに劣らぬ千草の盛り、荻萩桔梗、蔦かずら、裾もほうほう吹きかえし、さらさらさっと、秋風に、つれて梢の花もみじ、露の玉散る風情かな」

鮮やかに舞いおさめるや、一声鋭く、

「えいっ！」

と懸声かけて、両手を地べたへ置くと、足をはねあげた。

裾を両の踵ではさんでいて、なんの乱れもみせぬ見事なさかだちであった。

弧線を描いた下半身を、すうっと、しなやかに、曲げて、頭上へ倒して来たかとみるや、とんと、蹠を土につけると同時に、くるっと上半身を、はねて、立った。

「さようなら――」

明るい声を、そこにのこして、踵をまわしていた。

甚内は、呆然と佇んで、お吉の姿が、豆粒のように、原野の果てに、小さくなるまで、いつまでも見送ったことだった。

もののふ帖(ちょう)

一

「喧嘩(けんか)だっ！」
遠くに、その叫びがあがった時、もう眠狂四郎のうしろを、小唄(こうた)を口ずさんでいた金八は、自身の出番の合図を受けたように、そこへ、ふっとんでいた。
下谷広徳寺前から、新寺町に入ろうとする往還上でのことだった。
騒擾(そうじょう)は、下谷稲荷(いなり)の前のあたりで起こっていて、人々は、そこへ走っていた。
ちょうど、つい今、驟雨(しゅうう)が来て、地上を夕闇(ゆうやみ)の昏(くら)さにして、大粒をたたきつけ、家々の台所の引窓を閉めさせたり、洗濯張物や梅干を取入れさせたり、大あわてさせておいて、さっと、炎暑を洗い去ったところであった。
雲の隙間(すきま)から陽光が射(さ)して、屋根や路上から、煙のように、蒸気をゆらめきたたせていた。
雷鳴は、まだ、雲の上にあった。
狂四郎は、寺院の高塀(たかべい)ぎわに出ている麦湯屋の涼み台に、腰を下ろした。
紅染の手襷(たすき)をかけた浴衣(ゆかた)すがたの少女が、白い脛(はぎ)をあらわにして、駆け戻って来て、

「おとっつぁん、喧嘩をふっかけられているのは、成瀬様だよっ！」

と、告げた。

麦湯屋のあるじは、眉をひそめて、かぶりをふると、

「近頃の寺侍は、破落戸と変りはありゃしねえ。おとなしい成瀬様にまで、因縁をつけやがる」

いまいましげに吐きすて佇ら、狂四郎に、麦湯をはこんで来た。

騒擾が、次第に、こちらに近づいて来たのは、あるじの云うごとく、ふっかけられた方が、対手にならずに、足をはこぶからであった。

驟雨のあとであったし、それでなくとも、人影のすくない通りなのであった。

涼み台の狂四郎の目にも、移動して来るその光景が、よく見てとれた。

三人の寺侍が、浪人ていをした武士をとりかこんで、罵詈をあびせかけて、なんとか歯向かって来させようと、躍起の様子であった。成瀬というその武士は、俯向いて、耳がないごとく、しずかに、歩をすすめていた。

と——、

ふいに、だだっと、行手をさえぎった一人が、きらっと、腰から差料を抜きはなって、

「容赦せぬぞ！」

と、喚いた。

これにあわせて、他の二人も、抜刀して、口々に、雑言を吐きかけた。

成瀬某は、やむなく、立ちどまったが、なお、顔を伏せたままだった。

「抜けっ！」

「貴様、それでも武士かっ！」

「よもや、中身は竹光ではあるまい！」

三方から、白刃が、殆(ほと)ど、からだにふれんばかりに、じりじりと迫った。

……一瞬。

「ごめん――」

ひくく、云いすてて、成瀬は、すっと身を沈めると、正面の対手のわきを、するすると、滑るように通り抜けて行った。べつに、それ程の素迅(すばや)い動きではなかったが、どうしたのか、対手は、自身でも、はてな、と疑いたくなるくらい、あっけなく、成瀬を行き過ぎさせてしまった。

涼み台の狂四郎は、これを眺(なが)めて、にやりとした。

「腰抜けめ！」

寺侍の一人が、路上から、古草鞋(わらじ)をひろいとって、たたきつけたが、成瀬はひらりと、身をかわした。古草鞋は、狂四郎の足もとに落ちた。

ついに、斬り合いにはならずに、おわった。

「ちょっ！　豆腐の角で、頭を打ってくたばれ――ってえのは、あの臆病(おくびょう)野郎のことだ。河童(かっぱ)が、皿の水をこぼしたんじゃあるめえし、いっぺんも、頭を挙げやがらねえんだから、

あきれらあ」

ぶつぶつ云い乍ら、そばへ来た金八に、狂四郎は、べつだん何も云わなかった。

やがて――。

三人組が、ひきかえして来るのを見出した金八は、

「男は度胸で、女は愛嬌、六尺褌だてにははかぬ、湯文字の文字には明盲でも、あん畜生のふところは、端金まで読み透し――とくらあ」

と云い乍ら、腰を上げかけた。

肚を据えかねた金八は、三人組のどいつかの懐中を、掏ってやろうと、ほぞをきめたのであった。

「止せ、金八」

狂四郎が、とどめた。

「休業中でも、腕はにぶっちゃいませんぜ」

「ここにおれがいることを忘れるな」

「へっ――なある……」

三人組が、眼前にさしかかったとたん、狂四郎は、足もとの古草鞋を蹴とばした。

横列になった三人の鼻さきすれすれに、それは、掠めた。

「何をするかっ！」

一斉に、血相変えた三人組の前へ、狂四郎は、ふところ手のままで、のそりと立つと、暗

い無表情で、
「抜いて頂こうか」
と、促した。
「何っ！」
「なには難波じゃ、夜鷹は総嫁、うしろへまわって、袖を引く。左様、お一人は、うしろへまわって頂こう。そちらの御仁は、横あいから先程の、成瀬氏につめ寄った陣形がよろしいな。愚図愚図しては、人がたかろう。勝負は早いがよい」
狂四郎は、からかいつつも、対手がたが、その位置に就かざるを得ないように、巧妙に、すこしずつ身をまわした。
のぞむがままに、三方から切先をつきつけさせるや、
「よろしいな！　お手もと御用心――」
皮肉な言葉をあびせた。
次の刹那、狂四郎の五体が、旋風のごとく翻転した。
「やっ！」
「おおっ！」
「むっ！」
短い叫びが、三人の口からほとばしった。いずれも、斬りつけようと、刀を振りかぶりかけた――その間髪の間に、おのが手くびに、したたかな手刀の衝撃を受けて、しびれるまま

に、ぼろっと柄をはなしていた。
地べたへころがった三本の刀のまん中に、狂四郎は、もとの、うっそりとした静止の姿にたちかえると、
「名づけて、これを風心刀と謂う。古今和歌集にある、吹く風の色の千種に見えつるは、秋の木葉の散ればなりけり、という一首が、この秘術の心を現わしている。刀法は、無形より出て、無形にかえる。成瀬氏は、お手前がたが、つめ寄った時、この見えざる風心刀で、一人のこらず斬ってすてた。それとさとらず、古草鞋を投げて、腰抜けよばわりをしたお手前がたこそ、滑稽な道化であった、と知るがよい、……刀をひろって、去れ！」
と、きめつけておいて、麦湯屋へひきかえした。
金八は、びしゃっと自分の頬桁をひっぱたいて、
「こん畜生！　堪忍家督、短気は損気、辛抱金で、下衆の後智恵は、屁のつっぱりにもならねえや」

二

山下の「けころ」という売色の家の二階に登がって、狂四郎が、白壁のように白粉をぬりたくった醜い女の酌で飲みはじめてから、程なく——。
「おうおう、身の毛もよだつ化けて出そうなのが揃ってやがら」
階下に、金八の威勢のいい声がひびいた。

「こんな商売していりゃ、お化けにもなろうじゃないか。主の来た夜はお顔を三つ目、お顔見ぬ夜はろくろ首、ってね」

「へへ……見すてられたら、化けても出ると、化けぬ先から化かしかけ、って知ってるか」

とんとんと階段を駆けあがって来た金八は、

「先生、めがねちがいじゃござんせんかね。成瀬俊三郎うじは、墓守りですぜ」

首をふり乍ら、そう報告した。

麦湯屋のあるじに、その住居をきいて、狂四郎は、金八を、趨らせてみたのである。

「何様の墓守りだ！」

「蜂須賀家でさ」

「なに！」

狂四郎の表情が、急に、鋭くひきしまった。

――蜂須賀家が、あれだけの手練者を、墓守りにしておく！

当然、これには、重大な理由があると、考えられる。

狂四郎は、成瀬が、隠忍して、去ったのは、無頼の寺侍を対手に争うことの愚かさをさとっていた、というだけではなく、何かの重大な使命をおびているために、その腕前をかくしたのではなかろうか、と推測してみたのである。

推測は、どうやら、当っていたようである。

阿波藩江戸家老稲田八郎右衛門が、風心刀の達人を、墓守り役のままにすてておくわけが

ない。風心刀の達人だからこそ、墓守り役を命じたに相違ない。そうせざるを得ない秘密が、菩提所にあるのだ。

「成瀬俊三郎は、墓地の中の小屋に住んでいるのだな？」

「そうでさ。十七、八の妹と、二人ぐらしで、年に一度の殿様の墓詣りの時のほかは、鼻毛でも抜いているか、住職とざる碁でも打っているよりほかは、ひまのつぶしようのねえ毎日でさ。妹ってえのがお転婆で、線香臭せえくらしに不服が山とつもっているらしく、あっしの舌っさきに乗っかって、なんでも喋ってくれましたがね、どうも、怪しいふしは、塵っ気もなさそうでさあ――」

狂四郎は、立ち上がると、

「金八、おれのかわりに、ここで、飲んでゆけ」

「冗談じゃねえ」

金八は、しかめっ面になると、女を、じっと見やって、

「徳を好むこと、色を好むが如し、って――あっしゃ、近頃、精進しているんで」

「あんなこと云って……どこかに、馴染みが、待っているんだろ？」

女が、にらむと、金八は、大袈裟にぶるぶるっと身顫いして、

「女の怕さを、つくづく思い知らされた矢先だあ。化け目で睨まねえでもらいてえや」

「深い企みのありとも知らず、うかとはまった陥し穴、かえ？」

「嘘の筑波根ときくからに」

「恋ぞつもりて、ふちとなりぬる」
「できた！　学があらあ。けころにしておくには惜しいや」
「嘘や手管はもう売りあきて、今じゃ誠の売れのこり。実があるぞえ。乗り換えちゃ下さんせぬかえ」
「盲になったら、また来らあ、は、は、はっくしょいっ！」

三

神田川に架けられた淀橋を渡って、北へ辿ると、中野三重塔。その塔裏手にある屋敷は、曾て、美保代が、新太郎とともに、ひっそりとくらしていたところである。
狂四郎が、一刻あまり後――暮れなずむ草道をひろって来て、到着したのは、この屋敷であった。
穂垣をまわり、梅軒門をくぐった狂四郎は、ちょっと、そこに立ちどまって、凝った庭を、なつかしいものに眺めた。
羅漢槙や女青や山茶花や樅などの常葉樹のしげりも、石燈籠や、飾井戸や、つくばいのたたずまいも、昏れて行く世界の中で、一年前のままの幻想的な風趣であった。
ただ、ちがっているのは、住む人が、他の女性であることである。
狂四郎は、置石をふんで、萱葺きの母屋に近づきかけて、ふと、中門の方へ、視線をめぐらした。

——美保代！
思わず、錯覚が、起こりかけた。
俯向き加減に、影のように、すっと、そこをくぐって来た人のすがたが、楚々として、儚い美しさに、目に映った。その手に、虞美人草の花を持っている風情が、狂四郎に、亡き妻がよく、そうして花をつんで来たことを偲ばせたのである。
女性は、蜂須賀阿波守夫人であった。
「あ——」
顔を擡げた夫人は、狂四郎をそこに見出すと、悦びの色を泛べる前に、おどろきで全身を搏たれて立ち竦んだ。
座敷で対座した時、透けるような白いおもてに、羞恥の紅味がさした。
狂四郎は、内心、
——やはり、似ていた。
自身に呟いていた。
夫人の見目かたちは、美保代と似かようたところは、すこしもなかった。にも拘らず、この細いおもては、亡き母の俤と、どこやら一脈通じるものがあった。狂四郎は、曾て、美保代と母が似ていることに気づいて、これが強い絆となる宿命を覚悟していたものであった。
美保代とすこしも似ていないこの夫人が、しかし、亡き母の俤を、どこかに写していると いうふしぎを、狂四郎は、やはり、ひとつの運命として、感慨ぶかく、受けとらざるを得な

かった。

「……ここへ、参りまして、はじめて、心の安らぎをおぼえました」

夫人は、目を伏せたまま、云った。

「緑衣黄裏の時世なれば、この孤独のくらしをおのぞみになった貴女に、いつまで、危きが避け得られるものか、わかりませんが……」

そう云ってから、狂四郎は、用向きをきり出した。

「おたずねしたいことがひとつ。成瀬俊三郎という御仁が、蜂須賀家の菩提所の墓守りをされて居るが、稀有の使い手をして、その役に置いたのは、仔細あってのことと存じますが、如何です？」

夫人は、一瞬、おもてをこわばらせて、俯向いたが、すぐに、じっと瞶めかえして、

「それを、きいてどうなされます？」

と、問いかえした。

「本日、成瀬氏に、殊更に、喧嘩をしかけた寺侍どもが居りましたが、これは、どうやら、ゆすりたかりのたぐいではなく、成瀬殿の手の内を観ようとして、寺侍どもを使嗾した者が、陰にいると考えてよいと存じたのです。と申すことは、成瀬氏が墓守りとなっている理由を、使嗾者が、すでに知っている上でのしわざではありますまいか」

「…………」

「もし、使嗾者が、貴女を拉致したあの徒党とすれば、わたしにとっても、敵であり、これ

は、たたかってみる意欲をそそられるということです。尤も、あの成瀬氏ならば、むざと、敵の奸策に乗せられて、敗れるおそれはありますまいが……」

夫人は、しずかに立って、奥に入ったが、すぐに、ひきかえして来た。その手には、一枚の絵図面が持たれていた。

狂四郎は、膝の前にひろげられたそれへ、目を落した。

「ふむ！」

頷いて、夫人へかえすと、

「多分そうではなかろうかと考えていました。では――」

一礼して、立った。

瞬間――夫人は、何か云おうとして、微かにわななく唇をひらいたが、声には出せず、双眸に、必死な光を燃やした。

狂四郎は、咄嗟に、この女性もまた、美保代と同じ道を辿ろうとしていると、読んだ。

曾て、作者は、美保代について、次のように書いた。

美保代は、これまで、ただの一度も、全身全霊で、情熱を奔騰させたことがない。自由な、奔放な欲望の表明を知らないのだ。聡明な判断力や秀れた徳性は、彼女の美貌や挙措振舞いに品位を与えて来たが、しかし、それはかえって抜きがたい宿命観の中へ自身をとじこめてしまう不幸をもたらした。恋というものに溌剌と応じてゆく若い肢体の活動を抑えつづけたこの不幸な女性は、あたかも、現在の孤独に堪える力をたくわえるために、そうしたかとさ

え思いなされるのだ。
まさしく——。
この阿波守夫人もまた、美保代と同じ運命に置かれているのであった。
ただ、夫人が、美保代とちがっている点は、すでに、狂四郎に犯された時に、その白い豊かなからだの奥に、快楽のよろこびを知ったことであった。いや、それだからこそ、かえって、狂四郎に出現されてみれば、炉の中の燠火(おきび)が、油をそそがれたように、全身に燃えあがり、堪え難い疼(うず)きとなって肉をふるわせるのだ。
いま、すげなくも狂四郎に立ち去られて、どうして、この夜を過し得よう。
つと踵(きびす)をまわして、出て行こうとする狂四郎にむかって、突如、夫人は、われを忘れて、裾(すそ)を乱して、立ちあがると、走り寄った。
……なんの言葉も、その朱唇(しゅしん)からは出なかった。
ただ、熱した喘(あえ)ぎをせわしくつづけ乍ら、必死に、いのちをこめて、夫人は、狂四郎の両肩にしがみついて、食い入るように仰いだのであった。

四

下谷御成街道から、明神下の方へむかって入ると、神田旅籠町(はたごちょう)。南方に、筋違(すじかい)御門をのぞむ大通りを、すこし辿ると、右手に加賀原の馬場があり、その後に、古びた寺院があった。
蜂須賀家の菩提所であった。

朝陽のさしそめた頃合、狂四郎は、山門をくぐった。
本堂前を掃いている納所に近づいて、成瀬兄妹の住む庵を尋ねた。
「あそこに見えます萱門をくぐってお行きなされますと、蜂須賀様の墓地でございます」
と教えられて、そこの大開戸の中につけられた潜戸を抜けると、
――これは！
と、狂四郎は、目を奪われた。
墓地――とは、到底見えない、広い書院式の庭園なのであった。
樹木の殆どは、松で、江戸草創期からの永い年月を経て、みごとな枝ぶりであった。伽藍石、石燈籠など、いずれも時代色がついて、幽雅なおもむきがあった。数百坪はあろう。
歴代の墓碑は、それぞれ、配置の結構をたもって、松陰にひっそりと建っていた。
左方の光悦寺垣のむこうに、草庵があった。
狂四郎は、歩み寄って、風流な網笠門の戸を、押した。
刹那――愕然となった。
第一歩でふむ短冊石を、かき抱くようにして娘が仆れていた。
かかえ起こしてみると、左肩から袈裟がけに、一太刀で斬られていた。ひとすじの血糸を、くちびるから頤へひいている死顔に、苦悶の色がないのは、来客の声に応えて、戸を開いた瞬間を、あびせられたものに相違ない。
狂四郎は、いそいで、草庵へふみ込んだ。

惨たる修羅場と化した痕跡なまなましく、血汐は、いたるところへ散っていたが、屍は、一個も見当らなかった。

縁側から、露地へ出た狂四郎は、彼方の腰掛待合に、成瀬俊三郎の姿を発見した。

足早やに近寄った狂四郎は、二間のてまえで、

「…………！」

凝然として、息をのんだ。

成瀬は、衂れた一刀を杖にして、壁に凭りかかり、くわっと、双眼を瞠いて、事切れていた。血の海からあがったように、全身が、濡れていた。

戦国のむかし、孤剣をもって、砦をまもったもののふの、壮烈な最期はかくや、と思わせた。

狂四郎は、夫人にすがられて、つい一夜をすごしてしまい、ここへ到着するのがおくれたのを、烈しく悔いた。

雲が動いて、陽光が、斜めにそそぎ、その悽愴な憤死の姿にあたった。視力なき眸子が、煌と光ったようであった。いまだ、冷たい体内にのこっている魂魄がなお、そこを見戍るがごとく、眼眸は、とある一角へ向けられていたのである。

狂四郎は、視線をまわした。臥竜のかたちに、幹を地に匐わせた巨松の前に、織部燈籠が傾いて立っていた。

狂四郎が、夫人のさし出した絵図面の中に見た、朱点が、そこであった。朱点のそばに、

小さく、「主のたから」と記されてあったのである。

けだし、海の彼方から渡って来た勇気のある伴天連が、その信仰を、この国にうえつけ、ひろめるための資金として携えた莫大な財宝が、そこに匿されていたのである。

狂四郎は、歩み寄って、たしかめるまでもなく、織部燈籠が傾いていることで、すでに、そこが掘られていると知った。

「主のたから」は、運び去られたのか？

この時、遠くで、

「うわっ！」

驚愕の叫びが、あがった。金八であった。娘の哀れな姿に仰天したのであった。

狂四郎は、金八が、自分の姿を見つけて、走り寄って来て、成瀬の物凄い死にざまに、こんどは、声も立てずに、立ち竦むや、

「金八、上野町一丁目の、摩利支天横丁へ行って、沐兵衛という植木屋を呼んで来い」

と、命じた。

「が、がってん――」

金八は、一散に、駆け出して行った。

狂四郎は、そのあいだに、兄妹の遺骸を、草庵にかつぎ込んで、北枕にならべておいた。

やがて、金八に遮二無二ひっぱられて来た七十越えた植木屋は、かねて、狂四郎とは顔見知りであった。江戸随一といわれている名人で、武部仙十郎と親しく、江戸城西丸の後苑に

も出入していた。
「あそこにかたむいている織部燈籠だが――」
と、狂四郎は、指さして、
「位置として、どうだろう？　不調和ではないか」
と、訊ねた。
「へえ――」
沐兵衛は、ちょっと、小首をかしげていたが、
「おかしゅうございますな」
「そうか」
狂四郎は、微笑した。
「お前なら、どこへ据える？」
「左様でございますね」
沐兵衛は、置石をふんで出て、ややしばらく、思案していたが、
「あの獅子がしらの楓の右わきでございましょうかな」
と、定めた。
「わかった！」
狂四郎は、頷いた。
成瀬俊三郎は、慎重且つ賢明であった。強敵に狙われているとさとるや、織部燈籠の位置

を動かしておいて、万全を期したのである。
敵は、むなしく、空手で、去らねばならなかった。
沐兵衛を帰らせた狂四郎は、
「金八、どうだ。ひさしぶりに、おれの円月殺法を見物するか」と、云った。
「へえ？　出かけやすか？」
「いや、待って居れば、むこうからやって来る」
狂四郎は、北端の叢樹（そうじゅ）の陰に、怪しい影がひそんでいて、いつの間にか、消えて行ったのを、すでに知っていたのである。

狂い部屋

一

「えっへん――おほん」

下谷広小路「本牧亭」の昼席の高座で、立川談亭は、張扇で、読み台を、ぴしりっと打鳴らして、反り身になった。

「時はいつなんめり――永禄三年五月十日と九日は丑の刻、清洲城は御本丸、奥の寝所の褥の中、仇な夜風に、ふと目をさましゃ、来ぬ夜、きこゆるあの半鐘は、首尾もおじゃんと鳴るわいな――てな次第にはこれあらず、あれこそは、駿・遠・参の頭領にて、海道一の弓取なる今川治部大輔義元が、率いてここに嘘八百万、かぞえてこれは五万の大軍、威風草木を靡かせて進撃し来るの警報なりっ。これをきくが早いか、がっ破と牀を蹴って、つッ立ち上った若荒武者は、これぞ織田上総介信長公、年も血気の二十と六歳。来たか義さん、待ってたほい、竜車に手向かう蟷螂と云う勿れ、蝦で鯛釣るためしあり、その坊主っ首をばひっちぎり、今川焼きにぞなしくれん、と――腹がへっては戦さが出来ぬ。立ち飯喫して、小鼓取り、打って謡うた敦盛舞曲。

人生五十年、化転のうちをくらぶれば、夢幻の如くなり、一度び生を得て、滅せぬ者の
有るべきか
死のうは一定、しのび草には何をしようぞ、一定かたりをのこすよの……いざや、者共、螺吹け、具足をまとうべし、云いも終らず、金色の志加美を立てたる兜をば、一天高しと押し戴き、青貝打ったる三間柄、大身の槍をかい込んで、風の如くに走り出で、乗ったる馬は連銭葦毛、目指すは、田楽狭間の敵の陣」

談亭は、羽織をぬぎすて、手拭いで額の汗をぬぐい乍ら、一隅に、眠狂四郎の姿を見つけると、にやっとしてから、

「時しもあれや、残月天空にかかって、一路幽か——まだ明けやらぬ街道に、啼いて通るか明鴉、たまの逢瀬の短か夜に、ふたつ枕をならべたままで、一夜あかしの恨みごと、十四の春から通わせて、今更イヤとはどう欲な、鴉が啼こうが、夜が明けようが、お寺の坊さん、鐘突こが、枕屏風に陽がさそが、このわけきかなきゃ、起しゃせぬ——つつみ隠せど、濡れたる事を、人に知られて汗襦袢、馳せて走って三里と五町、人馬はともに玉の汗」

このおり——。

狂四郎の前に坐っていた、緋縮緬がほのぼのと透く明石を仇にまとうた女が、すっと立って、出て行こうとしかけて、瞥と狂四郎に流眄をくれた。

冷たく、目をかえし乍ら、狂四郎も、その妖艶な美しさをみとめないわけにいかなかった。

その透ける緋縮緬から匂いこぼすように、甘い香をただよわせて、こみあった膝と膝のあ

いだを、裾さばきも鮮やかに、行き過ぎたが、それが、談亭の講釈にあくびして立ったのではない証拠を、狂四郎の耳にのこした。

「地獄へ――」

行き過ぎがてに、その一語を呟いたのである。自分に投げられたものと、狂四郎は、さとった。

切支丹のこの忌み語は、狂四郎にとって、身近なものだった。

地獄に墜ちるほかはない異端者として、無頼の所業を積み重ねて来た身である。ただ、これを見知らぬ他人から投げつけられたのは、はじめての経験であった。

狂四郎が、やおら身を起して、女のあとを追ったのは、しかし、あいてが、異端者を悪むかくれ切支丹と見てとったからではなかった。むしろ、反対に、その女に、信徒特有の雰囲気がみじんも感じられなかったからである。

こちらを眠狂四郎と知って、誘いの手段として、自身にも口馴れぬその言葉を投げることが、最も効果がある、と誰かに教えられた。――そう読んだ。

もし、あいてが、ほんもののかくれ切支丹と見てとったならば、狂四郎は立ち上がらなかった筈である。

二

山下を過ぎて、新寺町から幡随院門前へ抜け、辻を右折すると、浅草寺の本堂の大屋根が、

はるか彼方に、蒸した夕靄に溶けた中空を割って、高くそびえていた。

二間の距離を置いて、女も狂四郎も、しずかな歩みをつづけて来た。

寺ばかりがならんだ通りで、風呂敷包みをかかえた少年たちの姿が多く見かけられるのは、文字通りの寺子屋が、はやっているのであろう。げんに、山門わきに、「御家流」という看板をかかげた寺も見受けられた。

女は、曹源寺という古寺の土塀に沿うて、つと、左へまがった。行手は、ひろびろとした青い田地で、それを通り抜けると、非人溜へ行きつくことになる。

――どこへ、つれて行こうとするのか？

なかば興味をうしないかけてい乍ら、狂四郎は、無為なひとときのひまつぶしに、ここまで尾行して来たからには、ひきかえすわけにもいかなかった。

田植えを終った野から吹いて来る夕風が、涼しく、人影のないまっすぐな往還の歩みは、心地よかった。

狂四郎は、およそ半刻も、こうして女の後姿を眺めているうちに、ひさしぶりに、身うちに、花を見て枝を手折る欲望をおぼえていた。花は、あきらかに、毒を含んでいたのである。一歩毎に、なよやかにくねる腰の動きは、緋縮緬の陰に、男を悩殺する妖しい媚態の修練を積んでいると、はっきりと見てとれた。

と――女の足が、はじめて、停められて、白い顔が、まわされた。

にこ、とほころびた――それが合図であったと、後に判ったことである。

頭上から、鋭く唸って、飛んで来た物を、狂四郎は、しかし、それを予期していたごとく、軽く首を反らして、耳朶すれすれに躱した。地べたへ突き立ったのは、珊瑚玉の簪であった。一瞥して、それは、ただの簪ではなく、護身用の、手裏剣に代え得る一本足の銀造りであった。

狂四郎は、それをひろいとってから、投擲者を仰ぎ見た。一文字瓦葺きの高い土塀上に、百日紅が、うねった太枝をさしのべていたが、投擲者は、それに腰かけていた。

意外にも、まだ二十歳前の、ぽってりとした丸顔の、大きく張った眸子と、ふっくらとふくらんだ頬に刻まれた片靨が、印象にのこる武家娘であった。

狂四郎を苦笑させたのは、武将が出陣に臨んで、牀几に就き、威容を示している図にも似て、肩をそびやかせ、両肱を張り、膝をいっぱいに拡げている恰好であった。

裳裾は、はだけ、白い腰絹の陰に、ゆたかな太股が、斜線を引いて、その奥に幽かに霧る女体の色づいた亀裂までも、覗かせていた。

狂四郎の擡げた視線を、まともに受けとめた娘は、

「ほほほほ……」

と、愉しげな笑い声をたてた。これは、狂った者独特の甲高さであった。

狂四郎は、二間のむこうに佇んで、食い入るように自分を瞶めている女へ、視線を返すと、

「なんの意味だ、これは?」

と、訊ねた。
「あたしと、なんのかかわりもないことでござんす」
女は、冷やかにこたえた。
「そうは云わせぬ。が、まアよかろう」
次の刹那、狂四郎は、娘の股間めがけて、簪を投げ上げた。あやまたず、それは、娘の亀裂の中へ、珊瑚玉の根元まで、ふかぶかと吸い込まれた。
「ひっ！」
おそろしい悲鳴を発した娘は、のけぞりつつ、夢中で、一枝を片手摑みにしたが、それがぽきっと折れるとともに、白い双脚を空ざまに、大きく開いて、落ちて行った。
狂四郎は、ゆっくりと女に近寄った。
「おれに地獄へ墜ちろと云ったのは、なんの理由によるのだ？」
「切支丹には、つもる恨みがござんす」
「おれは、べつに、切支丹ではない」
「お前様が、なんと言訳なさいましょうとも、そのお顔をとりはずすわけには参りますまいよ」
「顔？」
狂四郎の眼底で、暗い光がうごいた。
「あたしに、二世を誓った男がいたと思っておくんなさい。なんの因果か、その男が、商い

で上方(かみがた)へ半年ばかり行っている間に、御禁制の耶蘇(やそ)教にとり憑(つ)かれて、江戸へ帰って来たら、あたしなんぞを見向きもせずに、ひまさえあると、青銅の画像を飾って、せんすまるはらいそ、せんすまるはらいそと、わけのわからない陀羅尼(だらに)を唱えはじめましたのさ。……隙(すき)を見て、その画像を覗いたら、まりやとかいう裸おんなだったから、あたしゃ、かっと来た。……男をまりやに取られちまったんだから、あたしゃ、きりすととやらを取ってやる――その時、その肚(はら)をきめましたのさ」

「きりすとを取る？　……取れたか？」

「ふふふふ。女の一念というやつでござんすよ。あたしゃ、みんごと、きりすとを取ってやった。毎日、可愛がって居ります」

――この女も、気がふれているのか？

ややあきれて見戍(みまも)る狂四郎へ、女は、にっこりして、

「旦那、おことわりして置きますけど、あたしゃ、いまのお嬢さんとちがって、正気でござんすよ。だから、銅で造られたきりすとを可愛がるよりも、生きたきりすとが欲しくなって、こうして、旦那をお誘いしたんじゃありませんか」

狂四郎は、合点した。女は、隠れ切支丹の一人から、わが貌(かお)に似たあの祈禱(きとう)像を盗みとったのだ。可愛がっているという意味は、足で踏みつけ、唾(つば)を吐きかける仕打であろうか。たまたま、どこかで、この眠狂四郎を見かけて、はっとなり、「生きたきりすと」と看做(みな)して、これに復讐(ふくしゅう)する機会をねらっていたのではないか。

いまの狂女は、並の者なら到底躱し得ぬ手裏剣打ちの達者であった。女は、この手裏剣を利用しようとしたに相違ない。

こちらにしてみれば、面妖(おかし)な、甚(はなは)だ迷惑な話であったが、男を失った女の悋気(りんき)が、常識では割りきれぬ異常な憎悪(ぞうお)を生むものであってみれば、これは、考えかたによっては、いじらしい振舞いとも受けとれなくはない。

「よかろう」

狂四郎は、にやりとした。

「お前は、どうやら、おれの咽喉(のど)をひと刺しする企ては、失敗したようだから、事のついでに、生きたきりすとの情を受けてみるがよかろう」

「たぶん、そうなるだろうと、あたしは、覚悟して居りました」

女が、ともなったのは、狂四郎の予測たがわず、狂女の落ちた屋敷であった。

これは、大名の下屋敷とも思われる立派な構えであった。

三

これより一刻ばかりさき、この屋敷に、一梃(ちょう)の駕籠(かご)が着いていた。

降り立ったのは、地味な路考茶縮緬に一粒鹿の子(かのこ)の黒裏、鼠緞子(ねずみどんす)の帯をきりりと締めた生粋(きっすい)の当世町方女房であった。三十前後であろうか、しっとりとした餅肌(もちはだ)の、熟(う)れた艶(つや)は、大店(おおだな)の裕福なくらしでつちかわれた、おっとりした気品を漂わせて、これは、仇っぽい歌妓(かぎ)な

どとはまたちがった色気で男心をそそる風情であった。

「駕籠屋さん、ここかえ？」

ちょっと訝しげに、駕籠舁きへ訊ねた。

「へい。まちがいござんせん。御新造さんは、おはじめてなんで？」

「ああ――。まるで、お大名の屋敷じゃないか。難波屋さんも、ごうぎなものだねえ」

感にたえたように、お内儀は、宏壮な構えを見わたした。

大玄関に入って、案内を乞うと、手代らしい中年の男があらわれて、

「よう、お越しやす。ささ、どうぞ――」

如才ない物腰で、招じた。

通された部屋には、ほのかな伽羅の匂いがこもっていた。なにからなにまで、吟味のゆきとどいた美しいたたずまいであった。

待たせるまでもなく、入って来たのが、まだ二十四、五の、役者のように綺麗な風姿の町人であったのに、お内儀は、またもや、意外な思いをさせられる様子をしめした。

「お初にお目にかかります。難波屋でございます。御新造さんには、是非一度お会いしなければ、大阪へもどれないと思うて居りました。なにしろ、御新造さんのお美しいことは、大阪へもひびいて居りますさかいなあ――」

「上方衆のお世辞には、叶いませんねえ。……わざわざ、お招き頂いて、有難う存じました」

お内儀は、日本橋北岸鞘町川岸の菱垣廻船問屋「利倉屋」の女あるじであった。主人の六兵衛が三年前に逝ってから、男まさりの気性で、万端とりしきっているのであった。おとせという。

利倉屋は、同じく鞘町川岸の銭屋とともに、大阪をはじめ摂河泉、京都その他上方諸国の荷物廻漕問屋として、公儀及び諸藩邸の御用達をつとめる双璧であった。

鞘町川岸で、江戸輸入の百貨が輻輳し、無数の艀下と大八車が、懸け声勇ましく荷扱いをする光景は、江戸名物のひとつにかぞえられていた。

ところが——。

昨秋、利倉屋は、千五百石積の菱垣廻船八艘が、暴風雨に遭って、難破して、屋台骨がぐらつきかかっていた。難船振合い勘定は、非常に面倒なもので、一部分の破損の場合でも、入札になると、落札価格と総元価の差引に、大変な悶着が起るのであった。まして、丸濡れとなると、負担の割合は、なかなか片がつかない。

利倉屋は、この難波屋の新綿を輸送して来ていて、その難に遭ったのであった。

毎年秋季に、大阪から新綿を輸送して来る新綿番船は、廻船仕事のうちでも、最も華々しいもので、第一番に到着した船からは、市中荷主の各店へ、赤い襦袢を着て、紅白の采配を持った水主たちが、太鼓をたたいてふれまわり、祝いはやすのであった。第一番に到着した船は、翌年第一に荷物積込みの特典を得るからであった。

すべて、縁起をかつぐ当時の商いであった。

新綿番船が、難破し、丸濡れになったことは、利倉屋の信用を、失墜させてしまった。
女あるじのおとせは、難波屋へ手紙を送って、来年もう一度、新綿を輸送させてくれるように悃願していたのである、
「利倉屋を生かすも殺すも、難波屋さんの胸三寸にある」と。
その難波屋が、ふいに、江戸へ出て来て、呼んでくれたのである。おとせは、とるものもとりあえず、やって来た次第であった。
酒肴がはこばれ、おとせは、盃を受けた。難波屋は、終始にこにこして、献酬にも馴れていた。
ほんのりと、頬を桜色にしたおとせは、
——もう大丈夫！
と、安堵した。
「難波屋さん、思えば、ながいつきあいでございますね。おききおよびでござんしょう。五代様の頃の話——」
「あ——衣裳くらべのことでございますか」
二人は、頷きあった。
五代将軍綱吉の時代、利倉屋も難波屋も、すでに豪奢なくらしを誇る大店だったのである。
利倉屋は、照降町の角屋敷に住んで、鉅万の金を、土蔵に積んでいた。その女房は、華美を好んで、虚栄の権化のようなぜいたくぶりをしめしていた。

取引先きの大阪の難波屋の女房もまた奢侈を好んで、美衣美食にうき身をやつしているときいた利倉屋の女房は、
「衣裳くらべをしようではないか」
と、手紙を送って、はるばる東海道を越えて行った。
場所は、京の清水寺の舞台がえらばれた。
難波屋の女房は、洛中の図を繡わせた緋繻子をきて、待ちかまえた。
あらわれた利倉屋の女房は、黒羽二重に南天の立木を染めた小袖をまとうていた。
見物のために蝟集した人々は、ひとしく、
「くらべるまでもない。大阪が勝ちじゃ」
と、評した。
ところが、能く見れば、南天の実は、珊瑚の珠を砕いて縫いつけたものであった。
利倉屋の女房は、意気揚々と、江戸へひきあげて行った、という。
こうした因縁をもっている両家であった。半刻もすごすうちに、おとせは、安堵とともに来た酔い心地に、しぜん、身のこなしもなまめいて、膝も崩れた。
「……ほんに、こんなに頂いて――酔いました」
目もとと声音に、媚をふくめたおとせを、優しく見戍っていた難波屋が、この時を待っていたように、
「御新造さん、てまえも商人でございますゆえ、お店の船へ新綿を積ませて頂くからには、

ひとつ条件をつけさせてもらいます」
「どうぞ――なんなりと」
「お前様を、うちの新綿へ積ませて頂きましょうか」
「…………」
一瞬、おとせの全身を、微かな戦慄が走りぬけた。
「おいやでございますか？」
ねっとりと吸いつくような眼眸と声音であった。
「い、いえ……」
おとせは、いまさら、首を横には、振れなかった。

次の間に、すでに、その用意は、なされていた。
ふんわりと身の沈む三枚重ねの褥に、帯だけ解いて、仰臥したおとせは、目蓋をとじ、胸で手を組んで、難波屋に、裾前をめくられるにまかせた。
あらわにされた下肢は、豊かに肉盈ちて、しかも、三年の空閨に肌膚を包みかくされていた羞恥に息づいて、甘く匂うた。
それを、しずかに、押し拡げられつつ、おとせが、とじた目蓋の裏に描いているのは、新綿番船が到着した華やかな光景であったろうか。
難波屋は、その若さにも似ず、愛撫に執拗であった。おとせは、唇を、乳房を、そして、

、、そこをむさぼられるうちに、いくたびか、堪えがたい声をたてて、身もだえつつ、猶(なお)あいてが、じぶんの中に入って来ないことを、訝らずにはいられなかった。

……おとせをして、はじらわせたのは、いざとなって、ほんの数秒の間しか、かぞえられなかったことであった。

ぐったりとして、ゆるやかに引いて行く干潮に、身を漂うにまかせていたおとせは、やがて、のろのろと起き上がって、身じまいをととのえた。難波屋が、じぶんの上から退くやいなや、すっと部屋を出て行ったことに不満はあったが、この秘事が、わが店をすくうことになんの疑いもなかった。

おとせは、去った。

と——。

床の間のわきの、壁とみせた部分が、ぎいっと軋(きし)って、ぽっかりと口を開けた。

そこからあらわれたのは、白髪の老人であった。骨格逞(たくま)しく、いかにも古武士然としていたが、杖(つえ)をつき、足つきがおぼつかなげであった。付人の士が三名うしろにしたがった。

急いで入って来た難波屋が、そこへ平伏すると、老人は、底光りする目を据えて、

「流石(さすが)は姣童(かげま)めじゃ。女子(おなご)をよろこばせるすべを心得居る」

と、云った。

大阪商人になりすませたのは、実は、湯島天神の姣童(かげま)茶屋の一人であったのである。当時、姣童は、殆(ほと)んど大阪から連れられて来ていて、その大阪訛(なまり)と方言が、よろこばれていたので

ある。大阪商人になりすますことは、さしてむつかしくはなかった。

「お役に立ちまして、ございましょうか？」

怯ず怯ずと、訊ねるのへ、老人は、ふんと鼻を鳴らしただけであった。

四

お仙、という仇な女が、狂四郎をつれて来て、その同じ褥へ横たわったのは、それから四半刻も過ぎてはいなかった。

曾て、自ら観念して、そうやって身をなげ出した女を、狂四郎は、幾人眺めて来たことであろう。

しばらく、じっと見下ろしていてから、つと、寄ろうとしたとたん、遠くから、異常な鋭い叫び声があがった。

あの狂女であった。

叫びのあとに、ひきつづいて、けらけらと笑い声をたてて、ばたばたと廊下を走って行く――。

――傷つきはしなかったようだな。

そう思った――瞬間、狂四郎の脳裡に、霊感のごとく閃く直感があった。

――そうか、読めたぞ！

狂四郎は、逡巡わず、お仙の片足くびを、むずと摑むや、もう一方の足くびを踏みつけて

おいて、生木でも裂くように、ぐいと拡げさせた。
「おい、お前は、きりすとを、毎日可愛がっていると云ったな」
お仙の面上に、恐怖と狼狽の色が走った。
「どうやら、女の執念のおそろしさを、痴呆な真似にしてみて、自己満足をして居るのであろうが、痴呆の真似は、所詮、痴呆の真似でしかあるまい」
云い終らぬうちに、狂四郎は、空いた片手を、緋縮緬の湯もじがもつれまつわった股間へ、すっとさし入れた。
腰をよじるお仙の抵抗をおさえて、さっと抜きとったのは、濡れた青銅のぜずす・きりすと像にまぎれもなかった。
やおら、立ち上がった狂四郎は、床の間わきの壁に向かって、
「そこに隠れておいでの御仁、顔を見せて頂こうか」
と、云いかけた。
壁が動き、いきなり、三名の士が、躍り出て、斬りかかったが、いずれも、滑稽にも、そのきりすと像で、鼻柱をしたたか打たれて、ひっくりかえってしまった。
狂四郎は、杖をついた老人に、冷笑を送って、
「年寄の冷水、ということがあるが……回春の手段としては、あまりにも陰惨に過ぎよう。どうせのことなら、あの狂った娘に、白昼、庭前で、裸踊りをさせたら如何？」
そう云いのこした。

実は、老人の回春を欲する心は、悲壮なものだったのである。旗本布衣以上大御番頭五千石の家を絶やさないために、老人は、是が非でも、嫡子を儲けなければならなかったのである。唯一の肉親である孫娘は、狂って、婿取りの希望がうしなわれていたから——。

尼寺春情譜

一

奇怪な依頼であった。

武部仙十郎にたのまれて、次代の将軍家権大納言家慶(ごんだいなごんいえよし)の御側御用人(おそばごようにん)、堀大和守の上屋敷へおもむいた眠狂四郎は、書院へ、寵妾(ちょうしょう)をともなってあらわれた当主から、その奇怪な依頼を受けたのである。

大和守は、すでに初老に達していたが、青年のように澄んだ眼眸(まなざし)の柔和な風貌(ふうぼう)の持ち主であった。

「噂(うわさ)によれば、その方は、魔剣をふるって比類ない颯爽(さっそう)ぶりを示すとともに、女人を犯したことも夥(おびただ)しいときくが……」

いきなり、そう云いかけたのであったが、ふしぎにその穏やかな声音は、こちらに不快の念を催させぬおっとりとしたひびきをもっていた。

狂四郎も、無表情のままで、

「十余年を無頼に生きて参りました故(ゆえ)、汗出(い)でて背を沾(うるお)す所業のかずかずを否定いたすわけ

には参りませぬ」
「されば、池塘の春草を潤すすべには、長けて居ろう」
「いささか――」
平然として、狂四郎は、こたえた。
大和守は、微笑した。
「それについて、たのみがある。実は、この八重なる女じゃが――」
と、かたえの寵妾を、紹介した。
廿歳ばかりになろうか、切長な眸子に凄艶な光を湛えて、それが破調となって、造作すべての繊細な清楚な美しさに妖しい魅力を与えている女性であった。冷たい気象が、透けるような白い肌膚の下にひそめられているようであった。
狂四郎は、むしろ、その美貌よりも、肩から膝に置いた手にかけての、滑らかな線に、なんともいえぬ、なまめかしい色っぽさが湛えられているのに、興味を惹かれた。腕白く膚紅なり玉筍の芽、琴を調べ線を抽いて尖鋒を露わす、と韓偓が詠じた素手の美しさは、これであろうか。
「奥へ入れて、もう一年になるが……東郊春を探らんと欲すが、未だ鶯花の迹を見ず、じゃ」
「………」
「どうであろうな、ひとつ、その方にあずける故、酔いを勧めて、春情を解させてはくれぬ

か？」

途方もない申出であった。

しかし、狂四郎は、意外さにあきれる気色など、みじんもみせず、八重へ、冷たい一瞥（いちべつ）をくれた。

八重は、顔を伏せて、微動もしなかった。

「こちら様に御異議がなければ、お引受けつかまつります」

「八重に異議のあろう筈がない。わしのたのみじゃ。……女が、女のよろこびを知ることは、この上の生甲斐（いきがい）はあるまい」

封建の時世であった。筑前の藩儒貝原益軒の七去三従を説く「女大学」によって、婦人道徳はこれ以外、一歩も踏み出すことを許されぬ、まことに殃（わざわい）なる宿命にあった。

例えば、「女大学」の一条に――。

凡（およ）そ婦人の心様（こころざま）の悪（あし）き疾は、和ぎ従わざると、怒り恨むと、人を謗（そし）ると、物を妬（ねた）むと、知慧（ちえ）浅きと也（なり）。この五つの病は、十人に七、八は必ず有り。是（こ）れ婦人の男に及ばざる所なり。（中略）女は陰也。陰は夜にて暗し、故に女は男に比ぶるに愚にて、目前なる然（しか）るべき事をも知らず、（中略）古（いにしえ）の法に、女子を産めば三日床下に臥（ふさ）しむるといえり。是れも男は天にたとえ、女は地に象（かたど）る。故に万（よろず）の事に付きても、夫を先立て我身を後にし（中略）又人に侮（あなど）られても、憤（いきどお）ることなく能（よ）く堪えて、物を恐れ慎むべし――云々（うんぬん）。

こういう教えを、道徳の根蔕（こんたい）として、遵守（じゅんしゅ）して、家のため、親のため、良人（おっと）のため、じぶ

んを殺して、犠牲の生涯を送る者が、貞女であり節婦とされていたのである。
大和守の依頼は、八重にとって、女として最大の侮辱である筈だった。しかし、八重には、一語の抗議さえも許されてはいなかった。
狂四郎は、お付女中も駕籠もことわって、八重ただ一人をつれて、堀邸を立去った。

二

寵妾を無頼浪人の手にゆだねる人物であるから、大和守は、よほど冷酷な暴君のように思えるが、実は、世上、明君としてきこえていた。
西丸老中水野越前守忠邦が片腕と頼んでいる才智豊かな、しかも三端（文士の筆端・武士の鋒端・弁士の舌端）を避けて、人と諍わず、利器を乱用せず、いわば、終身路を譲るも、百歩を枉げずといった、御側御用人としてはうってつけの人物であった。
こういう逸話がのこっている。
十六歳の若殿時代、はじめて、信州飯田の城へ、江戸から帰って在る時、飯田から川路村の開禅寺まで遠乗に出た。従う陪乗の者よりも疾く、到着したので、ぶらぶらと山門から出て、とある路上に積んだ籾俵の上に腰を下ろして、おくれた家臣たちを待った。
そこへ、一人の老婆が近づいて来て、この籾は、お殿様へ差上げる年貢米ゆえ、その上へ腰をかけるとは、お侍様でも怪しからぬ、と咎めた。
若殿は、率直に、その非を認めて、立ち上がった。そこへ、家臣たちが乗りつけて来て、

老婆は、それが若殿ときいて仰天した。どんな御沙汰があろうか、と生きた心地もなく、わが家に戻って、寝込んでしまった。

若殿は、帰城するや、翌朝、その老婆を飯田の町会所へ呼び出させた。村役人同道で、おそるおそる罷り出た老婆に、若殿がその奇特な心がけに感服された、とあって、褒美として青緡一貫文が渡された。

その頃の、大和守の詠草に、

　仇にすな一穂の中も民の汗すつるなよ人忘るなよ人

というのがある。

家督して後の逸話にも——。

御側勤めの小姓館野弦蔵が、過まって秘蔵の鉢植を壊した。

弦蔵は、慌てて、事の次第を御側頭役の小林儀兵衛に話して、御沙汰を待った。

小林は、すぐさま、君前へ出て弦蔵麁忽の段を言上した。すると、大和守は、過失は誰にもある、咎めるには及ぶまい。ついでに、その方に、側頭役としての心得を申聞かせておくが、いつも、こうした場合には、ただ、御側の者が過失を致しましたと申せ、誰某が、と名を指すものではない、と教えた、という。

若年寄になって、権勢を得てからも、決して、傲慢にはならず、諸大名からの付届が、半期、千数百両にもなったが私服せず、悉く散じてしまっていた。

それでいて、小姓小納戸が、殿様の着服に火熨斗をかけてたたんでいると、強い火熨斗は

止めるがよい、あとで役に立たなくなる、といつも忠告していた。これは、御納戸払いといって、殿様の着服のお下がりを、君側の者が頂戴するならわしとなっていたので、拝領するものが、地の弱ったのでは為になるまい、という親切心であった。

御奏者番に出身して、十余年、全く落度なく、見事に勤めあげている明君であった。

それ程に尊敬すべき人物が、寵妾を、無頼浪人の手にゆだねたのである。

三

八重がともなわれたのは、小日向の、江戸川の堤に面した、とある古い寺院であった。

山門をくぐって行く狂四郎に、八重は、訝しげに、

「あの……ここは、どういう寺なのです？」

と、訊ねた。

「尼寺です」

狂四郎は、ただ、それだけこたえておいて、まっすぐに、足をはこんだ。

境内に人影もなく、狂四郎もまた、方丈の玄関で、案内を乞いもせず、さっさと、書院へ通った。そこで、対座して、しばらくのあいだ、八重は、屋内の無人の静寂に、不安な面持をつづけた。

襖が開けられて、影のように音もなく、お茶をはこんで来たのが、容貌醜悪な傴僂であったので、八重は、思わず、身をちぢめて、息をのんだ。こちらが、案内も乞わなかったのに、

ちゃんと知って、お茶をはこんで来たことも、薄気味わるかった。

「この男は、もと甲賀忍組という公儀隠密の一人でした。ものをたのんで、これほど信頼の置ける男は、またとない、と申上げられる。貴女が、内密のたのみをされるなら、最も親しくつきあっているわたしへと雖も、そのことを告げるような真似はせぬ。打明けられた秘密は、そのまま、墓場へ持って行ってくれる男です」

狂四郎が、そう教えたが、傴僂は、耳がないごとく、なんの反応もしめさず、すっと消え去った。

「ところで……貴女が、春情を解するために、祈禱の利生を甘心されるよう、この尼寺へおつれした次第ではない。祈禱などは無用のこと。貴女にしていただきたいのは、きわめて、つまらぬ行為なのです」

狂四郎は、頭をまわして、指さした。

障子が開けはなたれ、広縁のむこうは、荒れはててはいるが、植栽を中心とする作庭の妙趣に心を配ったなごりがうかがわれる露地がひらけていた。

「あの猿戸を抜けて行かれると、茶亭造りの離れがあります。そのむかいに、腰掛待合が設けられているが、貴女には、そこで、戌の刻から亥の時まで、腰を掛けていて頂きたい。それだけでよろしいのです」

「………」

八重は、狂四郎をじっと瞶めかえして、この男が命ずる意味をくみとろうとしたが、むだ

であった。

「三、四日経ったなら、伺うことに相成ろう」

そう云いのこして、狂四郎は、座を立って行った。

八重は、与えられた座敷に、庭から流れこむ涼しい夜風を受けて、ひっそりと坐っていた。

夕餉を持って来てくれたのも、次の間に夜具を敷き延べてくれたのも、例の傴僂であった。

八重の方からはもとより口をきかず、傴僂も唖のように沈黙をまもった。

傴僂が、どこかへ下がって行ってから、かれこれ一刻は過ぎた。

そのあいだ、八重は、身じろぎもせず、昏れて行く庭を眺めやっていた、放心していた、といってよかった。

遠く、時の鐘が、五つを告げるのをきいて、われにかえって、八重は立ちあがった。

命じられたことに、なんの疑いも抱かずに従うごとく、八重は、庭へ降り立つと、飛石をふんで行き、猿戸を押した。

二重露地になっていて、茶亭と腰掛待合は、ひくい竹垣で区切られていた。植込みの陰から、いくつかの燈籠が、幽かに、赤い灯を洩れさせていて、美しかった。

待合に入った八重は、つつましく、片隅に腰を下ろすと、まっすぐに、茶亭へ目をあてた。

障子は、一枚だけ開けられていた。人の気配はないようであった。あかるい灯とともに流れ出る薫香が、ここまでも、漂うて来る。

……八重は、ここでも、身じろぎもせずに、半刻あまりすごした。

やがて、障子に、人影が映って、しずかに動いた。頭を包んだ比丘尼（びくに）であった。

炉ばたに坐ると、そのうしろ姿が、四分（しぶ）ばかり、見えた。老若のほどはわからなかったが、その挙措は、いかにも優美で、奥床しい作法にはまったものに眺められた。

ひとり、心しずかに、点前（てまえ）をはじめたのである。

と――。

植込みに音がして、八重が、視線を移すと、のそりと、その中から、一匹の犬が出て来た。かなり老いぼれているらしく、首を垂れて、歩きかたものろくさかった。老犬は、下地窓の下を通りすぎがてに、

――来たよ。

と、告げるように、首を擡（もた）げて、ひと声、吠（ほ）えた。

それから、土庇（どびさし）の下に入ると、ほんのちょっと袖壁（そでかべ）ぎわに、蹲（しゃが）んでいたが、つと立ちあがると、のそのそと、内部へ上がって行った。

尼僧にあまえかかる風情（ふぜい）が、障子に影法師となった。

……不意に、尼僧が、

「ほほほほ……また、おねだりかえ」

若々しい笑い声をたてて、つと、正座の姿勢を崩した。

突如――八重の心身に、異様な衝動が来た。

尼僧の影が、すうっと倒れたかと思うや、障子の陰から、ゆっくりと、膝より下の部分がのぞけられた。

そして、そろそろ、その膝を立てるとともに、白羽二重の裳裾を滑り落したのである。

水色の腰絹も、膝が拡げられるにつれて、腿をするりと撫でて、めくりとられた。

凝視する八重の胸に、烈しい動悸が起った。

「ほほほほ……しろ、しろ——そのように、躍起にならずとも……ちゃんと進ぜようものを——」

嬌声をあげた尼僧は、畳にうち拡げた衣を音たてて紊し乍ら、恣に露にした下肢を、なよやかに波うたせはじめたではないか。

八重は、障子にかくされた部分の光景を覗きたい欲求に、全身をゆさぶられ、四肢をむずむずと匐い蠢くなやましさは次第に堪えがたくなって来た。顔は、火のように火照っていた。

四

中に一日を置いて、八重が、戌の刻の時鐘とともに、さっと座敷を出た時、庭に跫音がした。

すばやく、障子へ身を寄せて、そっと窺うと、嫋々とした足どりで、飛石をひろって行く後姿は、まさに、女であったが、八重は、一瞥して、

——あ！　半四郎！

と、胸の中で、叫んだ。

八重もまた、「寝起きから芝居話の長局」に住む一人であった。

当代双美として劇壇を飾っているのは、菊之丞と半四郎である。その一人を、八重が見まちがえる筈がなかった。

半四郎は、江都根生お山の開山と呼ばれ、清艶の容子と爛熟の技芸をもって、世に推され、鏡山のお初、助六の揚巻、白井権八など、その、気品のある美しさは、鼠木戸まで、女たちの溜息をあふれさせるといわれていた。台詞を砕いて、巧妙な面白い云い廻しを立てて、女形の台詞を一進歩させた功も、かぞえられている。

弥陀に帰依して、法燈をかかげ、念珠をまさぐる身であり乍ら、孤閨をまもることに堪えきれず、悩ましい、邪な欲望を、老犬によってみたしている淫靡な比丘尼のもとへ、その似顔を描いた錦絵の売れ行きも群を抜いた女形が、忍んで来る。

八重は、嫉妬で目晦む思いがした。

じぶんに、この逢曳を目撃させようと計った眠狂四郎に対してさえも、腹が立って来た。

しかし、女の性の中にひそむ残忍な妬心は、八重に、足をはこばせずには置かなかった。

腰掛待合に入った……八重をして、居ても立ってもいられない焦燥に駆らせたのは、茶亭の障子が、ぴったりと閉じられていたことであった。

八重がそこに来た時、もう、尼僧の影法師と女形の影法師は、ひとつになっていた。のみならず、八重に、それを見られるのをきらうごとく、障子の腰板の陰へ、消え伏して

しまったのである。

しのび笑う声、ひそやかな衣ずれの音がつづいた。

それも絶えて、八重にとって、おそろしく永く感じられる静寂があってから、不意に、女の絶え入るような鋭い呻き声が、断続して起った。

八重は、全身の顫えを怺えるために、しっかと、両腿を合わせ、膝の両手を握りしめた。口腔内は、乾いていたし、鼓動は胸を破るばかりに迅鳴っていった。

「……半さま——」

陶酔の坩堝の中で、身も心も溶かし乍ら、夢中で呼ぶ声をきいた刹那、八重は、思わず、耳を掩うた。

もはや、それ以上、八重は、そこに腰かけていられなかった。

八重の姿が、猿戸のむこうへ消えると、待合の裏手からふらりと狂四郎があらわれて、茶亭へ近づいて行った。

閉ざされた室内には、なお、みだらな声と物音は、ひきつづいていた。

狂四郎は、榑縁へ上がると、無言で、無造作に、障子をひき開けた。

意外にも——そこに横たわっていたのは、半四郎ただ一人であった。

手枕をして、これは、一人二役を、見事に演じていたものである。

左様、前々夜の比丘尼も、実は、この半四郎が扮していたのである。

狂四郎は、起き上がった半四郎に、笑って、

「御苦労であった。流石(さすが)は当代随一の女形だな。真を写して間然するところがない」
と、云った。
「お役に立ちまして、てまえも、演(や)り甲斐(がい)がございました。したが、眠様――」
半四郎は、ちょっと皮肉な冷笑を泛(うか)べて、
「このような濡(ぬ)れ事(ごと)を見聞きして頂く面倒よりも、お殿様のおたのみ通り、手とり早く、眠様がお教えなさいましたら、どういうものでございましたか？」
「何事によらず、わたしは、人にものを教える親切心を持合せて居らぬ」
「なれど、お殿様には、お引受けなさいましたのでございましょう？　濡れ事を見聞きして頂いたぐらいで、色の味をお知りなされるか、どうか――こりゃあ、疑わしいものでございます。やはり、実地にお教えしなければ、こればかりは、目や耳からおぼえるものではございますまい」
「その通りだな」
狂四郎は、ただ笑って、頷(うなず)いただけであった。

五

翌日の夕刻、八重の前にあらわれた狂四郎は、
「今宵(こよい)から、あの茶亭に泊まって頂くことになります」
と、告げた。

八重は、何か云いかえしたげに、きらっと眸子（ひとみ）を煌（きらめ）かせたが、すぐに思いかえして、顔を伏せた。

「但（ただ）し、お断りして置きますが、わたしが忍んで参るのではない。所用あって、七日ばかり、江戸をはなれなければならぬのです。……そのあいだ、あの茶亭で、お一人で起き臥しされたい。綺羅殿（きらでん）の内には、有為の悲しみを告げ、翡翠（ひすい）の帳（とばり）の内には、有漏（うろ）の願力ありとか——謡曲にあるこの文句を納得するには、いささか、日時を要することです。花も時節を待って咲く……そうなれば、おのずと、下に径（こみち）も通ずるというもの。お世話は、ひきつづき、あの傴僂がいたす」

そう云いのこした。

五日が過ぎた。

——今宵こそ！

茶亭でひっそりとくらす八重は、陽が落ちるとともに、その期待を抱いた。

期待を抱くようになったのは、茶亭に入ってから二日目の宵からであった。

身もだえした程のなやましい一人寝の三夜を過ごして、八重は、昼間は、いたたまれない焦燥に、駆られるようになっていた。

昏れて、焦燥に代って、期待が生まれ、一秒一秒をかぞえて、待っている八重であった。

夜半——三更の鐘をきいた八重は、ふたたび、期待を失望に変えて、おそろしい焦燥にさ

いなまれることになった。
——今夜も、だめなのだ！
褥に仰臥して、闇に大きく目をひらいて、じぶんに呟いた——その時。
猿戸が、ぎいっと軋る音をきいて、八重は、はっと息をつめた。
跫音はなかった。そのかわりに、雨戸が、微かに叩かれた。
八重は、胸をはずませつつ、その一枚を繰った。
黒い影は、上がりざま、一語も発せずに、八重のからだを抱いた。
八重は、喘ぎつつ、唇に口を受けた。
……そのまま、そうして、しばらく、抱擁がつづいた。
口をはなすと男は、
「伛偻が、使いに参ったが……信頼するに足りるであろうか？」
と、ささやいた。
「ご心配にはおよびませぬ」
男は、八重のからだを抱きあげると、闇を摺り足でさぐりつつ、褥へはこんだ。
横たわるやいなや、二人は、ともに、狂おしい勢いで、組みあった。
——一瞬。
室の一隅で、かちっと燧石を打つ音がした。男女の蠢きは、はたと停止した。
赤い明りが、満ち汐のように、闇を追いやって、ひろがった。

はね起きた男女は、有明行燈（あんどん）のかたわらに、幽鬼のように、のっそりと正座している眠狂四郎を見出して、その妖気（ようき）にあてられたように、身も心も凍らせてしまった。

狂四郎は、ふっと薄ら笑うと、

「はじめにお断りして置く。おてまえがたの密会を、あの傴僂の耳うちによって知ったのではない。これは、こちらの仕組んだ筋書を、おてまえがたが、素直に演じてくれたというだけのことだ。……考えてもみるがよい。おてまえがたの主君は、明君としてきこえて居る。その明君が、おのが愛妾の操（みさお）を、この無頼の浪人者の自由にゆだねるなどという、たわけた考えを持つであろうか。……目下、大和守殿は、公事多端のため、奥向きの事に関して、思慮するいとまがない。夫人が佞姦（ねいかん）の婦であり、殿付、奥方付の中臈（ちゅうろう）どもが、いずれも性情悪（あ）しきに加えて、国家老安富主計（かずえ）また、奸臣（かんしん）のたぐいということに相成ると、内情は紊（みだ）れて乱麻――大和守殿は、寵妾と雖（いえど）も、これに心を許すわけにはいかぬ。八重と名のって、妾となったそなたが、いつの間にか、自分の生命を狙（ねら）う奸臣の輩下の、色仕掛けにおうて、裏切っているとさとった大和守が、わたしにたのんで、その密男（みそかおとこ）をつきとめようとしたのは、さすがは、明君らしいやりくちであったと云える。……おい、小納戸頭・高遠小三郎、八重をたらし込んで、殿を毒殺するように、国家老から命令を受けている、と読んだが、どうだ？」

星あかりの露地で、狂四郎が、円月殺法の冴（さ）えた一颯（いっさつ）の下に、小納戸頭を血煙りあげさせておいて、茶室へとってかえした時、八重は、すでに、懐剣で、のどを刺して、果てていた。

恋慕幽霊

一

七月十三日——魂迎（たまむかえ）、という。

この日の昏（く）れがたになると、武家町家の別なく、魂棚（たまだな）を飾り、先祖累代（るいだい）の精霊（しょうりょう）をはじめ、有縁の霊は猶（なお）さら無縁の族（やから）にいたるまでの供養をいとなむ、就中（なかんずく）、身柄（みがら）のある武家、筋目正しい町家においては、魂迎のために、おのおのの檀那（だんな）寺へ行って、墓前へ燈火をあげ、生きた人を迎えるように、家々の定紋をつけた弓張提灯（ぢょうちん）で路上をてらし乍ら、家へ誘（いざな）う。武家では、正門を押しひらいて、玄関より間毎に、それぞれ家人が麻上下（あさがみしも）を着して、厳粛に、その霊魂を、仏間へ通す。町家では、主人以下番頭手代小僧にいたるまで、店にならび、門口（かどぐち）で、迎火の苧殻（おがら）へ火を移すと同時に、鉦（かね）を打ち鳴らし、称名を唱える。

迎火は、隣家、向う前とも、一斉（いっせい）に焚（た）くので、一時に、通りは昼のように明るく照らし出される。布施僧は木魚を鳴らし、乞食は欠け椀（わん）をささげて、この中を、うろつく——。

陰気な行事ではあるが、賑（にぎわ）いは、また格別の趣きがあった。

鼠小僧次郎吉は、魂棚を飾る間瀬垣と篠竹（しのだけ）を売りあるく在所者に化けていたが、昏れて来

た頃あいには、荷籠は殆ど空になっていた。

その大半は、裏店の路地に入って、貧乏人たちへ無料でくれてしまっていたのである。

──今宵までには、獄門になって、回向院で、無縁仏になっている筈だったのだが……。

うす穢い手拭いで頰かむりした顔を俯向けて、迎火を焚くばかりになった通りを過ぎて行き乍ら、胸の裡に、湿った感慨を催していた。

なんとなく、名乗り出そびれてしまったのである。一度は、お玉ヶ池の佐兵衛の家をたずねて行ったのだが、恰度留守で、それきり、足をはこばずにいるのであった。

──やれやれ、往生際悪く、魂迎が来ちまいやがった。

このぶんだと、来年まで、生命が延びた、ということになりそうだった。

とある居酒屋の前を行き過ぎようとすると、

「次郎吉──」

縄暖簾の中から、声がかかった。

覗き見た次郎吉は、顔へ活きた色を刷くと、天秤を肩からすてて、入って行った。

奥の片隅に──長床几に腰を下ろしていた眠狂四郎は、笑い乍ら、

「お互いに、無縁仏になりそこねたようだな」

「面目ない、と思って居ります」

次郎吉は、どうやら狂四郎の連れらしい、向い側にいる総髪無精髭の若い人物を気にし乍ら、こたえた。

それは、和蘭書「ターヘル・アナトミア」の翻訳「新訳解体新書」に基づいて実地に、死人の腑分けにあたり、最近「人体解体事録」なる名著を公にした蘭学医師・曾田良介であった。腑分けする屍を、希望に応じて提供したのは、狂四郎であった。

狂四郎は、良介にはばかるでもなく、

「この男が、鼠小僧――」と、ひきあわせた。良介は、しかし、別段、おどろきの表情をしめさずに、次郎吉に、盃を渡した。

「どなた様なので？」

次郎吉は、そっと、狂四郎に問うた。

「人間の心臓や胃袋をつかみ出して、いじくりまわす仕事にとり憑かれている御仁だ。したがって、今宵の行事などは、莫迦々々しいと嗤いすてておいでだ。霊魂などという代物は、この世に存在せぬと、断定していなさる。……次郎吉、お前は、どうだな？」

「あっしでござんすか。あっしは……」

次郎吉は、盃をひとつ空けてから、

「やっぱり――」

「幽霊はいる、と信じるか？」

「たぶん……いるおかげで、どうも世間には妙な事が起っているように思えますがね。げんに、四、五日前、この目で見とどけた一件がございます」

二

これが、この世での仕事納め、といった料簡で、忍び入った大名屋敷でございました。いつもなら、何様のお屋敷、と調べておいてから忍び込むのでございますが、仕事納めの積りでございましたから、行きあたりばったりに、表門の前で、賽ころを振ってみて、半目と出たらお邪魔することにして、ここだときめた四軒めでございました。

さして広くもない、表長屋もついていない、これは、せいぜい三万石程度の下屋敷でございましたろう。

天井裏をつたって、表から奥へ入り込んでみましたが、まるでもう、ひっそりとして、跫音も話し声も、きこえないのに、こちらの方が、うす気味わるく感じたことでございます。

内証が苦しくなって、借金のかたに、札差へでも明け渡したか、と思ったくらいでございました。

灯の入った部屋があるので、何気なく、覗いてみて、はっとなり、不吉な予感があたったような気がいたしました。

そこに——。

あのような美しさを、臈たけた、というのでございましょうか。まだ二十歳前のお姫様が、白と紫の桔梗がすりの寝間着を召して、緋縮緬の敷布団の上に、きちんと坐っておいでになりました。

時刻は、そろそろ亥の刻を過ぎようという頃あいでございました。にも拘らず、大和錦の掛布団は、たたまれてあって、横におなりになった様子は、全くございません。この寝所に入ってから、ずっと起きておいでになったと見えました。

それよりも、おどろかされたのは、細紐で両手と膝が、幾重にも縛りあげられていることでございました。柔らかな腕や胸や腿に、細紐が食い入って、いたいたしい眺めでございましたが、奇妙なことに、ご当人は、澄んだまなざしを宙に据えて、なんともいえぬ優しい気品の匂うしずかな気色でおいでだったのでございます。

どうにも目がはなせなくなって、左様、半刻近くも、眺めて居りましたが、そのあいだに、身じろぎもなさらず、そのままの表情をずうっと保っていらっしゃいました。こちらの方が、とうとうしびれをきらせてしまい、ほかの部屋をさぐりに、動き出してしまいました。

どの部屋も、すでに、有明は消されて、ただ、長廊下のところどころに据えられた金網燈籠が、隙間風にまたたいて居りましたが、どういうものか、不寝番の女中の跫音も起らず、屋内は、全く、しいんと寝しずまって居りました。

再び、その寝所の上にもどって参りましたてまえは、

——いったい、どうしたってんだ！

と、声をあげたくなりました。

姫様は、前とすんぶんちがわぬ正座すがたで、宙を瞶めておいでだったのでございます。狂っておいでではないことは、そのお顔つきであきらかでございました。

変化といえば、そのまなざしに、時おり、微かな愁いの翳が滲む——それぐらいのものでございましたろうか。

どうにも、面妖しな光景でございました。

こうなれば、こっちも、この決着を見とどけなければ、退散できない、と自身に云いきかせて、腰を据えたわけで——。

ふと気づいたのでございますが、縞物をお召しになるのは、上つ方では、精進日に限られているということでございました。この姫様は、どうやら喪に服しておいでになる——。

それから、さらに半刻が経って、畳廊下に上草履の摺り音が近づいて来ましたので、てまえのゆるんでいた神経も、やっと、ひきしまったわけでございます。

恰度、石町から、子の刻を告げる鐘の音がひびいて来たのをおぼえて居ります。

「姫様、お時刻でございます」

障子の外から、そう呼んで、するすると開いたのは、乳母とも見える老いた女中でございました。

いんぎんに、その前へ両手をついて、ひと通りではない不安の色を顔に泛べ乍ら、

「今宵は、いかがでございましたか？」

と、訊ねかけます。

すると、姫君は、はじめて、われにかえったように、ほっと深い溜息をついて、

「わたくしは、もう、明夜から、このような真似をせずにおこう、と思います」

と、弱々しい声音で、こたえられました。
老女中は、気色ばんで、
「それは、なりませぬ。亡霊めに、つけ込まれてはなりませぬ。もうしばらくのあいだの御辛抱でございます。我慢なされませ」
「もうしばらく……と云うて、いつまで、こうしていればよいのであろう？」
「四十九日が、あと八日で、参ります。それが、すぎますれば……」
「そうであろうか――」
姫君は、淋しげに、老女中をごらんになって、
「わたくしは、わたくしが生きつづけるかぎり、新十郎の霊魂は、あらわれると思います」
「姫様！」
老女中が、つよくたしなめようとすると、姫君は、かぶりをふって、
「よいのです。わたくしは、死ぬのは、すこしもおそろしくはありませぬ。新十郎が、それ程に、わたくしを欲しいのであれば、ともに、中有の闇に落ちても……」
「姫様！　そのようなお気の弱いことで、どうなさいます！　決して、決して、亡霊などの俘虜には、この松江が、させませぬ。……さ、おやすみなさいませ」
老女中は、はげまし乍ら、姫君のいましめを解き、毀れやすい脆いものでも扱うようにそっと、細い軀を、寝かせたのでございます。
……これも、あとで、気がついたことでございますが、姫君が正座されているあいだ中、

褥の四隅に据えられた、大奉書折上の小香炉から、まっすぐに、香煙が、立ち昇っていたのでございます。老女中が、入って来た時、それは、消えて居りました。

有明の灯が細められ、打掛で掩われて、寝所は暗くなり……それきり、何事もなく、夜明けを迎えました。

三

あらたにはこばれて来た熱燗を口にして、

「どういうものでございますかね、この亡霊ってやつは――」

と、次郎吉が、首をひねると、狂四郎は、薄ら笑って、

「次の夜も、お前は、見物に行ったな？」

「その通りなんで……宵のうちから、天井裏へ忍んだとお思い下さいまし。亡霊ってやつには、まだ生まれてこのかた一度もお目にかかったことがなかったので、仕事納めには恰好の景物だと思いましてね」

「出たか？」

「それが……あっしの目には、まるっきり――でございました。お姫様が、寝所へお入りになったのが、五つ刻で、その老女中がおともして来て、すぐに、縛りあげてしまいました。四つの香炉に、香を焚いておいて、出て行き……それっきり、なんの変化もありゃしませぬ。お姫様は、宙を瞶めて、じっと坐りつづけておいでだった――それだけの話でございま

す。

子の刻が来て、香のけむりが消えると、老女中が入って来て、はげまし乍ら、細紐を解いたのも、前夜と同じで、なんだか、あっしは、あっし自身が、かつがれているような気がいたしました」

次郎吉が、そこまで語った時、それまで黙々として飲んでいた若い蘭医が、笑い出して、

「出る筈がない。亡霊なんぞ、居りはせんのだから――」

と、きっぱりと云った。

「へえ？　ですが、先生、あらわれもしない亡霊におびえて、毎夜、ご自分のからだをしばらせるとは、酔狂も過ぎるじゃございませんか」

「まことに、その通りだ。実は、わしも、一度、診てくれと依頼されて、一夜つきあって、匙を投げた。あれは、自然に、癒えるのを待つよりほかはあるまい」

良介は、冷淡に、云いすてた。

姫君は、丹波綾部の城主九鬼式部少輔の息女里姫であった。

九鬼家では、毎年、筍を、将軍家へ献上するのを恒例としていた。

今年も、例年通り、九鬼家では早馬によって国許から届けられた筍を、使番佐柄新十郎に持たせて、本丸へ遣わした。新十郎は、まだ二十代半ばで、隠居した父のあとを継いで使番になったばかりの青年であった。献上物使者も、はじめての任務であった。

新十郎は、本丸に入ると、まっすぐに、御納戸構えに伺候して、茶坊主頭に、御用番老中

に献上物検閲の儀を取次いでくれるように願い出た。

ところが、下城時刻になっても、なんの音沙汰もないので、苛立った新十郎は、茶坊主頭を廊下でとらえて、何故に取次いでくれぬか、となじった。すると、茶坊主頭は、あざ笑っただけで、行き過ぎてしまった。

新十郎は、その日は、むなしく、笥を持つと、藩邸へ戻らなければならなかった。

新十郎の報告をきいた江戸家老は、にがりきって、

「当家の献上物は、御奏者番衆へさし出すならわしになって居るのだ」

と、きめつけた。

実は、献上物を、直接に御用番老中へさし出して検閲を受けて、将軍家へおさめ得るのは、十万石以上の国主及び準国主だけだったのである。譜代でもない、二万石の小大名の九鬼家が、図々しくも、このしきたりを破ろうとしたのは、一大事であった。

他藩の嘲笑をあびるのは、火を見るよりもあきらかであった。

九鬼式部少輔は、家老から、泪を揮って馬謖を斬るよりほかに、世間の譏をまぬがれるすべがないことを告げられると、やむなく承知した。

新十郎の切腹の場所は、下屋敷の庭がえらばれた。

新十郎は、その時刻を、亥の下刻と希望した。これは、彼の母が、十年前に逝った時刻であった。その希望は、ききとどけられた。

家中随一の美丈夫であり、文武ともに抜群の新十郎の最期は、すべての人々を悲しませ

た。

式部少輔は、息女里姫にも、見分するよう命じた。

良縁あって、近く輿入れすることになっている姫に、もののふの妻たる修業のひとつとして、心がまえのために、と考えたのであった。

新十郎の切腹は、見事であった。

白装束に、白ぬき紋の無地あさぎの裃をつけ、無腰で、しずしずとあらわれた新十郎は、広縁さきに設けられた板屋根の仮屋に入り、白縁の畳に四尺四方にあさぎ布を張った座に就くと、介添人がさし出した末期の水をのみ、次いで、僧侶の末期の教化を受けおわって、広縁上の主君を仰ぎ、

「このたび、それがしの蒙昧不明の振舞いによって、殿が御覚悟遊ばしたる忍辱は、思うだに、万死以ってつぐない得ぬ仕儀にございます。

にも拘らず、その罪深き身に、斯様な晴れの死座を賜り、高恩これにまさるものはございませぬ。何卒、百歳までの長寿をお保ち遊ばし、仁政を千載の後までの風としてお敷き下さいますよう願い上げ奉ります」

と、述べた。

この時、父のかたえに坐っていた里姫の目に、篝火の焔に浮きあがった新十郎の白い姿が、もうこの世のものではない妖しさを湛えているように映った。

そして――。

新十郎が、杉原紙二枚を逆巻きにした鍔なしの小脇差を、四方（三方と同じもの）から取り戴いて、両手を懸け、屹と、双眸を据えた刹那、偶然にも、里姫の視線と、ひたと合った。

思わず、里姫は、ぶるぶるっと、全身をうち顫わせた。

新十郎が、切先を、左の脇腹へ、ぶっつりと突き立てて、腹の皮を左へひき寄せつつ、ぎりぎりと右脇腹までひき切るのを待って、介錯人は、項の髪の生際を、頸皮一枚のこして、抱き首に、丁と打落した。

同時に、里姫は、失神して、うしろへ倒れていた。

「……因果にも、次の夜から、姫は、亡霊にとり憑かれたというわけです」

良介は、笑い乍ら、云った。

翌夜、亥の刻になって、白装束の新十郎が、寝所に出現して、かねて、自分は、貴女様を恋慕していた、切腹の折、貴女様と視線が合うや、貴女様もまた、それがしの妻たる運命をお持ちであったことが判った、幽明境を異にしても、恋慕しあう心をひきはなすことは叶わぬ、何卒、貴女様も、この世をすてて、それがしと手をたずさえて冥界への道を辿って頂きたい、とかきくどきはじめたのである。

里姫は、はじめは、ただもう、おそろしさに、おののくばかりであったが、夜を重ねるにつれて、恐怖はうすれてゆき、美丈夫のひたむきな熱意に、つい負けそうにさえなって来た。

昼間は、抜殻のように茫然自失のていですごす里姫の変化を、周囲の者が気づかぬ筈はなかった。

乳母松江が、里姫の口を割らせて仰天し、その夜から、姫のからだをかたくしばり、褥の四方で、魔除けの香を焚いて亡霊に近づけないようにはかった。
勿論、修験者を招いて、新十郎が切腹した場所で、柴燈護摩が行われたし、名医と称される人々も呼ばれた。蘭医の処方も用いられたし、名山霊場から霊験あらたかな祈禱符呪札をもらって来て、屋敷中へ、べたべたと貼った。しかし、なんのききめもなかった。
亡霊は、夜な夜な、寝所へ出現しつづけた。
褥にまでふみ込んで来ることはできなくなったし、もはや、かきくどく言葉も尽きたか、終始無言で、じっと、里姫を見戍っていて消え去って行く――。
奇妙なことに、里姫には、いつとなく、亥の刻を、待つ気持が生まれていた。こちらから、口をきくことはなかったが、そうして、対座していると、ふしぎな安らぎさえおぼえるようになっていたのである。
輿入れの日が近づいていたので、このことは、世間に洩れないように、きびしく警戒されているのであったが……。
「いかがです、眠さん。貴方には、亡霊斬りの秘剣はありませんか！」
良介が、訊いた。
すると、狂四郎は、こともなげな口調で、
「ないこともない」
と、こたえてから、

「どうやら、四方で焚く香が、まちがっているようだな。たぶん、陽の香だろう。陽の香を焚けば、陰の気が聚まる。たとえば、柳は陽木だから、陰気を呼んで、幽霊が出る。……ひとつ、陰香を焚かせてみては、どうだろう。そうすれば、陽気をまねいて、亡霊が退散するかも知れぬ。桜は陰木だから、陽気を聚めるがごとしか。……次郎吉、乗りかかった船で、一役買うか」

「承知いたしました」

次郎吉は、大きく頷いた。

若い蘭医は、あきれて、狂四郎の横顔を見戍った。

およそ、亡霊などという存在を、自分以上に、あたまから信じないと思っていた狂四郎が、意外にも、ひどく古めかしい迷妄の言を吐いたのである。

「最も効験のある陰香は、伊皿子の修験院御嶽坊にある筈だ。次郎吉、お前が、九鬼家の側用人に化けて、貰いに行って来い。その際、亡霊の件を、あらいざらい、ぶちまけることだ」

四

……今宵も、里姫は、からだを縛られて、牀の上に、正座していた。

待っている——。

はっきりと、意識は、そのすがたがあらわれるのを、のぞんでいた。

四方から、まっすぐに立ち昇っている香煙が、つと、ゆらめいた。
里姫は、微かな胸のときめきさえおぼえた。
亡霊は、眼前一間あまりのところへ、朦朧と浮び出るのを常とした。
里姫は、眸子を、じっと凝らした。
ところが、今宵は、ちがっていた。
次の間との仕切襖が、するすると開かれた。
無地あさぎの裃に、白装束をつけた死出の装いには、変りはなかったが、どうしたのか、そのおもても、白い布で包んでいた。
さわさわと、白袴を鳴らして、近づいて来るや、香煙などものともせず、いきなり、右手にした衂れた小脇差で、里姫をしばった細紐を、ぷつりぷつりと、切りはなった。
しかし、里姫は、あらかじめ、こうされることを覚悟していたように、すこしも態度をとり紊さなかった。
手を把られると、すなおに、立ちあがった。
ひかれるままに、庭へ降り立ち乍ら、胸の裡には、仄かなよろこびさえもあったのである。
「……む！」
亡霊が、ひくい呻きをもらして、出足を停めた。
切腹の仮屋のあった地点に、一個の黒影が、うっそりと彳んでいたのである。
両手を懐中に置いて、ゆっくりと歩み寄った黒影は、

「佐柄新十郎の亡霊だな」

「…………」

「眠狂四郎、これを斬る！」

一瞬の息づまる静寂があってから、亡霊は、すっと身を沈めたとみるや、剽悍な野獣が、跳躍するに似て、地を蹴って、抜討ちの一刀を、送った。

彗星のごとく、白い光電が、一足引いた狂四郎の顔面すれすれに、流れ落ちた。

そのまま……亡霊は、振り下した姿勢を固着させて、大地をふまえていた。

いつの間に、鞘走らせたか、狂四郎の右手には、無想正宗があった。

狂四郎が、懐紙で白刃をぬぐって、腰に納めてからであった、胴を両断された亡霊が、撞っと、仆れ伏したのは――。

次郎吉を九鬼家の側用人に化けさせて、修験院御嶽坊へ行かせ、亡霊の件を打明けさせたならば、あらゆる機会をとらえて、その大規模な陰謀をおしすすめようとしている徒党が、黙って、きくのがす筈はない、と狂四郎は、考えたのである。

はたして、贋亡霊があらわれて、里姫を拉致しようとしたのである。

狂四郎は、若い蘭医にこたえた通り、亡霊斬りの秘剣を示した。

効験は、鮮やかであった。亡霊が一太刀のもとに仆れるさまを目撃した瞬間、里姫は、正常の神経をとりもどしたのである。

佐柄新十郎の幻影が、なお、後日まで、里姫の心にのこるかどうか——それは、狂四郎の、かかわり知らぬことであった。

鷹と鶴

一

霖雨明けの陽光が、宙いっぱいにみなぎっていたが、武蔵野を渡る微風は涼しかった。
ここ——西南郊駒場野は、丘陵も林も野も、太古のむかしのままのたたずまいをとどめて、いかにも、野猪や狐や鹿が棲息していそうな眺めであった。
事実、渋谷からこの駒場野にかけては、野猪が農作物を荒して、百姓たちを困らせている、という。
将軍家狩猟場として、家康時代から、この広漠たる原野は、里人がひそかに往来する野径二、三条を通しているだけで、みだりに人の入ることを禁じられているのであった。
秋の鶉狩りと春の雉狩りは、将軍吉宗の頃から、必ず催されていた。公儀年中行事の一つとなっていた。
この駒場野はずれの森の陰から、眠狂四郎の黒の着流し姿が、ふらりとあらわれたのは、鳥もけものも仮睡に入った静寂が占める午さがりであった。
連れがあった。これは四十年配の、無精髯をはやした、盲木綿の筒袖にくり袴というい

でたちの、いかにも土くさい貧相な人物であった。

この人物が、今般、約二百数十年間、何らの進歩を示さなかった鉄砲に、革命的な発明を為した天才とは、到底見えはしない。

名は、久米栄左衛門通賢といい、讃岐馬宿の出身であった。風采のあがらぬのも道理で、荷役船の水主であったが、天文・航海・砲術などを独学して、遂に士籍に抜き出されて、高松藩の財政経済方面の事業にも携わって、功績があった。

栄左衛門が、最初に作ったのは、輪燧佩銃というのであった。これは、燧石からヒントを得たので、金石が相打って出す火花はあまりに瞬間的であるので、この火花に若干時間を持続せしめてはどうであろうか、と工夫して、鋼輪を廻転させるようにしたのである。すなわち、火縄を用いない撃発銃であった。

当時、欧羅巴では、燧石銃が全盛で、日本にも、高嶋秋帆が、和蘭人からナポレオン型と称する最新式の一梃を買入れて、研究に着手していたが、栄左衛門の輪燧佩銃は、これより、はるかに精巧なものであった。

このたび——。

栄左衛門は、さらに工夫を加えて、黄燐を応用して、この輪燧佩銃の改良に成功し、その試作品をたずさえて、出府して来て、西丸老中水野忠邦に、さし出したのであった。

忠邦は、武部仙十郎に、この試射を見とどけるように命じた。仙十郎は、自分の代りに、眠狂四郎を、同行させたのである。

江戸市中で、みだりに、鉄砲を撃つことは禁じられて居たので、狂四郎は、試射場を、この駒場野にえらんだのであった。
狂四郎は、栄左衛門をふりかえって、
「鶉は、近く将軍家の放鷹(ほうよう)があるために、撃つのを禁じられて居ります故、あの鳥見屋敷裏手あたりにいる野鳩(のばと)を追い出しましょう」
と、指さした。
栄左衛門は、背に負うた銃をおろして、油紙を破って、とり出すと、
「それがしは、銃砲造りでござって、狙(ねら)い撃ちは不得手でござれば、お手前に、おねがい致したい」
と、申出た。
「こちらも、得手ではありませんが……」
狂四郎は、受けとって、狩猟場と農地とを仕切る鶴寄土堤(つるよせどて)に、進んで行った。
土堤に沿うて、楢(なら)の疎林(そりん)がつづき、そのむこうに、鳥見屋敷の藁葺(わらぶ)き屋根が見えた。そして、それと土堤をへだてて、広い空地があった。これは、あきらかに、近年取払われた屋敷跡であり、かなりな構えの土蔵だけが、まん中に、ぽつんと建ち残っていた。数千坪はあろうその空地は、高い竹矢来で囲われていた。
狂四郎は、空に鳥影をもとめる前に、冴(さ)えた眸子(ひとみ)を、しばらく、その土蔵へ当てていた。
南側の壁に、開けられた小さな高窓の奥に、人の気配があるとみとめてから、狂四郎は、

視線を、空に向けた。
四半刻(しはんとき)も、辛抱強く、そうやって、動かずに待っていたろうか。
林の中から、ばたばたと飛び立つ音が起ったかと思うや、一羽の白鳩が、梢(こずえ)を掠(かす)めて、空地の方向へ――狂四郎の立つ上空へ向かって来た。
これは、一瞥(いちべつ)して、野生の鳩ではなかった。
それを予期していたように、微笑を泛(うか)べた狂四郎は、しずかに、銃口を狙いつけようとした。
と――。
挙げかけた右手を、急にとめて、狂四郎は、頭をめぐらした。
視野の片隅(かたすみ)に、鳥見屋敷から、矢のように翔(か)けあがる速影が、ちらと映ったからである。
それは、紅の緒総(おぶさ)をつけた鷹(たか)であった。
遥(はる)かな高みへ、まっしぐらに昇って行く猛禽(もうきん)を、目で追いつつ、狂四郎は、
――そうか！
と、何事かを合点した。
見る見るうちに、小さな黒点と化した鷹は、すすす……と、横へ飛びはじめた。
狂四郎は、旋回をおわって、一直線に頭上を掠め過ぎる白鳩へ、視線を移した。その飛翔(ひしょう)も、すばらしい迅(はや)さだった。
土蔵の高窓をめざしていることは、もはや疑う余地はなかった。

――いずれが、速いか？

これは、興味のある観ものであった。

白鳩が、高窓へ、あとひと羽撃きで達しようとした刹那、上空から、流星宛然に、覘いすました猛禽が、襲いかかった。

白鳩は、くるくると舞い落ちて、くさむらの中へ消えた。

勝利者は、悠々と、大きく翼をひろげて、ふたたび、高く舞いあがって行き、そして、鳥見屋敷の庭へ、降りて行った。

二

栄左衛門が、土堤へあがって来て、

「どうせ撃ち落すなら、あの鷹の方を、しとめて頂きとうござるな」

無表情で、ぼそりと云った。素朴な風貌に似あわず、なかなか辛辣な皮肉屋らしかった。

紅の緒総をつけているのは、将軍家の最も寵愛する鷹なのである。これを撃ち落せば、獄門になる。

「おのぞみとあれば……」

狂四郎は、にやりとすると、土堤の上をひろって、空地の前まで、近寄って行った。

白鳩の二羽めが、林の中から飛び立って来るに相違ないと、狂四郎は、予測していた。

はたして――。

さらに、半刻を置いて、白鳩が、土蔵めざして、まっしぐらに羽撃いた。

同時に鳥見屋敷の庭からも、猛禽は、放たれた。

狂四郎は、輪燧佩銃を、さしのべて、土蔵の高窓を狙った。

白鳩がそこへ達するのと、鷹が襲いかかるのと、そして、狂四郎が引金を引くのが、全く同時だった。

「……おっ！」

栄左衛門が、かっと双眼をひき剝(む)いて、ひくく唸(うな)った。

白鳩は鷹に撃たれ、鷹は狂四郎に撃たれ——二羽はひとつになって、地上へ落下した。

「お、お見事！」

栄左衛門は、おのが試作銃が、名手の手によって、鮮やかな効果をおさめた昂奮(こうふん)を、全身にあおらせつつ、叫んだ。

狂四郎は、もとのままの面持(おももち)で、

「弓矢の時代は、完全に、去りましたな」

そう云って、歩み寄って、銃を返すと、急ぎ足に、土堤をひきかえして行った。

狂四郎が、ふみ込んだ林の中には、まだ十二、三歳の、栄養の足りなさそうな血色のわるい少女が、しょんぼりと、草の上に坐っていた。その前には、竹籠(たけかご)が置かれてあった。

双眸(そうぼう)にいっぱい泪(なみだ)をためて見あげる少女に、何か云いかけようとした狂四郎は、籠の中から、くくく……と啼(な)く声をきくと、黙って、蹲(しゃが)み込んで、その蓋(ふた)をひらいた。

白鳩は、まだ一羽のこっていた。足には小さな包みが、くくりつけてあった。

狂四郎は、鳩を籠から出してみて、その包みが、にぎり飯であるのを知った。まだ、あたたかい。

鳩は、狂四郎の手から放たれると、梢を縫って、空に舞いあがり、こんどこそ、猛禽に襲撃されるおそれもなく、土蔵めざして、飛んで行った。

この折、土堤上で呶号（どごう）が起った。

鷹を撃ち落された鷹匠（たかじょう）が、激昂して、奔（はし）って来て、栄左衛門を咎（とが）めているのであった。

狂四郎は、少女を見戍（みまも）って、

「土蔵の中に、とじこもっているのは、そなたの父か？」

と、訊（たず）ねた。

「はい――」

「そなたが、こうして、鳩をとばしはじめてから、幾日になる？」

「十三日になります」

「にぎり飯は、幾個とどいた？」

「たった……三つです」

こたえた少女は、両手で顔を掩（おお）うと、烈（はげ）しく嗚咽（おえつ）しはじめた。

そこへ――。

血相変えた中年の鷹匠が、走り寄って来て、

「お鷹を撃ったのは、貴公かっ！」
と、喚いた。
「左様――」
「左様だと――左様、ですむかすまぬか！　お、おのれっ、上様御寵愛の、飛雲と知って、撃ったのか！」
「べつに、他意はない。新式銃の試射をしたまでのこと――」
「だ、だまれっ！　うぬっ――番所へ同道せい、番所へ！」
鷹匠は、狂四郎の右の手くびを、ひっ摑んだ。
とたんに、狂四郎の左手が、対手の鳩尾へ入った。
鷹匠は、他愛なく、崩折れてしまった。

三

ふところ手になり、微風を袂に入れて、野径を、ゆっくりとひきかえして行きながら、狂四郎は、栄左衛門の疑念にこたえて、先刻の出来事の仔細をきかせた。
あの土蔵の中にとじこもっている者は、今春まで、駒場野の鷹匠頭であった。藤木三左衛門といい、家康入府以前から、この西南郊一円を支配した豪族の末裔であり、ただの鷹匠とは格式を異にして、そこにあった屋敷も宏壮なものであった。
三左衛門は、名門旧家の末裔に往々にして見られる、おそろしく偏屈な性格の所有者であ

った。
その性格がわざわいして、今春、雉狩りにあたり、将軍家斉(いえなり)にむかって、直接言葉をかえして、即座に縄目を受けて、大名預けになった。家門の高さが、切腹になるのをすくったが、役を召上げられ、駒場野より屋敷払いを命じられてしまった。
ところが三左衛門は、土蔵にとじこもって、頑(がん)として、立退(たちの)こうとしなくなったのである。母屋(おもや)も別棟(べつむね)も、どんどんとり払われるのを、土蔵の高窓から眺め乍ら、三左衛門は、鉄扉(てっぴ)に内側から鍵(かぎ)をかけて、一歩も外へ出ず、何者の勧告をも、拒否しつづけて……今日にいたっているのであった。
公儀では、三左衛門の餓死を待つよりほかはなかった。
上司から、厳重に監視するように下知を受けた鳥見屋敷の鷹匠は、三左衛門の娘が、けなげにも、飼いならした白鳩を使って、食物を送ろうとしているのに気づいて、鷹を放って、これを妨害していたのである。
……以上のいきさつに就いては、狂四郎は、あらかじめ、武部仙十郎から、きかされていたのである。
話をききおわった栄左衛門は、
「ふうん。それ程に、門閥の士と申すものは、父祖の屋敷に執着するのでござるかな」
さも莫迦々々(ばかばか)しげに、云いすてた——とたんに、
「いや、待てよ」

と、直感が働いたらしく、首をかしげた。
「眠殿、三左衛門は、聊か狂気じみた一徹者と、きかれなんだか？」
「その様です」
「ふむ。わしと気象が似て居り申すて。……とすると、父祖の屋敷に執着して居るのではなくて、あの土蔵に執着があるという次第じゃな」
「どういうのです？」
狂四郎は、栄左衛門の意味ありげな合点ぶりに、興味をそそられた。
「臆測にすぎぬかも知れぬが……高窓の下の壁に、不審がある」
そう云いはなつ栄左衛門の横顔を見やって、狂四郎は、
——そうか！
と、さとるところがあった。
その夜——。
狂四郎は、隅田堤の梅柳山木母寺の離れにもどると、一通の書状をしたためた。
十日ばかり前に、狂四郎は、目下の強敵である修験院御嶽坊から、果し合いの牒状を送りつけられていた。
べつに、日時も場所も指定してはなかった。この牒状を受けとった瞬間から、闘いは開始されたものと覚悟せよ、という脅迫であった。
狂四郎は、これに対する返答の必要をみとめずに、破りすてておいたのであった。

たまたま、駒場野に、試射に行って帰るさ、突然、狂四郎は、思いついたのであった。

　答示

鳥、窮すれば則ち啄み、獣、窮すれば則ち攫み、人、窮すれば則ち詐る。愚にして、嗤うべし、無頼孤単の庸夫に、その正体をあばかれることを懼れて、窮して詐らんとする——なんぞ、その疑行のあわれなる。当方は、常に、窮すれば変じ、変ずれば通じ、通ずれば、則ち微傷だに受けずして、久し。

戦いは、敵を鏖にするを上となすとか。勇気あらば、当方ののぞむ場所へ来たれ。悉く尽して御覧に入れるべし。貴党が兵の数は問わず、武器勝手たるべし。

日時、明後日未上刻。

場所、駒場野・鶴の台地

四

およそ十六、七名の武士の一団であった。

馬を駆って、一気に、駒場野入口の楢林の中へ至り、そこから一列になって、鶴寄土堤下を、忍びやかに、迅足に進んで行った。

途中で、先頭の者が一度、土堤へあがり、

「お——鶴の台地に、標識が立てられて居るぞ」

と、おどろきの声を発した。

鶴の台地とは、将軍家の御座所であった。将軍家放鷹の日には、御座所であることを示すために、竿の頂きに朱色で葵の紋を染めた金の麾をさしたのと、白い大きな吹貫きを立てるならわしであった。

それというのも、まず、放鷹最初の行事として、必ず、鶴を捕獲することになっていた。将軍自身の拳に据えた鷹をもって捕獲した鶴を、称して拳の鶴といい、これは、天機伺いとして、天子に献上するさだめであった。鶴は、大変臆病な鳥であるので、猟場の低空に飛んで来させるためには、供立ちの行列人数が、全部、ふみ込むわけにはいかなかった。そこで、猟場の遠近、寺院や林や野に、段々に分散して控える。これを御行列御場段切れ、と称す。猟場に入って将軍に従うのは、鷹匠と小姓だけとなるのであった。したがって、御座所と御膳所（食事を摂る場所）とには、高い標識が必要であった。

意外にも――。

今日は、将軍家放鷹でもないのに、鶴の台地には、麾の金色と、吹貫きの白色が、あい映えて、眩しい陽光に、鮮やかに浮きあがっているのであった。

「眠狂四郎め、なんのこんたんがあっての、しわざか？」

訝らずには、いられぬことだった。

油断なく、四方に目をくばり、神経をめぐらせているのだが、明るい静寂に、なんの怪しい気配がひそんでいるとは思えなかった。

鳥もけものも木も草も、この灼熱の日輪をあびて、ひそと息をひそめてしまっている。風はまったく凪いでいた。時おり、夏木立の中で、きらっきらっと輝く葉の反射光だけが、唯一の動くものであった。

眠狂四郎を知るこの徒党には、まさか、狂四郎が、果し合いをするとみせかけて、幕吏に通報して、捕物陣を展開するとは、考えられなかった。

堂々と、ただ一人で出現するに相違ないと信じられていた。

去年、狂四郎が、本丸老中の寵臣土方縫殿助に斬奸状をつきつけて、およそ百名にもあまる敵陣のまっただ中へ、単身斬り込んで行った噂は、あまりにも有名である。

「眠め、水野忠邦にたのんで、将軍家の名によって、われわれを討ちとり、その報酬として、何かを得ようという存念かも知れぬ」

一人が云い、他の者たちも、そうとしか想像できなかった。

やがて、一党はそこへ到着し、それぞれの足場をさだめて、狂四郎の出現を待ちかまえた。

この時、狂四郎は、鳥見屋敷の庭つづきの櫟林の中の空地に、悠々と、寝そべっていたのであった。

今日の連れは、金八であった。おそろしく緊張して、大きな目籠を、しっかとおさえている。その中には、鶴が入れてあった。鷹匠をしばりあげておいて、盗み出して来た鶴であった。将軍放鷹の日に、必ずしも、鶴が飛んでくれるとは限らないので、鳥見屋敷では、こっ

そり飼っていたのである。
「金八――」
後頭で手を組んで、ずうっと目蓋をふさいでいる狂四郎を、金八は、
――不敵なものだな。睡っておいでだ。
と、なかばあきれていたのだが、ふいに、呼ばれて、
「なんでござんす？」
「小唄でもやらぬか。先日、水茶屋の女に、きかせていた――あれを」
「じょ、冗談じゃねえ。危急存亡の場合ですぜ。小唄どころか――」
「織田信長は、ひとさし舞って、桶狭間へ駆けて行ったぞ」
「先生！　まだ、いいんですかい？　野郎どもは、台地へ到着したらしゅうござんすぜ」
「うむ――」
やおら起きあがった狂四郎は、
「そろそろ、やるか」
ふところ手で、歩き乍ら、
「おれが、あの土蔵の脇に行ったら、鶴を放せ」
「合点――」
狂四郎は、音もなく、屋敷跡へ忍び入って、巨きな樹木の陰に身を寄せると、土蔵の高窓を、仰ぎ見た。

そこに、ひとつの顔がのぞいていた。狂人としか見えぬ凄じい陰惨な形相であった。

——よほど、公方を憎んでいるとみえる。

狂四郎が、心で呟いた時、その形相が、名状しがたい歓喜の色をあふらせた。

櫟林の中から、一羽の鶴が、白いゆたかな翼を大きくひろげて、舞い立ったのである。

——やるか!

流石に、狂四郎も、期待で、胸をはずませずにはいられなかった。

……期待は、裏切られなかった。

突如、高窓の下の壁が、音たてて崩れた。

そして、ぱっくりと空いた洞から、ぬっと押し出されたのは、大砲の銅筒にまぎれもなかった。

狂四郎の目にあやまりがなければ、それは、十貫目玉(口径一八二粍)の砲で、砲架に据えられ、旋回俯仰自在の、これは、あきらかに、先年佐藤信淵が工夫した如意台とそっくり同じものであった。執念凝って、藤木三左衛門が、如意台図を参照しつつ、つくりあげたものに相違なかった。

三左衛門は、この大砲で、将軍家を撃つべく、土蔵内にとじこもって、放鷹の日を待ちかまえていたのである。

鶴の台地に、標識が立てられ、そして、鶴が放たれれば、将軍家が、そこにいると思い込むのは、当然であった。

狂四郎は、固唾をのんで、秒刻をかぞえた。

銅筒が、ぐっと引き込まれた――次の刹那、轟然と、天地をつんざいて、筒口は、火を噴いた。

狂四郎は、頭をめぐらして、見とどけた。

見事に――砲弾が、金色と白色の標識の下へ吸い込まれて、炸裂し、白煙と火粉と土埃と、そして幾個かの人体を、宙へ撒くのを――。

「ひっひっひ……見たかっ！　見たかっ！　将軍め！　思い知ったか！　ひっひっひ……ばんざいじゃ！　ばんざいじゃ！」

高窓からほとばしる絶叫が、完全に狂った者のそれであるとききつつ、狂四郎は、しずかな足どりで、土堤を越えて行った。

生き残ったのはわずか六名であった。そのうちの二名は扶けを受けなければ、歩行もおぼつかなかった。

馬をつないだ楢林の中へ、惨たる姿をはこんで来た残党は、そこに、影のごとくに佇む狂四郎を見出して、一瞬、声をのんで、総身を石と化したように動かぬものにした。

狂四郎は、薄ら笑って、

「お手前がたの挑戦状が、日時と場所を指定していたのであれば、あるいは、この眠狂四郎を討ちとることも、不可能ではなかったかも知れぬ。謀には謀を以てする戦法をごらんに

入れた。孫子にも、善く勝つ者は、勝ち易きに勝つ、とある。……残った方々は、答示に、鏖を約束いたしたからには、円月殺法によって、片づけさせて頂く。敵わぬとさとって、腹を切る方には、介錯の労を厭う者ではない」

幾分かの後――。

最後の一人が、草を紅に染めて、微かなもがきをとめた時、もうそこには、斬り手の姿はなかった。

鼠小僧御用

一

　はっとなったことだった。

　ひと口つけた熱燗(あつかん)の酒を、思わず、茶碗(ちゃわん)からこぼす程、指さきまで、ぶるっと顫(ふる)えが来た。

　河岸(かし)人足の薄穢(うすぎたな)い風ていで、無宿者の侘(わび)しさを、この昏(く)れがたの一杯のほろ酔いでなぐさめているといった様子を装い、この縄(なわ)のれん内に入って、片隅(かたすみ)に腰かけて、すぐの出来事であった。

　煮しめたような、番茶色の頬(ほお)かむりの陰で、鼠小僧次郎吉は、きらっと鋭く目を光らせて、外の模様に、全神経を傾けた。

　突然——。

　ぴ、ぴ！　ぴ、ぴ！　ぴぴぴっ！

　と、呼笛が吹き鳴らされたのである。それも、一個処(かしょ)からだけではなく、五、六個処から、一斉(いっせい)に、であった。

　そうでなくてさえあわただしい昏れがたの物音が、このおかげで、さらに騒然と渦巻(うずま)いた。

げんに、この居酒屋で飲んでいた連中も、

「なんだ？」

「なんの捕物だ？」

と、顔色を変えて、走り出て行ったのである。

――呼笛の音に、こう、びくつくようじゃ、もういけねえやな。……どうして、名のり出はぐれてしまったものか。

自分で、自分をあざけって、ぐっと、ひと息にあおった――その時、

「鼠小僧を、この町内へ追い込んだというんだぜ」

その大声が、おもてから、きこえて来た。

再び、愕然(がくぜん)となった次郎吉は、しかし、すぐ、苦笑した。

――冗談じゃねえ。ほんものは、ここにいるんだ。

贋者(にせもの)を捕縛しようとして張りめぐらせた網の中に、ほんものがいることに――当人は、おかしくなった。

しかし、わらいごとではなかった。

この店へも、手先が二人、殊更(ことさら)にすごんだ顔つきになって、ふみ込んで来て、じろっと見まわしたのである。

この南本所、番場町の固めは、閻魔(えんま)屋と陰口をたたかれている、評判はよくないが、腕利(うでき)きの勘助という岡っ引の采配(さいはい)であった。

鼠小僧を捕える！

これは、江戸中の岡っ引の念願なのであった。

まるで通り魔のように、大名や旗本大身の屋敷を荒して、影さえも捕えさせない対手(あいて)を、自分の手で押えるなどということは、夢で見ても、胸のおどる生涯(しょうがい)またとない悦(よろこ)びであり、それだけに、遥(はる)かな遠い望みであった。それが、どうやら、実現しそうだとあっては、三下奴(さんしたやっこ)にいたるまで、目の色も変ろうというものであった。

「おいっ！　面(つら)を見せろっ！」

威丈高になって、十手で、次郎吉の頭を小突き、向けられた顔が、ひどく間のびた表情をして、涎(よだれ)まで垂らしているのに、

「ちょっ！」

と、舌うちして、そばをはなれた手下は、よしんば、「これがほんものだぜ」と誰かに告げられたとしても、

「おきやがれ！」

と、吐きすてたに相違ない。

手下たちが、出て行ってから、ものの数分も過ぎないうちに、再び、鋭く呼笛が、宵(よい)の町をつらぬいた。

次郎吉は、この路地を出た通りを、つッ走って行く捕吏の跫音(あしおと)をきいて、

「追い詰めやがった。……とんだ人ちげえ――いや、鼠ちげえだ」

と、口のうちで、呟いた。

二

普賢寺という、由緒ある古い寺院の山門前は、かなりの広場になっていた。

鼠小僧と目された男は、そこの土塀を背にして、追い詰められていた。

盗っ人被りをした、職人ていの、心張棒を構えた長身に、若々しさがみなぎった男であった。

事実また、その身ごなしは、撓やかで、剣の極意で謂う、風揚乱曲、一体分身の鮮やかな動きをしめしていた。

襲っているのは、およそ十七、八名であったが、これが、息つくいとまも与えまいと、正面から右から左から、路上の埃を舞わせて、寸時も静止することなく、十手を打ち込んで来ていたが、男は、余裕をもって、その十手を、宙に払いあげて、地べたへ叩き落していた。

初秋の涼しい夜気も、ここばかりは、避けたかのように、御用提灯の明りに照らされたいずれの顔にも、あぶら汗を漲らせているのであった。皮肉にも、襲われている者だけが、その手拭いの陰の顔を、さらりとした皮膚にたもっているようだった。切長な双眸が、きれいに澄んで、冴えた光を放っている。

「野郎っ！」

「くそっ！」

「それっ――」
「うぬがっ！」
鋭い、短い叫びを発し乍ら、勇敢に、突進して来る敵を、男は、無言で、あらかじめ打合せでもしていたような正確な棒さばきで、十手を、その手から奪っていた。
そのうち――。
隙をつかんで、土塀をこするようにして、ツツッ……と、横滑りに、奔った。
「遁すなっ！」
「やるなっ！」
躍起になって、捕吏の群は、その走路をふさごうとした。
これは、男の策であった。
一瞬――くるっと、向きを転ずるや、手薄になった反対の方角へ、すばらしい迅さで逃げ出した。
と――。
ものの十間と走らぬうちに、男の足は、ぴたっと停まった。
往還上に、うっそりと、黒の着流しの浪人姿が、ふところ手で、行手をはばんだのである。
「……むっ！」
男は、ひくく呻くや、左足をふみ出し、左半身になりつつ、心張棒を、ぴたっと、冠り入身の下段構えにとった。

棒術のうち、これは、捨身の攻撃に出る構えであった。右手を頭上へ振りかぶり、左手を前方へさし延べて、棒先きを敵の股間(こかん)につけるこの構えは、そのまま進むよりほかに、左右へも後方へも翻転することは叶(かな)わぬ。

男は、対手が何者かさとって、この必死必殺の構えをえらんだものに相違なかった。

じっと、眸子(ひとみ)を据えた対手は、

「おお！」

ひくく、なにかをさとった声をもらした。

そして、男の背後へ追い迫った捕吏の群へ、高くひびかせて、

「この場は、わたしにまかせてもらおう！」

と、云った。

「な、なんでえ、おめえさんは——？」

嚙(か)みつくように呶鳴(どな)ったのへ、

「眠狂四郎」

と、名のっておいて、左足をすうっと引くや、無想正宗を、腰から、すべり出させていた。

三

次郎吉は、まだ、その居酒屋を動かずにいた。動かぬ方が、安全であることを、経験が教えていたのである。

——いやに、しずかになったな。
捕まるにせよ、逃げたにせよ、こうも、しずかになる筈はないのだ。
——どうしたというのだろう？　贋者ということが判ったのか？
これは、さっきから、考えていたことである。
——そうだとすると、こんなところに、長居は無用だが……。
と、立ちあがりかけた次郎吉は、とたんに、また、遠くで、吹き鳴らされる呼笛の音に、にやりと北叟笑んで、腰を下ろした。
ほんものが贋者の逃げたのを、祝ってやるために、
「おい、姐さん、もう一本」
と、たのんだ。
その一本が、次郎吉の前に来た時、縄のれんを割って、ふらりと入って来たのは、偶然にも、狂四郎であった。
——旦那！
次郎吉は、子供のように、胸をはずませて、声なく呼んだ。
狂四郎は、勿論、次郎吉がそこにいると知りつつ、そ知らぬ態度で、床几に就いた。
盃が、狂四郎の口に運ばれないうちに、どやどやと入って来たのは、捕吏の一団であった。
先頭に立った、痩せこけた、ひどい反っ歯の岡っ引が、閻魔屋勘助であった。
「眠狂四郎の旦那！」

険しい目つきで、その背中を睨(にら)みつけ乍ら、呼びかけた。

「どういう料簡(りょうけん)で、鼠小僧を、わざと遁しなすったか、ひとつ、うかがおうじゃござんせんか？」

狂四郎は、暗い無表情で、盃を空(あ)けると、

「べつに、わざと遁したわけではない。むこうが、勝手に逃げたまでのことだ」

「冗談じゃねえ。旦那、この勘助の目玉は、節穴じゃござんせんぜ」

「そうか、節穴じゃないのか」

狂四郎が、薄ら笑うと、片隅の次郎吉は、首をすくめた。

「旦那！」

勘助は、目を光らせて、向かい側へまわると、

「いま、きいたんだが、旦那は、鼠小僧とは、かなりふるい顔馴染(かおなじみ)という噂(うわさ)でござんすねえ」

「煙は火のないところには立たぬらしいが、時には、根も葉もないのに、噂の花が咲いたりするようだな。推量は、そちらの自由だ」

「顔馴染だから、わざと遁してやるために、一役買って出なすったとなると、こっちも、黙っちゃいられねえというものじゃござんせんか」

「閻魔屋」

狂四郎は、じっと、勘助へ目をあてた。

とたんに、勘助は、ぶるるっと身顫(みぶる)いした。

「あれが、鼠小僧に相違ないと、どうしてきめる？」

これをきいて、次郎吉は、ひやりとした。

——旦那は、ばらすつもりなのか？

これには、何かあるな、と直感が働いた。

勘助にとって、狂四郎の問いは、待ってました、といいたかったところで、にやっとすると、

「証拠がありまさ、動かぬ証拠が——」

「どんな証拠だ？」

「御高家衆、畠山長門守様のお屋敷へ忍び込んで、松江の名工如泥の作った麻の葉透し彫りの小筥を盗んで、色おんなにくれてやったのが、運のつきで」

「ほう、鼠小僧にも、惚れた女がいたか」

「盗みを働くのは、酒と女のためでさ。鼠小僧に、女がいねえわけがねえ」

——そうきめてかかるところが、てめえの目玉が、節穴になる所以さ。

片隅で、次郎吉が、ひそかに、せせら嗤った。

「如泥の筥は、かぞえる程しかねえことは、旦那もご存じの筈だ。これを貧乏裏店の小娘が持っていやがった。誰に貰ったと、問い詰めると、次郎吉という植木職人からだ、とこたえた、と思ってもらいやしょう。何様お出入りの植木屋だ、と責めて、畠山長門守様のお屋敷住込み、と判ってみりゃ、もう、こっちのものでさ。鼠小僧の本名が、次郎吉ということも、

ちゃあんと洗ってあるんだ。その次郎吉を、この町内へ追い込むまでには、あっしの身内が一人のこらず、三晩も睡らねえで、網を張りめぐらせていたんですぜ。その苦労も、横あいから出て来た旦那のために、水の泡になったんだ。ただではすまされねえ！」

「どうする！」

狂四郎は、笑い乍ら、訊いた。

「どうするって――きまっているじゃござんせんか。番所へ来て頂きやしょう」

「番所は、好まぬ。白黒は、この場でつけるがいい」

「旦那のような、酢でも蒟蒻でも食えねえ、あっし共の十手じゃしまつに負えねえ御仁を、とり調べるのが番所なんだ」

「あいにくだったな、閻魔屋。……近頃の番所は、虎の威をかる狐の群のすみかときいたぞ。すこし骨のある岡っ引は、十手を返上して、仏店あたりで善男善女をあいてにする商売をはじめるようだ。焼跡の稲荷で、鳥居（取柄）が無いのが、狐っ面で、腐り縄をふりまわしているらしいが、こっちは、そんな手合に、手をうしろにまわす程、まだヤキはまわって居らぬ！　去せろ！　酒がまずくなる」

虚無の冴えを放つ眼光は、勘助に、一句もやりかえすことをゆるさなかった。

四

「おい、次郎吉」

二人だけとりのこされると、狂四郎が、呼んだ。

次郎吉は、おもてに手先がひそんでいないか、と気をくばりつつ、狂四郎のかたわらへ寄って来た。

「あっしの贋者ってえのは、どんな奴でござんした？」

「出来がちがっていたな」

「と、仰言いますと？」

「あちら様の方が、ずんと、上出来だったということだ」

「こりゃア、恐れ入りました」

「いや、まじめな話だ。……お前に、また、ひとつ、働いてもらおうか」

「かしこまりました」

「忍び込むのは、番所だ。盗み出すのは、如泥の小筥を貰った小娘だ」

「へえ。こりゃア、ちと、面倒な仕事でございますな」

「どうせ、いずれは、抛り込まれる牢屋敷だ。どんなところか、さきに見学しておくのもむだにはなるまい」

「仰言いました。やっつけましょう」

その夜、更けて、狂四郎が、竪川沿いの往還をひろって、二ツ目之橋と一ツ目之橋との、恰度中程に来た時、不意の襲撃があった。

横丁から、十数名の武士が、しずかな足どりで出て来て、自分の前後にわかれて歩き出したのを、

――どうする？

と、思っていると、背後から、刃風が唸(うな)って来た。

これを、軽く躱(かわ)した時、もう、どの武士も、抜刀して、両側から挟(はさ)んで来た。

狂四郎は、懐中から抜き出した両手を、ダラリと垂らしたなりで、視線は、月かげを映した川の流れへ投じ、

「わたしには、敵は多い」

まず、そう云ってから、ゆっくりと、左右の敵を見わたしした。

「したがって、そちらから名のってくれぬ限り、なんの目的か、どの意趣か、わたしの方では、知らぬままに、斬ることになる」

「…………」

敵がたは、深く沈黙をまもって、じりじりと間合を詰めて来た。

「ここもと、わたしを襲って来るのは、修験院御嶽坊の御仁たちだが、お手前がたは、どうやら、そうではなさそうだな」

「…………」

「どこの、馬の骨か。……見受けたところ、いずれかの藩士らしいが――」

その言葉のおわらぬうちに、左方から迫った敵陣から、一人が地を蹴(け)って、躍りかかって

来た。
とみるや、撞（どう）っと、地ひびき打って、地に匐（は）った。
抜き討った無想正宗を、右手に、携（さ）げて、
「読めたぞ」
月光の中で、にやりとした。
「今宵（こよい）、わたしが、贋の鼠小僧を遁した――そのことに、関連があるな」
大戸をおろした大きな商家の檐（のき）下へ身を移しつつ、狂四郎は、自身の言葉を確信もって、口から放った。
「畠山長門守の家中――と見た。いずれ、藩の重役あたりが、お手前がたを使嗾（しそう）したのであろうが、これは、かえって、藪（やぶ）をつついて蛇（へび）を出したことになった。生き残った者は、帰って、そう伝えるがいい」
しかし、白刃をそろえた面々は、仆（たお）れた味方の血の匂（にお）いを嗅（か）いで、殺気立ち、狂四郎の言葉が、耳を通ったかどうか。――
「やあっ！」
闘志を漲（みなぎ）らせた懸声もろとも、斬りつけた者が、つづけさまに、三人まで、あるいは、のけぞり、あるいは、たたらを踏み、あるいは、刀身を杖（つえ）にして、膝（ひざ）を折った。
頭数を減らされつつも、次の瞬間には、刃陣の脈絡を整えて、躍起に、おのが功名にせんとするけなげさは、しかし、狂四郎の一動作によって、みじんに破れさった。

……屍(しかばね)は、路上に増していった。

狂四郎は、その半数を討ちすてると、衂(ちぬ)れた白刃を地へ垂らして、悠々と歩き出した。

「おのれがっ！」

正面へ奔(はし)った一人が、狂気のごとく、大上段にふりかぶるや、狂四郎は、

「たわけっ！」

と、一喝(いっかつ)した。

「向かえば斬られると知りつつ、向かって来る迂愚(うぐ)は、なんのためだ！　この眠狂四郎を斬れば、十石でも加増になるというのか！」

切先(きっさき)へ向かって、大きく足をふみ出し乍ら、

「どうしても仆したければ、腕に覚えのある剣客をやとって来い！」

五

三日過ぎた黄昏(たそがれ)どき――。

柳橋の横丁にある薄穢(うすぎたな)い川魚屋の二階で、次郎吉は、やつれをみせているが、いかにもういういしい町娘と、さし向かって、腕を組んでいた。

次郎吉は、これが最後の大仕事と、ほぞをきめて、伝馬町(てんまちょう)の牢屋敷に忍び込み、女囚牢の鍵(かぎ)を盗んで、お雪というこの町娘を、みごとに、つれ出したのであった。

お雪の話は、ごくありふれた忍び恋であった。

今年の山王祭に、お雪の住む町では静御前の人形の花巣車(だし)を出し、お雪は、その先頭に立つ金棒曳(かなぼうひ)きになった。男髷(おとこまげ)に結い、友禅に錦糸(きんし)で縫いとった縮緬(ちりめん)の襦袢(じゅばん)を、片肌ぬいだ下にみせ、紺の腹掛の上へ掛守(かけまもり)の銀鎖、花笠(はながさ)を背負って、黒骨の扇で陽をよけ乍ら、金棒の音をひびかせる伊達(だて)姿は、長蛇(ちょうだ)となってねり歩く行列の中でも、ひときわ目立つ華やかなものであったが、その先頭をきるのを、どこの娘にするかで、町内は、ひともめするのが、毎年のことだった。

お雪がえらばれるにあたっては、町内の若い衆が、二つに割れて、血を流す争いまでひき起したのであった。

行列が、竹橋御門内の、将軍家上覧場を過ぎ、常盤(ときわ)橋を出て、ようやく、ひと安堵(あんど)とともに、騒々しく乱れて来たのを見はからって、突然、蝟集(いしゅう)した見物人の中から、数名の若い衆が躍り出て、お雪を拉致(らち)しようとした。

これをはばんだのが、きりりとした男前の、若い職人で、あっという間に、若い衆たちを、一人のこらず、地べたへたたきつけたのであった。

これが、なれそめで、その後十日ばかり経(た)ってから、お雪と、街中で、ばったりぶつかったその職人は、涼み船へ誘って、首尾の松の下へ漕(こ)ぎ寄せ——そこで、二人は、出来た。

次郎吉といい、畠山長門守の屋敷に住込みの植木職と告げた職人は、逢瀬(おうせ)の時間をつくるには、夜を待たなければならず、お雪も、首尾するためには、家の者に云いつくろう、なみなみならぬ苦心をしなければならなかった。

そうしてむりにつくったわずかな時間が、かえって、二人の心を、烈しく燃えあがらせ、離れがたいものにした。

十日ばかり前の宵。次郎吉が、ふところからとり出して、べつにそれがどんなに高価な品かとも知らせずに、お雪に渡したのが、如泥作の麻の葉透し彫りの小筥だったのである。

お雪は、その時、きれいな小筥をくれる次郎吉の心づかいに、ただもう、うれしく、縫針入れにして、一生そばからはなさない、と誓ったものだったが……。

その——仇となった小筥は、いま、ほんものの鼠小僧のふところにあった。牢屋敷から、ついでに、盗みとって来たのである。

「で——お前さんは、いまはその次郎吉という職人が、鼠小僧だった、と思っていなさるかい？」

次郎吉は、ういういしい顔を、じっと見戍り乍ら、訊いた。

お雪は、こたえず、ふかく俯向いてしまった。

おそろしい囚獄に入れられて、生きた心地もなくすごしたのは、わずか三日とはいえ、娘心を傷つけるには、充分だったのである。

いたましげに、見戍った次郎吉は、

「ちがうんだ。その職人は、鼠小僧じゃない。ほんものの鼠小僧が、そう云うのだから、まちがいない」

そう云いたい衝動にかられた。

ぐっと、声を咽喉（のど）もとで抑えた次郎吉は、立ち上がった。
「しばらく、ここで待っていなさるがいい。お前さんの身柄（みがら）をあずかってくれるお方をおつれする。お前さんをかばって下さるのに、こんな心強いお方はいないのだから、安心して、待っていてもらいましょう」
狂四郎は、次郎吉から、会うやすぐに云い出されて、おどろいて、仰臥（ぎょうが）していたのを、起き上がった。
「これから、名のって出る、というのか？」
お玉ヶ池の佐兵衛の家へ行く、という。
「これを、持って参ります」
次郎吉がさし出した小筥へ一瞥（いちべつ）をくれた狂四郎は、
「どういうのだ？」
と、訊（たず）ねた。
「おわらい下さいまし。盗み出した娘の風情（ふぜい）が、あまり、ういういしすぎて、この鼠小僧に、ふっと、粋（いき）な料簡を起させた、とお考え下さいまし」
「……つまり、お前は、その娘の色男になりすまして、獄門になりたいというのだな」
「左様で――」
次郎吉は、はればれと笑ってみせた。

「よかろう。お前が、そうしてくれるなら、贋者の身は、安泰となろう。ついでに、おれが一役買って、その娘を贋者に添わせてやろう」

小半刻あまり後、狂四郎は、お雪をつれて、麴町の坂をのぼっていた。

坂の上に、畠山長門守の屋敷があった。実は、鼠小僧の贋者は、畠山長門守自身だったのである。今夏まで、次男坊の部屋住みで、自由な身分であったので、職人姿になって屋敷をぬけ出し、気ままな市井ぐらしを愉しんでいるうちに、お雪をたすけて、恋におちたのであった。ところが、当主の兄の急逝にあい、にわかに家督を継ぐことになり、その立場は、一変したのである。

長門守は、お雪と別れなければならなかったが、それを告げるかわりに、小筥を与えたのであった。

狂四郎は、長門守とは旧知の間柄であり、棒を構えた姿を見て、ただちに、さとり、これを遁したわけであった。

ちなみに――。

長門守を、鼠小僧として、閻魔屋勘助に追わせたのは、実は、畠山家の重役であった。長門守を仆して、三男のなにがしを当主にたてようとする陰謀によるものであった。

白い闇（やみ）の決闘

一

眠狂四郎と修験院御嶽坊一党が、新井薬師梅照院裏手の松林内で、凄絶（せいぜつ）を極める決闘を行なったのは、神田祭の勇ましい賑（にぎわ）いもおわり、菊花の幽趣漸（ようや）く、寝ざめの牀（とこ）に風前の笛韻をきき、月下の砧声（ちんせい）に秋の逝（ゆ）くのを知る一夜であった。

何者とも知れぬ徒党が、富商をねらって、押入り、千両箱を奪い、風のごとく去って手がかりをのこさぬ事件は、今春より、つぎつぎと起っていたが、夏を過ぎる頃から、毎夜のように、頻発（ひんぱつ）しはじめ、誰云うともなく、その怪盗団を「天誅（てんちゅう）ぬばたま組」と称するようになっていた。

その手口には、三つの特徴があった。

第一には、暗闇（くらやみ）に乗じて、音もなく忍び入り、加えて、屋内の灯火を消して、闇中（あんちゅう）に行動すること。第二には、御用金と称して千両箱を要求し、その所在を拷問（ごうもん）する手段が、残忍を極め、家人を斬殺（ざんさつ）するに、天誅の言葉を用いていること。第三には、これは、甚（はなは）だ不可解な

出来事であるが、彼らがひきあげて行く時、必ず、暗中の路上で、意外な乱闘が行なわれることであった。血汐をとどめるのみで、死体は一個も残さなかった。闘いぶりは、終始、沈黙裡に、短時間をもってなされる模様であった。獲物を得たあと、仲間割れがあって、その争奪が演じられるのであろうか？　それが、押入るたびに、必ず演じられるのであってみれば、理解に苦しむというべきであった。

眠狂四郎は、この「天誅ぬばたま組」を、修験院御嶽坊一党と、見てとっていた。

しかし、おのれにむかって降りかかって来る火の粉でない限り、これを払うために、一役買って出る興味はなく、傍観をつづけていた。駒場野において、狂四郎の策略にかかって、藤木三左衛門の砲撃に遭い、一挙に十八名の同志を斃され乍ら、これが復讐のけはいを、敵は、いまだしめしてはいなかったのである。

いわば、狂四郎と一党とのあいだは、不気味な休戦状態にあったが、しかし、これは、そう永くつづくものでないことは、云うを俟たなかった。

狂四郎が、雌雄を決するほぞをかためたのは、懇意の材木問屋田嶋屋が、襲撃を受けてからであった。

田嶋屋が、自他ともに深川の十八大通をもってゆるしている粋人であることは、以前に述べたことがある。若い頃は、純金の針金で髪を結い、仲間たちが三日坊主だろうと云うや、意地になって三年間も、それを用いたり、吉原の引手茶屋で、夏の暑いさなかに火鉢をかかえ、芸妓たちにあたれとすすめて、しりごみされ、おくれて入って来た年嵩の太鼓持ちが、

心得て近づくや、灰と見せた白砂糖の中に、熾（おこ）った炭と見せて盛った小判を、そっくり呉（く）れてやったり——さんざ、突飛な莫迦（ばか）遊びをした人物であったが、本卦還（ほんけがえ）りしてからは、なるべく目立たぬように、枯淡な人柄（ひとがら）をみせて、好んで狂四郎のような寄りつきにくい人物を友にえらんで、これをよろこばせる興趣に心を費すのを自分のよろこびとしている——いわば、まことの粋の道をさとっている大町人であった。

狂四郎が、なんのためらいもなく、金子（きんす）を貰（もら）って、その場で忘れられる対手（あいて）は、武部仙十郎を除いては、この田嶋屋だけであった。

その財力のゆたかさから考えて、天誅ぬばたま組に襲われるのは、むしろおそかったくらいである。

田嶋屋が、目ざめたのは、侵入された気配によってではなかった。いつもの習慣で、厠（かわや）へ立ったために、丑（うし）の刻を告げる石町（こくちょう）の鐘で目蓋（まぶた）をひらいた田嶋屋は、朝までつけてある筈の行燈（あんどん）の灯が、消えているのを訝（いぶか）りつつ、身を起したとたん、

「しずかにせい！」

と、闇の中から、声がかかった。

ぎくっ、となりつつ、

「どなた様で——？」

と、訊（き）くと、

「巷間（こうかん）では、天誅ぬばたま組と称していてくれる」

そのこたえだった。

田嶋屋は、そっと、左手をのばして、枕もとの紐を引こうとした。これは、床下をつたわせて、遠く、裏門へ通じてあり、生命知らずの木場人足たちの寝小屋へ警報するしかけになっていたのである。

鞭が唸って、田嶋屋は、左手の甲を、したたか打たれ、

――これはいかぬ！

と、観念した。

敵は、闇に目が利くのであった。

田嶋屋は、牀の上に坐って、暗黒に目を馴れさせて、ずうっと見渡した。

宙に、青い微光が、二つ宛ならんでいる。それが、人間の眸子と知って、田嶋屋は、背筋に悪寒をおぼえずには、いられなかった。これは、野獣の目玉であった。

ぬばたま組が、闇中に跳梁する理由が、判った。この連中は、奇怪にも、白昼と同じ視力を発揮することが可能なのだ。

「どうぞ、欲しいものは、自由にお持ち帰り下さいまし。千両箱は、一の倉の中にございます。……但し、お断り申しておきますが、皆様方のお手で取って頂き度う存じます。これは、奪われるのが口惜しくて、こちらの手をお貸しいたさぬ次第ではございませぬ」

田嶋屋は、一の倉の在処を教え、その鍵も渡した。

覆面の浪士たちは、倉にふみ込んでみて、田嶋屋の云った意味を納得した。

地下室が設けられ、床の一個処に、玻璃が張られてあって、その下が覗き見られる。一間あまりの空間を置いて、水が満々と湛えられていた。金櫃は、その水底に据えてあったのである。龕燈で照らしてみて、よく目を凝らさなければ、見わけられないくらい、水は深いのであった。

玻璃のまん中に、銅の漏斗がのぞいて居り、これに小判を投げ込めば、細い筒をつたって、水底へ落ちて、金櫃に入る仕掛けになっていた。

まさに、田嶋屋の完璧な用意周到ぶりであった。

「この家の全員で、水を汲み出せ」

と命ずると、

「これは、隅田川から流れ込む水でございます」

という返辞だった。

汲めども尽きぬ水だった。

「田嶋屋、貴様が、これを簡単に引きあげる工夫をほどこしていないとは云わせぬぞ！」

「ひねくれ者でございましてね。この漏斗から落す金は、あきないにさしつかえない余りもの。むかしなら、色里でまき散らしたでございましょうが、とんと足が遠ざかったおかげで、この仕儀と相成りましたわけでございます。……いえね、遺言には、ちゃんと使いかたを教えておくつもりでございます。てまえが死んで、左様、引きあげるまでには、工事が半年あまりかかりましょうか」

しゃあしゃあとして、田嶋屋は、云ってのけたものだった。

だが——。

ぬばたま組は、田嶋屋の言葉を鵜呑みにはしなかった。

母屋の庭敷へもどった田嶋屋をして、さっと顔色を一変させたのは、そこに、いつの間にか、一人の女性が、当て落されて、はこばれているのを見出したためであった。

それは、眠狂四郎の依頼を受けて、ひそかに、離れにかくまっている蜂須賀阿波守夫人だったのである。

「田嶋屋、期限をきるぞ。三日だ。……一万両を、この女とひきかえにいたそう。約束をたがえる場合は、この女は、四十九人の男によって、弄ばれ、一糸まとわぬ素裸で、日本橋の高札場前へ、曝されることになるぞ」

指揮をとっていた者が云いのこしたのは、その脅迫であった。

この夜も——。

ぬばたま組が、おもてへ出るやいなや、往還上に、凄じい闘いが展開した模様であった。

しかし、店の者が、おそるおそる、外を窺った時、冷えびえとして夜気が深い静寂を保っているばかりであった。

翌朝、手代の一人が、肱から截ち断られた右腕を一本発見して、闘いが演じられたことは疑いないものとなった。

二

急報を受けて、あらわれた狂四郎は、田嶋屋から、顛末をききとって、愈々、決闘の秋が至ったのをおぼえた。

店を出て、河岸道を辿りはじめた狂四郎は、石垣上に腰を据えて、流れに糸を垂れている釣人たちを眺めやり乍ら、

——危きを畏るる者は安く、亡ぶるを畏るる者は存う——と素書にあるが、おれは、その逆の道を歩んで来て、まだこうして生きている。これは、どういうことなのか？

ふん、と自嘲の冷たい笑いを口もとに刻むと、ひくく、謡曲・苅萱をうたいはじめた。

「……有為の転変を見るに、芝蘭は散じ易く、瑠璃はもろし。本の雫、末の葉露の下草の、後れ先だつ世の習い、今はじめたる嘆きと思わず……」

と——狂四郎は、足を停めて、一人の釣人の背中へ、視線を投じた。

「……眠殿」

川面を見まもったまま、その釣人が、呼んだのである。並の者の耳ならば、ききのがしたであろう、口を動かさずして出す声音だった。

——お！

狂四郎は、すぐに、それが、自分とは因縁浅からぬ人物と見てとった。甲賀忍組頭領にまぎれもなかった。去年までの、忍組との幾度びとない死闘は、いまだ記憶になまなましい。

そして、それが、逆に、頭領をして、孤身を持して寸毫もたじろがぬ狂四郎の強さと勇気に対する尊敬の念を生ましめ、狂四郎が土方縫殿助に果し状をつきつけて、三十余名を斬って、おのれも倒れるや、これを救う好意をなさしめたのであった。

狂四郎は、釣人の背後へ歩み寄って、

「ぬばたま組を、路上に要撃しているのは、お手前の曾ての配下たちと考えてよろしいか？」

と、云いかけた。

「左様、公儀においても、尋常一様の手段では、あの徒党を勦討できぬと知って、忍組に厳命を下して居り申すが、なかなかもって、手ごわい。これは、やはり、おぬしの力を借りなければならぬ。……志合う時は、胡越も昆弟たり、昨日の敵は今日の味方——いかがであろうか」

「火の粉は、すでに、わたしの頭上にも降りかかっている。これは、わたしにまかせておいて頂こう」

「すでに、正体はご存じかも知れぬが、徒党の中心をなしている者たちは、薩摩の山中に棲んでいた犬神族と謂われる豪族の末裔たちで……数百年間、嵎を負う猛虎のくらしをしていたおかげで、獣のように闇に利く目を持って居る。……修業によってきたえた目が、天性のそうした目に太刀打ちすることは、まず叶わぬ。忍組が、いかに躍起になろうとも、その夜中横行をはばむことは困難だ。……あるいは、おぬしが、指揮をとれば、その頭目を斃し得るかも知れぬと思うて、呼びとめたのだが——いかがであろうな？」

「わたしも、夜は、めくらです。目あきの獣とたたかうには、策がなければならぬが、それを、これから、歩き乍ら、考えてみることにいたそう」
両者は、釣人とその見物人の姿勢を保って、一間とはなれた地点からは何もきこえぬ低声で、話し交し、そして、別れた。
それから、半刻あまり後、狂四郎がおとずれたのは、蘭学医師・曾田良介の茅屋であった。
良介は、縁側に胡坐をかいて、自分が工夫した反射望遠鏡で十六夜の月を仰いでいた。
「おぬしに、ちょっと訊くが、灯を消すのに、風や武器を用いずに、何がある？」
狂四郎が、挨拶ぬきで問うと、良介は望遠鏡を覗いたままで、
「消火瓦斯ですな」
こともなげにこたえた。
「どんなものだ？」
「お見せします」
良介は、あらゆる雑多な、奇妙な品物がちらばった居間に入り、小さな玻璃瓶を手に把ると、蠟燭の焔の近くで、蓋をとってみせた。火は、すっと消えた。（瓶に詰めてあったのは、今日の炭酸瓦斯だったのである）
狂四郎は、良介が、この瓦斯というものについて、くわしく説明するのを、きき乍ら、庭を眺めた。
夜靄がたちこめて来て、樹木をうすれさせ、居間へも、流れて来た。

「……ふむ！」

急に、何を思いついたか、狂四郎は、にやりとした。

――影は、暗いものと思っているのがまちがっている。水に映った月かげは、光っている。同様に、闇は、黒いものときめてかかるのは軽率だ。白い闇もある！

狂四郎が木母寺の離れへ戻ってみると、そこにひっそりと端坐して、待っていたのは、野々呂甚内であった。

午まえに来て、ずうっと待っていた、という。

「今日まで、何処に？」

と、狂四郎に問われて、十日市場はずれの渓あいの古家に住み、鶴見川の鮎を獲って、くらしていたとこたえてから、

「てまえ、生まれた故山へ帰って、頭をまるめてくらそうと思いたち、お別れに参上つかまつりました」

「お国はいずれだ？」

「長崎でござる。てまえは、もとは、漁師でござった」

「そうか――」

若い日、おのが血の半分が、異人のものではないか、と大きな疑惑を抱いて、それをたしかめに、はるばると出かけて行ったところであった。

「わたしも、江戸にはあきた。なろうことなら、おぬしとともに、旅をしたいものだが……」

「お伴が叶いますれば、この上のよろこびはござらぬ」

この無表情な人物が、珍しく悦びの色を刷いた。

「明日を生きのびれば、のことだが――」

「と申されると」

「いや……」

狂四郎は、かるくかぶりをふって、説明を避けようとした。

「眠殿！」

甚内は、膨れた垂れ目蓋を揚げて、じっと瞶めて、

「それがしは、主命とは申せ、貴殿の生命を狙うた挙句、貴殿によって絶望からすくわれ申したのでござる。それがしが、江戸を去るにのぞんで、唯一の心残りは、貴殿のために、聊かの役にも立たなかったことでござる。……どのようなことでもよろしゅうござる。それがしを、はればれとした気持で、出発させては下さるまいか？」

誠心をおもてにあふらせたねがいであった。

「わたしが、たのむとすれば、おぬしに、生命をすててくれ、ということになる」

「かまいませぬとも！　よろこんで、この生命、さし上げましょう。坊主になって生きながらえたところで、経文も読めぬままの、娑婆ふさぎでござる。……いかなる仕事でも、お申

付け下され」

狂四郎は、しばらく、黙然としていたが、やがて、口をひらくと、

「おぬしの旧主の奥方が、ぬばたま組と称える徒党に捕われて居る」

「お！」

甚内は、ひくく、唸った。

「とりかえさねばならぬが、おぬしの長刀に助勢してもらえるならば、この上の心強さはない」

「かしこまった！」

甚内は、自身でもこんなに心がおどるものかとおどろくくらい、大きな声を出した。

狂四郎は、しかし、この刹那、ふっと、つよい悔いをおぼえた。

——どうしたというのだ？　いまだ嘗て、人に力を借りたことのない、このおれが……。

三

新井梅照院は、松高山と号し、新義真言宗、中野宝仙寺末である。天正十四年、行春なる僧が開基したと伝えられる。本尊薬師仏は、石の座像で、長さ一寸八分、厨子に入れられてある。いつの頃からか、この薬師仏は、俗に子育薬師と称され、縁日には、小児薬夢想丸というのを売り出していた。十五歳以下の児童は、この薬を服すれば、どんな難病でも、治癒しないことはない、と云われて、これを買求める参詣人は、夥しかった。

そして、治癒した家で、寄進した石塔が、裏手の松林に、およそ二町余も、二列につらなっていた。

ぬばたま組が、田嶋屋に、一万両を持参する場所として指定したのが、そこであった。

日が昏れて、程なく、梅照院境内に、しずしずと、五梃の乗物が入って来た。これは、女乗物で、総蠟色に金の紋散しの唐艸蒔絵、左右の腰廻りに二つの環を付け、夢想窓に紗を張った優美なものであった。乗物の多きに比べて、供人はごくすくなく、これは大奥の、さして権勢のない中臈たちのお忍びというこしらえであった。

先頭に立って、提灯を持っているのが、野々呂甚内であった。紋付の木綿羽織をはおって、お付きの伊賀者といういでたちであった。

甚内は、行列をみちびいて、境内をつききり、裏手の桜樹の多い空地に、乗物を据えさせておいて、一人、石塔の並ぶ松林の中へ入って行った。

空に星はあったが、地上を照す光に乏しく、まして、林の中は、文字通り墨を流したような真ッ暗闇であった。

甚内の携げた提灯が、わずかに、草木や石塔を、異様な生きもののように、赤く浮き出した。

と——。

風もないのに、提灯の炎が、すうっとほそり、そして消えた。

甚内は、暗黒の中に、立ちどまった。

数秒をかぞえる不気味な沈黙の間に、甚内は、左右の石塔の陰に、殺気をひそめて、ひそんでいる敵の存在を、察知した。感覚にあやまりがなければ、ことごとくの石塔の陰に、敵はひそむと受けとれた。

甚内は、道幅から推し測って、武器は長槍(ながやり)だな、と判断した。

「田嶋屋の代理、参上いたした。阿波侯夫人は、いずれにあるや？」

声を張って、問うと、はるか彼方(かなた)で、灯がつけられ、一基の石塔にくくりつけられた女人の姿を浮きあがらせた。しかし、それは、すぐ、闇の中に消えた。

「五梃の乗物の中に、二千両ずつ——一万両を、はこんで参った。……夫人を、お渡し願おう」

すると、闇の中から、

「おぬしは、田嶋屋の代理ではなく、眠狂四郎の代理であろう。乗物の中の千両箱には、石が詰めてあると、見たぞ！」

と、あびせかけて来た。

その瞬間であった。

伏勢たちにとって、思いもかけぬ方角から、不意に、唸(うな)りをたてて、樹間を縫って飛んで来た物が、つぎつぎと石塔へ当って、濛々(もうもう)と白煙を噴いた。

その機をはずさず、甚内は、四尺の長刀を抜き放って、大霞に構えるや、猛然と、地を蹴(け)って、奔馳(ほんち)した。

左右から、びゅっ、びゅっと、槍が投じられたが、甚内の速影を刺すことは叶わなかった。

しかも——。

白煙筒は、甚内の飛ぶ前へ、前へ、と正確に、投げ込まれたのである。いわば、甚内の速影は、白煙の幕から幕へと掠めるあんばいとなった。

——黒い闇には目は利いても、白い闇には利くまい。

狂四郎の考えたのは、このことだったのである。

投擲した槍を、ことごとくはずされて、四十名あまりの敵勢は、一斉に、抜刀して、路上へ躍り出て、甚内を追おうとした。

そこへ。——白煙筒を投げつくした狂四郎が、疾風のごとく、奔り寄りざま、

「斬り殲すぞっ！」

と、宣告凄じく、まず、一個の首と二個の胴を、一閃する弧線の中に、無想正宗の贄とした。

文字通り——疾雷は耳を塞ぐに及ばず、疾霆は目を掩うにいとまあらずの神速が、闘志に燃えた狂四郎のものであった。白煙の幕は、撒き血に染められ、白刃にあおられ、絶鳴を吸いつつ、しだいに、うすれて行った。

林の中に静寂がもどった。

とある個処で、灯がともされ、それが、ゆっくりと近づいて来た。かかげているのは、忍

組頭領であった。

灯がはこばれた場所に、狂四郎が、全身に返り血を匂わせて、うっそりと、幽鬼のごとく佇んでいた。

地面には——

蜂須賀阿波守夫人が、石塔にくくられたまま、がっくりとうなだれていた。

その胸を刺しつらぬいた大刀を、なお摑んだなりで、膝を折り、片手を土につけた姿勢で事切れている山岡頭巾の大兵の武士は、修験院御嶽坊首領に、まぎれもなかった。

そして、首領の背中を両断した甚内は、その場に頭をあげて正座していた。その頸根と肩と左膝に、手裏剣がふかぶかと突き立っていた。

垂れ目はさらに糸のように細められ、むすんだ唇から、ひとすじの血が流れていた。表情は、むしろ、安らかであった。

灯の中に浮きあがったその凄惨な姿を、狂四郎は、じっと見戍って、

——この善良な人物も、死んで行く。

あんたんとして、胸の裡で、そう呟いた。

それから、数日後の早朝——。

品川宿はずれを——東海道を、西へ向って歩んで行く狂四郎の痩身が、見うけられた。目的が、ひとつだけあった。長崎へ行き、海の見える丘の上に、甚内の骨を埋めてくることで

あった。骨は、ひと握り、袂の中にあった。

江戸を去って、また、いつの日帰って来るか——それは、狂四郎自身にも、わかってはいなかった。

本書に収録した作品は『眠狂四郎無頼控 続三十話』
として昭和三十四年十月、新潮社から刊行された。

表記について

新潮文庫の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めました。

一、旧仮名づかいで書かれた口語文の作品は、新仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、旧字体で書かれているものは、原則として新字体に改める。
四、難読と思われる語には振仮名をつける。

なお本作品中、今日の観点からみると差別的ととられかねない表現が散見しますが、作品自体のもつ文学性ならびに芸術性、また著者がすでに故人であるという事情に鑑(かんが)み、原文どおりとしました。

（新潮文庫編集部）

眠狂四郎無頼控（六）

新潮文庫　し－5－11

昭和四十年六月二十日　発行
平成五年八月三十日　三十五刷改版
平成九年二月二十日　三十八刷

著者　柴田錬三郎

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
　　　読者係(〇三)三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎　製本・加藤製本株式会社

ISBN4-10-115011-7 C0193

